

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第501集

の つ こ

野古A遺跡第23・24・29次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

2007

独立行政法人都市再生機構
岩手県盛岡市

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

野古A遺跡第23・24・29次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査



RA061 出土墨書土器「吉」



「吉」字刻書土器集合

巻頭カラー図版

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成16年度に発掘調査された野古A遺跡第23・24次調査、平成17年度に発掘調査された野古A遺跡第29次の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、古墳時代から平安時代の堅穴住居跡が多数見つかったことから、当時の集落の一部であったことが明らかになりました。今後、この地域における古代の集落に関する基礎資料となるものと考えられます。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました盛岡市都市整備部、独立行政法人都市再生機構、盛岡市育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成19年2月

財團法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田牧雄

例　　言

1. 本書は平成16年度、岩手県盛岡市下鹿妻字北33-1ほかに所在する野古A遺跡第23次・24次の発掘調査成果、平成17年度、岩手県盛岡市下鹿妻字北40-1ほかに所在する野古A遺跡第29次の発掘調査成果を収録したものである。

2. 調査は盛岡南新都市整備事業に伴い、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、独立行政法人都市再生機構の委託を受けた第23次調査、盛岡市の委託を受けた第24次・第29次調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した緊急発掘調査である。

3. 野古A遺跡は岩手県遺跡登録台帳番号LE16-2155に該当し、調査略号はそれぞれ第23次調査がONK-04-23、第24次調査がONK-04-24、第29次調査がONK-05-29である。

4. 発掘調査における調査次数毎の期間、調査面積、担当者は以下の通りである。

(第23次調査) 平成16年9月15日～11月1日 2,056 m²

　　文化財調査員 亀澤盛行・期限付調査員 立花裕

(第24次調査) 平成16年10月1日～11月1日 2,240 m²

　　文化財調査員 福島正和・米田寛

(第29次調査) 平成17年4月12日～6月13日 3,088 m²

　　文化財専門員 金子昭彦・文化財調査員 八木勝枝

5. 整理作業の期間、担当者は以下の通りである。

(第23次調査) 平成17年2月1日～平成17年3月31日 立花裕

(第24次調査) 平成17年2月1日～平成17年3月31日 福島正和

(第29次調査) 平成18年1月16日～3月31日 八木勝枝

6. 本書の執筆は分担し、福島(第23次・24次)、八木(第29次)がおこなった。

7. 発掘調査に際する航空写真撮影は東邦航空株式会社に、出土した鉄製品の保存処理はJFEテクノリサーチ株式会社にそれぞれ業務委託した。

8. 発掘調査においては、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会、独立行政法人都市再生機構岩手総合開発事務所、近隣住民の方々のご理解とご協力をいたしました。

9. 調査および報告書作成にあたり以下の方々のご教示をいただいた。記して感謝申し上げる(敬称略・順不同)。八木光則、三浦陽一、神原雄一郎(盛岡市教育委員会)、井上雅孝(浅沢村教育委員会)、高橋千晶(奥州市教育委員会)、佐藤良和(財団法人 奥州市埋蔵文化財調査センター)、村田晃一(宮城県教育庁)、高橋誠明、大谷基(大崎市教育委員会)、佐藤敏幸(東松島市教育委員会)、宇部則保(青森県八戸市教育委員会)、菅原祥夫(財団法人福島県文化振興財團)、津野仁(財団法人 とちぎ生涯学習財团)、小橋健児(財団法人 市原市埋蔵文化財センター)。

10. 本書では、国土地理院発行「盛岡・日詰 1:50,000」地形図を使用した。また、検出遺構の土増注記における土色および出土土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』2002年度版に準拠した。

11. 調査で出土した遺物および実測図、写真等の各種記録類の一切は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。広く活用されることを希望する。

12. 本書発行以前に現地公開で調査成果を公表したが、公表内容と本書記載事実との不一致、相違に関しては整理作業期間を経ている本書をもって正とする。

目 次

I 調査に至る経緯と経過	1
II 立地と環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	2
3 過去の調査成果	4
III 調査の方法	7
1 発掘調査の方法	7
2 整理作業の方法	7
3 記載方法と凡例	7
IV 第23・24次調査	10
1 基本層序と遺構配置	10
2 坪穴住居跡	10
3 土坑	57
4 溝跡	60
5 遺構外出土遺物	63
6 まとめ	63
V 第29次調査	81
1 坪穴住居跡	81
2 掘立柱建物跡	97
3 土坑	98
(1) 陥し穴状土坑	98
(2) 土坑	100
4 住居状遺構	102
5 柱穴状土坑	106
6 遺構外出土遺物	108
7 総括	108
VI 考察	117
1 野古A遺跡第23・24・29次調査検出坪穴住居跡について	117
2 野古A遺跡第19・20・29次調査区検出の陥し穴状土坑について	122
3 墓壙	127
4 土器	129
5 磁土器の使用痕跡	138
6 鉄製鋸先	140
7 まとめ	143

図 版

第1図 遺跡位置	2	第40図 RA063	49
第2図 地形分類	3	第41図 RA063 カマド	50
第3図 周辺の遺跡	5	第42図 RA063 出土遺物	51
第4図 調査区割	8	第43図 RA065	52
第5図 基本層序断面	11	第44図 RA069	53
第6図 第23・24次調査区遺構配置	11	第45図 RA069 カマド	54
第7図 RA066	12	第46図 RA069 出土遺物	55
第8図 RA066カマド	13	第47図 穴状住居出土鉄製品	56
第9図 RA066出土遺物	14	第48図 RD103～108	58
第10図 RA068	15	第49図 土坑（RD）出土遺物	60
第11図 RA068カマド	16	第50図 RG024	61
第12図 RA068出土遺物	17	第51図 RG027～029	62
第13図 RA068出土遺物（石器）	18	第52図 遺構外出土遺物	63
第14図 RA071	19	第53図 「吉」字土器集成	64
第15図 RA071（カマド）	20	第54図 第29次調査遺構配置図	81
第16図 RA071出土遺物	21	第55図 RA060住居跡	82
第17図 RA067	22	第56図 RA060住居跡出土遺物	83
第18図 RA067カマド	23	第57図 RA076住居跡	84
第19図 RA067ピット	24	第58図 RA076住居跡出土遺物	85
第20図 RA067出土遺物（土器）	24	第59図 RA077住居跡（1）	86
第21図 RA067出土遺物（石器・石製品）	25	第60図 RA077住居跡（2）	87
第22図 RA060（第23次）	26	第61図 RA077住居跡出土遺物	88
第23図 RA060（第23次）出土遺物	27	第62図 RA078住居跡（1）	90
第24図 RA061	28	第63図 RA078住居跡（2）	91
第25図 RA061カマド	29	第64図 RA078住居跡出土遺物（1）	92
第26図 RA061出土遺物（1）	30	第65図 RA078住居跡出土遺物（2）	93
第27図 RA061出土遺物（2）	31	第66図 RA079住居跡	94
第28図 RA061出土遺物（3）	32	第67図 RA079住居跡出土遺物（1）	95
第29図 RA062	34	第68図 RA079住居跡出土遺物（2）	96
第30図 RA062東カマド	36	第69図 RB004掘立柱建物跡	97
第31図 RA062南カマド	37	第70図 RD112～115陥し穴状土坑	99
第32図 RA062出土遺物	38	第71図 RD116～125土坑・RE002住居状遺構	101
第33図 RA059・064	40	第72図 RB004掘立柱建物跡・RD土坑出土遺物	102
第34図 RA064カマド	41	第73図 RE002住居状遺構出土遺物（1）	103
第35図 RA059・064出土遺物	42	第74図 RE002住居状遺構出土遺物（2）	104
第36図 RA070	45	第75図 RE002住居状遺構出土遺物（3）	105
第37図 RA070カマド	46	第76図 RZ005柱穴状土坑	106
第38図 RA070出土遺物（1）	47	第77図 RZ006柱穴状土坑	107
第39図 RA070出土遺物（2）	48	第78図 RZ005柱穴状土坑・遺構外出土遺物	108

第79図	奈良時代住居床面積	118	第88図	野古A遺跡・第12次RD039	128
第80図	平安時代住居床面積	118	第89図	土器集成図(1)	130
第81図	古代住居跡分布図	119	第90図	土器集成図(2)	131
第82図	カマド方位	121	第91図	土器集成図(3)	132
第83図	陥し穴状土坑開口部長幅分布図	122	第92図	土器集成図(4)	133
第84図	陥し穴状土坑底面長幅分布図	122	第93図	土器分類図	134
第85図	野古A遺跡陥し穴状土坑配図	123	第94図	礫石器の使用痕跡	139
第86図	近隣遺跡検出陥し穴状土坑開口部長幅分布図	123	第95図	岩手県における鉄製鋸先出土分布	140
第87図	陥し穴状土坑底面長さ別検出数	124	第96図	岩手県内出土鉄製鋸先	142

表

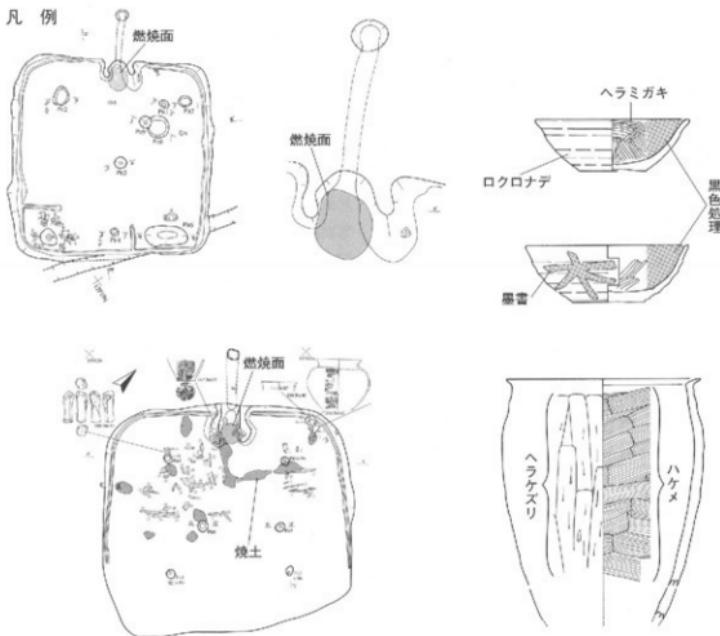
第1表	第23・24次掲載遺物一覧(土器)	65	第7表	野古A遺跡検出住居一覧	119
第2表	第23・24次掲載遺物一覧(その他)	79	第8表	第23・24・29次陥し穴住居跡計測表	120
第3表	第29次陥し穴状土坑観察表	98	第9表	第23・24・29次カマド計測表	120
第4表	第29次土坑観察表	100	第10表	盛南開発地域内陥し穴状土坑一覧	125
第5表	第29次柱穴状土坑観察表	109	第11表	礫石器の使用痕観察表	138
第6表	第29次遺物観察表	113	第12表	岩手県内出土鉄製鋸先	141

写 真 図 版

写真図版1	航空写真	147	写真図版22	RA065	168
写真図版2	調査前状況	148	写真図版23	RA069	169
写真図版3	基本順序(微低地)	149	写真図版24	RD103~106・108	170
写真図版4	RA066(1)	150	写真図版25	RG024・027~029・RD107	171
写真図版5	RA066(2)	151	写真図版26	RA066・068(1)出土遺物	172
写真図版6	RA068(1)	152	写真図版27	RA068(2)出土遺物	173
写真図版7	RA068(2)	153	写真図版28	RA068(3)出土遺物	174
写真図版8	RA071(1)	154	写真図版29	RA071・067(1)出土遺物	175
写真図版9	RA071(2)・RA060	155	写真図版30	RA067(2)・060・061(1)出土遺物	176
写真図版10	RA061(1)	156	写真図版31	RA061(2)出土遺物	177
写真図版11	RA061(2)・作業風景	157	写真図版32	RA061(3)出土遺物	178
写真図版12	RA062(1)	158	写真図版33	RA061(4)出土遺物	179
写真図版13	RA062(2)	159	写真図版34	RA061(5)出土遺物	180
写真図版14	RA064(1)・RA059	160	写真図版35	RA061(6)出土遺物	181
写真図版15	RA064(2)	161	写真図版36	RA062(1)出土遺物	182
写真図版16	RA070(1)	162	写真図版37	RA062(2)出土遺物	183
写真図版17	RA070(2)	163	写真図版38	RA064(1)出土遺物	184
写真図版18	RA067(1)	164	写真図版39	RA064(2)出土遺物	185
写真図版19	RA067(2)	165	写真図版40	RA070(1)出土遺物	186
写真図版20	RA063(1)	166	写真図版41	RA070(2)出土遺物	187
写真図版21	RA063(2)	167	写真図版42	RA070(3)・063(1)出土遺物	188

写真図版43	RA063(2)・069(1)出土遺物	189
写真図版44	RA069(2)出土遺物	190
写真図版45	土坑・遺構外出土土器、 RA068出土石器、RA071出土土製品	191
写真図版46	RA067出土石器・石製品	192
写真図版47	RA061出土石器、RD108出土石器、 堅穴住居出土鉄製品	193
写真図版48	調査区全景・南溝査区基本土層	195
写真図版49	RA060住居跡	196
写真図版50	RA076住居跡	197
写真図版51	RA077住居跡(1)	198
写真図版52	RA077住居跡(2)	199
写真図版53	RA078住居跡(1)	200
写真図版54	RA078住居跡(2)	201
写真図版55	RA079住居跡(1)	202
写真図版56	RA079住居跡(2)	203
写真図版57	RB004掘立柱建物跡	204
写真図版58	RD112・113陥し穴状土坑	205
写真図版59	RD114・115陥し穴状土坑	206
写真図版60	RD116・117・118・119・120・121土坑	207
写真図版61	RD122・124土坑、RE002住居状遺構、 RZ005・006柱穴状土坑	208
写真図版62	RA060・076住居跡出土遺物	209
写真図版63	RA076・077住居跡出土遺物	210
写真図版64	RA077・078住居跡出土遺物	211
写真図版65	RA078住居跡出土遺物(1)	212
写真図版66	RA078住居跡出土遺物(2)	213
写真図版67	RA079住居跡出土遺物(1)	214
写真図版68	RA079住居跡出土遺物(2)	215
写真図版69	RA079住居跡・RB004掘立柱建物跡、 RD土坑出土遺物	216
写真図版70	RD土坑・RE002住居状遺構出土遺物(1)	217
写真図版71	RE002住居状遺構出土遺物(2)	218
写真図版72	RE002住居状遺構出土遺物(3)	219
写真図版73	RE002住居状遺構(4)・RZ005柱穴状土坑・ 遺構外出土遺物	220

凡 例



I 調査に至る経緯と経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された都市区画整理事業である。平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定として、対象面積313haに及ぶ土地区画整理事業が進められている。

この間、事業対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査をおこない調査必要範囲を確定し、本調査は、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業として実施することとなった。

今回の発掘調査は、第23次・第24次が平成16年度、第29次が平成17年度受託事業として契約された。そのうち第23次調査が独立行政法人都市再生機構委託分として都市計画道路予定地2,056m²の範囲で、第24・29次調査が盛岡市都市整備部盛岡南整備課委託分として宅地予定地内2,240m²、3,088m²の範囲でそれぞれ調査した。

II 立地と環境

1 地理的環境

野古A遺跡は、岩手県盛岡市下鹿妻字北に所在する。遺跡の東には北上川、北には零石川がそれぞれ流れ、北西には岩手山を望むことができる。奥羽山脈東側に位置する岩手山は標高2,038mを測り、零石川北岸で火山噴出物を堆積させている。

岩手県北部から県内を南へ貫流する北上川は、蛇行を繰り返しながら岩手県南端を抜け宮城県に至り、宮城県北部を経て、宮城県石巻湾より太平洋に注ぎ出る。この東北地方を代表する大河川は西に連なる奥羽山脈、東に連なる北上山地の間を流れ、その流域に多くの沖積平野を形成している。この北上川の沖積作用によって形成された平野は、特に中・下流域において発達が顕著であり、その平野部面積は岩手県内に存在するその他の河川流域よりも広大である。中流域北部に位置する盛岡市域では、西から零石川、東から中津川、梁川がそれぞれ北上川に合流する。

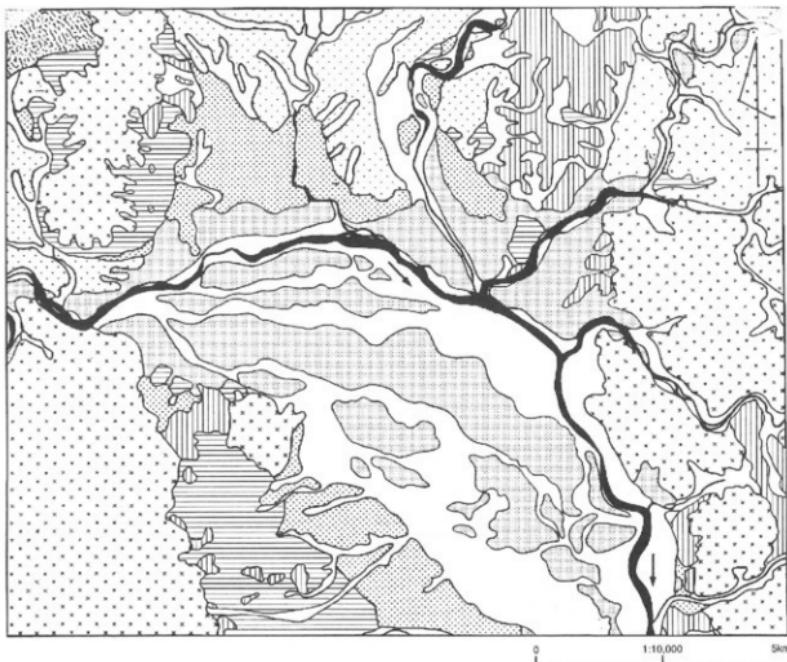
零石川は、秋田県境、岩手県西部に端を発し、東へ流れ北上川に合流する。この零石川は、盛岡盆地西半において広い冲積地を形成しており、特にこの南岸と北上川西岸にあたる一帯は冲積段丘面が層状に重なる。

野古A遺跡は、この段丘面の自然堤防上に位置する。この段丘は砂礫層によって構成され、起伏を持ちながら一帯に広がっている。また、段丘面には零石川から北上川に向けて幾つかの氾濫源を持ちながら後背湿地を形成している。遺跡付近では、多くの低地部分が検出されており、古くから湿地と隣接する立地であったと考えられる。

野古A遺跡周辺は、零石川の氾濫原による低地部分と低位段丘面が複雑に入り組んだ地形を成している。盛岡開発前の地形は水田、宅地、道路などに反映している場所も随所にみられる。このような微地形は、遺跡の分布・立地と大きく関わるものと考えられ、両者の関連性については今後も開発が進むこの地域の重要なテーマの一つであると考えられる。また、開発によって旧地形がほとんど失われていく現状で地形を記録に残すことも有用である。



第1図 遺跡位置



第2図 地形分類

2 歴史的環境

季石川北岸の台地上には、縄文時代の遺跡が多数確認されている。特に大館遺跡群は県内でも有数の縄文時代中期の集落である。一方、季石川南岸に位置する野古A遺跡周辺では、本宮熊堂A遺跡が縄文時代晩期の集落域であるが、その他の遺跡では縄文時代の陥し穴状土坑が散見される。

季石川南岸に広がる平野部には古代の遺跡が顕著である。古墳時代の様子は遺跡がほとんどなく未解明であるが、奈良時代になると古代の人々の活動がみられ始める。

零石川より北約1kmに位置する太田蝦夷森古墳群は8世紀に営まれた古代の墳墓群である。これまでの調査で和同開珎や唐手刀などが出土している。また、太田蝦夷森古墳群の約1.5km西には志波城跡が存在する。この志波城跡は803年に成立した城柵の一つで、古代盛岡地域も中央政府の枠組みに組み込まれたとされている。この志波城は存続期間が短く、10年でその実質的な機能を徳丹城に移される。これまでの志波城跡の発掘調査では、築地塀跡などの城柵としての機能を持つ造構が確認されている。また、城柵機能を想定できる他地域からの搬入遺物や墨書き器なども多量に出土している。

志波城跡の周辺および南側の広い範囲では、古代の集落が多数高い密度で分布する。志波城の所在する太田地区では、志波城並行期の集落と考えられている松ノ木、館遺跡が調査されている。また、志波城以降の時期では林崎遺跡などの集落遺跡が確認されている。

太田地区の南に位置する本宮地区では本書に掲載している野古A遺跡や本宮熊堂B遺跡、小幡遺跡、鬼柳A遺跡、宮沢遺跡、大宮北遺跡などが調査され、古墳～平安時代の拠点的な集落の全容が明らかになりつつある。特に、本宮熊堂B・野古Aの両遺跡は居住域が密に広がっており、この地区的集落群の中心的存在であったと考えられる。現在までに本宮熊堂B遺跡で約130棟の古代の堅穴住居跡が確認されている。この地区は7世紀代の造構・遺物は数多くないが、8・9世紀代の造構・遺物は充実している。

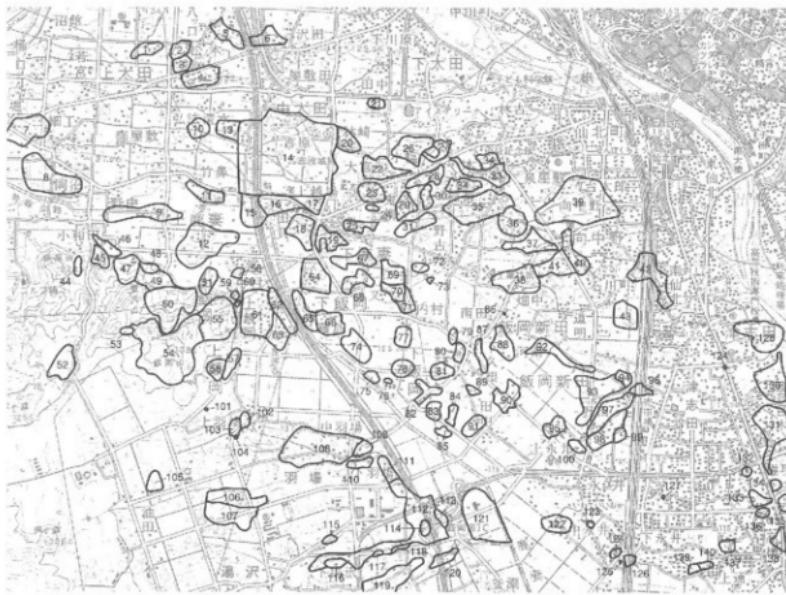
本宮地区の南に位置する向中野・飯岡地区では、台太郎遺跡を中心多くの古代の集落が調査されている。台太郎遺跡の西側に隣接する飯岡沢田遺跡では、古代の堅穴住居のみならず、古代の墳墓群が調査されている。この南に隣接する飯岡才川遺跡でも墳墓群、平安時代の堅穴住居が調査されている。台太郎遺跡の南に位置する細谷地遺跡、向中野館遺跡の調査では、飯岡才川遺跡と同様に平安時代の堅穴住居跡が多く調査されている。

以上のように野古A遺跡周辺の盛南開発区域では、古代を中心とする集落遺跡が広域な範囲にわたって高密度で存在している。

3 過去の調査成果

野古A遺跡は平成16年度当初段階まで、22次に渡る発掘調査が当埋蔵文化財センター、盛岡市教育委員会の両機関によっておこなわれている。野古A遺跡の延べ調査面積は、平成16年度4月段階において約43,000m²を測り、約60棟に及ぶ古代の堅穴住居が検出・調査されている。

この成果により、周辺地域同様に古代の集落が広がっているエリアであることを示している。現段階では、遺跡範囲東側で未調査部分もあるが、隣接する諸遺跡の成果を考え合わせると、遺跡のほぼ全域が7世紀～10世紀にかけての居住域であると考えられる。堅穴住居はおもに第12次・第15次調査区周辺において密に分布しており、遺跡の中での集落中心域はこのエリアであると考えられる。また、遺跡内に旧河道と呼ばれる帶状の低地部分が幾条も認められ、この低地部分に近接するように堅穴住居が立地する傾向にあり、微地形と住居立地との関係性が注目される。現段階では、7世紀後半以前の遺物は確認されていないため、野古A遺跡での古代集落の開始時期は7世紀後半であると考えられる。一方、平安時代では、志波城が成立する9世紀前半の造構・遺物が確認されていない。このように、古代集落は絶続しながらも10世紀頃まで展開すると考えられる。古代の堅穴住居以外では掘立柱建物も確認されており、住居以外の施設が集落内に存在している可能性を示している。ちなみに、古墳～奈良時代の堅穴住居は25棟、平安時代の堅穴住居は34棟という内訳である。



1. 鶴田(平安)
 2. 松ノ木(古代～近世)
 3. 犀(太田館)(古代～近世)
 4. 上野屋敷(古代)
 5. 八ツ口(古代)
 6. 八掛(奈良・平安)
 7. 太田宿夷森古墳群(奈良)
 8. 一本木(平安)
 9. 天沼(古代)
 10. 鶴中(古代)
 11. 五兵衛新田(古代)
 12. 竹森(古代)
 13. 小沼(平安)
 14. 志波城(平安)
 15. 花御前(平安)
 16. 田具(古代)
 17. 新堀塙(純文・平安)
 18. 石仏(古代)
 19. 上越塙A(純文・古代)
 20. 滝跡(平安)
 21. 太田町田(平安)
 22. 大宮北(古代)
 23. 大宮(古代～近世)
 24. 小林(古代)
 25. 水門(古代)
 26. 小櫛(古代)
 27. 宮沢(古代)
 28. 鬼柳A(古代)
 29. 鬼柳B(古代)
 30. 鬼柳C(古代)
 31. 斧古B(古代)
 32. 本宮熊堂A(古代)
 33. 本宮熊堂B(古代)
 34. 稲荷(古代)
 35. 斧古A(古代)
36. 飯沢沢田(古代)
 37. 飯沢才川(古代)
 38. 矢森(古代)
 39. 古太郎(古代)
 40. 向中野原(古代・中世)
 41. 雄鹿原(古代)
 42. 南御北(純文・古代)
 43. 向中野原(古代)
 44. 小相田原(純文・歴史・中世)
 45. 二ノ沢(純文・古代)
 46. 鰐沢下(古代)
 47. 鰐沢(純文・古代)
 48. ヘビ堂(純文・古代)
 49. オヌ坂(純文・古代)
 50. 山中(純文・古代)
 51. 月見山(純文・古代)
 52. 大ヶ森(純文)
 53. 相模(純文)
 54. 飯田山原(中世)
 55. 飯田原(中世)
 56. 飯田赤坂I(古代)
 57. 飯田赤坂II(古代)
 58. 犬(純文・古代)
 59. 高麗古墳群(奈良～平安)
 60. 高畠(純文)
 61. 大崩II(古代)
 62. 大崩I(古代)
 63. 鶴野前(純文)
 64. 近臣敷(古代)
 65. 猿島II(平安)
 66. 猿島I(純文・平安)
 67. 上越塙B(純文・古代)
 68. 二又(平安)
 69. 西田A(古代)
 70. 内村(平安)
71. 中壁敷(古代)
 72. 西山(古代)
 73. 前田(古代)
 74. 飯沢河原II(古代)
 75. 飯沢原林第1(平安)
 76. 上新田(平安)
 77. 深澤I(平安)
 78. 深澤II(平安)
 79. 高麗敷I(古代)
 80. 高麗敷II(平安)
 81. 西(平安)
 82. 飯沢穂堂I(純文・古代)
 83. 飯沢穂堂II(平安)
 84. 飯沢穂堂III(平安)
 85. 南谷地(平安)
 86. 横須海現跡(近世)
 87. 下久松I(古代)
 88. 石持(古代)
 89. 下久松II(古代)
 90. 松鳥(古代)
 91. 田中(平安)
 92. 夕見(古代)
 93. 横原(古代)
 94. 生畔(古代)
 95. 忍木(古代)
 96. 津志田(古代)
 97. 陣相当(古代)
 98. 長沼(古代)
 99. 津志田橋塗(古代)
 100. 鳥居(古代)
 101. 羽場いのこ塚(近世)
 102. 羽場館(中世)
 103. 羽場古木(純文)
 104. 夢子塚(古代)
 105. アイノ堀(純文)
106. 木越(平安)
 107. 福千代(奈良)
 108. 因幡(美文・古代)
 109. 清井田I(古代)
 110. 新井田II(古代)
 111. 笠田(平安)
 112. 下羽場(平安)
 113. 下深沢(古代)
 114. 間既丁(古代)
 115. 小田I(古代)
 116. 小田II(平安)
 117. 森子(古代)
 118. 間達II(古代)
 119. 湯沢大塚(古代～中世)
 120. 一本松(平安)
 121. 大桑(古代)
 122. 間木(古代)
 123. 水井前田(古代)
 124. 神田(古代)
 125. 神田原(古世)
 126. 下永井(古代)
 127. 水井絆塚(近世)
 128. 砥塚(奈良)
 129. 津志田イコ坂(近世)
 130. 西面渡(古代)
 131. 百日本(純文・古代)
 132. 塚の下(純文)
 133. 下永林(純文)
 134. 中鳥(古代)
 135. 三本柳柳(古代)
 136. 大通西(古項)
 137. 高櫻A(古代)
 138. 高櫻B(古代)
 139. 高瀬田(古代)
 140. 鬼屋(古代)

第3図 周辺の遺跡

3 過去の調査結果

古代の遺物では、残存状況が良好な竪穴住居が多いため出土量が豊富である。住居内より一括で出土する竪穴住居跡も多くあり、古代の土器におけるセット関係が明らかになる可能性を秘めている。特に、野古A遺跡では、竪穴住居跡の残存状況が良好であるため、この時代の遺物は他の遺跡より豊富である。そのため、特殊な土器類も多く認められ、一例としてこれまで砂底土器が多く出土していると指摘されている。

今回報告する調査区は遺跡の西側に位置し、濃密な居住域の縁辺部に当たる。今後、調査が進むことによって、古代集落域全体の様子が明らかになるものと思われる。

また、野古A遺跡では古代の遺構以外に縄文時代の陥し穴状土坑も検出されている。のことから遺跡の一部は縄文時代の狩猟場であったと考えられる。

現在、この地域は大規模な都市開発により刻々と姿を変えている。野古A遺跡も例外ではなく、すでに旧来の地形はその面影を失いつつある。未調査部分もわずかになり、この遺跡の発掘調査のまとめをする時期に差し掛かりつつある。

引用・参考文献

- 盛岡市教育委員会 1998 「野古遺跡」『盛岡市埋蔵文化財調査年報 平成5・6年度』盛岡市教育委員会
菅原清男 2003 『野古A遺跡第12次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第420集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
阿部眞澄 2003 『野古A遺跡第15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第421集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
小松則也 2004 『野古A遺跡第19次』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第455集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

III 調査の方法

1 発掘調査の方法

調査開始時、試掘トレンチを掘削し、その上層断面によって調査区全域での遺構検査面を確認した。その後表土をバックホーにより除去し、それ以降の掘削作業は人力でおこなった。調査中は適宜、写真撮影および実測図作成をおこない記録の保存に努めた。

調査区割とグリッドの設定および遺構名称は、盛岡市教育委員会の方針に従っている。座標軸をもとに正方形グリッドを設定し、その最小単位を 2×2 mとした。グリッドの配置については第4図のとおりである。

遺構出土遺物は遺構・位置・層位の各単位で取り上げ、遺構外出土遺物はグリッド・層位単位で取り上げた。

調査区は、第23次調査区・第24次調査区・第29次調査区と大きく3つに分かれる。

遺構名は遺跡内統一の通番であるため、調査時に付与したものが欠番になることもあったが、統一通番にするべく新しい遺構名・番号を与え報告した。また、過年度調査されている遺構の続きは、過年度調査の遺構名および遺構番号をそのまま踏襲した。遺構名略号は、竪穴住居（RA）・竪穴住居状遺構（RE）・土坑（RD）・溝（RG）・性格不明遺構、その他（RZ）である。本文中の記載については略号のみの表現で統一した。

2 整理作業の方法

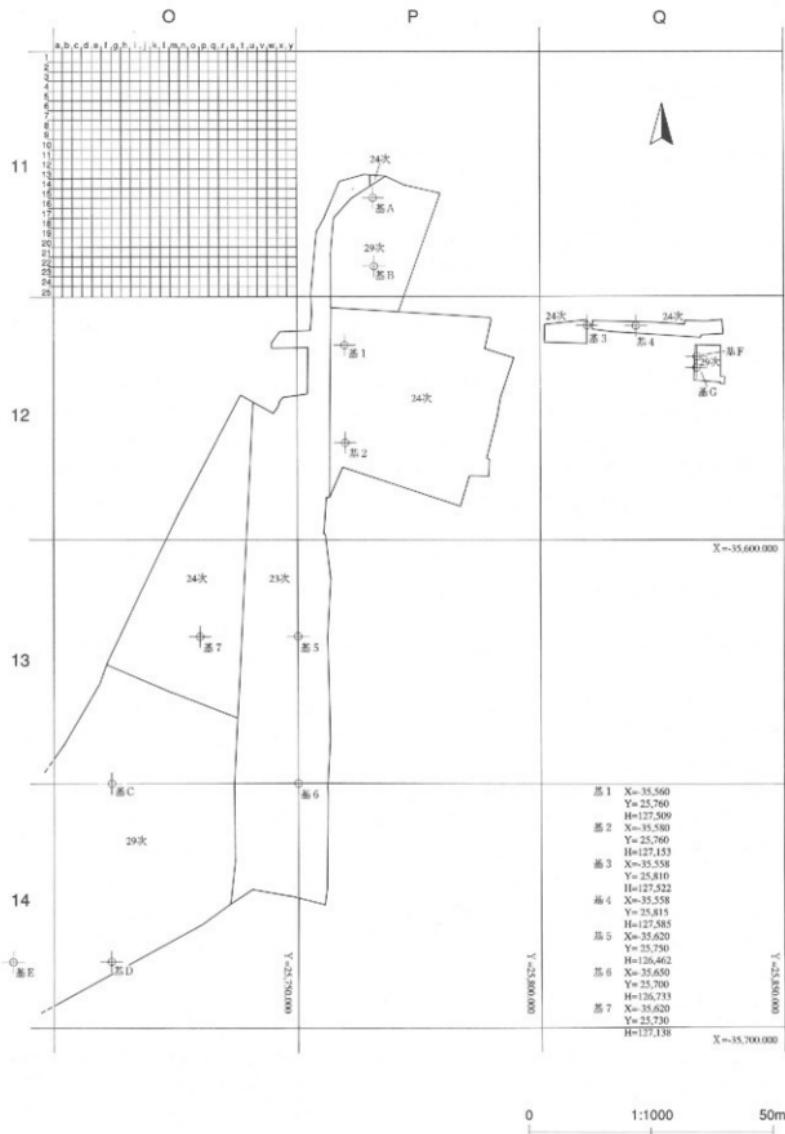
発掘調査中に作成した遺構実測図は必要に応じて合成および修正をおこない、浄書し版下作成をおこなった。

発掘調査中に撮影した遺構写真は、35 mmモノクロ・35 mmカラーリバーサル・ 6×7 版モノクロを使用し、それぞれファイルに整理し台帳を作成した。本書では、そのうち必要な遺構写真についてトリミング、紙焼きをおこない写真図版に掲載した。

出土した遺物は、水洗した後注記・接合し、必要な遺物に関しては石膏による復元をおこなった。それら作業過程中、本書に掲載するものを選出し実測および写真撮影を実施した。実測した遺物は浄書をおこない掉図版として掲載し、撮影した遺物写真についてもすべてを写真図版に掲載した。掲載した遺物は、原則的に実測に堪え得るもの、体部のみの破片は器壁の傾きが厳密に判明する遺物のみを選出した。また、墨書き器等の特殊な遺物に関してはこの限りでない。遺物写真は、立面での撮影を原則としたが、立面での撮影が不可能な破片については平面的な俯瞰撮影をおこなった。

3 記載方法と凡例

本書で使用する方位は、座標による方位である。よって平面図中に付されている方位はすべて国土座標による北である。検出した遺構の欠損部分は、破線による推定線を加えて表現した。また、調査において任意で設定したトレンチ掘方、調査区境および現代の攪乱は一点鎖線とし、トレンチおよび攪乱の平面図はケバを変えて遺構のそれと区別した。



第4図 調査区割

個々の遺構平面図は、基本的に遺構主軸を重視して配置したが、主軸の定まらない不定形、円形の平面形態を示す遺構については、北が上になるように掲載した。竪穴住居の平面図はカマドのある側辺を上向きに配置し主軸に合わせレイアウトした。

出土した土器は、本書では以下の通りに分類し報告することとした。従来のあかやき土器とされている坏類は土師器（非黒色処理、ミガキなし）とした。この分類は客観性を持たせることが目的であるが、非黒色処理でミガキの施されない坏と焼成不良の須恵器坏とは極めて不分明であると言わざるを得ない。両者の決定的な差異は焼成に他ならない。よって、一部で還元が進んでいるものや須恵器の形態・製作技法がみられるものは本来須恵器を指向したと考えられ、器表面に黒斑が顕著にみられるものは本来土師器を指向していたと考えられるため、部分的に還元不足が認められる土器や黒斑を有する土器は遺物観察表の備考欄に表記した。

掲載した土器実測図は、奈良平城京跡、京都平安京跡の調査報告書に準じて $1/4$ の縮尺で統一した。先述した分類により須恵器の断面は黒塗り、土師器の断面は白抜き、黒色処理されている土師器は内外面とも半分にアミを掛けて表現した。調整の痕跡は、一部例外を除き内外面とともに中央半分のみの表現にとどめた。土師器口縁部に施されるヨコナデは、口縁部における稜線の欠失、図の煩雜さを避けるため表現していない。また、土器実測図における稜線は弱い屈曲や口縁端部、底端部の棱を一点抜き直線、強い屈曲や明瞭な調整の変化点は実線、ロクロ等の回転力を利用した回転ナデは、その凹凸の凸部に2点抜き直線で表現した。回転ナデの稜線における2点抜き位置は、土器の立体感を表現するため稜線全長の3等分位置に固定した。また、石器も $1/4$ の縮尺で統一し、その他石製品、土製品、鉄製品は $1/2$ の縮尺で統一した。

竪穴住居出土遺物は、原則として住居毎のまとまりで図・写真を掲載した。竪穴住居出土以外の遺物は遺構種別毎のまとまりで掲載している。

第23次、第24次の調査で設置された基準点の標高値は第4図に示している。この基準点は調査に際して都市再生機構によって設置され、これら基準点の標高値を基に遺構の実測をおこなった。しかしながら、第29次調査地点をはじめとして隣接調査地点の水準点と比較すると約2m高い標高値であることがわかった。約2mは大きな誤差であるが、成采簿等の資料がなく検証不可能である。したがって、本書第23次、第24次調査の標高値は修正をおこなわず調査時ままで表示した。

IV 第23・24次調査

1 基本層序と遺構配置

調査区周辺の微地形をみると西から東へ向け低くなる段丘の境である。周辺は大まかに分けると3つの段丘面が存在しており、本遺跡北西にある稻荷遺跡・本宮熊堂B遺跡・本宮熊堂A遺跡が各段丘面に立地している。すなわち、高位が稻荷遺跡、中位が本宮熊堂B遺跡、下位が本宮熊堂A遺跡である。これら3つの段丘面のうち、本宮熊堂B遺跡が立地する中位の面に野古A遺跡が立地している。この段丘面の境界ラインは上記遺跡群周辺では東西方向にみられるが、野古A遺跡では、緩やかにカーブしておよそ南北方向へと変化する。今回の調査区西側はちょうど高位と中位の面の境目にあたると考えられる。したがって、調査区内は概ね西から東へ向けて低くなる地形である。

調査した範囲の基本層序は上層よりⅠ～Ⅲ層を確認した。Ⅰ層は表土および近現代耕作土層、Ⅱ層は黒色シルト主体の自然堆積層、Ⅲ層は黄色シルト主体の自然堆積層である。なお、Ⅲ層より下層では砂層および砂礫層がみられる（Ⅳ層）箇所がある。表土直下で砂礫層がみられる調査区西側は、本来堆積していたであろうⅡ層およびⅢ層が削平のため失われていると考えられる。すなわち、本来調査区内でもっとも高い地点であると考えられ、表土直下面の標高値ももっとも高い。また、第23次・24次調査区では、帯状に低地部分が3ヶ所みられる。これらが、もっとも低い地点であると考えられる。この低地部分にはⅡ層が良好に残存しており、そのため大規模な黒い帯が調査区内に横たわっているように見える。最上位の遺構検出面は、このⅡ層上面である。RA067のみは、帯状低地のまっただ中にあり、Ⅱ層上面で検出した。しかし、低地以外はすでにⅡ層が残存しておらず、Ⅲ層上面が露出している状態であったためこの面で遺構を検出した。次章で報告する第29次調査区も基本層序は同様である。

検出した遺構は、第23次調査区で堅穴住居8棟、土坑5基、溝3条である。第24次調査区では、堅穴住居5棟（内1棟は第23次調査区に及ぶ）、土坑1基、溝3条（内2条は第23次調査区に及ぶ）である。第23次調査区は南北に長い形状を呈しており、堅穴住居は北からRA060・[RA064・059]・RA062・RA061・RA070・RA068・RA071・RA066の順で検出した。第24次調査区は間に第23次調査区を挟み、東西に分かれる。西側で遺構は無く、第23次調査区より東側でのみ遺構を検出した。堅穴住居は東からRA063・RA067・北端にあるRA065・東端のRA069である。なお、次章で報告する第29次調査区は、第24次東側エリアの北と、第24次西側エリアの南にそれぞれ隣接して位置している。また、第23次調査区北で検出したRA060は第29次調査区で続きを検出している。

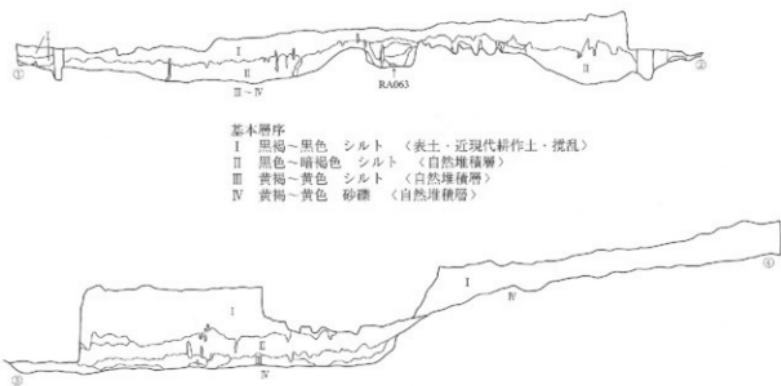
2 堅穴住居跡

RA066

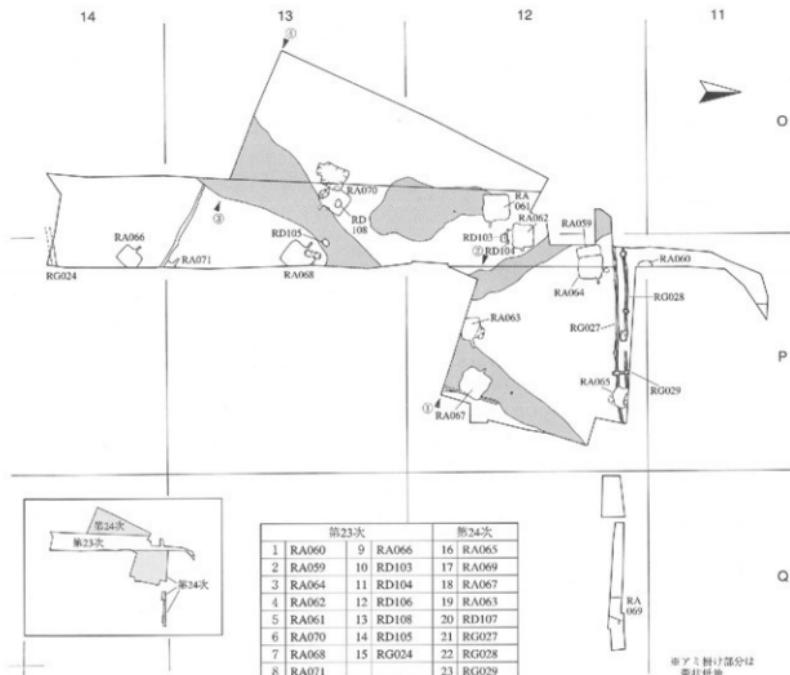
遺構（第7・8図・写真図版4・5）

【位置】 第23次調査区南側140m4aグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められないが、住居西隅は調査区外へ続く。また、住居の北西には、RA071が位置している。Ⅰ層直下の平坦な面である。主軸方向は約45°西に傾いた南北方向である。

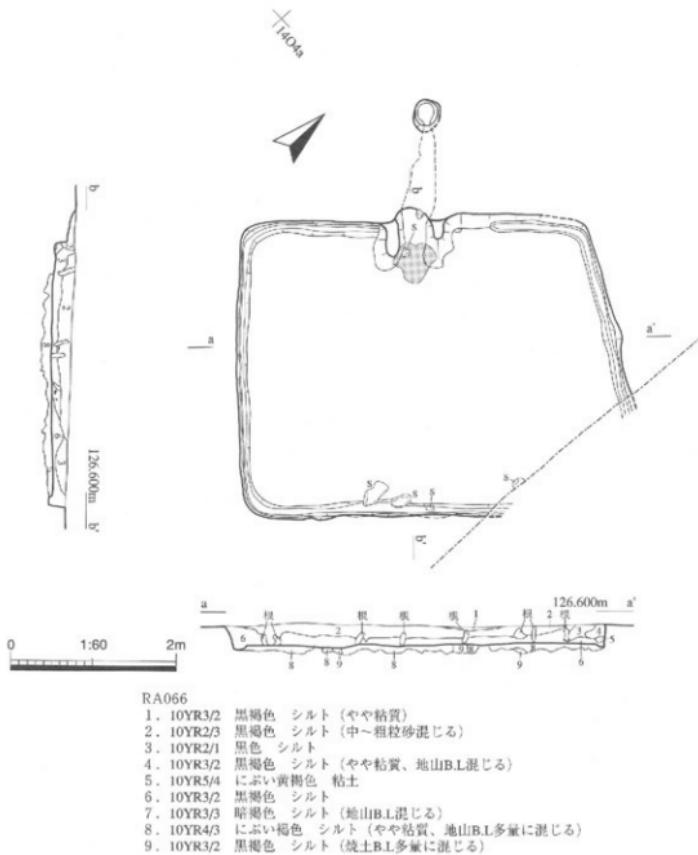
【平面形・規模】 平面形態は概ね方形であると推定されるが、やや主軸方向が短く、南東壁がやや長



第5図 基本層序断面



第6図 第23・24次調査区遺構配置



第7図 RA066 (第23次)

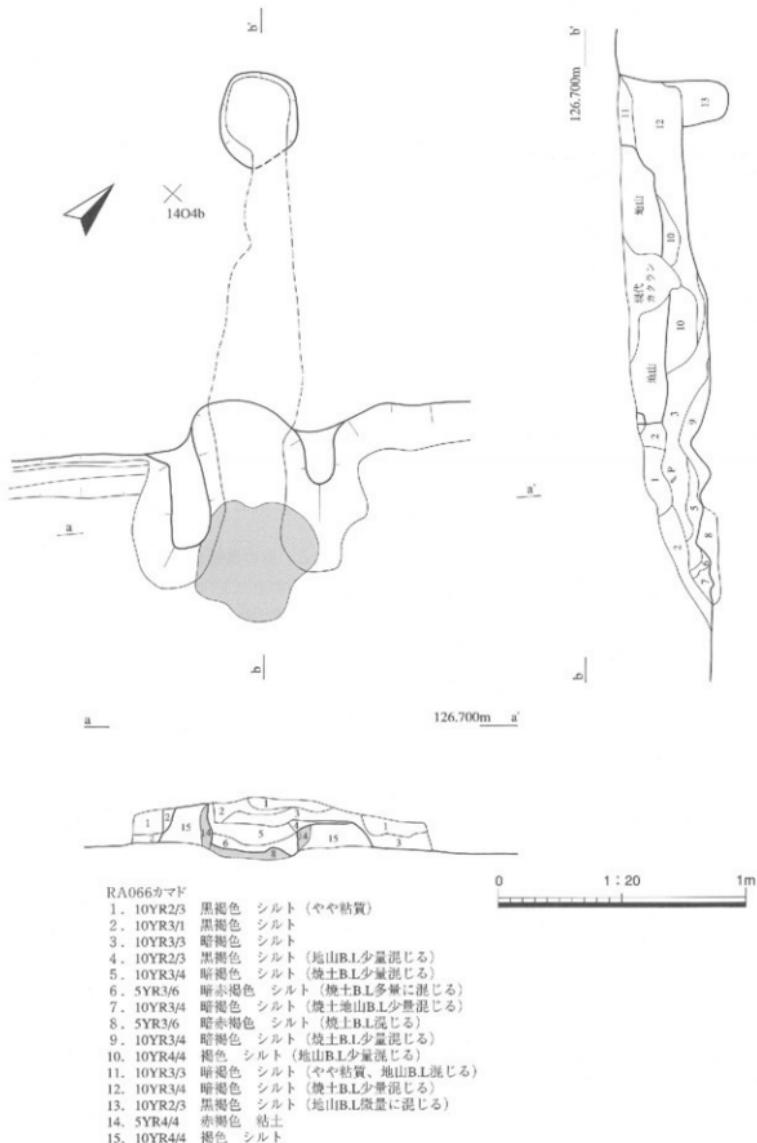
い台形に近い形態であると考えられる。

検出可能な北西壁 4.09m および南西壁 3.5m を測り、調査区外へ続く北東壁 2.2m および南東壁 2.81m を測る。また、深さは 32cm を測る。

【堆積土】 概ね 2 層のシルトからなる。いずれも炭化物を多く含む。

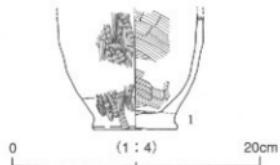
【壁・床面】 調査区外へ続く東隅以外がすべて良好に残存する。四側壁ともに、垂直に近い急角度で立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面である。東側壁際には縄文土器を検出した。また、壁際の周溝はカマド付近を除いてすべての壁で検出した。

貼床はほぼ床全面に施されており、除去すると凹凸著しい掘削面が存在する。



第8図 RA066カマド（第23次）

2 堅穴住居跡



第9図 RA066出土遺物（第23次） 煙道部は煙出し部に向けあまり傾斜せずトンネル状に倒り抜かれており、長さ1.35mを測る。堆積土は焼土や地山ブロックを多く含んでいる。

煙出し部は、円筒状に掘り込まれておらず、煙道部底面よりも約20cm深い。

[柱穴] 明確な柱穴は確認されなかった。

[土坑] 確認されなかった。

遺物（第9図・写真図版26）

堆積土やカマド燃焼部などから土師器が出土した。このうち、図化可能な遺物は土師器1点である。

1はカマド燃焼部埋土より出土した土師器壺である。内外面ともにハケ調整が施されている。底部は比較的厚みがあり、安定した形態である。

小結 遺構の時期は、出土遺物より7世紀末～8世紀初頭であると考えられる。

RA068

遺構（第10・11図・写真図版6・7）

[位置] 第23次調査区南側13P19bグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められないが、住居北隅および中央付近が大きく攪乱坑によって失われている。また、住居の北西には、RD105が位置している。I層直下の平坦な面である。主軸方向は約45°北に傾いた東西方向である。住居東隅は調査区外へ続く。

[平面形・規模] 南北4.2m、東西4.5mを測り、平面形態は概ね方形であると推定される。深さは32cmを測る。

[堆積土] 3層のシルトからなる。いずれも炭化物を多く含む。上層からは平安時代の土師器片が出土している。下層には特に炭化物が多く認められ、土器の出土や焼土ブロックも顯著である。

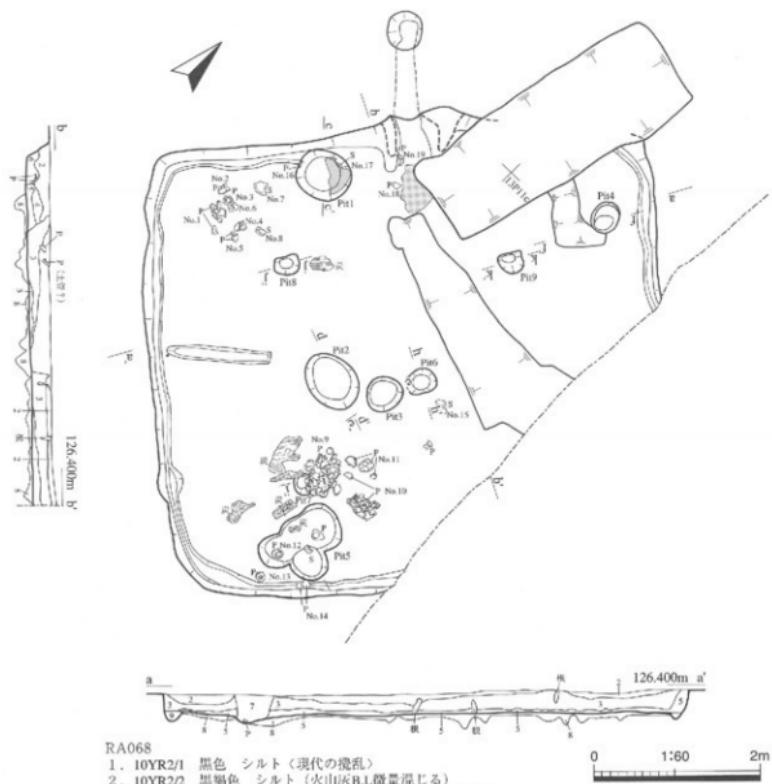
[壁・床面] 調査区外へ続く東側隅、攪乱を受けている西壁一部以外がすべて良好に残存する。北西側壁は緩やかな角度で立ち上がるが、その他の壁は比較的急角度で立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面である。多数の遺物と炭化材を検出した。床面上では、炭化材が散在しており、この住居の建築部材の一部である可能性が高い。床面が顕著に赤化しているような状況がみられないため断定は避けなければならないが、炭化材やまとった土器の出土状況などを考慮すると、何らかの理由で焼失した住居である可能性もある。また、カマド付近を除いてすべての壁で周溝検出した。

貼床はほぼ床全面に施されており、除去すると凹凸著しい掘削面が存在する。

[カマド] 北西側壁に設置されており、両袖部とともに基底部が残存している。北側の袖および燃焼部は攪乱によって失われている。また、燃焼部の平面形態は不定形である。

煙道部は煙出し部に向け傾斜してトンネル状に倒り抜かれており、長さ1.4mを測る。堆積土は炭化物を多く含んでいる。

[柱穴] 4基のピットを確認した。その他にも5基のピットを検出したが、配置や規模などから考えて柱穴はピット3・ピット5・ピット8・ピット9が有力である。このことから柱穴の平面配置は、



RA068

1. 10YR2/1 黒褐色 シルト〈現代の擾乱〉
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト〈火山灰B.I.微量混じる〉
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト〈地山B.I.微量、細粒砂混じる〉
4. 10YR2/3 黒褐色 シルト〈中～粗粒砂混じる〉
5. 10YR2/2 黒褐色 シルト〈やや粘質〉
6. 10YR2/3 黒褐色 シルト〈地山B.I.多く混じる、締まり強〉
7. 10YR2/1 黒色 粘土〈近現代の擾乱〉
8. 10YR2/3 黒褐色 シルト〈地山B.I.多く混じる〉

第10図 RA068 (第23次)

調査区外に1基あると想定され、合計5本の柱が考えられる。すなわち、四方の4本と中央の1本の配置が考えられる。

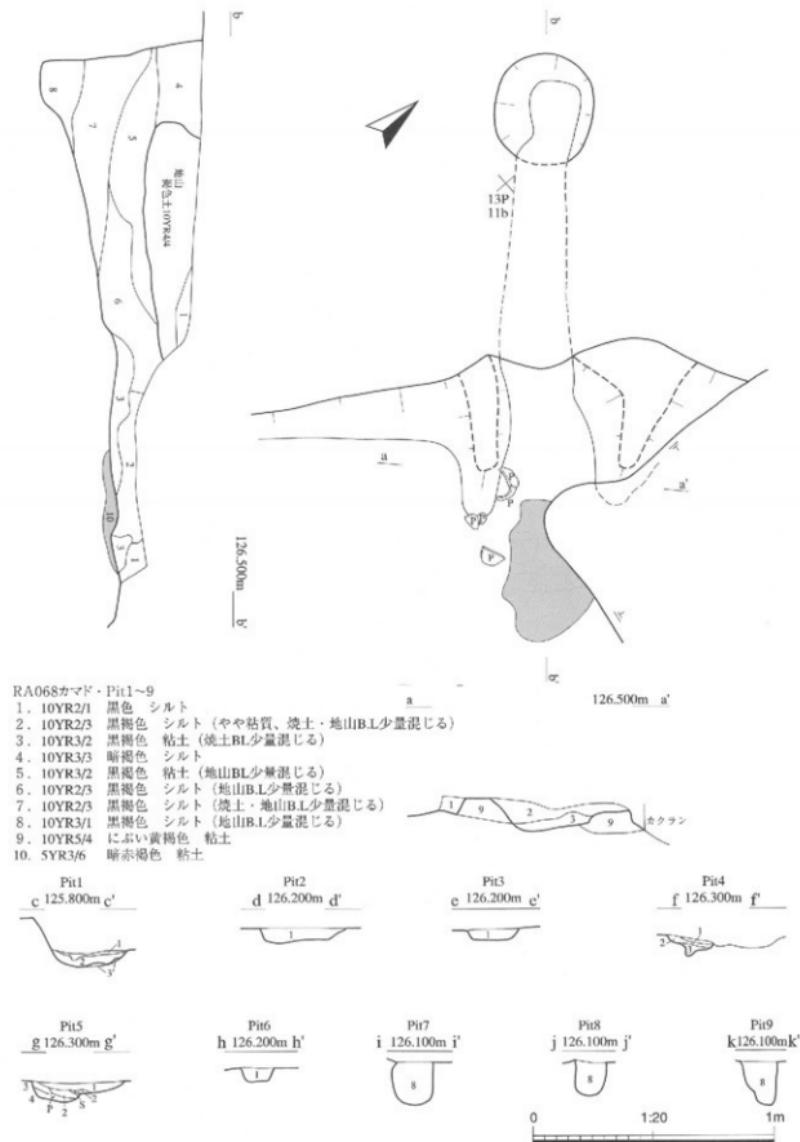
〔土坑〕 ピット3・5・8・9以外のピット1・2・4・6・7は土坑であると考えられる。

遺物 (第12図・写真図版26～28)

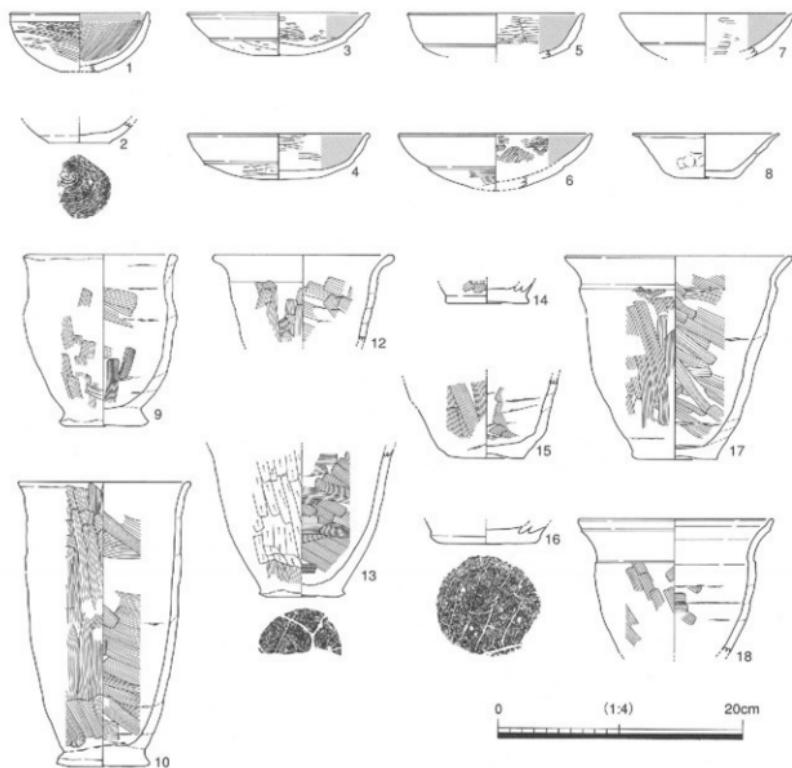
堆積土や床面などから土師器、石器が出土した。このうち、図化可能な遺物は土師器21点、石器2点である。

1～8は土師器坏である。

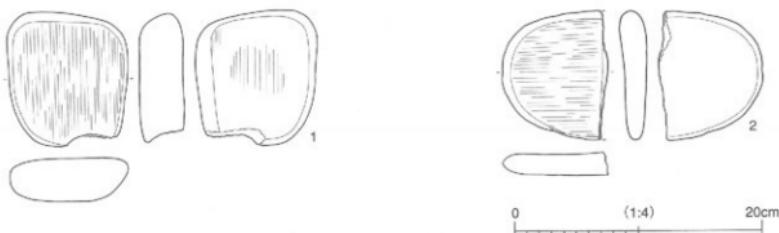
2 堅穴住居跡



第11図 RA068カマド（第23次）



第12図 RA068出土遺物（土器）（第23次）



第13図 RA068出土遺物（石器）〈第23次〉

1は床面直上より出土した半球形の小形壺である。外面はヘラケズリの後、横方向に細かなミガキが施されている。内面は底部から口縁部まで一息に放射状にストロークの長いミガキが施され、黒色処理されている。また、口縁部のヨコナデは、端部のみをナデる上下幅の狭いものである。これら諸特徴は関東地方、特に現在の千葉県域でみられる7～8世紀代の土師器と似ている。よって、この土師器は関東系土師器の一種であると考えられる。ただし、胎土や色調などは在地の土師器と大きく変わらない。2は埋土の上層より出土した壺である。ロクロが用いられているため平安時代のものである。底部には回転糸切りの痕跡が認められる。埋土上層の堆積時期が想定される土器である。3・4はともに有段の壺である。外面は体部下半において明瞭なヘラケズリが施されている。また、内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。器高は比較的低く、器壁は比較的薄い特徴を有し、全体的にシャープな作りである。仙台平野など東北南部で特徴的な栗開式の系譜を持つ壺である。5～7は丸底であるが、段が不明瞭な壺である。いずれも3・4に比して器壁が厚く、外面のヘラケズリも顕著ではない。在地によくみられる壺である。8は粗雑な作りの土師器壺である。外面には指頭圧痕がみられ、調整と呼ぶことができる調整は皆無である。

9～21は土師器壺である。いずれも埋土や床面より出土した。

9～11は当該地域ではみられない独特な壺である。いずれも頸部の括れや段は不明瞭で、底部は極度に厚みがあり、他の壺より粗雑な成形である。9は小形、10は中形、11は大形とみられ、12は下半がないため全体の形状が不明であるが、口径や器壁の傾きから9と同じく小形である可能性が高い。11は外面に縱方向のミガキが施されているが、その他はハケ調整である。また、11は土器自体の歪みが著しく、形状も異様である。18は小形の壺であるが、頸部の括れがなく、体部から一定の傾きを維持しながら口縁部が開口する形態である。

18と21は口縁部上端が上方に摘み上げられ、受け口状の形態を呈する。

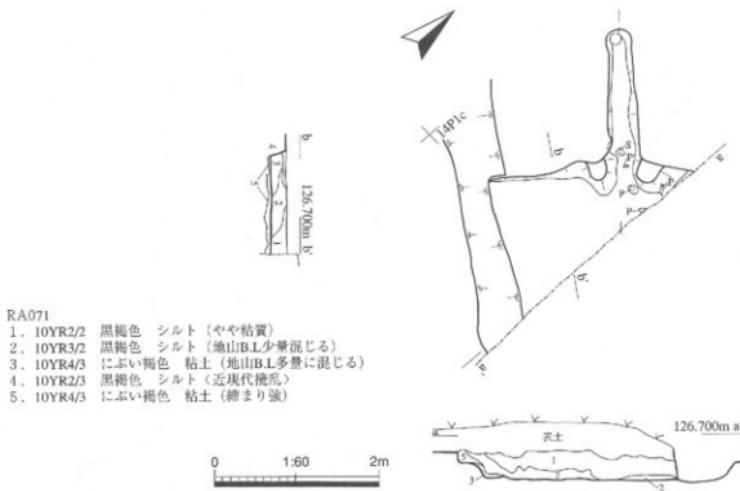
22・23は磨石器である。ともに扁平な形状を呈しており、擦痕が認められる。用途は不明であるが、縄文時代の石皿のような用途が想定される。

小結 遺構の時期は、出土遺物より7世紀末～8世紀初頭であると考えられる。

RA071

遺構（第14・15図・写真図版8・9）

[位置] 第23次調査区南側13P25cグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められないが、住居西側壁が大きく擾乱（現代の水路）によって失われている。また、住居の南には、RA066が位置している。住居の大半が調査区外へ延びており、今回調査したのは北西のわずかな部分である。



第14図 RA071（第23次）

【平面形・規模】 平面全体が不明であるが、方形であると考えられる。残存する南北長0.6m、東西長2.8m、深さ13cmを測る。

【堆積土】 概ね3層のシルトからなる。堆積は攪乱を除けば、乱れが無く自然堆積であると判断される。

【壁・床面】 北西側壁の一部のみが確認できた。それ以外は、攪乱で失われている南西側壁、調査区外へ続く北東、南東側壁は現時点では不明である。検出した北西側壁は比較的急角度で立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面である。床面直上では、遺物の出土はみられなかった。貼床は検出した床面のほぼ床全面に施されており、除去すると凹凸著しい掘削面が存在する。

【カマド】 北西側壁に設置されており、両袖部ともに残存しており、ともにシルトで構築されている。燃焼部は顕著な焼土を確認できなかった。しかし、北側袖部よりに土師器壺底部が逆位に置かれた状況で出土した。この壺はカマド支脚として用いられた可能性が高い。

煙道部は、底面が煙出し部に向け傾斜しており、天井部は良好ではなくたが、赤化した天井部が崩落したような痕跡を確認した。このことから、本来煙道部はトンネル状に削り抜かれていたものと考えられる。

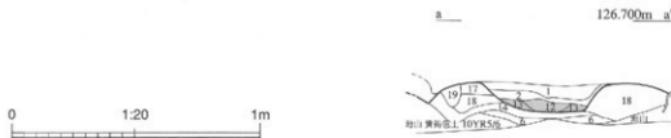
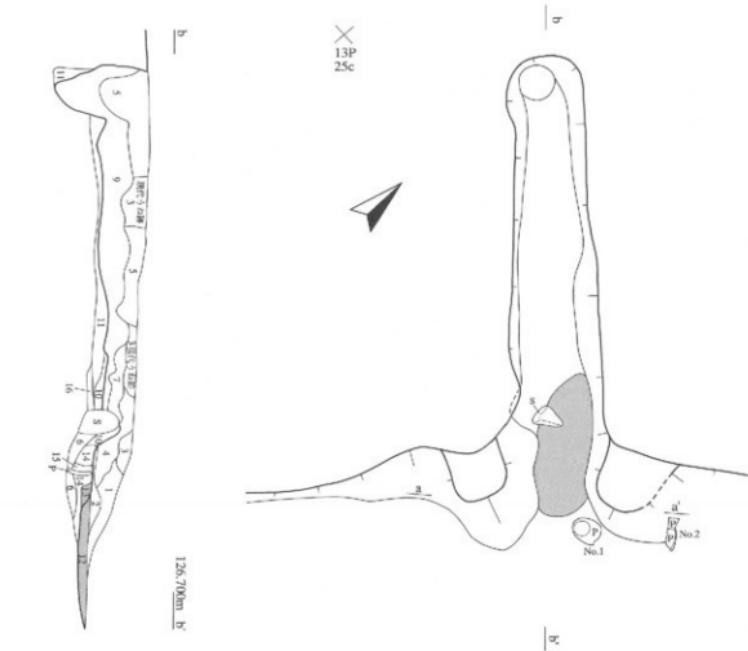
【柱穴】 明確な柱穴は確認されなかった。

【土坑】 確認されなかった。

遺物（第16図・写真図版29）

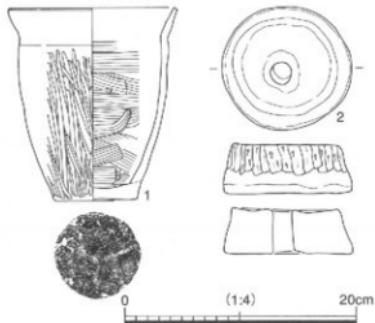
カマドの支脚と考えられる土師器壺1点、堆積土2層より土製紡錘車が1点出土した。

1は底部がカマド北袖部脇において逆位で出土した。また体部上半や口縁部などはカマド袖部周辺で出土し、接合してほぼ完形になった。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向にハケが施される。頸部の括れは弱く、外傾はするもののやや直線的な器型が特徴的である。また、器高が低めの器種である



- RA071カマド
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土（地山BL多量に混じる）
 2. 10YR5/6 黄褐色 粘土（焼土BL混じる）
 3. 10YR4/4 暗褐色 粘土（地山BL、焼土BL少量に混じる）
 4. 10YR3/3 暗褐色 粘土（地山BL混じる）
 5. 10YR3/2 黒褐色 シルト（地山BL微量に混じる）
 6. 5YR3/6 暗赤褐色 粘土（地山BL少量混じる）
 7. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土
 8. 10YR4/4 にぶい赤褐色 粘土（やや粘質、地山BL多量に混じる）
 9. 5YR3/4 暗赤褐色 粘土（地山BL混じる、赤化）
 10. 10YR3/4 暗褐色 シルト（地山BL多く混じる）
 11. 10YR3/4 暗褐色 粘土（焼土BL多く混じる）
 12. 5YR3/6 暗赤褐色 粘土
 13. 5YR2/4 暗褐色 シルト（地山BL混じる）
 14. 10YR3/3 暗褐色 シルト（土器片、焼土BL混じる）
 15. 10YR4/4 にぶい赤褐色 シルト（地山BL混じる）
 16. 10YR3/4 暗褐色 シルト（やや粘質、地山・焼土BL混じる）
 17. 5YR3/4 暗赤褐色 粘土（地山・焼土BL多く混じる）
 18. 5YR2/4 暗褐色 シルト（地山・焼土BL混じる）
 19. 10YR3/4 暗褐色 粘土（地山・焼土BL多量に混じる）

第15図 RA071カマド（第23次）



第16図 RA071出土遺物〈第23次〉

にもかかわらず、底径はやや大きめである。

2は土製錘車である。中央部に焼成前の穿孔がなされている。外測面上半には縦方向のヘラケズリが施されている。焼成は非常に良好で固く締まっている。

小結 出土遺物の特徴より7~8世紀代の遺構であると考えられる。

RA067

遺構（第17・18図・写真図版18・19）

【位置】 第24次調査区南側12P17 nグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められないが、住居東隅付近に攪乱によって失われていて

る。また、住居の北東には、RD107が位置している。I層直下、II層上面の平坦な面である。帯状低地部分に立地しているため、削平を免れており、遺存度が非常に高い。主軸方向は約45°北に傾いた東西方向である。

【平面形・規模】 北壁4.6m、東壁4.75m、南壁4.66m、西壁4.97mをそれぞれ測り、平面形態は形の整った方形であると考えられる。深さは59cmを測り、他の住居よりも深さが保たれている。この深さからも、この竪穴住居が非常に良好な残存状況であることがわかる。

【堆積土】 概ね5層のシルトからなる。いずれも炭化物を多く含む。上層からは平安時代の土師器片が出土している。中層には火山灰が多く認められる層が堆積している。火山灰は十和田a降下火山灰であると考えられ、それよりも上層より平安時代の土器片が出土する状況と矛盾がない。これらのことから、この竪穴住居の最終埋没が平安時代であると考えられる。

【壁・床面】 すべて良好に残存する。北西側壁は急角度で立ち上がるが、その他の壁は比較的緩やかな角度で立ち上がる。

床面は固く締まった平滑な面である。多数の遺物を検出した。床面の遺物は、おもに南隅で集中して出土しており、すべて土師器である。また、床面中央では管玉が1点出土した。貼床はほぼ床全面に施されており、除去すると凸凹著しい掘削面が存在する。特に北西側は、貼床が頭張である。カマド付近を除いてすべての壁で検出した。また、この周溝から分岐する溝を南東と南西で2条確認した。

【カマド】 北西側壁に設置されており、両袖部とともに基底部が残存している。また、燃焼部の平面形態は円形であり、一部両袖部の内側裾に及ぶ。

煙道部は煙出し部に向け傾斜してトンネル状に割り抜かれており、長さ1.2mを測る。埋土は炭化物を多く含んでいる。カマド側の煙道部床面から土師器壊が1点出土した。

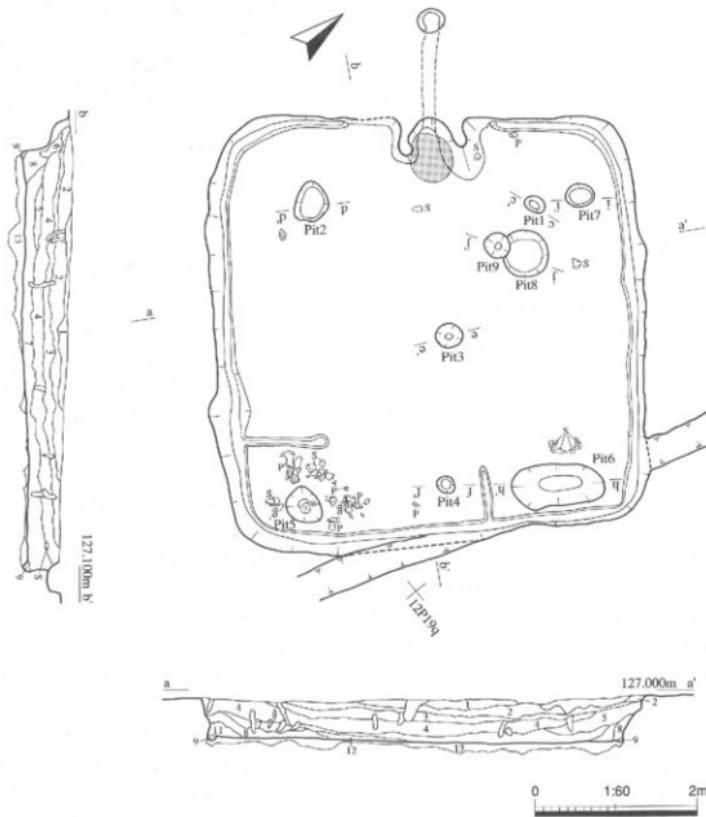
【柱穴】 4基の柱穴を確認した。その他にも5基のピットを検出したが、配置や規模などから考えて柱穴はピット1~4が有力である。このことから柱穴の平面配置は、4点で「Y」字形に配されると考えられる。

【土坑】 南隅のピット5は浅い土坑であるが、礫石器が2点まとめて出土した。

遺物（第20・21図・写真図版29・30）

堆積土や床面などから土師器、礫石器が出土した。このうち、図化可能な遺物は土師器11点、礫石器5点、管玉1点である。

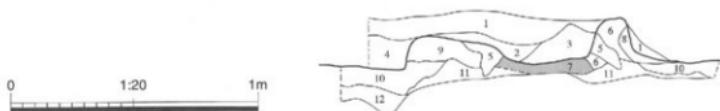
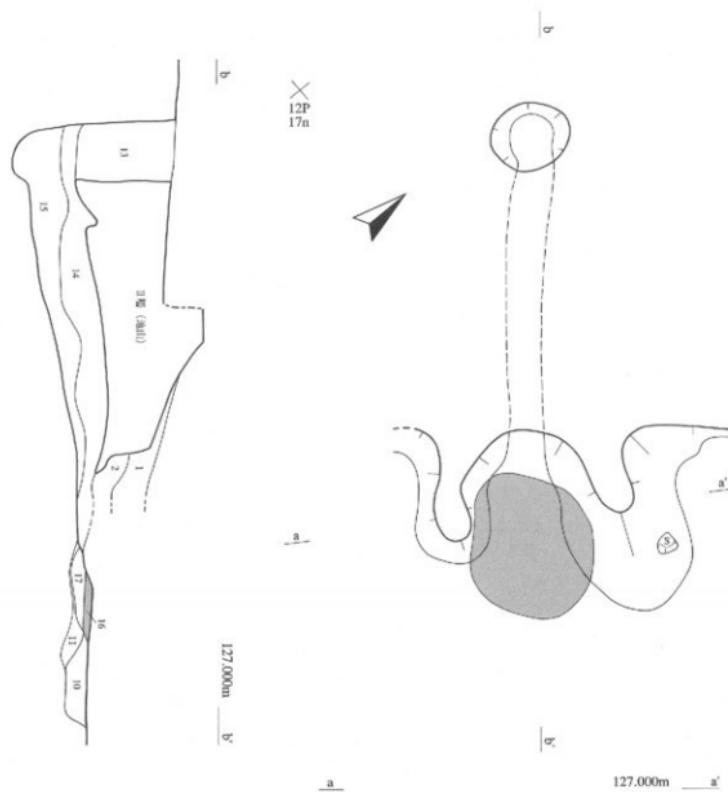
2 堅穴住居跡



RA067

1. 10YR1.7/1 黒色 シルト (細粒砂混じる)
2. 10YR2/1 黒色 シルト (小粒少量、火山灰B.L.少量混じる)
3. 10YR2/1 黒色 シルト (火山灰B.L.多量に混じる、締まり弱)
4. 10YR2/2 黒褐色 シルト (やや粘質)
5. 10YR3/1 黒褐色 シルト (やや粘質)
6. 10YR2/1 黒色 シルト (やや粘質)
7. 10YR3/2 黒褐色 シルト (やや粘質、地山BL混じる)
8. 10YR3/3 暗褐色 シルト (地山BL多量に混じる)
9. 10YR3/2 黒褐色 シルト (地山BL多量に混じる)
10. 7.5YR2/1 黒色 粘質シルト (地山BL混じる)
11. 10YR3/2 黒褐色 シルト (地山BL多量に混じる)
12. 10YR3/2 黒褐色 シルト (地山BL多量に混じる)
13. 10YR4/4 無色 シルト (地山BL、炭化物多量に混じる)

第17図 RA067 (第24次)

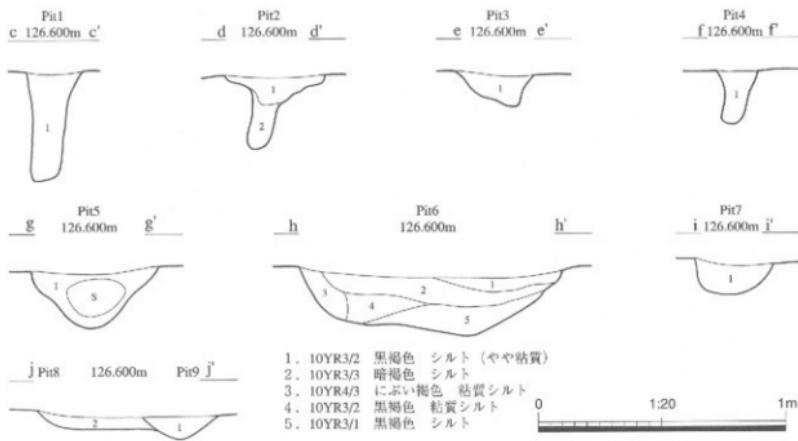


RA067カマド

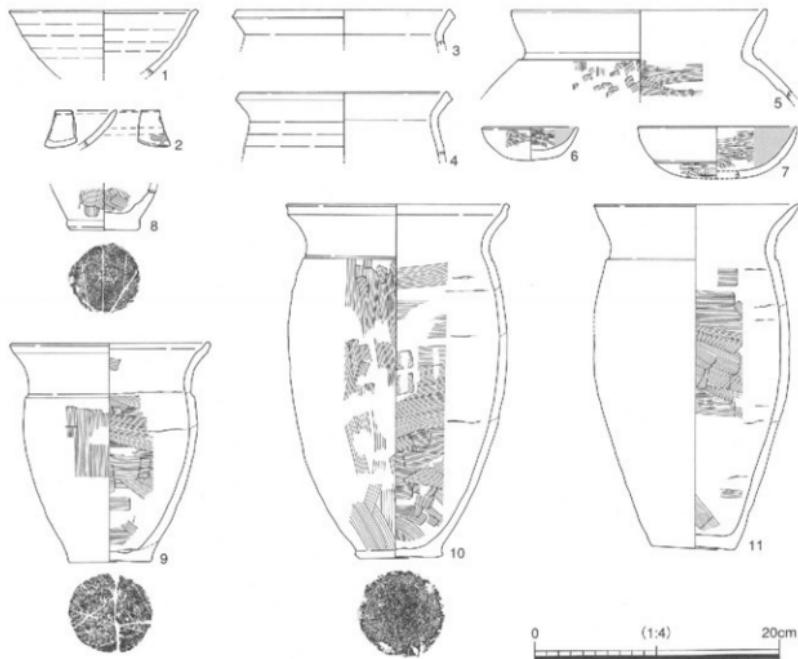
- | | | | | | |
|--------------|-------|---------------------|----------------|-------|------------|
| 1. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト (地山B.L混じる) | 11. 10YR5/6 | 黄褐色 | シルト (やや粘質) |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト (地山・焼土B.L多く混じる) | 12. 10YR6/6 | 明黄褐色 | 粘土 (やや粘質) |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト (やや粘質) | 13. 10YR4/3 | にぶい褐色 | シルト |
| 4. 10YR2/1 | 黒色 | シルト (地山B.L混じる) | 14. 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト |
| 5. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト (焼土B.L混じる) | 15. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト |
| 6. 10YR4/3 | にぶい褐色 | シルト (焼土B.L混じる) | 16. 7と同じ、ややしまる | | |
| 7. 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト (焼土B.L多く混じる) | 17. 10YR5/6 | 黄褐色 | シルト |
| 8. 10YR3/3 | 暗褐色 | シルト (やや粘質) | | | |
| 9. 10YR4/4 | 褐色 | 粘質シルト (一部赤化) | | | |
| 10. 10YR4/4 | 褐色 | 粘質シルト (地山B.L混じる) | | | |

第18図 RA067カマド (第24次)

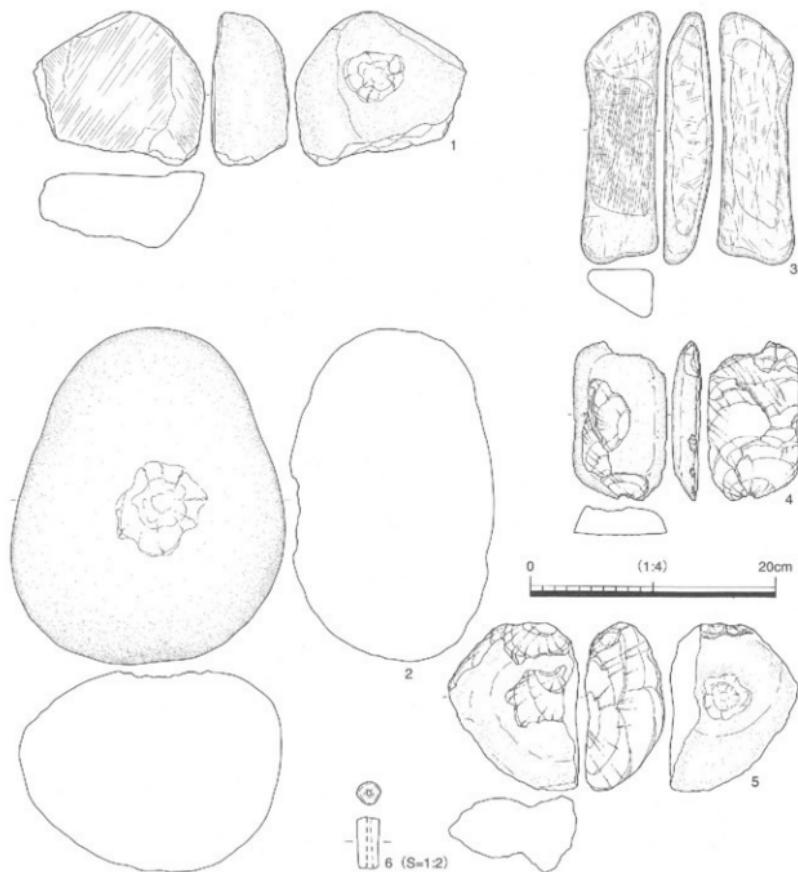
2 壑穴住跡



第19図 RA067ピット（第24次）



第20図 RA067出土遺物（土器）（第24次）



第21図 RA067出土遺物（石器・石製品）（第24次）

1・2は土師器壺である。いずれもロクロが用いられており、9世紀後半～10世紀初頭のものであると考えられる。3・4は土師器甕である。いずれもロクロが用いられており、9世紀後半～10世紀初頭のものであると考えられる。1～4は埋土上層より出土した。いずれも火山灰層よりも上層の遺物である。5は貼床より出土した土師器壺である。頸部に段を持ち、直線的に外傾する口縁部を有する。内外面ともにハケ調整が施されている。6・7は土師器壺である。6はカマド北袖部の脇床面より出土した。小皿形の壺で、内外面ともに丁寧にミガキが施されている。7は煙道部底面より出土した。微かな有段、丸底の壺である。お椀形の丸い体部を有し、外面下半はヘラケズリ、内面はミガキが施されている。

2 坪穴住跡

8～11は土師器壺である。8が北東隅の床面直上より出土した以外は、すべて南隅の床面直上より出土した。

1～4は礫石器である。

1は北隅床面直上、2・5は南隅ピット5より出土した。片面中央にへそ状の窪みがある。縄文時代のくぼみ石のような形状である。石材はいわゆる軽石素材である。3は砥石である。断面は二等辺三角形を呈し、長辺部分両面に明瞭な擦痕が認められる。この両擦り面は、本来の石材の色調ではなく、光沢を帯びた青灰色を呈する。4は敲打器のような礫石器である。端部に打撃による剥離が認められる。

小結 床面より出土した遺物は、8世紀中ば～後半である。しかし、埋土中位に10世紀初頭と比定される十和田a火山灰が認められる。さらに、埋土上層より9世紀後半～10世紀初頭の土師器が出土した。これらを総合すると、この塹穴住居は8世紀代に営まれ、その後廃絶し、最終的に10世紀前半頃埋没が完了したと考えられる。

RA060

遺構（第22・23図・写真図版9）

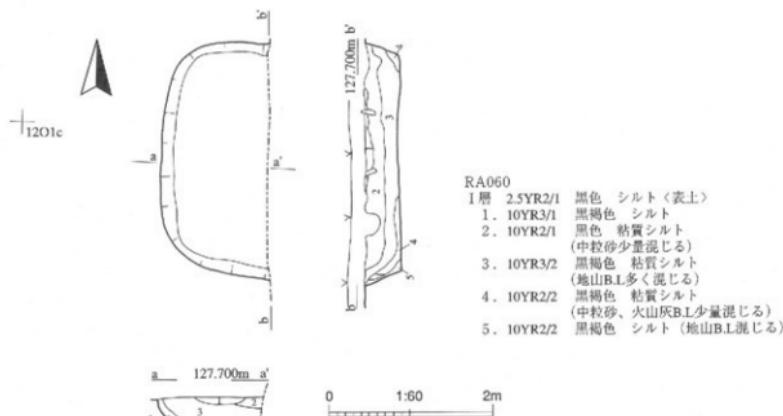
【位置】 第23次調査区北側120 1cグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められないが、住居の半分が調査区外へ延びており、今回調査したのは西半のみである。なお、東側調査区外は第29次北調査区であり、この住居の東半が検出されている。（本書V章 第29次調査の成果参照）

I層直下の平坦な面である。

【平面形・規模】 方形であると考えられ、残存する南北長0.6m、東西長2.8m、深さ13cmを測る。

【堆積土】 概ね2層のシルトからなる。乱れが無く自然堆積であると判断される。堆積土は全体的に縮まりがなく、火山灰はみられない。

【壁・床面】 第23次調査区では、西側壁と南北両側壁の一部のみを良好に検出した。壁は急ではなく緩やかでもなく立ち上がる。床面は平滑な面である。他の住居に比べ固く締まった様子はない。床面直上では、遺物の出土はみられなかった。



第22図 RA060（第23次）

床面施設として第23次調査区では、柱穴や土坑などはみられず、壁際の周溝も存在しなかった。貼床は検出した床面範囲ではまったくみられなかつた。この貼床が施されていないことが、床面の固く締まつてないことと何らかの関係があるのかもしれない。

[カマド] 煙道部とともに第23次調査区では、検出していない。

[柱穴] 第23次調査区では、確認されていない。

[土坑] 第23次調査区では、確認されていない。

遺物（第23図・写真図版30）

第23次調査区では土師器壺が1点のみ埋土より出土した。この土師器壺はロクロが用いられており、黒色処理はされていない。9世紀後半～10世紀初頭の土師器と考えられる。

小結 出土した遺物の特徴より、この堅穴住居は9世紀後半～10世紀初頭の堅穴住居であると考えられる。

RA061

遺構（第24・25図・写真図版10・11）

[位置] 第23次調査区南側12018yグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められない。また、住居の北東にはRA062、南には、RD103が位置している。検出面はⅠ層直下の平坦な面であるが、南側は帯状低地に掛かっているため、わずかに残存するⅡ層上面で検出した。主軸方向はほぼ東西方向である。

[平面形・規模] 北壁5.17m、東壁5.12m、南壁5.25m、西壁4.96mを測り、比較的整った方形である。また、深さは34cmを測る。

[堆積土] 概ね3層のシルトからなる。いずれも炭化物・土器片などを含む。

[壁・床面] すべて良好に残存する。南北側壁は緩やかな角度で立ち上がるが、その他の壁は比較的急角度で立ち上がる。南側壁は一部で、下部が抉れたようになっている。固く締まつた平滑な面であるが、北西部は他より比較的柔らかである。床面では土器などの遺物を多く検出した。貼床はほぼ床全面に施されており、除去すると凹凸らしい掘削面が存在する。

[カマド] 東側壁南寄りに設置されており、両袖部ともに基底部が残存している。カマド両袖部は低く、緩やかな高まりを検出したが、天井部を含む大半は、崩落しているものと考えられる。燃焼部は、両袖部に挟まれるように存在し、概ね円形の平面形態である。

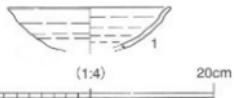
煙道部は煙出し部に向け傾斜してトンネル状に削り抜かれており、長さ1.44mを測る。天井部は攪乱等で完存ではないが、鈍く赤色している部分もみられる。煙道部埋土は炭化物を多く含んでいるシルトである。煙出し部は平面円形を呈し、筒状に握り込まれている。

[柱穴] 2基の小形ピットを確認した。ピット1は北西部、ピット2は東側壁際でそれぞれ検出した。2基ともに規模が同じで、北側壁と平行して直線上に並ぶため、柱穴と考えられる。しかし、その他に同様のピットはみられず、貼床を除去した状況にあっても2基以外のピットは確認されなかつた。

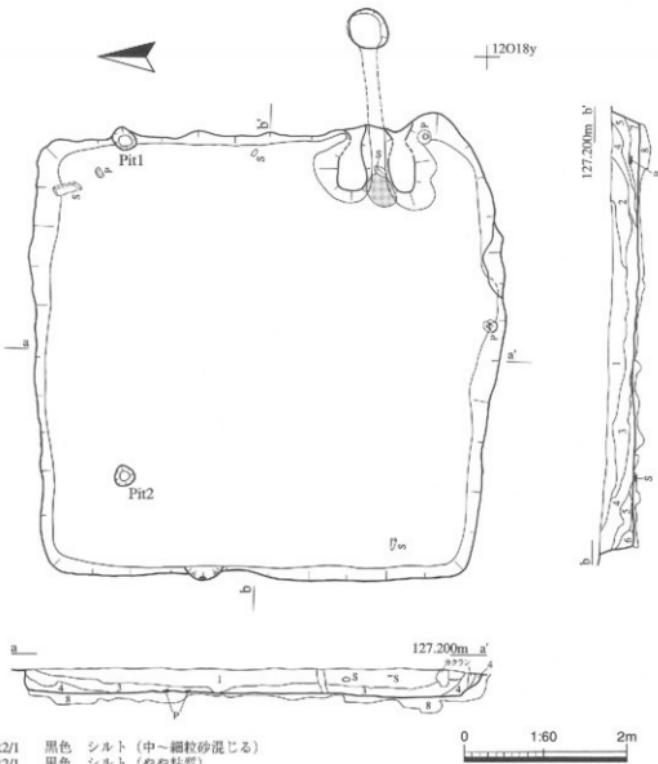
遺物（第26～28図・写真図版30～35）

堆積土や床面などから多量の土師器、須恵器など土器類と礫石器が出土した。このうち、団化可能な遺物は土器68点、石器1点である。

1・2・4～30・55～67は土師器壺である。内面に、ミガキ・黒色処理が施されている12点以外は内面ミガキ・黒色処理されていない。また、8・12・16・17・18・19・21・64のように底部あるいは



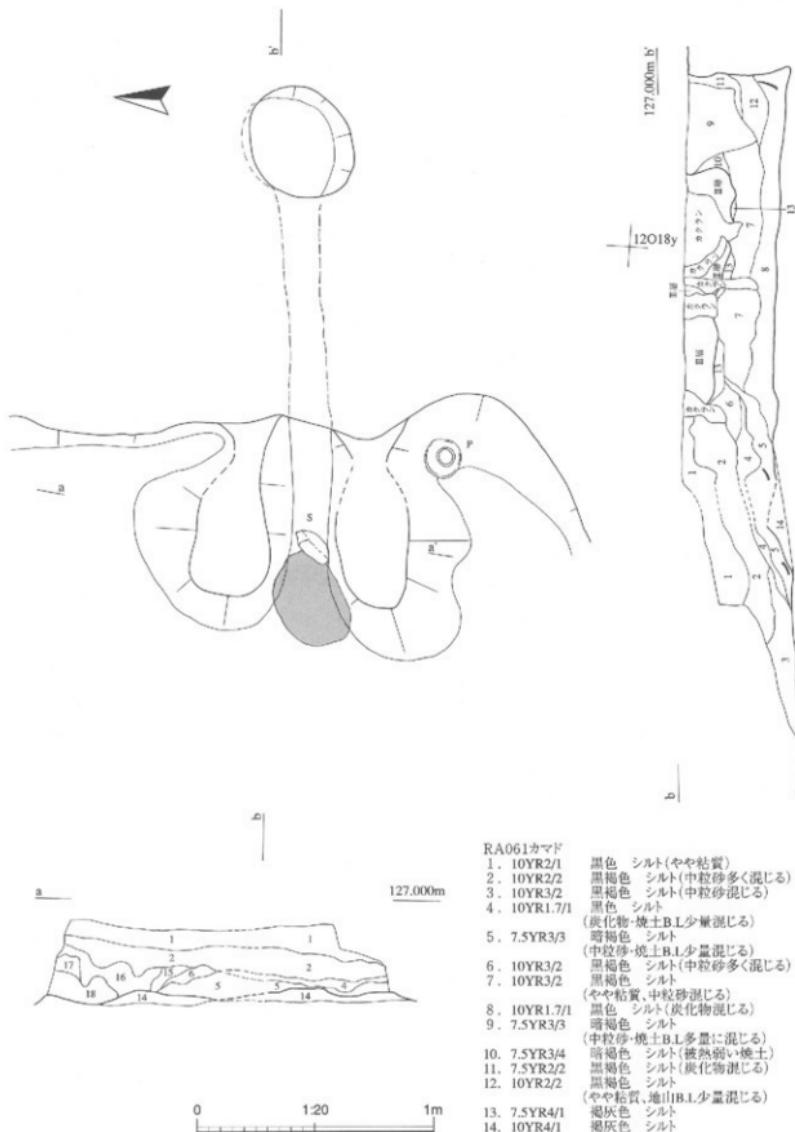
第23図 RA060出土遺物（第23次）



第24図 RA061 (第23次)

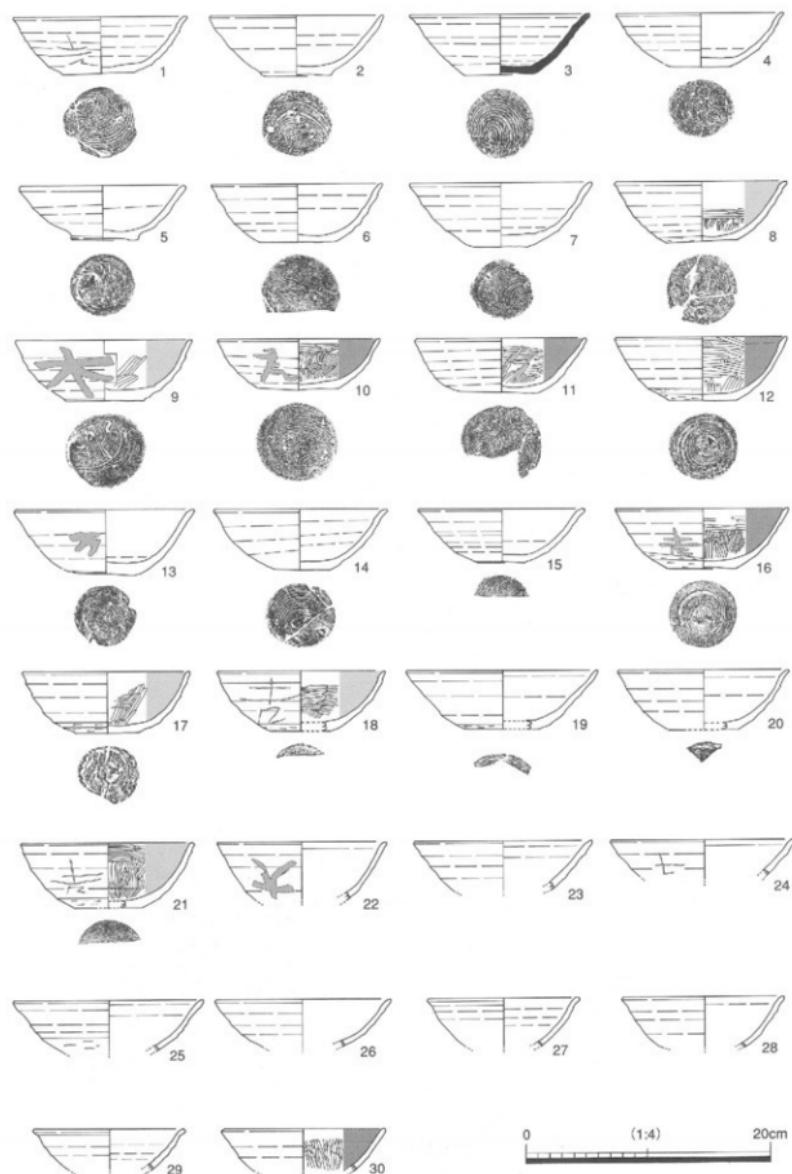
は体部最下端にヘラケズリが施されているものもある。

1は体部外面に刻書が認められる。摩滅により消えている部分もあるが、筆致から上部の「土」が「土」となっている「吉」と考えられる。また、「口」部は3画目と4画目が一連の流れで繋げられており、ちょうど「Z」のように見える。9は体部外面に墨書きが認められる。正位で「木」と判読できる。非常に大きく太い文字であり、留めや払い、反りなど毛筆の原則は無視されている。この「木」という墨書きは台太郎遺跡でよくみられる文字である。また、底部内面には重ね焼きによって生じた痕跡が認められる。10も体部外面に墨書きが認められる。欠損しているため文字全体は不明ながら、正位で「成」である可能性が考えられる。もし、「成」であるならば、本宮熊堂B遺跡でしばしばみられる文字と共通する。13も体部外面に墨書きが認められる。不明瞭であるが、正位で「万」と書かれてい

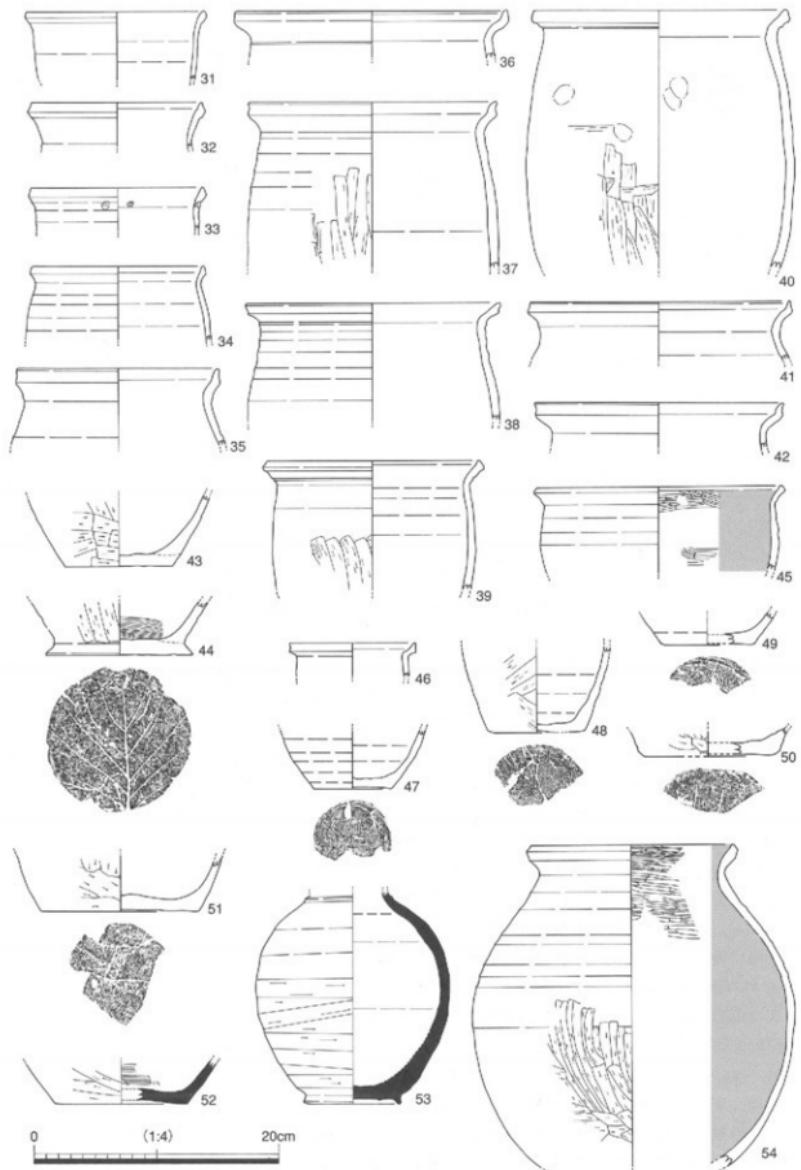


第25図 RA061カマド（第23次）

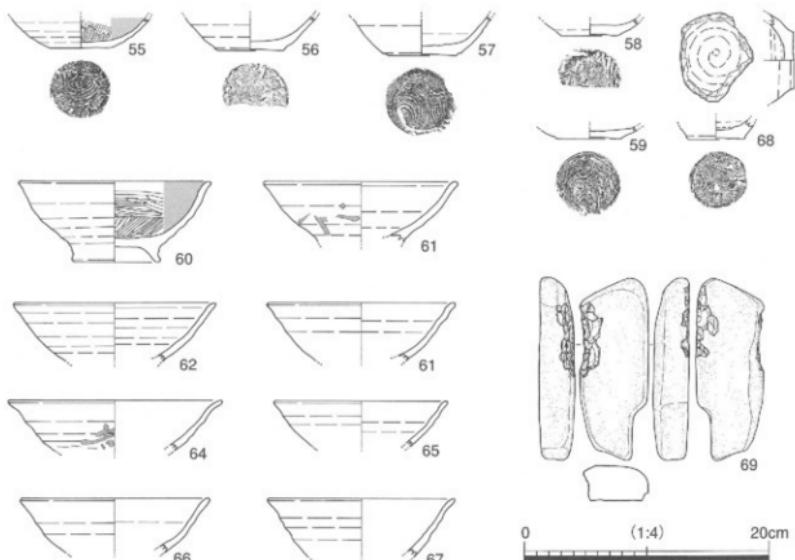
2 堅穴住居跡



第26図 RA061出土遺物（1）〈第23次〉



第27図 RA061出土遺物（2）〈第23次〉



第28図 RA061出土遺物（3）（第23次）

る可能性が高い。16は南壁際の床面で出土した壺である。これも体部外面に墨書が認められる。正位で「吉」と判読できる。1と同じく「土」が「土」となっており、「口」部の最終画が「Z」のように書かれている。22は体部外面に墨書が認められる。逆位に書かれた「大」であると考えられる。この文字は細谷地遺跡で多くみられる墨書である。24は体部外面に刻書が認められる。体部下半が欠損しており、刻書は全部残っていないが、筆致から「吉」の上部である可能性が考えられる。27は北東埋土下層より出土したが、北隣に位置するRA062の南カマド脇より出土した破片と接合関係が認められた。18・21は体部外面に刻書が施されている。1や16と筆致が共通する正位の「吉」である。60は土師器高台付壺である。楕形を呈し、比較的しっかりとした高台が貼り付けられている。内面はミガキ調整および黒色処理が施されている。61も土師器高台付壺であると考えられる。外面には墨書が認められる。墨書は欠損部にも及んでおり、全体をみることができない。しかし、残存部や筆致などから正位に書かれた「木」である可能性が高い。64は体部外面に墨書が認められる。1・16・18・21・24などの墨書や刻書でみられる正位の「吉」と同じであると考えられる。

3は須恵器壺である。口縁部は直線的に外傾するが、端部はわずかに外反傾向である。また、底部は回転糸切り後無調整である。

31～44・46～51は土師器壺である。このうち43・44・50・51はロクロを用いていない壺で、それ以外は、すべてロクロを用いた壺である。これらを大小に分けると、31～35・39・46～49は小形の壺、その他はすべて大形の壺であると考えられる。47は北東埋土下層より出土したが、北隣に位置するRA062南カマド脇より出土した破片と接合関係が認められた。33は小形の壺である。口縁部直下

に1箇所、直径約5mmの穿孔が施されている。穿孔は焼成後のものとみられ、内外両面から穿たれている。どのような目的の孔かは判断できないが、この壺の使用に関わるものであると推測される。45は土師器鉢である。基本的にロクロが用いられる壺と同じ作り、同じ形態であるが、内面にミガキと黒色処理が施されている点が大きく異なる。黒色処理は、煮沸など2次的に被熱すると吸着されていた炭素が飛んでしまう。したがって、この種の土器は煮沸用途の壺とは用途が異なると考えられる。したがって、土師器鉢と呼称する。

52・53は須恵器壺である。

52は底部のみの破片であり、全体の形状が不明である。そのため小形の壺である可能性も考えられる。53は須恵器長頸壺である。口縁～頸部は欠損しているが、頸部付け根に凸線が巡る。底部には貼り付けの高台が付けられている。調整はロクロによる調整が主であるが、外側の体部中位～下半には回転ヘラケズリが施されている。全般的に焼成が不良気味で、やや酸化しているが、成形および調整は丁寧である。

54はロクロが用いられた土師器壺である。頸部が括れ、土器の最大径が体部中位にある球胴形の形態を呈する。外側はロクロによる回転ナダの後、縱方向のヘラケズリが施されている。内面は横方向のミガキ・黒色処理が施されている。45と同様にロクロを用いた壺と同じ作りであるが、内面に黒色処理が施されているため、煮沸用途の壺とは用途が異なると考えられる。しかし、45と異なり頸部の括れが顕著であるため、鉢ではなく壺と呼称することとした。45の鉢よりも貯蔵用途に向いた器種であると考えられる。

68は土師器耳皿である。L1縁部は残存していないが、通常の杯よりも小さな底径、体部にわずかながら歪みがみられることから耳皿とした。

69は礫石器である。扁平な形態を呈する礫の側面2箇所において打撃によると考えられる剥離がみられる。どのような対象物に打撃を与えたかは不明であるが、敲打器であると考えられる。

小結 出土した遺物より、この竪穴住居は9世紀後半～10世紀初頭の竪穴住居であると考えられる。また、この住居北東に近接するRA062出土遺物の破片と接合関係も認められた。したがって、両竪穴住居は距離的に近いだけでなく、あらゆる点での密接な繋がりが想定される。

RA062

遺構（第29・30・31図・写真図版12・13）

[位置] 第23次調査区北側12P13aグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められないが、この住居の南西にはRA061が位置している。検出面はI層直下の平坦な面、ここではIII層上面で検出した。主軸方向はほぼ東西方向である。

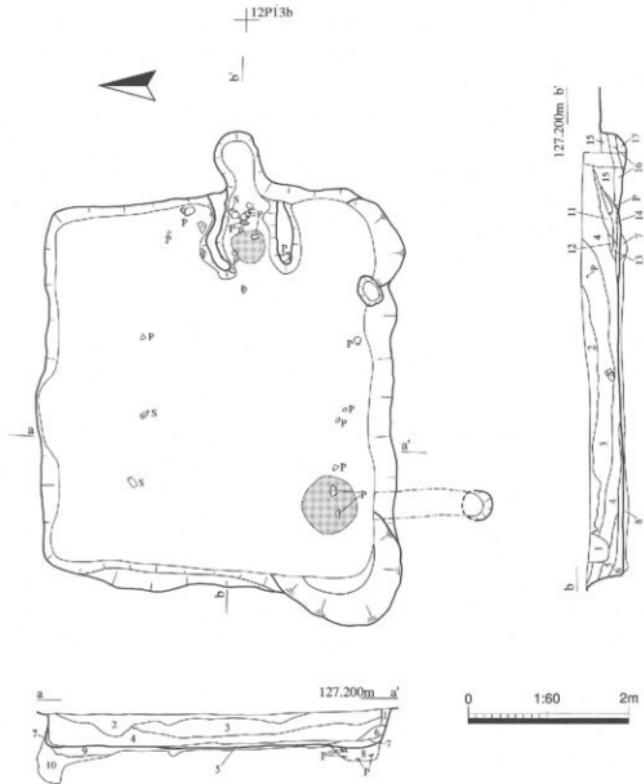
[平面形・規模] 北壁4.31m、東壁3.80m、南壁3.22m、西壁2.95mをそれぞれ測る。平面形態は、やや東西方向に長い長方形である。また、深さは45cmを測る。

[堆積土] は概ね3層のシルトからなる。いずれも炭化物・土器片などを含む。堆積状況はRA061と似ている。

[壁・床面] 南西隅、南東隅が攪乱により失われている以外はすべて良好に残存する。南側壁は緩やかな角度で立ち上がるが、その他の壁は比較的急角度で立ち上がる。また、北側壁は一部で、下部が抉れたような形態を呈する。床面は固く締まった平滑な面である。床面直上では土器などの遺物を多く検出した。貼床はほぼ床全面に施されており、除去すると凹凸著しい掘削面が存在する。特に床面北半は掘り込みが顕著である。

[カマド] 東と南に2基存在する。東カマドは、東側壁中央やや南寄りに設置されており、両袖部ともに基底部が残存している。カマド両袖部は低く、緩やかな高まりを検出したが、天売部を含む大半は、崩落しているものと考えられる。燃焼部は、両袖部に挟まれるように存在し、概ね円形の平面形態である。

煙道部は極端に短く、煙出し部に向かわざかに傾斜している。本来トンネル状に掘り抜かれていたのかどうか定かではない。煙道部の長さは65cmを測り、埋土は炭化物を多く含んでいるシルトである。



RA062

- | | | | |
|--------------|---------------------------------|-------------------|----------------|
| 1. 10YR1.7/1 | シルト〈近現代擾乱〉 | 11. 10YR2/1 | 黒色 シルト〈中粒砂混じる〉 |
| 2. 10YR2/1 | 黒色 シルト〈中～細粒砂混じる〉 | 12. 10YR3/3 | 黒褐色 シルト |
| 3. 7.5YR2/1 | 黒色 シルト質砂 | 13. RA062東カマド3と同じ | |
| 4. 10YR2/1 | 黒色 粘質シルト（中～細粒砂ラミナ状に混じる） | 14. RA062東カマド1と同じ | |
| 5. 10YR2/2 | 黒褐色 シルト（中粒砂多く混じる） | 15. RA062東カマド2と同じ | |
| 6. 10YR2/1 | 黒色 粘質シルト（中粒砂B.I.、火山灰B.L.微量に混じる） | 16. RA062東カマド4と同じ | |
| 7. 7.5YR4/3 | 褐色 シルト（赤化） | 17. RA062東カマド5と同じ | |
| 8. 10YR3/2 | 黒褐色 シルト（地山B.L.多量に混じる） | | |
| 9. 10YR3/3 | 黒褐色 シルト（地山B.L.多量に混じる） | | |
| 10. 10YR5/4 | にぶい黄褐色 シルト～粗粒砂 | | |

第29図 RA062（第23次）

南カマドの袖部は残存していない。また、床面をきれいにする作業中には正円形の燃焼部を検出した。煙道部は南側壁の南西隅近くに位置する。煙道部の長さは1.4mを測り、南にある煙出し部に向かって、やや傾斜したトンネル状を呈する。煙道部の埋土は炭化物を含むシルトである。煙出し部は平面円形で、筒状に掘り込まれている。

【柱穴】 1基の小形ピットを確認した。ピットは南西部壁際に位置し、柱穴であると考えられる。しかし、その他の柱穴は確認されなかった。

【土坑】 確認されなかった。

遺物（第32図・写真図版36・37）

埋土や床面などから多くの土器器、須恵器など土器類と鉄製品が出土した。このうち、図化可能な遺物は土器27点、鉄製品1点である。

1～12・15・16・22は土器器坏である。1・2・5・12・15・16・18のように内面にミガキ・黒色処理が施されているものと、ミガキ・黒色処理が施されていないものに分けることができる。

1は床面直上より出土した。底部は回転糸切り後無調整であるが、体部下端の口縁部に回転ヘラケズリが施されている。12は体部外面に刻書が認められる。筆致から逆位に書かれた、上部の「土」が「十」となっている「吉」と考えられる。また、「口」部は3画目と4画目が一連の流れで統けられており、ちょうど「Z」のように見える。焼成後に鋭利な金属の先端部などで書かれたと考えられる。なお、同様の刻書「吉」はRA061でも多く認められる。15は破片であるが、高台が付けられた浅い坏であると考えられる。口縁部は極端に外反している。体部外面には正面で「吉」と刻書されている。やはり「吉」の字形は12と同様である。

13・14・19・20・21～27は土器器壺である。13・19・21のようにロクロが用いられないものと、それ以外のようにロクロが用いられるものとに分けることができる。また、19・20・24のような小形のものと、その例外のような大形のものとに分けることができる。13は底部を中心とする破片である。底部には葉脈明晰な木葉痕がみられる。14も底部を中心とする破片である。底部には、粗い砂が多く付着している。また、体部はタタキの痕跡が明瞭に残り、タタキの上からわずかにヘラケズリが施されている。19は貼床より出土した土器器壺であるが、RA061埋土下層から出土した破片と接合関係にあることが判明した。21は床面直上より出土した土器器壺底部片である。底部には細かな砂が多量に付着している。なお、砂の付着は円の外側にはみられず、中央部円形にみられる。24は小形の土器器壺である。体部のロクロ目が明瞭である。底部は回転糸切り後無調整である。口縁部の括れはほとんどない形態を呈する。

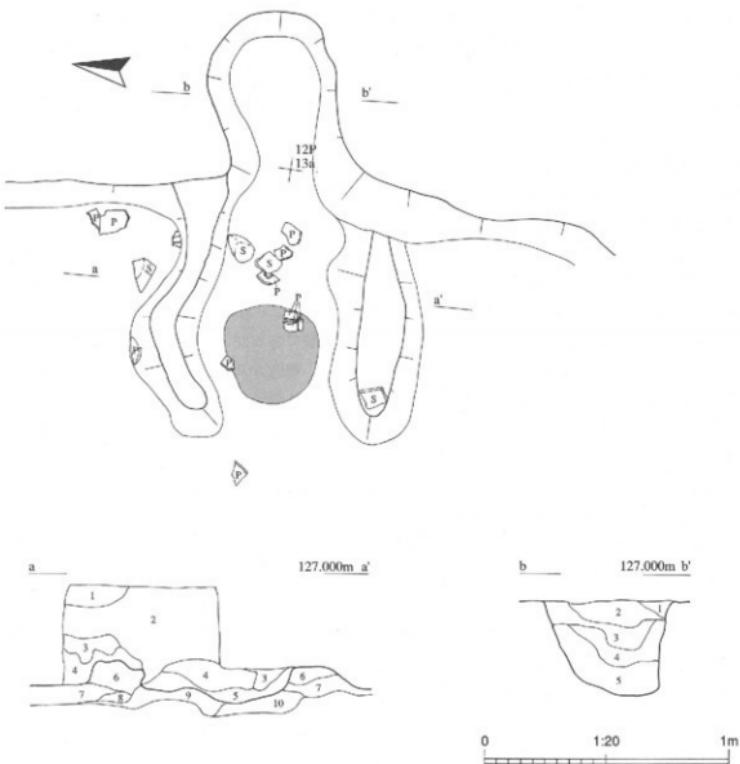
17はカマド燃焼部を被覆している堆積土中より出土した須恵器壺である。底部のみの破片であるため全体の形状は不明であるが、長頸壺である可能性が高い。底部には微妙に高台がみられ、体部下半には回転ヘラケズリが施されている。

小結 出土した遺物より、この堅穴住居は9世紀後半～10世紀初頭の堅穴住居であると考えられる。また、この住居北東に近接するRA061出土遺物の破片と接合関係も認められた。したがって、両堅穴住居は距離的に近いだけでなく、あらゆる点での密接な繋がりが想定される。

なお、両住居間で接合関係が認められた資料のそれぞれの出土層位を比較すると、RA062は床面あるいは床面より下位で出土するものばかりで、RA061は埋土の下層で出土するものばかりである。

RA059（第33・34図・写真図版14・15）

【位置】 第23次調査区北側12P 7fグリッド付近に位置する。RA064と切り合い関係が認められる。



- RA062東カマド
- 1. 10YR1.7/1 黒色 粘質シルト（やや粘質、中粒砂混じる）
 - 2. 10YR2/1 黒色 シルト（中～粗粒砂混じる）
 - 3. 10YR2/1 黒色 シルト質砂
 - 4. 10YR1.7/1 黒色 粘質シルト（火山灰B.L混じる）
 - 5. 7.5YR3/2 黒褐色 シルト（炭化物・焼土B.L混じる）
 - 6. 10YR3/4 砂質シルト（地山B.L混じる）
 - 7. 10YR3/2 黑褐色 シルト（中粒砂混じる）
 - 8. 10YR4/4 黄褐色 シルト（焼土B.L混じる）
 - 9. 7.5YR3/4 斷褐色 シルト（中～粗粒砂混じる）
 - 10. 10YR3/4 砂質シルト

第30図 RA062東カマド（第23次）

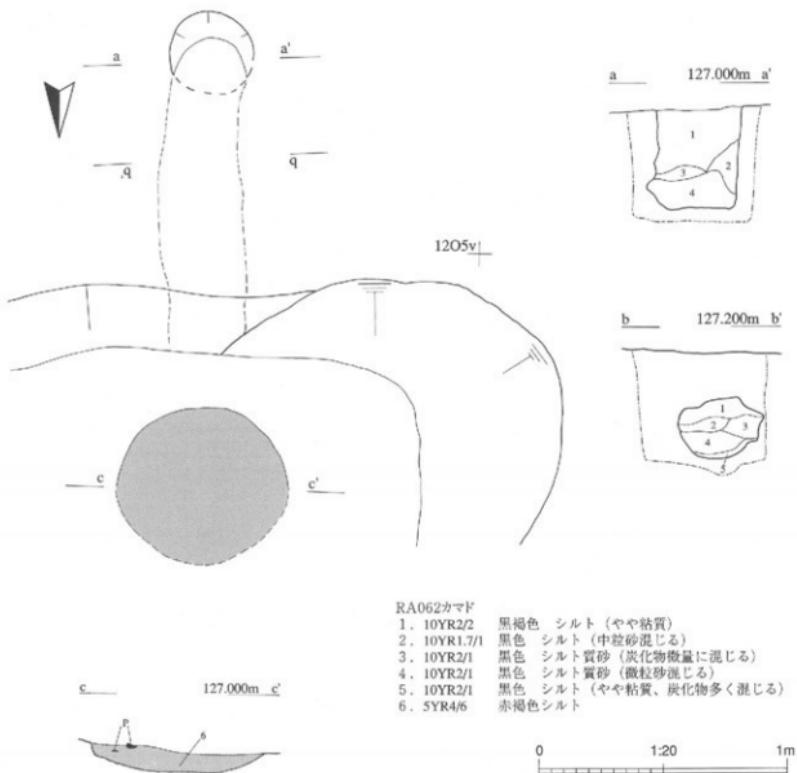
また、この竪穴住居の南西にはRA061が位置している。検出面はI層直下の平坦な面、ここではⅢ層上面で検出した。主軸方向はほぼ東西方向である。

【平面形・規模】 西壁5.2m、深さ8cmを測り、概ね方形であると考えられる。RA064に切られてしまつたため残存状態が良くない。

【堆積土】 概ね2層のシルトからなる。

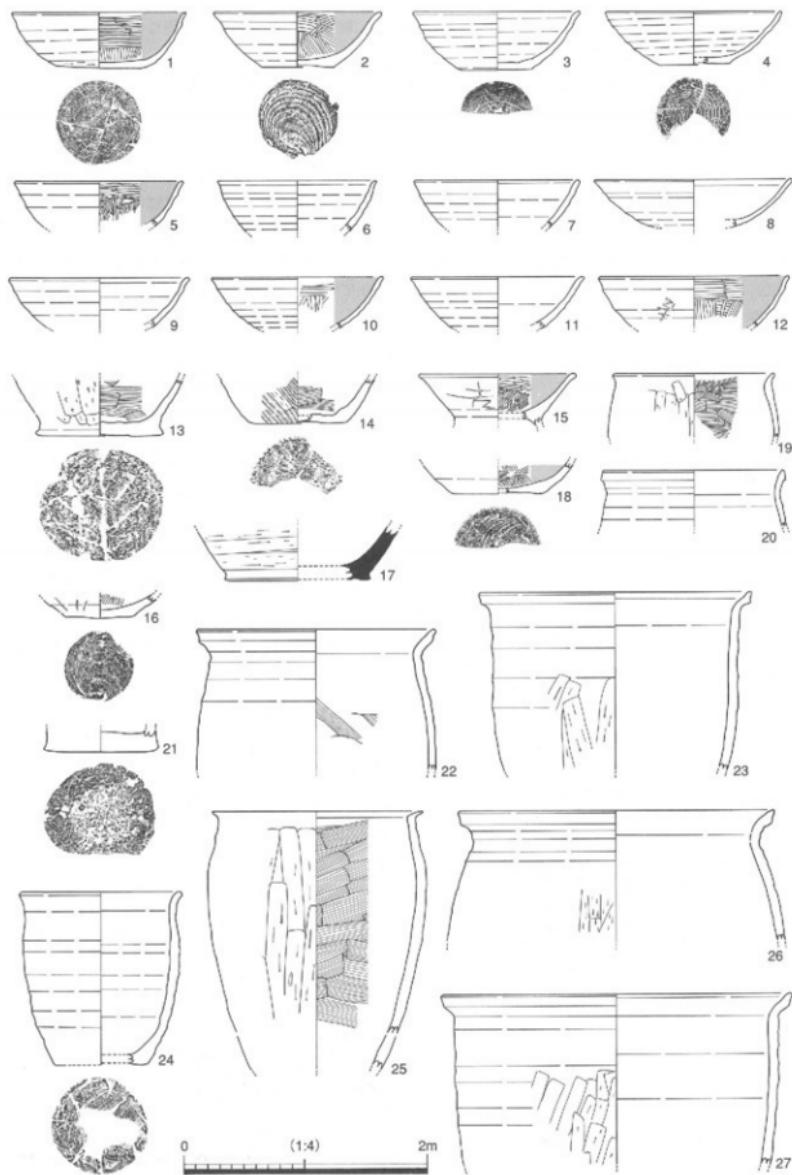
【壁・床面】 南西隅、南側と北側の一部が比較的良好に残存する以外は攪乱、RA064などによって失われている。床面は固く縮まった平滑な面であるが、床面直上では土器などの遺物はほとんど出土しなかった。また、床面も多数の攪乱によって本来の形を留めていない。

【カマド】 検出した範囲では確認できず、その痕跡も認められなかった。西側壁中央付近が大きな攪乱坑によって失われているため、仮にカマドが設置されていたのであるならば、この失われている場所に存在したのかもしれない。



第31図 RA062南カマド（第23次）

2 坪穴住跡



第32図 RA062出土遺物（第23次）

【柱穴】 第23次調査区では、確認されていない。

【土坑】 第23次調査区では、確認されていない。

遺物（第35図・写真図版38・39）

堆積土などから土師器など土器類がわずかに出土した。このうち、図化可能な遺物は土師器2点のみである。この堅穴住居を切るRA064より出土した遺物の中には、本来この堅穴住居に帰属していたものも含まれるかもしれない。そのため、出土遺物の記載はRA064と一括して述べることとする。

RA064

遺構（第33・34図・写真図版14・15）

【位置】 第23次調査区南側12Pに位置する。RA059と切り合い関係が認められる。また、この堅穴住居の南西にはRA061が位置している。検出面はⅠ層直下の平坦な面、ここではⅢ層上面で検出した。主軸方向はほぼ東西方向である。

【平面形・規模】 東壁4.26mを測るが、その他の壁はRA059との重複で定かではないが、3.8～4.5m程度であったと推測される。平面形態は方形であると考えられる。また、深さは13cmを測る。

【堆積土】 概ね2層のシルトからなる。いずれも炭化物・土器片などを含む。

【壁・床面】 西側壁、北西隅および南西隅が確認できなかったが、その他は残存する。残存する壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面である。床面では土器などの遺物を多く検出した。特にカマドが寄っている住居北半で顕著である。貼床は明瞭なものではなかった。必要最低限の貼床であった可能性が考えられる。

【カマド】 東側壁北寄りに設置されており、両袖部とともに基底部が残存している。カマド両袖部は低く、緩やかな高まりを検出したが、天上部を含む大半は、崩落しているものと考えられる。燃焼部は、両袖部に挟まれるように存在し、不整な円形の平面形態である。

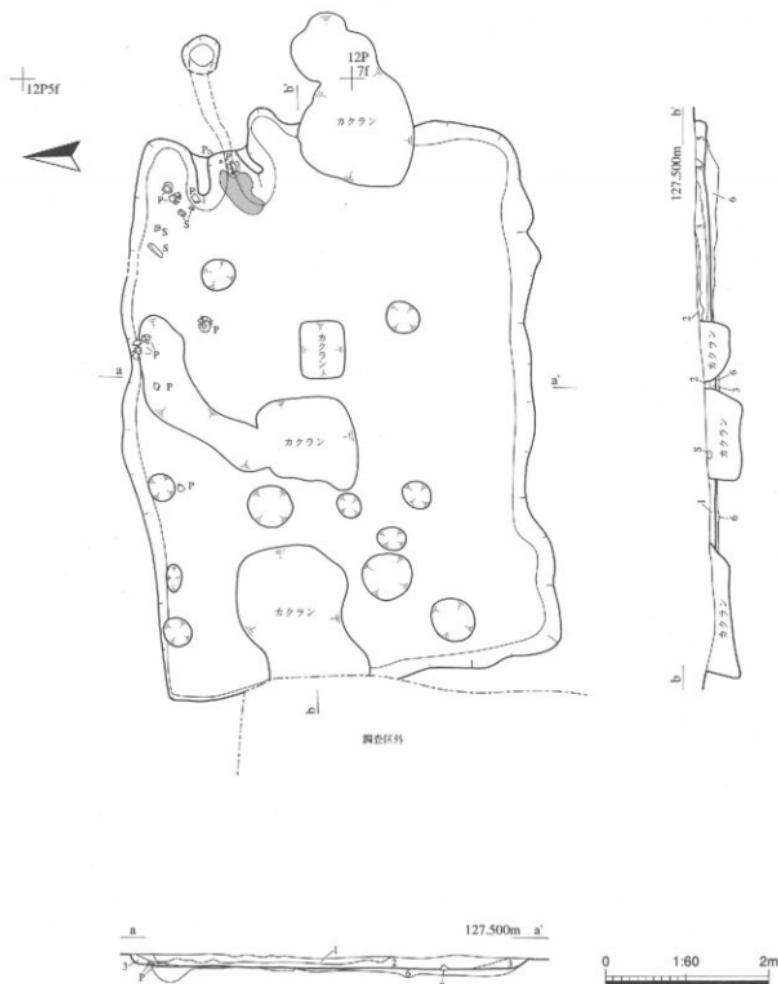
煙道部は煙出し部に向け傾斜してトンネル状に割り抜かれており、長さ1.45mを測る。煙道部堆積土は炭化物を多く含んでいるシルトである。煙出し部は平面円形を呈し、筒状に掘り込まれている。

遺物（第35図・写真図版38・39）

堆積土や床面などから多量の土師器、須恵器など土器類と礫石器が出土した。このうち、図化可能な遺物は土器23点である。

1～6・8～14・19・22・23は土師器壺である。1・3・5・9・13は内面ミガキ・黒色処理されており、14・22は高台が付く、内外面ともにミガキ・黒色処理が施されている。これら以外はすべて、内外面ともにミガキも黒色処理も施されていない。1は住居北端の床面直上より出土した。内面ミガキ・黒色処理が施されている。また、底部回転糸切り後無調整で、体部下端に回転ヘラケズリが施されている。3は床面直上より出土した。内面ミガキ・黒色処理が施されている。器高が6cmを超える、やや深めの壺である。5はカマドおよび煙出しより出土した。内面ミガキ・黒色処理が施されている。体部下半に刻書が施されている。焼成後の線刻で、正位で「春」と読むことができるが、他の文字であるかもしれない。12は床面直上より出土した。内外面ともにミガキ・黒色処理は施されておらず、高台が付けられている。また、体部には「キ」字形の刻書がみられる。焼成後に鋭利な金属の先端部などで刻まれたようである。7は住居北端の床面直上より出土した須恵器壺である。底部は回転糸切り後無調整である。16は住居南東堀上より出土した須恵器皿であると考えられる。通常の壺よりも浅い器形であると推定され、小皿状の器種であると考えられる。

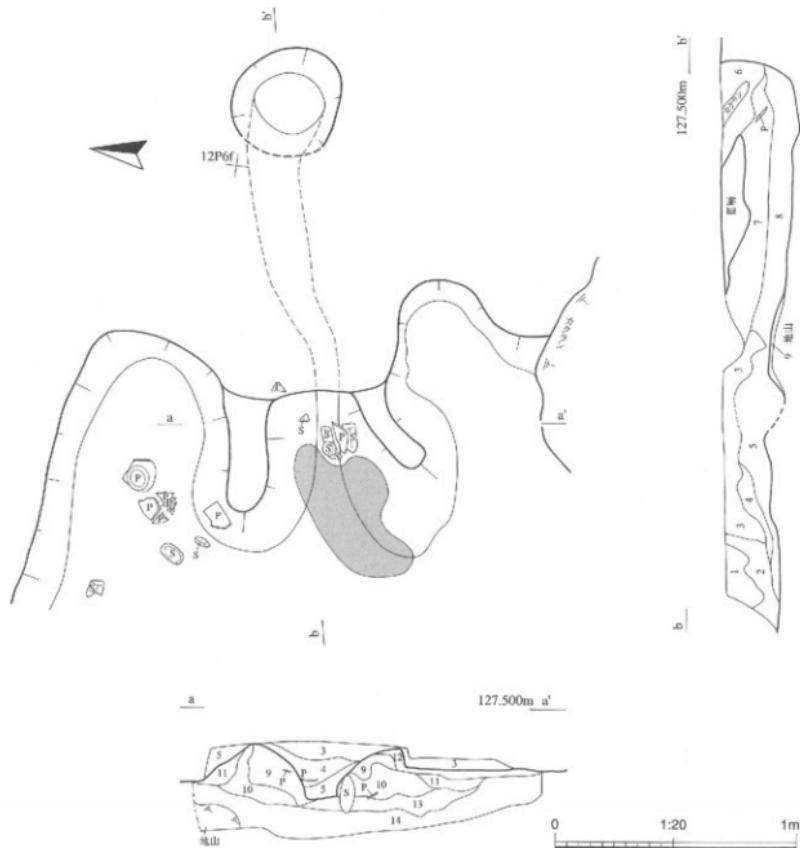
17・21は須恵器壺である。17はカマド脇より出土した。体部外面は回転ヘラケズリが施され、底



RA064(059)

1. 10YR2/1 黒色 シルト（やや粘質、火山灰BL混じる）
2. 10YR2/1 黒色 シルト（火山灰BL混じる）
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト（地山BL混じる）
4. 10YR2/1 黒色 シルト（やや粘質、粗粒砂混じる）
5. 10YR4/3 褐色 シルト～粗粒砂
6. 10YR2/1 黒色 シルト（やや粘質、粗粒砂混じる）

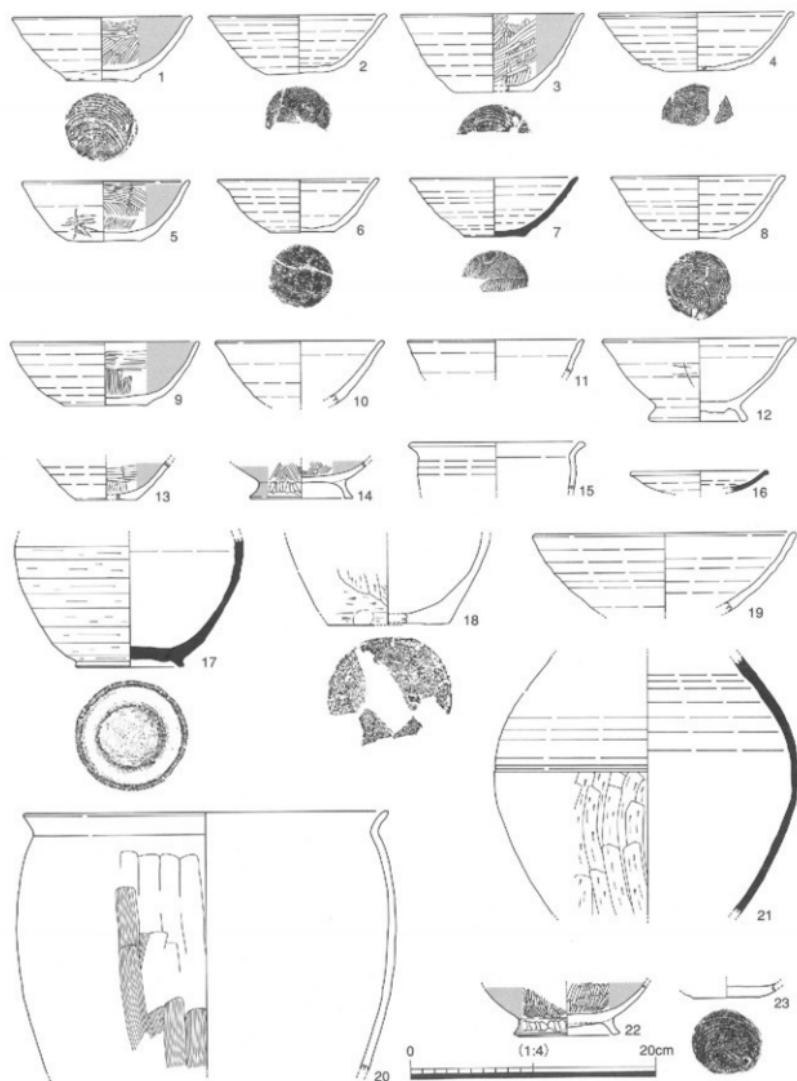
第33図 RA059・064（第23次）



- RA064カマド
- | | | |
|--------------|-----|-----------------------|
| 1. 10YR2/1 | 黒色 | シルト (火山灰B.L混じる) |
| 2. 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト (焼土B.L少量混じる) |
| 3. 10YR3/1 | 黒褐色 | シルト (火山灰B.L少量混じる) |
| 4. 7.5YR3/1 | 黒褐色 | シルト (やや粘質、焼土B.L少量混じる) |
| 5. 10YR3/3 | 暗褐色 | シルト (焼土B.L多量に混じる) |
| 6. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト (やや粘質、炭化物混じる) |
| 7. 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト (微粒砂混じる) |
| 8. 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト (火山灰B.L少量混じる) |
| 9. 10YR4/1 | 褐灰色 | シルト (地山) |
| 10. 10YR3/3 | 暗褐色 | シルト (焼土B.L多量に混じる) |
| 11. 10YR3/3 | 暗褐色 | シルト (地山B.L多量に混じる) |
| 12. 10YR3/1 | 黒褐色 | シルト (粗～中粒砂混じる) |
| 13. 7.5YR3/2 | 黒褐色 | シルト |
| 14. 10YR4/4 | 褐色 | シルト (焼土B.L混じる) |

第34図 RA064カマド（第23次）

2 塗穴住居跡



第35図 RA064出土遺物（第23次）

部には高台が貼り付けられている。残存器形から長頸壺であると推測される。

21はカマド埋土より出土した。体部外面には縱方向のヘラケズリが施されている。体部中位には横方向に1条の沈線が認められる。残存形態から器種を特定することは困難であるが、17よりも大振りであるため、長頸壺ではないと考えられる。

15・18・20は土師器壺である。15は住居南東埋土より出土した。ロクロが用いられた小形の壺である。18は貼床より出土した。体部は縦横にヘラケズリが施されている。底部には砂粒が多く付着している。

小結 出土した遺物の特徴より、この竪穴住居は9世紀後半～10世紀初頭の竪穴住居であると考えられる。

RA059とRA064との先後関係は調査時に決することができなかつた。平面を検出した時点で1棟であると考えたためである。状況証拠のみであるが、床面の遺物出土状況等から考えて、RA064がRA059を切っている可能性がある。

RA070

遺構（第36・37図・写真図版16・17）

【位置】 第23次調査区南側130.9xグリッド付近に位置する。住居床面では、RD105を検出し、この土坑と重複すると考えられる。また、この住居の南東にはRA068が位置している。検出面はI層直下の平坦な面であり、III層上面で検出した。主軸方向は南東方向である。

【平面形・規模】 北東側壁で4.57mを測り、その他残存する壁の長さは、北西側壁2.66m、南東側壁4.58m、南北側壁0.37mである。平面形態は比較的整った方形であると推測される。また、深さは34cmを測る。

【堆積土】 概ね2層のシルトからなる。

【壁・床面】 北東側壁が良好に残存する以外は、攤乱によって一部あるいは大半が破壊されている。いずれの残存する壁とも比較的緩やかに立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面である。床面ではカマド燃焼部周辺において土器などの遺物を多く検出した。貼床はほぼ床全面に施されており、除去するとわずかに凹凸のある掘削面が存在する。

【カマド】 南東側壁の南寄りに設置されており、両袖部とともに基底部の張り出しがわずかに残存している。カマド両袖部は低く、緩やかな高まりを検出したが、天井部を含む大半は、崩落しているものと考えられる。燃焼部は、両袖部に挟まるように存在し、不整な長楕円形の平面形態である。

煙道部は長さ1.52mを測る。天井部は攤乱等で残存していないが、本体はトンネル状に削り抜かれていたと考えられる。煙道部埋土は炭化物、地山ブロックを多く含んでいるシルトである。煙出し部は平面楕円形を呈し、筒状に掘り込まれている。

【柱穴】 2基の小形ピットを確認した。ピットは北西壁に平行するように並んでいる。ピット1は西側、ピット2は北側でそれぞれ検出した。2基ともに規模が同じで、北側壁と平行して直線上に並ぶため、柱穴と考えられる。しかし、貼床を除去した状況にあっても同様のピットはみられなかつた。

【土坑】 柱穴以外に土坑は確認されなかつた。詳細は後述するが、貼床を除去する作業中検出したRD108は、住居埋土および貼床および床面を切っておらず、このRA070に先行する土坑であったと考えられる。

遺物（第38・39図・写真図版40～42）

堆積土や床面などから多くの土師器が出土した。このうち、國化可能な遺物は土師器29点である。

1～15は土師器坏である。1・2・4・5・10・13・15は内面ミガキ・黒色処理が施されているが、それ以外は施されていない。1はカマド付近より出土した。底径に比して器高が低い形態を呈する。底部は回転糸切り後無調整である。4はカマド埋土より出土した。底部糸切り後、体部下半まで回転ヘラケズリが施されている。器厚が比較的薄く、胎土も精良である。5はカマド埋土より出土した。体部外面には墨書きが施されている。墨書きは3箇所に認められ、それぞれ、太く大きく書かれている。これら墨書きはすべて底部にまで及んでいる。文字であるようにみえるが、3つとも判読できない。9は煙出し埋土より出土した。内外面ともにミガキ・黒色処理されておらず、高台が付けられている。高台は「ハ」の字形を呈し、断面は長方形である。15は南東堆積土より出土した。内面ミガキ・黒色処理が施され、他の坏より底径が大きい特徴的な坏である。底部のみの残存であるため全体の大きさは不明であるが、法量の大きな坏である可能性が高い。16～29は土師器壺である。18・19・25はロクロの回転力が用いられていないが、その他はすべて、ロクロが使用されている。16はカマド堆積土より出土した。底部は回転糸切り後無調整である。底部のみの破片であるため壺である可能性も考えられるが、他の坏よりも器厚が厚く、胎土が粗いため小形の壺の底部片であると考えられる。18は煙出し埋土より出土した。底径・口径・器高の寸法差がほとんどなく、極端に短い口縁部が特徴的である。体部の膨らみもほとんどなく寸胴な形態を呈する。色調は極端に赤みが強く、胎土に大粒の砂粒を多く含む。外面は縦方向にヘラケズリが施されており、胎土の砂粒がより際立っている。内面は横方向のハケが施されている。また、底部外面には多量の砂が付着しており、中央には木葉痕も微かに認められる。19は破片がカマドや煙出しなどから出土し、底部は裏返しの状態で燃焼部上より出土した。カマドに伴う支脚であった可能性が考えられる。18同様に底径・口径・器高の寸法差がほとんどなく、短い口縁部が特徴的である。また、体部の膨らみもほとんどなく寸胴な形態を呈する。色調は極端に赤みが強く、胎土に大粒の砂粒を多く含む。内外面ともに粗いハケが施されており、胎土の砂粒が際立っている。また、底部外面には木葉痕が明瞭に認められる。26はカマドや煙出し埋土などから出土した。体部下半から底部にかけて残存している。外面は平行タタキの調整痕跡が明瞭に認められる。一方、内面には細かなハケが縦方向に施されている。また、底部外面には砂粒が付着している。29はカマドおよび住居堆積土下層より出土した。均整のとれた長胴形を呈し、口縁端部は上方に摘み上げられている。また、底部外面には砂粒が付着している。

小結 出土した遺物より、この壺穴住居は9世紀後半～10世紀前半の壺穴住居であると考えられる。ただし、床面で検出した土坑(RD108)は、この壺穴住居に先行する遺構であり、堆積土中に十和田a降下火山灰が認められる。しかし、壺穴住居堆積土では同様の火山灰が認められない。このような事実より、この壺穴住居は十和田a降下火山灰の降下以降、つまり10世紀前半以降の壺穴住居であると考えられる。

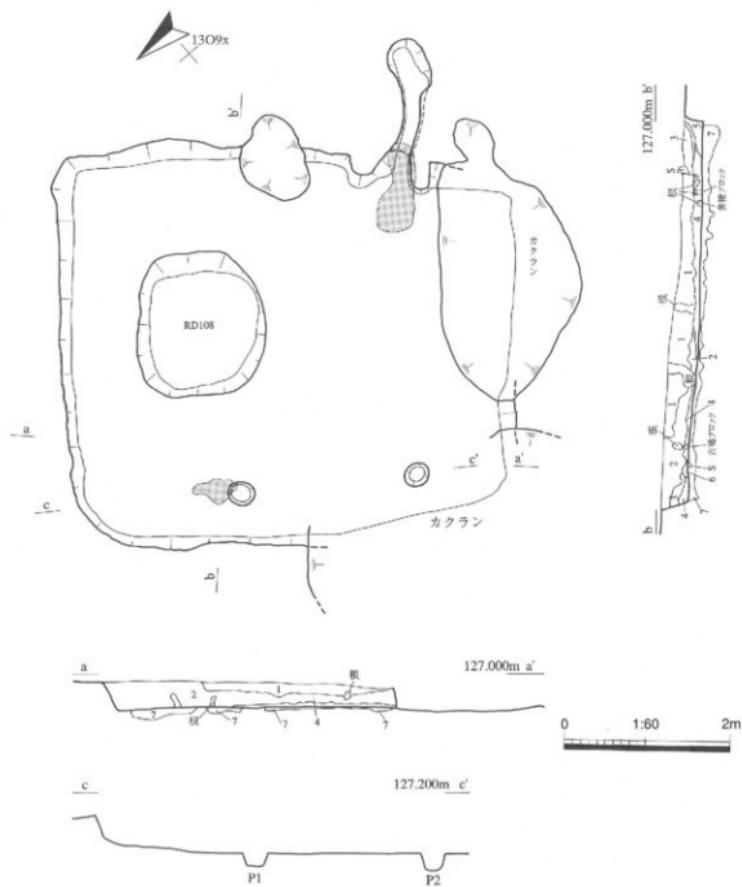
RA063

遺構(第40・41図・写真図版20・21)

[位置] 第24次調査区南側12P19kグリッド付近に位置する。他の遺構との切り合いは認められないが、この壺穴住居の東にはRA067が位置している。また、住居南東隅は調査区外である。検出面はⅠ層直下の平坦な面、ここではⅡ層上面～Ⅲ層上面で検出した。主軸方向はほぼ東西方向である。

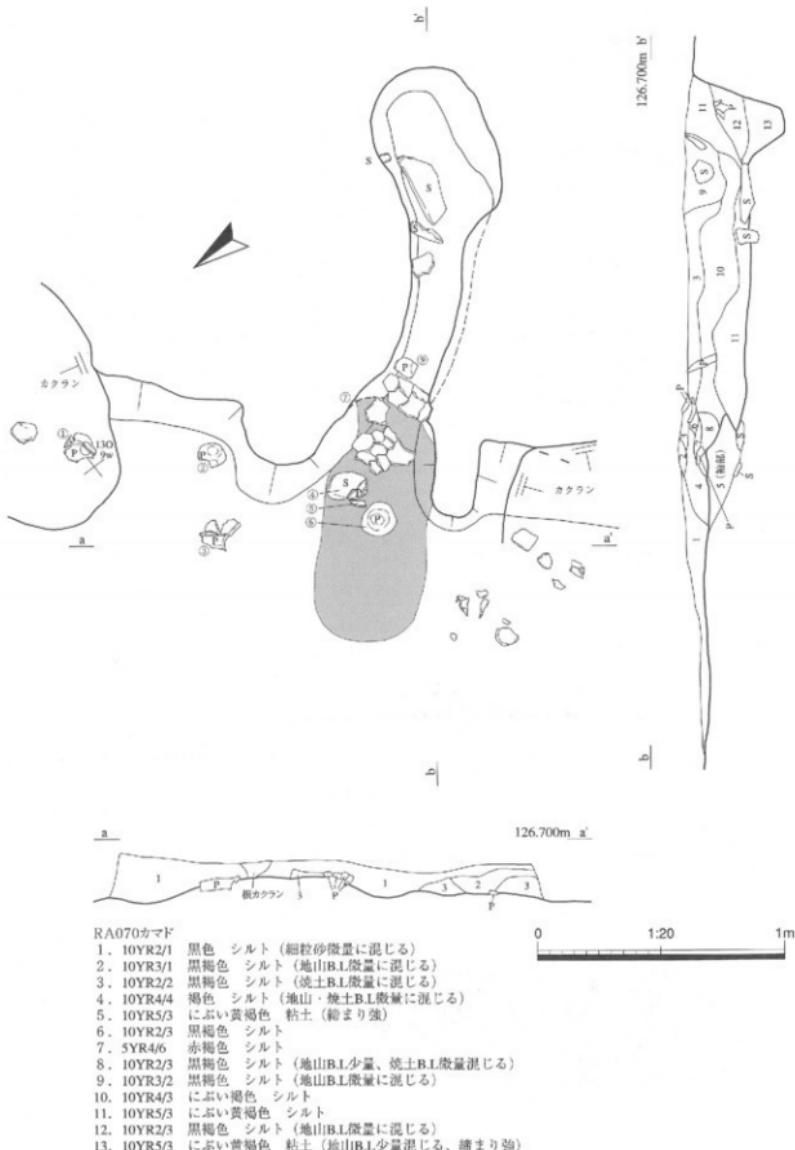
[規模・平面形] 調査区外へ続く南東隅と西半が攪乱のため失われているため定かではないが、一辺約4m程度の方形であると推測される。また、深さは13cmを測る。

[堆積土] 概ね3層のシルトからなる。いずれも炭化物・土器片などを含み、堆積土中位ではわずか

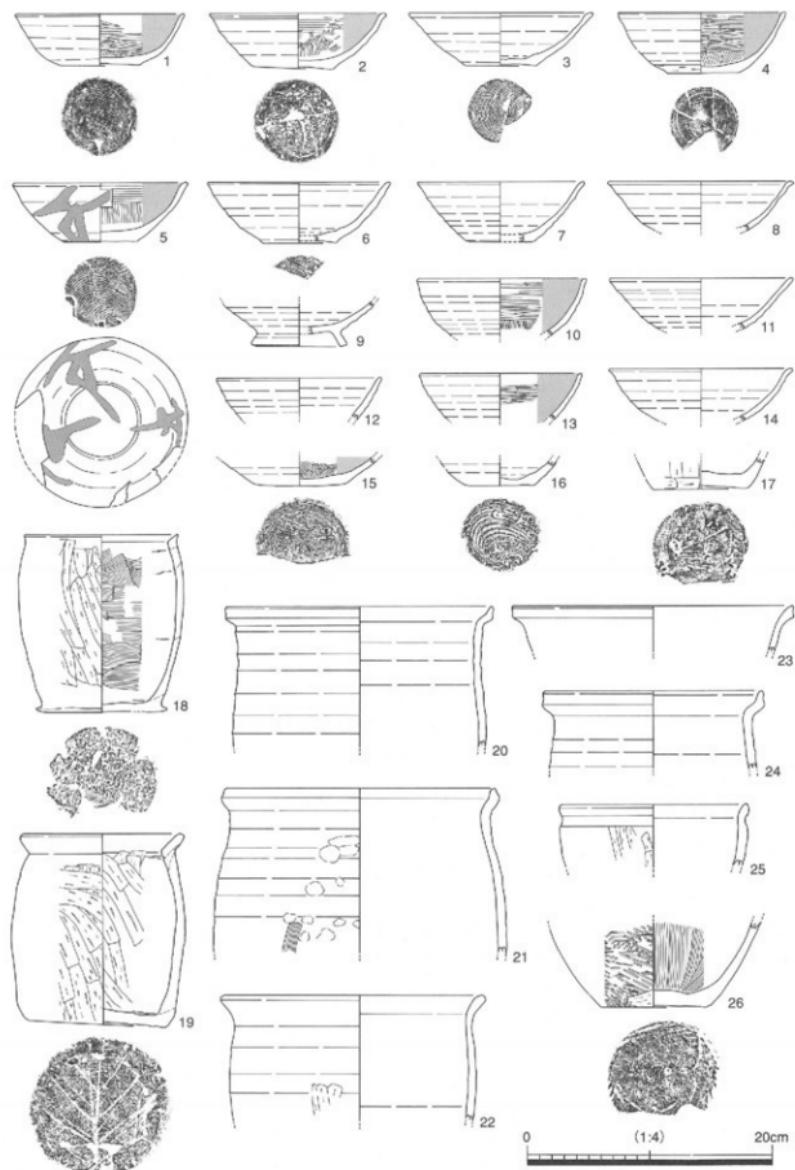


第36図 RA070 (第23次)

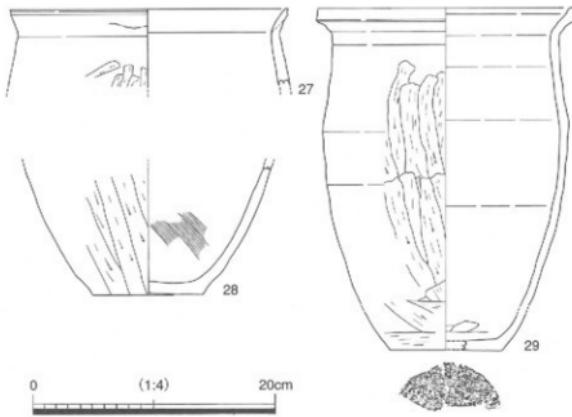
2 堅穴住居跡



第37図 RA070カマド (第23次)



第38図 RA070出土遺物（1）〈第23次〉



第39図 RA070出土遺物（2）〈第23次〉

〔カマド〕 東側壁北寄りに設置されており、両袖部ともに攪乱のため残存していない。しかし、燃焼部は円形の範囲で焼土を確認しており、本米のカマドの位置を示唆している。

煙道部は煙出し部に向てトンネル状に削り抜かれており、残存する長さは1.4mを測る。煙道部堆積土は炭化物を多く含んでいるシルトである。煙出し部は平面長梢円形を呈する。

遺物（第42図・写真図版42・43）

堆積土や床面などから土器類が出土した。このうち、國化可能な遺物は土器15点である。1～7は土師器壺である。4・5は内面ミガキ・黒色処理が施されているが、それ以外はすべて内外面ともに施されていない。また、6・7は高台が付けられている。7は堆積土下層より出土した高台付壺である。高台は「ハ」の字形を呈する。体部外面には墨書きが施されている。比較的太く波文のように書かれているが、文字かどうか不明である。8は北東堆積土より出土した土師器羽釜である。口縁部下に鈍が巡り、小形のものであると考えられる。

10～15は土師器壺である。9・10・12がロクロの回転力が用いられていないが、その他はロクロが用いられている壺である。10は堆積土下層より出土した。底部に木葉痕が認められる。14は床面直上より出土した。ロクロが用いられていない壺であるが、口縁端部が非常にシャープな形状である。内外面ともに細かなハケが施されている。

小結 出土した遺物および堆積土に十和田a降下火山灰と考えられる火山灰が確認されることより、この壺穴住居は9世紀後半～10世紀初頭の壺穴住居であると考えられる。

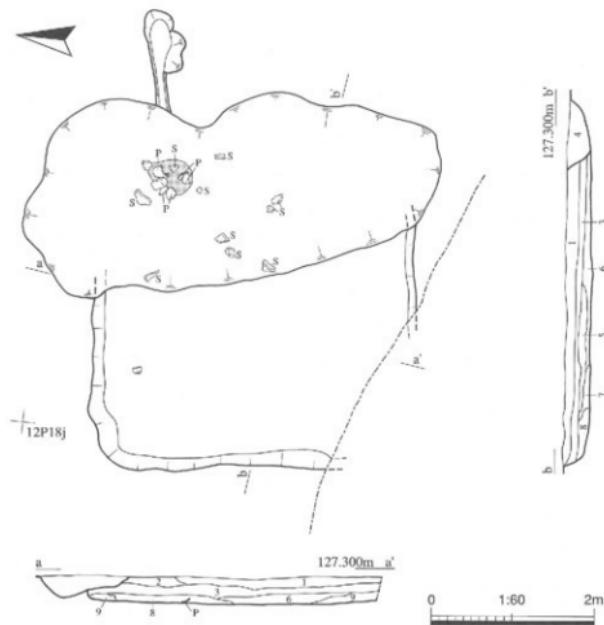
RA065（第43図・写真図版22）

〔位置〕 第24次調査区北端 12P 5rに位置する。RD027・028と重複関係が認められ、これら2条の溝は壺穴住居堆積土を切っている。検出面はI層直下の平坦な面であり、III層上面で検出した。主軸方向はカマドがみられないため不明であるが、軸方向は正方位より約45°振っている。

〔平面形・規模〕 調査区外へ続く北隅とその他は大規模な攪乱のため失われている。したがって、規模は定かではないが、一辺約3.5m程度の方形であると推測される。また、深さは25cmを測る。

に火山灰が認められる。〔壁・床面〕 西側壁、南西隅が確認できなかったが、その他は残存する。残存する壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面である。床面では土器などの遺物を多く検出した。特にカマドが寄っている住居北半で顕著である。

貼床は明瞭なものではなかった。必要最低限の貼床であった可能性が考えられる。

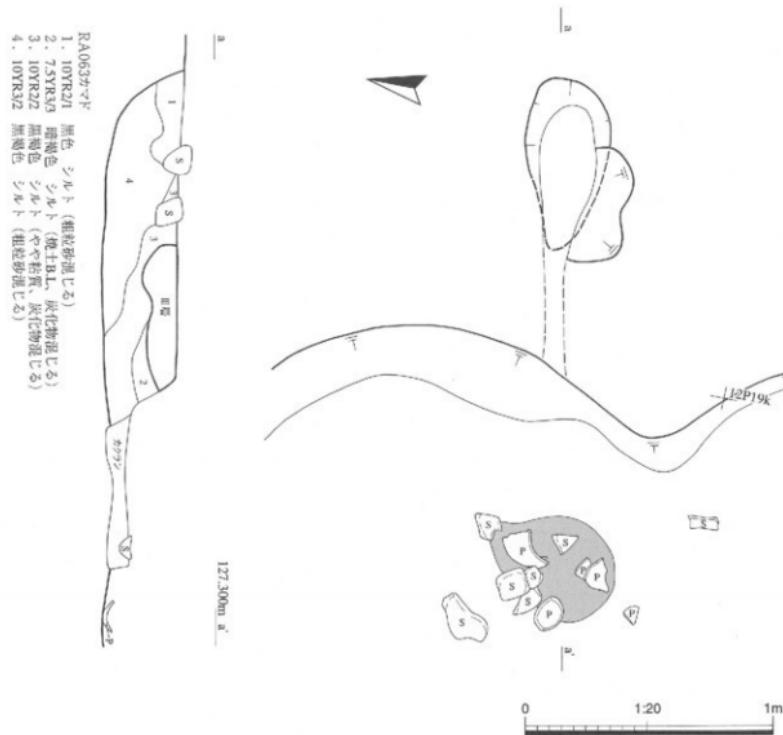


RA063

1. 10YR3/2 黒褐色 シルト（地山B.L多量に混じる）
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト（火山灰B.L多量に混じる）
3. 10YR3/3 黒褐色 シルト（やや粘質火山灰B.L、地山B.L多量に混じる）
4. 10YR2/1 黒色 シルト（中粒砂混じる）
5. 10YR2/1 黒色 シルト（中粒砂混じる）
6. 10YR2/1 黒色 シルト（火山灰B.L混じる）
7. 10YR3/2 黒褐色 シルト（粗粒砂混じる）
8. 10YR4/6 褐色 細粒砂（シルト混じる）
9. 10YR2/1 黒色 シルト（火山灰B.L微量に混じる）

第40図 RA063 (第24次)

2 堪穴住居跡



第41図 RA063カマド（第24次）

【堆積土】 概ね3層のシルトからなる。堆積土には地山ブロックを含むが、層状に堆積しており自然堆積であると考えられる。

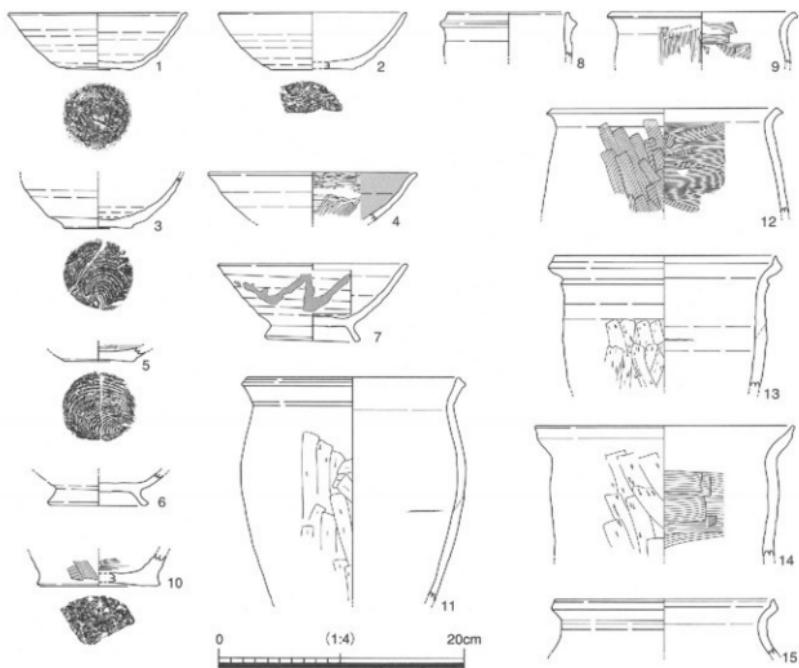
【壁・床面】 改乱によって一部あるいは大半が破壊されている。残存する壁は比較的緩やかに立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面であるが、貼床はみられない。

【カマド】 住居北側が調査区外へ続くため、北側に存在する可能性も考えられる。しかし、この部分は大規模な擾乱坑が位置しているため、すでに失われている可能性が高い。

【柱穴】 確認されていない。

【土坑】 確認されていない。

小結 この竪穴住居に伴う出土遺物は皆無である。したがって、遺物によって時期を特定することはできない。根拠は少なく断定はできないが、住居の立地や規模などから平安時代の竪穴住居であると考えられる。



第42図 RA063出土遺物（第24次）

RA069

遺構（第44・45図・写真図版23）

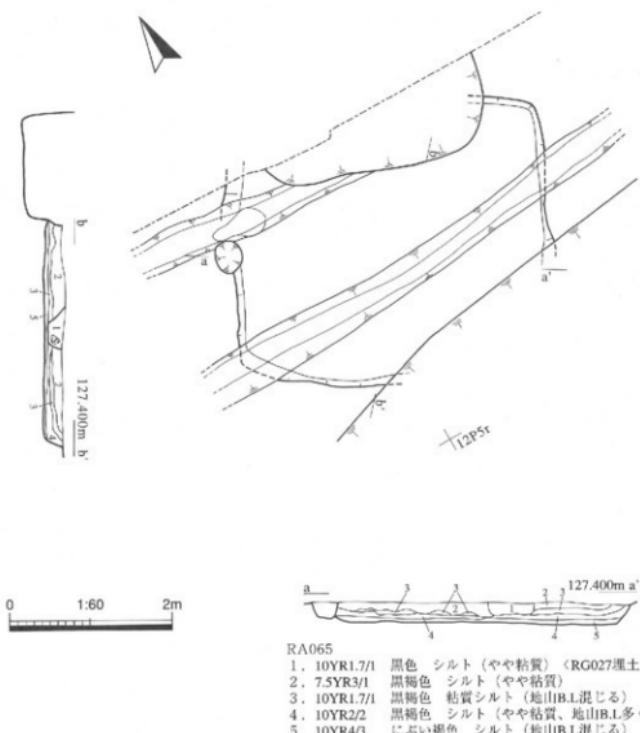
【位置】第24次調査区東側飛び地12Q 4 q グリッド付近に位置する。他の遺構との切り合いは認められない。また、住居北側および南側は調査区外である。検出面はI層直下の平坦な面、II層上面で検出した。主軸方向はほぼ東西方向である。

【平面形・規模】大半が調査区外へ続くため定かではないが、一辺約4m程度の方形であると推測される。また、深さは35cmを測る。

【堆積土】は概ね2層のシルトからなる。いずれも地山ブロックを含むが、自然堆積であると考えられる。

【壁・床面】北側壁、南側壁が調査区外に位置するため確認できなかったが、西側壁は一部良好に残存する。残存する壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がる。固く締まった平滑な面である。床面では土器などの遺物を多く検出した。特にカマド周辺では遺物の出土が顕著である。貼床はほぼ全面で施されているが、厚みと凹凸はわずかである。必要最低限の貼床であった可能性が考えられる。

【カマド】東側壁に設置されており、両袖部とともにわずかな高まりを確認した。燃焼部は橢円形の範



第43図 RA065（第24次）

開で焼土を確認した。

煙道部は煙出し部に向てトンネル状に削り抜かれており、残存する長さは1.25mを測る。煙道部埋土は炭化物が多く含んでいるシルトである。煙出し部は平面円形を呈する。

【柱穴】 確認されなかった。

【土坑】 確認されなかった。

遺物（第46図・写真図版44）

堆積土やカマド近く床面などから土器類が出土した。このうち、図化可能な遺物は土器12点である。また、鉄製品も1点出土した。

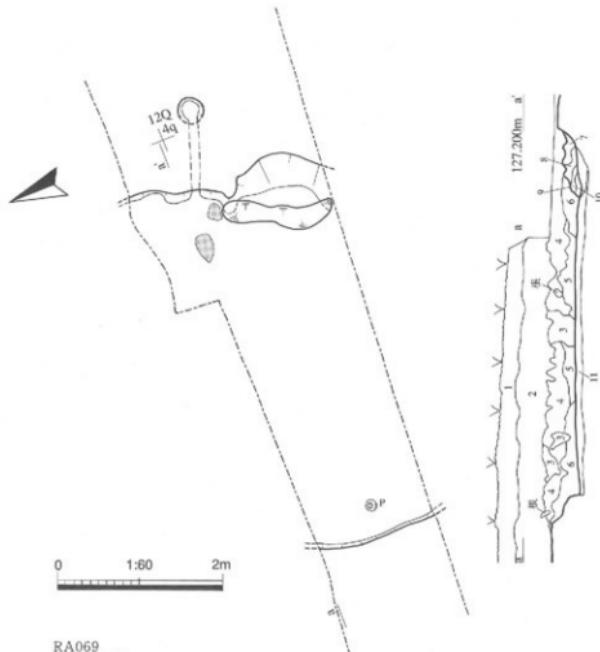
1～3は土師器壺である。1はカマド近くの床面より出土した。内面ミガキ・黒色処理が施され、底部は回転糸切り後無調整である。2はカマド近くの床面より出土した。柱状風の高台が付き、高台下面には静止糸切り痕が明瞭にみられる。器厚もやや厚く、大きさに比して重量感がある。周辺の遺跡を含め、類例の少ない特徴的な形態である。4～12は土師器壺である。4・6・7・9・10は口

クロの回転力が用いられていないが、その他はロクロが用いられている。4はカマド近くの床面より出土した底部のみの破片である。底部外面には大粒の砂粒が多く付着している。6はカマド近くの床面より出土した体部～底部の破片である。底部外面には木葉痕が明瞭にみられる。また、調整として体部内外面ともにハケが施されている。8はカマド近くの床面より出土した体部～底部の破片である。ロクロが用いられている甕であるが、器壁の歪みが著しく歪な形状である。焼成による変形ではなく、焼成前の変形であると考えられる。

小結 出土した遺物より、この竪穴住居は10世紀前半の竪穴住居であると考えられるが、2の柱状風の高台付窓がこの時代に帰属するのかどうかは不明である。

竪穴住居 出土鉄製品（第47図・写真図版47）

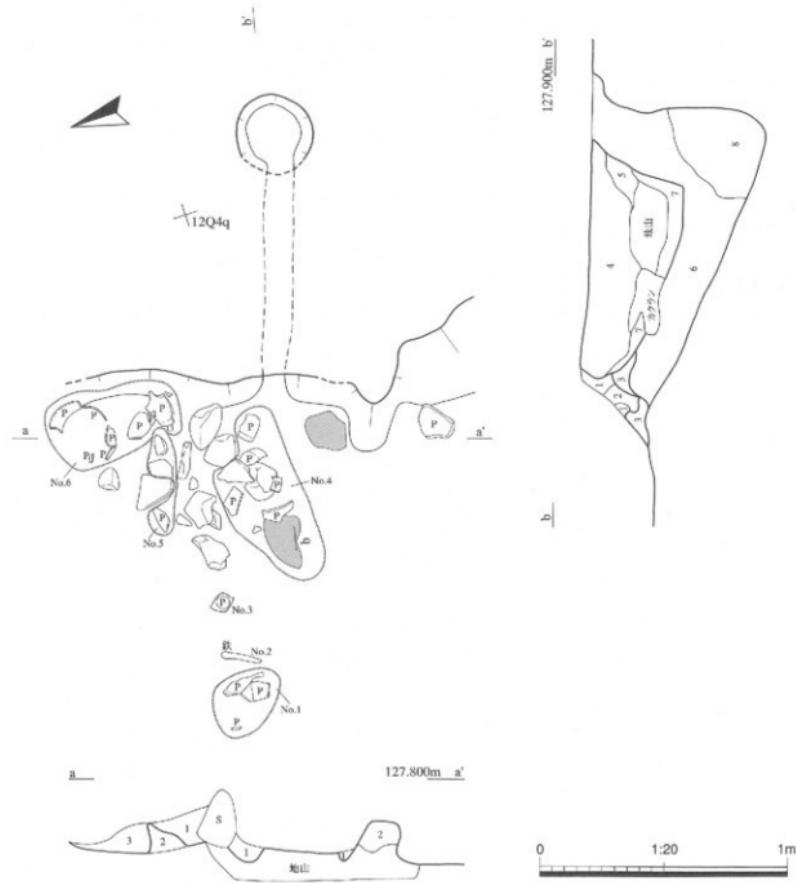
ここでは、竪穴住居より出土した鉄製品をまとめて報告する。これら出土した鉄製品は全部で5点



RA069

1. 鋸石数
2. 10YR2/1 黒色 シルト（表土・I層）
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト（地山B.L.、細粒砂少量化じる）
4. 10YR2/1 黒色 シルト（やや粘質、細粒砂少量化じる）
5. 10YR2/3 黑褐色 シルト（やや粘質、地山B.L.少量、細粒砂少量化じる）
6. 10YR2/2 黑褐色 シルト（地山B.L.、細粒砂混じる）
7. 10YR2/3 黑褐色 シルト（地山B.L.少量、細粒砂少量化じる）
8. 10YR4/3 にぶい褐色 シルト（やや粘質、地山B.L.混じる）
9. 10YR2/3 黑褐色 シルト（地山B.L.、細粒砂少量化じる）
10. 10YR4/6 棕色 粘土（シルト少量化じる）
11. 10YR4/3 にぶい褐色 シルト（やや粘質、地山B.L.多量に混じる）

第44図 RA069（第24次）

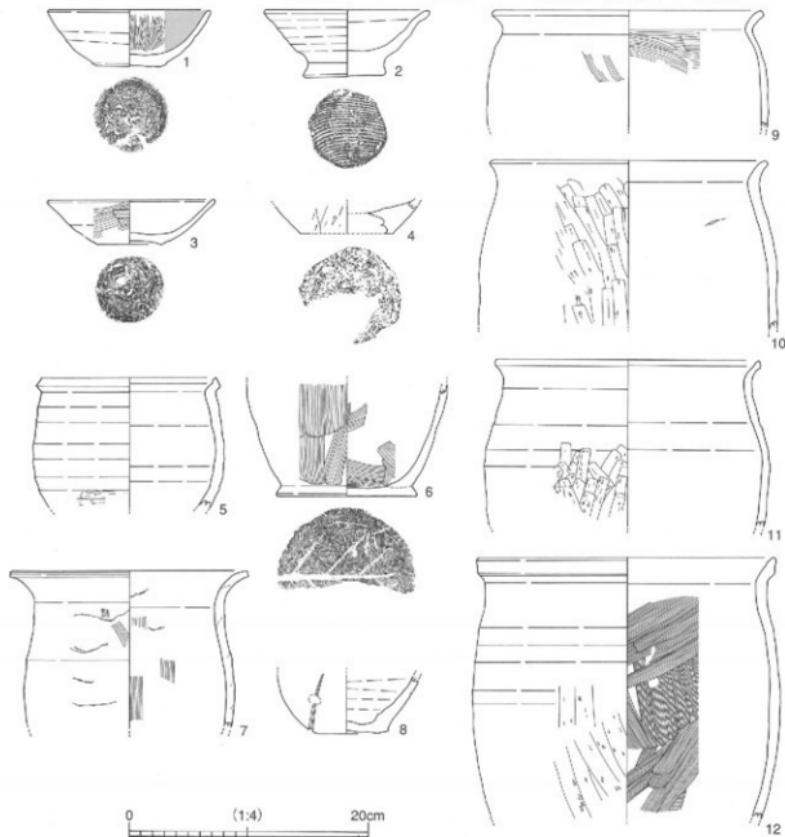


- RA069カマド
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト (地山BL少量混じる)
 2. 5YR3/6 斑赤褐色 粘土 (赤化)
 3. 10YR3/3 暗褐色 シルト (燒土・地山BL少量混じる)
 4. 10YR2/3 黒褐色 シルト (地山BL多く混じる)
 5. 10YR3/1 黒褐色 シルト (地山BL少量混じる)
 6. 10YR2/2 黒褐色 シルト (地山BL微量に混じる)
 7. 5YR2/4 橙褐色 粘質シルト (赤化)
 8. 10YR4/2 シルト (地山BL微量に混じる)

第45図 RA069カマド（第24次）

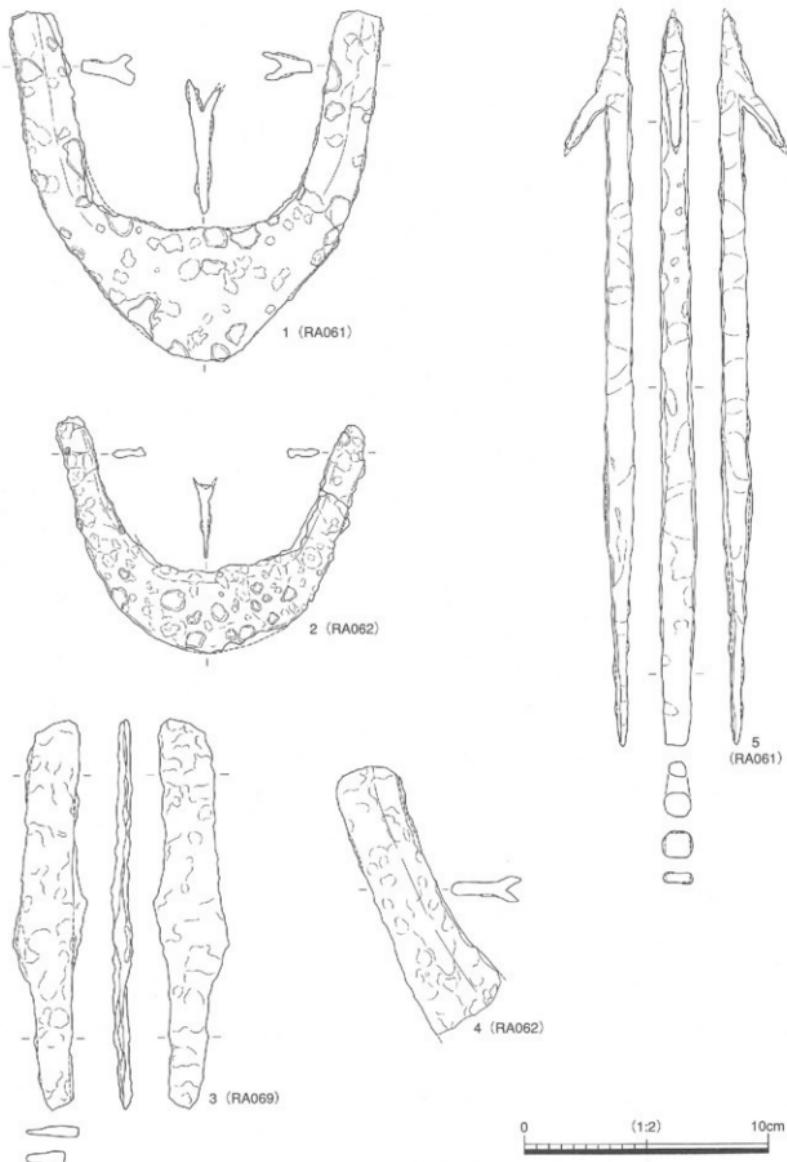
である。

1・2・4はいずれも鋸先である。いずれも「U」字形を呈し、断面「V」の字形の取り付け部がみられる。1はRA061カマド北袖直上より出土した。ほぼ完存している。刃部は幅広で丸みが少なく、逆台形を呈する。2はRA061北端貼床部分より出土した。1と異なり、刃部は緩やかな丸みを有する。また、刃先は鋭利であり、鋸がみられるが、比較的良好に残存していると思われる。4はRA062北東埋土下層より出土した。刃部は欠損しており、片側のみが残存しているが、残存部位から推して、1とほぼ同じ大きさの製品であると考えられる。3はRA069の床面より出土した。形態から小刀あるいは刀子であると考えられる。全体が鋸で覆われており、詳細な形状は不明である。また、刃部の先端は欠損している可能性が高い。5はRA061埋土下層出土の鋸先である。ほぼ完存している。体部は断面正方形であるが、基部は断面扁平な長方形である。先端部は尖り、返しがある。返しの形状は直線的ではなく、やや曲線を描いている。漁労具であると想定されるが、詳細な使用法および用途につい



第46図 RA069出土遺物（第24次）

2 穹穴住居跡



第47図 穹穴住居出土鉄製品

ては定かではない。また、同様の形態を呈する製品の出土例は少なく、今後の資料増加に期待したい。

3 土 坑

RD103

遺構（第48図・写真図版24）

【位置】 第23次調査区南側12P16aグリッド付近に位置する。RD104と切り合いが認められ、RD104を切っている。この土坑の北にはRA062が位置している。検出面はI層直下の平坦な面、ここではⅢ層上面で検出した。土坑の主軸方向はほぼ東西方向である。

【平面形・規模】 短軸131cm、長軸168cm、深さ52cmを測る。平面形態は整った長方形、断面形は横長の長方形を呈する。

【堆積土】 概ね7層のシルト～砂からなる。いずれも地山のシルトブロックや砂などの不純物が混じる。土坑は地山の砂礫層（IV層）を掘り抜いており、堆積土との差は砂など不純物の存在で区分される。砂礫層は不条理な堆積ではないものの、ブロックが多く混じる層や他の遺構にみられない砂質の堆積土である。掘削した後に、掘削で生じた土を用いてすぐに埋め戻したような状況である。

【壁・底面】 四方の壁すべてほぼ垂直の角度で立ち上がり、砂礫起源の地山であるため、やや脆弱である。また、底面は平滑である。

遺物（第49図・写真図版45）

堆積土より平安時代の土師器壺が1点出土した。2はRD103埋土最下層より出土した。内面ミガキ・黒色処理が施されている。底部は回転糸切り後無調整である。

出土した遺物より平安時代の遺構であると考えられ、埋土の特徴や遺構の規模・形態などの諸属性を勘案すると墓壙である可能性が考えられる。ただし、土坑内からは人骨等の出土はなかった。また、切り合い関係よりRD104よりも新しい遺構である。

RD104

遺構（第48図・写真図版24）

【位置】 第23次調査区ほぼ中央12Pに位置する。先述したRD103と切り合いが認められ、中央部分をRD103によって大きく切られている。また、この土坑の北にはRA062が位置している。検出面はI層直下の平坦な面、Ⅲ層上面で検出した。土坑の主軸方向はほぼ東西方向である。

【平面形・規模】 平面形態は比較的整った細長い長方形を呈すると推定される。短軸69cm、長軸232cm、深さ22cmを測る。

【堆積土】 単層の砂質シルトであり、地山ブロックが多く混じる。

【壁・底面】 残存している部分はすべて緩やかな角度で立ち上がる。底面は凹凸がみられる。

遺物 出土しなかった。

小結 時代を特定することはできない。堆積土の特徴から古代の遺構であると考えられるが、断定はできない。しかし、少なくともRD103よりも古い遺構であると考えられる。この土坑の性格については十分な手掛かりがなく不明である。

RD105

遺構（第48図・写真図版24）



第46図 RD103～108（第23次）

【位置】 第23次調査区ほぼ中央 130 8 v に位置する。他の遺構との切り合いは認められないが、この土坑の南東には RA068 が位置している。検出面は I 層直下の平坦な面、II 層上面で検出した。土坑の主軸方向はほぼ東西方向である。

【平面形・規模】 平面形態は楕円形、断面形態は椀形を呈する。短軸 123cm、長軸 179cm、深さ 62cm を測る。

【堆積土】 5 層のやや粘性のあるシルトからなる。最上層である 1 層より土師器坏片が 1 点出土した。堆積土はすべてレンズ状に層を成して秩序正しく堆積しており、堆積に人為の介在は考えられない。

【壁・底面】 四方の壁すべて緩やかな角度で立ち上がり、不整な部分が多くみられる。また、土坑底面は平坦な部分が少ない。

遺物（第49図・写真図版45）

先述したとおり、最上層より古墳～奈良時代の土師器坏片が 1 点出土した。

1 は内外面ともに丁寧なミガキ、体部下半にはヘラケズリが施されている。体部の段は比較的明瞭で、内面にも稜が認められる。2 次的な被熱を受けているようで変色、黒色処理が飛んでいる。

小結 出土した坏は 1 点のみで、出土層位が堆積土上層であるため、この土坑の時代および性格を特定することは困難である。

RD106

遺構（第48図・写真図版24）

【位置】 第23次調査区ほぼ中央 12024w に位置する。他の遺構との切り合いは認められないが、この土坑の北には RA061 が位置している。また、この土坑は帯状の微低地部分に立地する。検出面は I 層直下の平坦な面、II 層上面で検出した。

【平面形・規模】 直径 98cm を測る円形である。

【堆積土】 単層のシルトである。この堆積土上中よりほぼ完形の土師器坏が逆位の状態で 1 点出土した。底面より浮いているが、いかにも埋納されたかのような出土状況である。

【壁・底面】 四方の壁すべて緩やかな角度で立ち上がり、黒色シルトの低地部分が基盤となっているため埋土と基盤層との層境は不明瞭である。また、底面は比較的平滑である。

遺物（第49図・写真図版45）

先述したとおり、埋土より平安時代の土師器坏が 1 点出土した。3 は内外面ともにミガキ・黒色処理は施されていない。底部は回転糸切り後無調整である。

小結 出土した遺物より平安時代の遺構であると考えられるが、土坑の性格は不明である。

RD107

遺構（第48図・写真図版24）

【位置】 第24次調査区西側 12PI2 p に位置する。他の遺構との切り合いは認められないが、この土坑の南には RA067 が位置している。また、この土坑は帯状の微低地部分に立地する。検出面は I 層直下の平坦な面、II 層上面で検出した。

【平面形・規模】 直径 54cm を測る円形である。

【堆積土】 上下 2 層のシルトからなり、上層では火山灰ブロックが認められる。

【壁・底面】 四方の壁すべてほぼ垂直の角度で立ち上がる。底面は丸みを持つ。

遺物 出土しなかった。

小結 堆積土に十和田a降下火山灰が含まれることから平安時代の遺構であると考えられる。性格は不明である。

RD108 (第48図・写真図版24)

[位置] 第23次調査区ほぼ中央 13O 8 v に位置する。RA070と切り合いが認められ、このRA070によって切られている。検出面はRA070貼床直下の凹凸のある面である。主軸方向は約45° 東に振った南北方向である。

[平面形・規模] 短軸138cm、長軸173cm、深さ39cmを測り、やや不整な隅丸長方形を呈する。

[堆積土] 8層のシルト～砂からなる。3層では火山灰が混じっている。また、いずれの層にも地山のシルトブロック・砂などの不純物が混じる。土坑は地山の砂礫層(IV層)を掘り抜いており、埋土との差は砂など不純物の存在で区分される。砂礫層は不条理な堆積ではないものの、ブロックが多く混じる層や他の遺構にみられない砂質の堆積土が特徴的である。掘削した後に、掘削で生じた土を用いて埋め戻したような状況である。

[壁・底面] 四方の壁すべて比較的急な角度で立ち上がり、砂礫起源の地山であるため、やや脆弱である。また、底面はほぼ平坦である。

遺物 (第49図・写真図版47)

堆積土最下層より礫石器が1点出土した。4は擦り石であると考えられる。欠損しているため全体の形状は不明であるが、概ね直方体であると考えられる。1面のみ縦方向の擦痕が認められる。

小結 堆積土中層に十和田a火山灰を検出したことより平安時代の遺構であると考えられ、堆積土の特徴や遺構の規模・形態などの諸属性を勘案すると墓壙である可能性が考えられ、出土した礫石器は埋葬に伴う遺物である可能性が考えられる。

4 溝跡

RG024

遺構 (第50図・写真図版25)

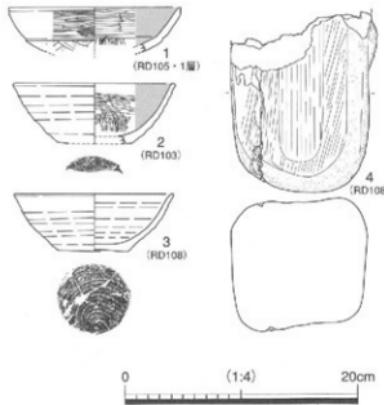
[位置] 第23次調査区南端、14P14d付近に位置する。東側は未調査の調査区外へ続き、西側は平成15年度おこなわれた第19次調査区へ続く。検出面はI層直下の平坦な面、III層上面である。主軸方向はほぼ東西を指向する。

[規模] 北側の長さ2.54m、南側の長さ0.95m、深さ17cmを測る。

[堆積土] 4層のシルトからなり、自然堆積であると考えられる。

遺物 3層より土師器片が1点のみ出土した。

小結 出土遺物が1点のみであるため時期の特定は困難であるが、堆積土の特徴より古代の遺構であると考えられる。



第49図 土坑出土遺物

RG027

遺構（第51図・写真図版25）

【位置】 第23次調査区北側の東端～第24次調査区、12O～12Pに位置する。RG029・RA065と切り合いが認められる。この溝と直交するRG029に切られ、RA065を切る。また、RG028と近接し、平行する。検出面はⅠ層直下である。入念な検出作業をおこなわざとも明瞭に輪郭が確認できる。主軸方向はほぼ東西を指向する。

【規模】 長さ72.3m、深さ15cmを測る。

遺物 土師器片がわずかに出土したが、微細な破片であるため詳細は不明である。

小結 遺構の時期は不明であるが、切り合関係より少なくともRG029より古く、RA065よりも新しいと考えられる。また、堆積土が古代の遺構と異なり、現代の下水管と平行すること、近現代の地境に近接することなどから近世以降の遺構である可能性が高い。

RG028

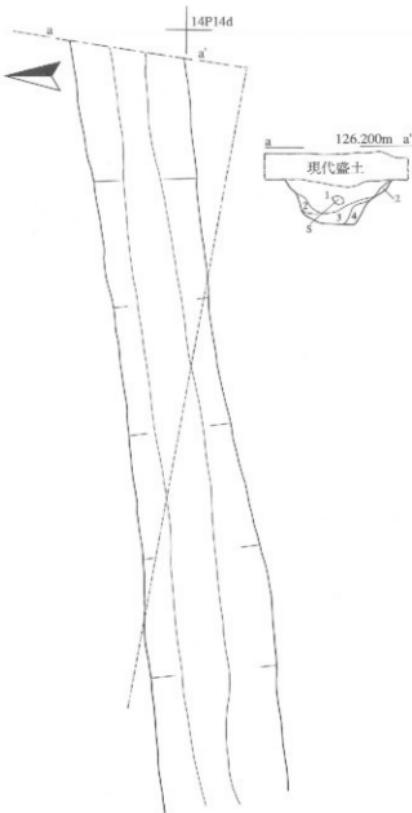
遺構（第51図・写真図版25）

【位置】 第23次調査区北側の東端～第24次調査区、12O～12Pに位置する。RG029・RA065と切り合いが認められる。この溝と直交するRG029に切られ、RA065を切る。また、RG028と近接し、平行する。検出面はⅠ層直下である。入念な検出作業をおこなわざとも明瞭に輪郭が確認できる。主軸方向はほぼ東西を指向する。

【規模】 長さ72.3m、深さ15cmを測る。

遺物 土師器片がわずかに出土したが、微細な破片であるため詳細は不明である。

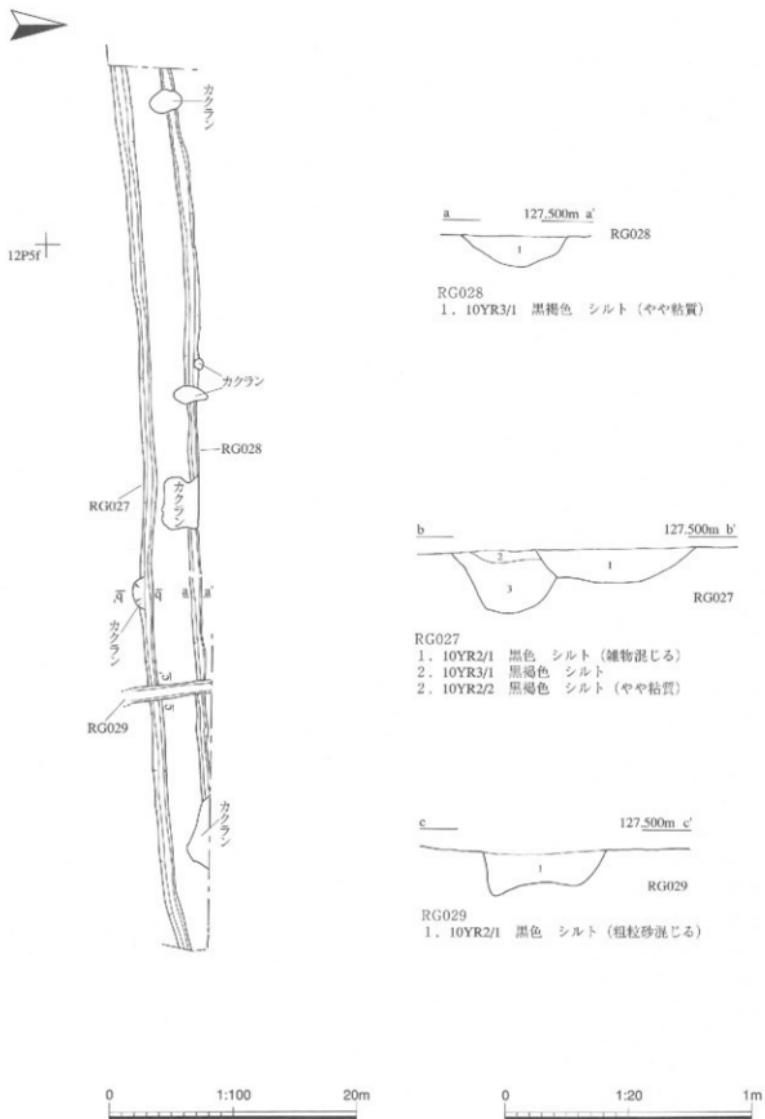
小結 遺構の時期は不明であるが、切り合関係より少なくともRG029より古く、RA065よりも新しいと考えられる。また、埋土が古代の遺構と異なり、現代の下水管と平行すること、近現代の地境に近接することなどから近世以降の遺構である可能性が高い。



RG024

1. 10YR2/1 黒色 粘土（植物根による塊多い）
2. 10YR3/1 黒褐色 シルト（地山B.L混じる）
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト（土師器片出土）
4. 10YR3/1 黒褐色 粘土（地山B.L少混じる）

第50図 RG024（第23次）



第51図 RG027～029 (第24次)

RG029

遺構（第51図・写真図版25）

【位置】 第24次調査区北端、I2Pに位置する。RG027・028と切り合いが認められ、この2条の溝を切る。検出面はI層直下である。入念な検出作業をおこなわざとも明瞭に輪郭が確認できる。主軸方向は南北を指向する。

【規模】 長さ3.2m、深さ16cmを測る。

遺物 出土しなかった。

小結 時期不明であるが、RG017・028が比較的新しい遺構であるため、この溝も近世以降であると考えられる。

5 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物はきわめて少量である。大半が現代の攪乱から出土したものである。これら遺構外出土遺物は図化可能なもの5点をまとめて報告する（第52図・写真図版45）。

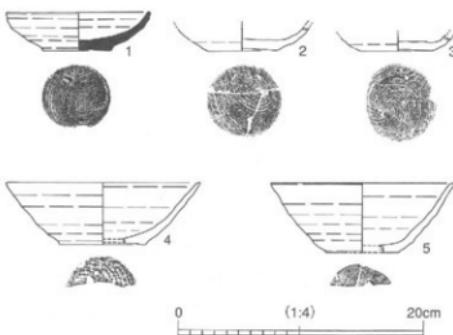
1は須恵器壺（皿）・2～5は土師器壺である。1は器高が低く浅い器種である。壺という名称よりも皿という名称の方が適切かもしれない。底部は回転糸切り後無調整である。やや焼成が不良気味であり、一部で還元が不足している。2～5はいずれも内外面ともにミガキ・黒色処理が施されていない。底部は回転糸切り後無調整である。

6 まとめ

第23次調査区は南北に長く、第24次調査区は第23次調査区の東西にそれぞれ分かれて存在する。過去の調査成果と比較して遺構密度は決して高くないが、古代に属する堅穴住居や土坑などを検出した。このような遺構の存在により、今回の調査範囲が集落の縁辺部に位置するものと考えられる。本節では第23・24次調査で検出した遺構と遺物について若干のまとめをおこなうこととする。

第23・24次調査では、合計12棟を数える古代の堅穴住居跡（RA）を検出した。これら堅穴住居の

所属時期は4棟が7世紀末～8世紀、9棟が9世紀後半～10世紀前半に属する。検出した7世紀末～8世紀の堅穴住居跡はすべて座標軸より約45°振れており、カマドの設置方位は北西である。これに対して9世紀後半～10世紀前半の堅穴住居跡はカマドの設置方位が概ね東である。また、両期間での堅穴住居跡同士の重複はみられない。II層が残存している帯状の微低地部で検出したRA067などは床面の出土遺物から奈良時代の堅穴住居跡であると考えられ



第52図 遺構外出土遺物

る。しかし、堆積土上層に含まれる十和田a降下火山灰や平安時代の遺物の存在から、最終的な埋没時期が平安時代の堅穴住居跡機能時期と大きな時間差を持たないと考えられる。したがって、今回の調査区で検出した平安時代の堅穴住居が営まれる段階においても完全に埋没せず、やや疎んだ状況であったと考えられ、このような廃絶した堅穴住居跡の痕跡である疎地を避けて、平安時代の堅穴住居跡が構築されたと推測される。その結果として、両時代の堅穴住居跡間での重複現象が認められないのかもしれない。

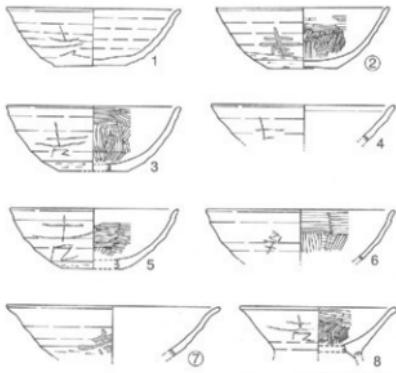
堅穴住居跡以外の古代の遺構では、6基の土坑を検出した。このうち、RD103・108は墓塚である可能性が考えられる。土坑掘削後、すぐに埋め戻したような埋土の状況や規模・比較的整った平面および断面形態、平坦な底面など諸属性より墓塚である可能性を考えた。このような墓塚が居住域に近接して存在することは、古代の葬法や宗教観・思想等を探るうえで貴重な事例となるものと考えられる。

出土遺物は土器がコンテナ5箱の出土であった。特に、RA061は掲載した土器69点を数え、圧倒的な土器の出土量を誇る。

また、7世紀末～8世紀の土器では、関東系土師器と考えられるRA068壺1点、在地の土器にはみられない特徴を有するRA068出土土師器壺などが珍しい土器として挙げられる。これら非在地の特徴を持つ土器の出土は他地域との交流を示すものであると考えられる。また、9世紀後半～10世紀前

半の土器では、器表面に墨書きや刻書が施された壺が多く出土し、壺ではロクロが用いられているもの用いられていないもの問わず、底部に砂粒が付着したいわゆる砂底土器と呼ばれる種類の壺が多く出土した。墨書きおよび刻書き土器には、文字として判読不明のものが多い中、「吉」と読むことができる資料が8点出土した（第53図）。これらのうち6・8はRA062より出土したが、それ以外はRA061より出土した。この2棟は近接した堅穴住居で、住居間での遺物接合が認められた。さらに、これら「吉」はすべて字形が同じである。すなわち、「士」部分が「土」となっており、「口」部分の2・3画目は画数を省略した「Z」字のように書かれている。このような字の癖を持った同一人物の手によるもの、一つの見本をその他の忠実に模したもののかは不明であるが、この「吉」は吉祥句でもあるため、何らかの意味合いがあったのかもしれない。

土器以外の出土遺物ではいずれも古代の土製品・鉄製品・石製品・礫石器などが出土した。特に、RA067より出土した管玉は野古A遺跡では初出である。また、鉄製鋸先は遺跡が所在する盛南開発地域の調査では出土例がない。



第53図 「吉」字土器集成

第1表 遺物観察表（3）RA067・060・061住居跡

国 20 8 住 構 24次RA067	寸 法	口 径 5.5 高 度 1.6 路 高 (1.6) 路 厚 1.0 底 部 木板底	調 整 外 ハケ（タテ） 内 ハケ（ヨコ） 器 高 (1.6) 脂 土	色 調 外 10YR8/8黄褐色 内 10YR8/3浅褐色 時 期 S.C. 備 考
写 真 29 31 位 置 北東角 種 別 土粘土 器 高 10cm 路 厚 1cm 底 部 10%				
国 20 9 通 構 24次RA067	寸 法	口 径 16.2 高 度 6.6 器 高 18.1 路 厚 0.7 底 部 底部	調 整 外 ハケ（タテ） 内 ハケ（ヨコ） 器 高 (白色砂、スコ) 路 厚 (リヤ) 底 部 脂 土	色 調 外 SYR8/6赤褐色 内 7.5YR6/4に赤褐色 内 7.5YR6/4に赤褐色 時 期 8C 備 考 内面スカリ
写 真 29 32 位 置 北東角、北東壁上部、南東壁上部、南東壁下部 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				
国 20 10 通 構 24次RA067	寸 法	口 径 18.0 高 度 7.1 器 高 18.1 路 厚 0.7 底 部 底部	調 整 外 ハケ（タテ） 内 ハケ（ヨコ） 器 高 (白色砂、スコ) 路 厚 (リヤ) 底 部 脂 土	色 調 外 12.5YR6/4に赤褐色 内 7.5YR6/4に赤褐色 内 7.5YR6/4に赤褐色 時 期 8C 備 考 内面スカリ
写 真 29 34 位 置 北西角上部、南東壁上部 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				
国 20 11 通 構 24次RA067	寸 法	口 径 16.6 高 度 7.1 器 高 28.45 路 厚 0.7 底 部 底部	調 整 外 ハケ？（タテ） 内 ハケ（ヨコ） 器 高 (白色砂、スコ) 路 厚 (リヤ) 底 部 脂 土	色 調 外 10YR6/4に赤褐色 内 7.5YR6/4に赤褐色 内 7.5YR6/4に赤褐色 時 期 8C 備 考 内面コゲ、内面スカリ
写 真 30 33 位 置 北西角上部、南東壁上部 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				
国 20 12 通 構 25次RA060	寸 法	口 径 13.4 高 度 5.7 器 高 3.5 路 厚 0.5 底 部 底部	調 整 外 同軸ナダ 内 同軸ナダ 器 高 (白色砂) 路 厚 (リヤ) 底 部 脂 土	色 調 外 7.5YR7/6灰褐色 内 7.5YR7/6灰褐色 内 7.5YR7/6灰褐色 時 期 9C後半～10C前半 備 考
写 真 30 35 位 置 北西角上部、南東壁上部 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				
国 20 13 1 通 構 25次RA061	寸 法	口 径 14.3 高 度 5.95 器 高 3.5 路 厚 0.45 底 部 底部	調 整 外 同軸ナダ 内 同軸ナダ 器 高 (白色砂) 路 厚 (リヤ) 底 部 脂 土	色 調 外 7.5YR6/4赤褐色 内 7.5YR6/4赤褐色 内 7.5YR6/4赤褐色 時 期 9C後半～10C前半 備 考
写 真 31 48 位 置 南東壁上部、セミドライ内及び燃焼部、北東 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				
国 20 14 2 通 構 23次RA061	寸 法	口 径 14.2 高 度 5.0 器 高 5.0 路 厚 0.5 底 部 底部	調 整 外 回転ナダ 内 回転ナダ 器 高 (スコリ、ス母) 路 厚 (リヤ) 底 部 回転式切り抜き調査	色 調 外 10YR7/4に赤褐色 内 7.5YR6/4赤褐色 内 7.5YR6/4赤褐色 時 期 9C後半～10C前半 備 考
写 真 32 50 位 置 北東 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				
国 20 15 3 通 構 23次RA061	寸 法	口 径 15.0 高 度 4.95 器 高 4.95 路 厚 0.5 底 部 底部	調 整 外 回転ナダ 内 回転ナダ 器 高 (白色砂) 路 厚 (リヤ) 底 部 脂 土	色 調 外 7.5YR7/6灰褐色 内 7.5YR7/6灰褐色 内 7.5YR7/6灰褐色 時 期 9C後半～10C前半 備 考
写 真 32 55 位 置 北東 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				
国 20 16 4 通 構 23次RA061	寸 法	口 径 (13.8) 高 度 4.7 器 高 4.4 路 厚 0.4 底 部 底部	調 整 外 回転ナダ 内 回転ナダ 器 高 (白色砂) 路 厚 (リヤ) 底 部 脂 土	色 調 外 7.5YR7/6灰褐色 内 5YR7/6灰褐色 内 5YR7/6灰褐色 時 期 9C後半～10C前半 備 考
写 真 32 58 位 置 北東 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				
国 20 17 5 通 構 23次RA061	寸 法	口 径 13.7 高 度 4.45 器 高 4.45 路 厚 0.55 底 部 底部	調 整 外 回転ナダ 内 回転ナダ 器 高 (白色砂) 路 厚 (リヤ) 底 部 脂 土	色 調 外 7.5YR6/6灰褐色 内 7.5YR6/6灰褐色 内 7.5YR6/6灰褐色 時 期 9C後半～10C前半 備 考
写 真 31 47 位 置 北東 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				
国 20 18 6 通 構 23次RA061	寸 法	口 径 (14.0) 高 度 6.0 器 高 4.8 路 厚 0.55 底 部 底部	調 整 外 回転ナダ 内 回転ナダ 器 高 (白色砂) 路 厚 (リヤ) 底 部 脂 土	色 調 外 7.5YR7/4に赤褐色 内 5YR7/4赤褐色 内 5YR7/6灰褐色 時 期 9C後半～10C前半 備 考
写 真 31 50 位 置 北東、8.7m南側、北東壁上部、南東壁下部 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				
国 20 19 7 通 構 23次RA061	寸 法	口 径 15.1 高 度 4.9 器 高 4.25 路 厚 0.55 底 部 底部	調 整 外 回転ナダ 内 回転ナダ 器 高 (白色砂、石) 路 厚 (リヤ) 底 部 脂 土	色 調 外 7.5YR6/8赤褐色 内 7.5YR6/8赤褐色 内 5YR7/6灰褐色 時 期 9C後半～10C前半 備 考
写 真 31 50 位 置 北東、8.7m南側、北東壁上部、南東壁下部 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				
国 20 20 8 通 構 23次RA061	寸 法	口 径 14.2 高 度 5.7 器 高 4.9 路 厚 0.55 底 部 底部	調 整 外 回転ナダ 内 ミダキ 器 高 (スコリ) 路 厚 (リヤ、ス母) 底 部 脂 土	色 調 外 10YR6/2灰褐色 内 10YR6/2灰褐色 内 10YR6/2灰褐色 時 期 9C後半～10C前半 備 考
写 真 31 48 位 置 床室（中央）床、床面直上 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				
国 20 21 9 通 構 23次RA061	寸 法	口 径 (14.4) 高 度 6.4 器 高 4.9 路 厚 0.45 底 部 底部	調 整 外 回転ナダ 内 ミダキ 器 高 (白色砂、スコ) 路 厚 (リヤ) 底 部 脂 土	色 調 外 7.5YR6/4に赤褐色 内 7.5YR6/4に赤褐色 内 7.5YR6/4に赤褐色 時 期 9C後半～10C前半 備 考
写 真 31 49 位 置 北西角 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				
国 20 22 10 通 構 23次RA061	寸 法	口 径 11.3 高 度 6.4 器 高 4.21 路 厚 0.45 底 部 底部	調 整 外 回転ナダ 内 ミダキ 器 高 (白色砂、スコ) 路 厚 (リヤ) 底 部 脂 土	色 調 外 7.5YR6/4に赤褐色 内 7.5YR6/4に赤褐色 内 10YR2/1黒褐色 時 期 9C後半～10C前半 備 考
写 真 31 50 位 置 北北 種 别 土粘土 器 高 10cm 路 厚 5cm 底 部 5%				

第1表 遺物観察表（5）RA061住居跡

図 26 写 真 32 種 別 土器 考 察 残 残 在 70 %	26 通 横 23次RA061 位 置 カマド脇 層 別 上部 器 物 瓦 残 在 5%	寸 法 口 径 (14.6) 底 径 (3.95) 器 厚 0.35	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 藤 (白色砂)	色 調 外 SYR6/4に近い褐色 内 SYR7/4に近い褐色 施 施 (白色砂)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 26 写 真 33 種 別 土器 考 察 残 残 在 70 %	27 通 横 23次RA061 位 置 北西 層 別 上部 器 物 瓦 残 在 5%	寸 法 口 径 (12.6) 底 径 (4.0) 器 厚 0.4	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (白色砂、石灰)	色 調 外 SYR6/6褐色 内 SYR6/6に近い褐色 施 施 (白色砂、石灰)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 26 写 真 33 種 別 土器 考 察 残 残 在 15 %	28 通 横 23次RA061 位 置 西北 層 別 土器 器 物 瓦 残 在 15 %	寸 法 口 径 (13.2) 底 径 (4.2) 器 厚 0.4	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (白色砂、石灰)	色 調 外 SYR6/6褐色 内 SYR6/6に近い褐色 施 施 (白色砂、石灰)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 26 写 真 33 種 別 土器 考 察 残 残 在 10 %	29 通 横 23次RA061 位 置 南西 層 別 上部 器 物 瓦 残 在 10 %	寸 法 口 径 12.6 底 径 一 器 厚 (3.5) 器 厚 0.45	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (白色砂)	色 調 外 SYR6/5褐色 内 SYR6/6に近い褐色 施 施 (白色砂)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 26 写 真 33 種 別 土器 考 察 残 残 在 20 %	30 通 横 23次RA061 位 置 南西 層 別 上部 器 物 瓦 残 在 20 %	寸 法 口 径 (13.0) 底 径 (4.3) 器 厚 0.4	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (白色砂、石灰)	色 調 外 SYR6/6褐色 内 SYR6/6に近い褐色 施 施 (白色砂、石灰)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 26 写 真 34 種 別 土器 考 察 残 残 在 5 %	31 通 横 23次RA061 位 置 西南 層 別 土器 器 物 瓦 残 在 5 %	寸 法 口 径 (13.6) 底 径 (4.5) 器 厚 0.55	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (スコリア)	色 調 外 SYR6/6褐色 内 SYR6/6に近い褐色 施 施 (スコリア)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 27 写 真 34 種 別 土器 考 察 残 残 在 20 %	32 通 横 23次RA061 位 置 西南 層 別 土器 器 物 瓦 残 在 15 %	寸 法 口 径 (14.0) 底 径 (3.7) 器 厚 0.4	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (スコリア)	色 調 外 SYR6/6褐色 内 SYR6/6に近い褐色 施 施 (スコリア)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 27 写 真 34 種 別 土器 考 察 残 残 在 10 %	33 通 横 23次RA061 位 置 西南 層 別 土器 器 物 瓦 残 在 10 %	寸 法 口 径 (14.2) 底 径 (3.8) 器 厚 0.45	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (スコリア)	色 調 外 SYR6/6褐色 内 SYR6/6に近い褐色 施 施 (スコリア)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 27 写 真 34 種 別 土器 考 察 残 残 在 10 %	34 通 横 23次RA061 位 置 西南ベルト 層 別 下部 器 物 瓦 残 在 10 %	寸 法 口 径 (14.2) 底 径 (5.1) 器 厚 0.4	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (白色砂)	色 調 外 SYR6/6褐色 内 SYR6/6に近い褐色 施 施 (白色砂)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 27 写 真 34 種 別 土器 考 察 残 残 在 10 %	35 通 横 23次RA061 位 置 西南ベルト 層 別 中部 器 物 瓦 残 在 10 %	寸 法 口 径 (16.7) 底 径 (6.0) 器 厚 0.6	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (白色砂、石灰)	色 調 外 SYR4/4に近い褐色 内 SYR5/4に近い褐色 施 施 (白色砂、石灰)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 27 写 真 34 種 別 土器 考 察 残 残 在 15 %	36 通 横 23次RA061 位 置 西南ベルト 層 別 中部 器 物 瓦 残 在 15 %	寸 法 口 径 (22.4) 底 径 (3.9) 器 厚 0.7	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (白色砂、スコリア)	色 調 外 SYR7/4に近い褐色 内 SYR7/4に近い褐色 施 施 (白色砂、スコリア)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 27 写 真 35 種 別 土器 考 察 残 残 在 30 %	37 通 横 23次RA061 位 置 カマド下 層 別 土器 器 物 瓦 残 在 30 %	寸 法 口 径 (20.4) 底 径 (13.6) 器 厚 0.8	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (白色砂、石灰)	色 調 外 SYR7/4に近い褐色 内 SYR7/4に近い褐色 施 施 (白色砂、石灰)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 27 写 真 34 種 別 土器 考 察 残 残 在 20 %	38 通 横 23次RA061 位 置 西南 層 別 上部 器 物 瓦 残 在 20 %	寸 法 口 径 (21.0) 底 径 (9.7) 器 厚 0.6	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (白色砂、石灰)	色 調 外 SYR6/6褐色 内 SYR7/4に近い褐色 施 施 (白色砂、石灰)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 27 写 真 35 種 別 土器 考 察 残 残 在 30 %	39 通 横 23次RA061 位 置 カマド下 層 別 土器 器 物 瓦 残 在 30 %	寸 法 口 径 (17.5) 底 径 (10.7) 器 厚 0.8	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (白色砂、石灰)	色 調 外 SYR6/6褐色 内 SYR7/4に近い褐色 施 施 (白色砂、石灰)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考
図 27 写 真 34 種 別 土器 考 察 残 残 在 30 %	40 通 横 23次RA061 位 置 西南 層 別 土器 器 物 瓦 残 在 30 %	寸 法 口 径 (20.6) 底 径 (21.4) 器 厚 0.8	調 整 一 外 回転ナジ 内 回転ナジ 施 施 (白色砂、石灰)	色 調 外 SYR7/4に近い褐色 内 SYR7/5に近い褐色 施 施 (白色砂、石灰)	時 期 9.C後半～10C前半 備 考

第1表 遺物観察表(6) RA061住居跡

図 27 41 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (21.3) 底 径 (16.7) 器 高 (6.7) 器 厚 (0.7)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 7.5YR6/2(紅褐色) 内 7.5YR6/2(紅褐色)
写 真 54 88 位 置 斧頭				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 良好				
残 存 20% 黒 磁	底 部			
図 27 42 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (20.4) 底 径 (18.3) 器 高 (5.7) 器 厚 (0.5)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 10YR8/4(浅黄褐色) 内 10YR8/4(浅黄褐色)
写 真 34 81 位 置 北東				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 亂丁厚				
26 様 例 他 成 やや不良				
残 存 10% 黑 磁	底 部			
図 27 43 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (21.3) 底 径 (18.0) 器 高 (4.2) 器 厚 (0.7)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 7.5YR6/2(紅褐色) 内 7.5YR6/2(紅褐色)
写 真 34 91 位 置 斧頭				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 やや不良				
残 存 20% 黑 磁	底 部			
図 27 44 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (20.0) 底 径 (18.0) 器 高 (4.2) 器 厚 (0.7)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 10YR6/2(紅褐色) 内 10YR6/2(紅褐色)
写 真 35 100 位 置 斧頭				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 良好				
残 存 20% 黑 磁	底 部			
図 27 45 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (20.0) 底 径 (18.0) 器 高 (7.1) 器 厚 (0.7)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 10YR6/4(深い黄褐色) 内 10YR6/4(深い黄褐色)
写 真 34 90 位 置 カマド				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 やや不良				
残 存 15% 黑 磁	底 部			
図 27 47 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (20.0) 底 径 (18.0) 器 高 (4.7) 器 厚 (0.7)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 7.5YR6/4(紅褐色) 内 7.5YR6/4(紅褐色)
写 真 35 102 位 置 北東北下厚土、RA062南カマド塗土坑				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 良好				
残 存 10% 黑 磁	底 部			
図 27 48 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (20.0) 底 径 (18.0) 器 高 (7.1) 器 厚 (0.6)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 7.5YR6/4(紅褐色) 内 7.5YR6/4(紅褐色)
写 真 35 101 位 置 カマド				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 良好				
残 存 10% 黑 磁	底 部			
図 27 49 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (20.0) 底 径 (18.0) 器 高 (7.0) 器 厚 (0.6)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 10YR7/4(深い黄褐色) 内 10YR7/4(深い黄褐色)
写 真 35 99 位 置 カマド塗土				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 良好				
残 存 5% 黑 磁	底 部			
図 27 50 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (19.2) 底 径 (18.0) 器 高 (6.6) 器 厚 (0.7)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 SYR5/6明赤褐色 内 SYR5/6明赤褐色
写 真 34 93 位 置 土器部				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 良好				
残 存 10% 黑 磁	底 部			
図 27 51 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (18.0) 底 径 (17.0) 器 高 (4.6) 器 厚 (0.7)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 7.5YR5/3(深い黄褐色) 内 7.5YR6/4(深黄褐色)
写 真 34 92 位 置 附近、北側下厚土				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 良好				
残 存 10% 黑 磁	底 部			
図 27 52 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (18.0) 底 径 (17.0) 器 高 (3.3) 器 厚 (0.6)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 7.5YR5/3(深い黄褐色) 内 7.5YR6/4(深黄褐色)
写 真 35 98 位 置 正面				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 良好				
残 存 15% 黑 磁	底 部			
図 27 53 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (18.0) 底 径 (17.0) 器 高 (2.7) 器 厚 (1.0)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 7.5YR5/3(深い黄褐色) 内 7.5YR6/4(深黄褐色)
写 真 35 103 位 置 正面				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 やや不良				
残 存 15% 黑 磁	底 部			
図 27 54 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (16.5) 底 径 (15.0) 器 高 (2.7) 器 厚 (0.6)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 7.5YR6/6暗赤褐色 内 7.5YR6/3(深い赤褐色)
写 真 35 96 位 置 北東				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 北東に良好				
残 存 20% 黑 磁	底 部			
図 27 55 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (16.5) 底 径 (15.0) 器 高 (2.7) 器 厚 (1.0)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 7.5YR6/6暗赤褐色 内 7.5YR6/3(深い赤褐色)
写 真 35 97 位 置 北東				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 北東に良好				
残 存 20% 黑 磁	底 部			
図 28 55 通 横 23次RA061	寸 法	口 径 (16.5) 底 径 (15.0) 器 高 (2.7) 器 厚 (0.6)	調 整 外 ハラクナデ 内 ハラクナデ	色 調 外 7.5YR6/4(深い黄褐色) 内 7.5YR6/3(深い赤褐色)
写 真 33 77 位 置 北東				時 期 9°C後半-10°C前半 備 考
種 別 土器部				
25 様 例 他 成 北東に良好				
残 存 20% 黑 磁	底 部			

第1表 遺物観察表(7) RA061・062住居跡

図 28 56 棚 横 23次RA061	寸 法	口 径 5.5 底 径 5.5 高 度 0.7 器 様 环 残 存 30%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 0.6 底 部 口部外切り後無凹型	色 調 外 7.5YR7/4に近い褐色 内 7.5YR6/3に近い褐色 土 士 粗良(白色砂、石片)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 28 57 棚 横 23次RA061	寸 法	口 径 5.5 底 径 5.5 高 度 0.7 器 様 环 残 存 30%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 0.6 底 部 口部外切り後無凹型	色 調 外 10YR8/4浅朱色 内 10YR7/4に近い黄褐色 土 士 粗良(白色砂)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 28 58 棚 横 23次RA061	寸 法	口 径 5.5 底 径 5.5 高 度 0.7 器 様 环 残 存 20%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 0.6 底 部 口部外切り後無凹型	色 調 外 7.5YR8/4に近い褐色 内 7.5YR6/3に近い褐色 土 士 粗良(白色砂)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 28 59 棚 横 23次RA061	寸 法	口 径 5.5 底 径 5.5 高 度 0.7 器 様 环 残 存 20%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 0.6 底 部 口部外切り後無凹型	色 調 外 7.5YR8/4浅朱色 内 7.5YR6/3に近い褐色 土 士 粗良(白色砂)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 28 60 棚 横 23次RA061	寸 法	口 径 15.8 底 径 15.5 高 度 6.6 器 様 环 残 存 100%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 6.6 底 部 口部外切り後無凹型	色 調 外 7.5YR7/6淡色 内 10YR8/4灰褐色 土 士 粗良(石英)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 28 61 棚 横 23次RA061	寸 法	口 径 13.7 底 径 13.5 高 度 6.6 器 様 环 残 存 30%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 6.6 底 部 口部外切り後無凹型	色 調 外 7.5YR7/4に近い褐色 内 10YR7/4に近い黄褐色 土 士 粗良(白砂、スコリア、雲母)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 27 62 棚 横 23次RA061	寸 法	口 径 (16.6) 底 径 (16.6) 高 度 (4.75) 器 様 环 残 存 25%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 (4.75) 底 部 (4.75)	色 調 外 SYR7/8灰褐色 内 SYR6/6灰褐色 土 士 粗良(白色砂、スコリア)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 28 63 棚 横 23次RA061	寸 法	口 径 (15.6) 底 径 (15.6) 高 度 (4.8) 器 様 环 残 存 25%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 (4.8) 底 部 (4.8)	色 調 外 7.5YR7/6淡色 内 7.5YR7/4に近い褐色 土 士 粗良(白色砂、スコリア)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 28 64 棚 横 23次RA061	寸 法	口 径 (17.6) 底 径 (17.6) 高 度 (4.8) 器 様 环 残 存 40%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 (4.8) 底 部 (4.8)	色 調 外 7.5YR6/4に近い褐色 内 7.5YR7/4に近い褐色 土 士 粗良(白色砂、スコリア)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 28 65 棚 横 23次RA061	寸 法	口 径 (14.2) 底 径 (14.2) 高 度 (4.2) 器 様 环 残 存 20%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 (4.2) 底 部 (4.2)	色 調 外 SYR6/6灰褐色 内 SYR6/6灰褐色 土 士 粗良(白色砂、石英)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 28 66 棚 横 23次RA061	寸 法	口 径 (15.6) 底 径 (15.6) 高 度 (4.45) 器 様 环 残 存 35%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 (4.45) 底 部 (4.45)	色 調 外 SYR7/6淡色 内 7.5YR6/4浅朱色 土 士 粗良(白色砂)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 28 67 棚 横 23次RA061	寸 法	口 径 (15.4) 底 径 (15.4) 高 度 (4.8) 器 様 环 残 存 20%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 (4.8) 底 部 (4.8)	色 調 外 7.5YR7/4に近い褐色 内 7.5YR6/4灰褐色 土 士 粗良(白色砂)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 28 68 棚 横 23次RA061	寸 法	口 径 (13.9) 底 径 (13.9) 高 度 (2.0) 器 様 环 残 存 50%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 (2.0) 底 部 (2.0)	色 調 外 10YR4/4灰褐色 内 10YR4/4灰褐色 土 士 粗良(白色砂、石英)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 28 69 棚 横 23次RA062	寸 法	口 径 7.0 底 径 6.8 高 度 0.5 器 様 环 残 存 75%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 0.5 底 部 口部外切り後無凹型	色 調 外 10YR6/4に近い褐色 内 10YR7/3灰褐色 土 士 粗良(白色砂、石英)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 29 1 棚 横 23次RA062	寸 法	口 径 14.2 底 径 7.0 高 度 4.65 器 様 环 残 存 75%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 0.5 底 部 口部外切り後無凹型	色 調 外 10YR6/4に近い褐色 内 10YR7/3灰褐色 土 士 粗良(白色砂、石英)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 29 2 棚 横 23次RA062	寸 法	口 径 (13.9) 底 径 (13.9) 高 度 (2.0) 器 様 环 残 存 70%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 (2.0) 底 部 (2.0)	色 調 外 10YR7/4に近い黃褐色 内 10YR7/3灰褐色 土 士 粗良(白色砂、石英)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考
図 29 3 棚 横 23次RA062	寸 法	口 径 6.8 底 径 6.5 高 度 4.45 器 様 环 残 存 70%	調 整 内 取締ナメ 外 取締ナメ 深 底 0.5 底 部 口部外切り後無凹型	色 調 外 10YR7/4に近い黃褐色 内 10YR7/3灰褐色 土 士 粗良(白色砂、石英)	時 期 9°C後半～10°C前半	備考

第1表 遺物観察表(9) RA062・064住居跡

図 32 18 通 横 23次RA062 写 真 37 125 位 墓 カマド壇上、南下層 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (7.8) 高 (3.6) 器 厚 0.7	一 調 整 内 ハケ (ヨコ) 外 タキ 内 ハケ (ヨコ)	外 7.5YR7/4に近い褐色 色 調 断 内 7.5YR7/4に近い褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 32 19 通 横 23次RA062 写 真 37 126 位 墓 端石、RA061東西ヘルト下層 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (12.7) 高 (5.3) 器 厚 0.7	一 調 整 内 ハケ (ヨコ) 外 ハラカズリ (ヨリ) 内 ハケ (ヨコ)	外 7.5YR6/4に近い褐色 色 調 断 内 7.5YR6/4に近い褐色 内 7.5YR6/4に近い褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 32 20 通 横 23次RA062 写 真 37 127 位 墓 磨盤 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (14.9) 高 (4.7) 器 厚 0.5	一 調 整 内 ハケ (ヨコ) 外 回転ナメ 内 ハケ (ヨコ)	外 7.5YR7/6褐色 色 調 断 内 7.5YR6/6褐色 内 7.5YR6/6褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 32 21 通 横 23次RA062 写 真 37 128 位 墓 磨盤 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (9.4) 高 (1.8) 器 厚 0.85	一 調 整 内 ハケ (ヨコ) 外 ナメ 内 ナメ	外 7.5YR7/4に近い褐色 色 調 断 内 7.5YR7/4に近い褐色 内 7.5YR7/4に近い褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 32 22 通 横 23次RA062 写 真 37 129 位 墓 磨盤 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (19.6) 高 (11.5) 器 厚 0.7	一 調 整 内 ハケ (ヨコ) 外 回転ナメ 内 ハケ (ヨコ)	外 7.5YR6/4に近い褐色 色 調 断 内 7.5YR6/4に近い褐色 内 7.5YR6/4に近い褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 32 23 通 横 23次RA062 写 真 37 130 位 墓 端石、カマド壇土、南下層 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (22.4) 高 (14.7) 器 厚 0.8	一 調 整 内 ハラカズリ、ハラカズリ 外 回転ナメ 内 ハラカズリ	外 7.5YR6/4に近い褐色 色 調 断 内 10YR5/3に近い褐色 内 10YR5/3に近い褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 32 24 通 横 23次RA062 写 真 37 131 位 墓 磨盤、カマド壇土、南下層 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (13.5) 高 (7.7) 器 厚 14.25 器 厚 0.6	一 調 整 内 ハラカズリ (ヨリ) 外 回転ナメ 内 ハラカズリ (ヨリ)	外 7.5YR6/6褐色 色 調 断 内 7.5YR6/6褐色 内 7.5YR6/6褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 32 25 通 横 23次RA062 写 真 37 132 位 墓 磨盤、下へ落ち込み (西浦) 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (17.2) 高 (21.5) 器 厚 0.8	一 調 整 内 ハケ (ヨコ) 外 ハラカズリ (ヨリ) 内 ハケ (ヨコ)	外 7.5YR6/6褐色 色 調 断 内 7.5YR7/4に近い褐色 内 7.5YR7/4に近い褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 32 26 通 横 23次RA062 写 真 37 133 位 墓 ワード熱帶板、RA061北東隅土下層 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (19.7) 高 (2.0) 器 厚 0.85	一 調 整 内 ハラカズリ (ヨリ) 外 回転ナメ 内 ハラカズリ (ヨリ)	外 7.5YR6/4を含む褐色 色 調 断 内 7.5YR6/4を含む褐色 内 7.5YR6/4を含む褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 32 27 通 横 23次RA062 写 真 37 134 位 墓 北西土上、ガマド壇上、瓦ハレト下層 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (28.4) 高 (12.5) 器 厚 0.85	一 調 整 内 ハラカズリ (ヨリ) 外 回転ナメ 内 ハラカズリ (ヨリ)	外 7.5YR7/4に近い褐色 色 調 断 内 7.5YR7/4に近い褐色 内 7.5YR7/4に近い褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 35 1 通 横 23次RA064 写 真 38 135 位 墓 南西土上 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (14.8) 高 (6.1) 器 厚 0.5	一 調 整 内 ハラカズリ 外 回転ナメ 内 ハラカズリ	外 7.5YR7/4に近い褐色 色 調 断 内 10YR5/1褐色 内 10YR2/1褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 35 2 通 横 23次RA064 写 真 38 136 位 墓 南西土上 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (14.6) 高 (5.2) 器 厚 0.4	一 調 整 内 ハラカズリ 外 回転ナメ 内 ハラカズリ	外 7.5YR6/6褐色 色 調 断 内 7.5YR6/6褐色 内 7.5YR6/6褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 35 3 通 横 23次RA064 写 真 38 137 位 墓 陶器 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (15.0) 高 (6.4) 器 厚 0.6	一 調 整 内 ハラカズリ 外 回転ナメ 内 ハラカズリ	外 7.5YR7/6褐色 色 調 断 内 7.5YR6/5褐色 内 7.5YR6/5褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 35 4 通 横 23次RA064 写 真 38 138 位 墓 陶器 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (16.0) 高 (6.6) 器 厚 0.6	一 調 整 内 ハラカズリ 外 回転ナメ 内 ハラカズリ	外 7.5YR7/6褐色 色 調 断 内 7.5YR7/6褐色 内 7.5YR7/6褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考
図 35 5 通 横 23次RA064 写 真 38 139 位 墓 陶器 種 別 土器部 器 形 釜 残 留 率 10%	寸 法 底 面	口 径 (13.5) 高 (6.0) 器 厚 0.4	一 調 整 内 ハラカズリ 外 回転ナメ 内 ハラカズリ	外 10YR5/1に近い褐色 色 調 断 内 10YR4/1褐色 内 10YR2/1褐色 時 期 9°C後半～10°C前半 備 考

第1表 遺物観察表 (11) RA064・059・070住居跡

国 35 1 滝 横 23次RA064	口 径 (17.5)	調整 外 内	色 調 外 内
写 真 39 149 位 置 北東カマド品	寸 法 周 長 (11.4)	器 厚 0.65	時 期 9°C後半~10°C前半
種 別 土器鉢	底 高 (2.1)		備 考 RA063・198と同一個体
形 類 完成	底 土		
残 在 20%	底 部		
国 35 21 滝 横 23次RA064	口 径 一	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 39 154 位 置 東カマド窓土、北西壁土	寸 法 底 高 (3.95)	器 厚 0.6	時 期 9°C後半~10°C前半
種 別 土器鉢	底 位		備 考 内部に陶片
形 類 完成	底 成 (良好)		
残 在 25%	底 部		
国 35 22 滝 横 23次RA059	口 径 一	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 39 154 位 置 砂土	寸 法 底 高 (3.95)	器 厚 0.55	時 期 9°C後半~10°C前半
種 別 土器鉢	底 位		備 考
形 類 完成	底 成 (良好)		
残 在 20%	底 部		
国 35 23 滝 横 23次RA059	口 径 一	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 39 154 位 置 砂土	寸 法 底 高 (3.95)	器 厚 0.55	時 期 7°C後半~8°C前半
種 別 土器鉢	底 位		備 考
形 類 完成	底 成 (良好)		
残 在 20%	底 部		
国 36 1 滝 横 23次RA070	口 径 13.8	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 40 155 位 置 井戸	寸 法 底 高 (4.4)	器 厚 0.5	時 期 10YR6/4(褐色)
種 別 土器鉢	底 位		備 考
形 類 完成	底 成 (良好)		
残 在 80%	底 部		
国 36 2 滝 横 23次RA070	口 径 (14.0)	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 40 156 位 置 井戸、北側壁土、床面直上、柱頭部	寸 法 底 高 (4.5)	器 厚 0.5	時 期 10YR6/4(褐色)
種 別 土器鉢	底 位		備 考
形 類 完成	底 成 (良好)		
残 在 50%	底 部		
国 36 3 滝 横 23次RA070	口 径 (15.0)	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 40 158 位 置 砂土上、床面直上、柱頭部	寸 法 底 高 (4.3)	器 厚 0.4	時 期 10YR6/4(褐色)
種 別 土器鉢	底 位		備 考
形 類 完成	底 成 (良好)		
残 在 50%	底 部		
国 36 4 滝 横 23次RA070	口 径 (15.0)	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 40 159 位 置 砂土、床面直上、柱頭部	寸 法 底 高 (4.3)	器 厚 0.4	時 期 10YR6/4(褐色)
種 別 土器鉢	底 位		備 考
形 類 完成	底 成 (良好)		
残 在 50%	底 部		
国 36 5 滝 横 23次RA070	口 径 14.0	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 40 160 位 置 カマド下縦、カマド上縦、柱、柱頭(東側)	寸 法 底 高 (4.85)	器 厚 0.6	時 期 10YR6/4(褐色)
種 別 土器鉢	底 位		備 考
形 類 完成	底 成 (良好)		
残 在 75%	底 部		
国 36 6 滝 横 23次RA070	口 径 (15.0)	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 40 162 位 置 井戸	寸 法 底 高 (5.0)	器 厚 0.7	時 期 10YR6/4(褐色)
種 別 土器鉢	底 位		備 考
形 類 完成	底 成 (良好)		
残 在 50%	底 部		
国 36 7 滝 横 23次RA070	口 径 (15.0)	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 40 163 位 置 カマド下縦一部、床面	寸 法 底 高 (4.9)	器 厚 0.55	時 期 10YR6/4(褐色)
種 別 土器鉢	底 位		備 考
形 類 完成	底 成 (良好)		
残 在 40%	底 部		
国 36 8 滝 横 23次RA070	口 径 (15.4)	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 40 165 位 置 カマド下縦一部、床面	寸 法 底 高 (4.9)	器 厚 0.55	時 期 10YR6/4(褐色)
種 別 土器鉢	底 位		備 考
形 類 完成	底 成 (やや不良)		
残 在 20%	底 部		
国 36 9 滝 横 23次RA070	口 径 (15.8)	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 40 166 位 置 カマド下縦一部、床面	寸 法 底 高 (5.0)	器 厚 0.5	時 期 10YR6/4(褐色)
種 別 土器鉢	底 位		備 考
形 類 完成	底 成 (不良)		
残 在 20%	底 部		
国 36 10 滝 横 23次RA070	口 径 (15.7)	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 40 167 位 置 カマド内一括	寸 法 底 高 (4.75)	器 厚 0.45	時 期 9°C後半~10°C前半
種 別 土器鉢	底 位		備 考
形 類 完成	底 成 (良好)		
残 在 15%	底 部		
国 36 11 滝 横 23次RA070	口 径 (15.7)	調 整 外 内	色 調 外 内
写 真 40 168 位 置 カマド内一括	寸 法 底 高 (4.2)	器 厚 0.4	時 期 9°C後半~10°C前半
種 別 土器鉢	底 位		備 考
形 類 完成	底 成 (やや不良)		
残 在 10%	底 部		

第1表 遺物観察表 (13) RA070・063住居跡

第 39 27 潟 横 23次RA070	寸 法	口 径 (23.0) 底 径 (9.0) 器 高 (6.5) 器 厚 (0.9)	調 整 外 ハラケシリ (小室) 内 ナデ 精 良 (白砂鉄)	外 7.5YR6/4汚黄褐色 内 7.5YR6/3汚黄褐色 色 調 断 7.5YR6/4汚黄褐色 内 5YR7.6/6汚黄褐色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考
第 41 177 位 置 地上 種 別 土器部 器 形 陶器 器 色 黄 残 在 15%	寸 法	口 径 (16.5) 底 径 (10.5) 器 高 (0.9) 器 厚 (0.7)	調 整 外 ハラケシリ (ナシ) 内 ハケ (不定) 精 良 (白色砂)	外 10YR6/4に近い黄褐色 内 7.5YR6/4汚黄褐色 色 調 断 7.5YR6/4汚黄褐色 内 5YR7.6/6汚黄褐色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考
第 39 28 潟 横 23次RA070	寸 法	口 径 (21.0) 底 径 (9.0) 器 高 (30.0) 器 厚 (0.7)	調 整 外 ハラケシリ (ナシ) 内 ハラケシリ (ナシ) 精 良 (石目)	外 10YR6/4に近い黄褐色 内 10YR6/3に近い黄褐色 色 調 断 10YR6/4に近い黄褐色 内 10YR5/2汚黄褐色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考
第 39 29 潟 横 23次RA070	寸 法	口 径 (14.6) 底 径 (5.2) 器 高 (4.6) 器 厚 (0.4)	調 整 外 回転ナデ 内 回転ナデ 精 良 (白色砂、石目)	外 7.5YR6/4汚黄褐色 内 7.5YR6/4汚黄褐色 色 調 断 7.5YR6/4汚黄褐色 内 7.5YR6/4汚黄褐色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考
第 42 1 位 置 横 24次RA063	寸 法	口 径 (15.4) 底 径 (6.6) 器 高 (4.7) 器 厚 (0.7)	調 整 外 回転ナデ 内 回転ナデ 精 良 (白色砂)	外 7.5YR6/4に近い黄色 内 10YR7/4に近い黄褐色 色 調 断 10YR7/4に近い黄褐色 内 10YR7/4に近い黄褐色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考
第 42 2 位 置 横 24次RA063	寸 法	口 径 (17.2) 底 径 (5.6) 器 高 (4.0) 器 厚 (0.55)	調 整 外 回転ナデ 内 回転ナデ 精 良 (白色砂)	外 10YR6/4に近い黄色 内 10YR6/3に近い黄色 色 調 断 10YR6/4に近い黄色 内 10YR6/3に近い黄色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考
第 42 3 位 置 横 24次RA063	寸 法	口 径 (17.2) 底 径 (5.6) 器 高 (4.2) 器 厚 (0.8)	調 整 外 回転ナデ 内 回転ナデ 精 良 (白色砂)	外 7.5YR6/4に近い黄色 内 7.5YR6/3に近い黄色 色 調 断 7.5YR6/4に近い黄色 内 7.5YR6/3に近い黄色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考
第 42 4 位 置 横 24次RA063	寸 法	口 径 (17.2) 底 径 (5.6) 器 高 (4.0) 器 厚 (0.55)	調 整 外 回転ナデ 内 回転ナデ 精 良 (白色砂)	外 10YR6/4に近い黄色 内 10YR6/3に近い黄色 色 調 断 10YR6/4に近い黄色 内 10YR6/3に近い黄色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考
第 42 5 位 置 横 24次RA063	寸 法	口 径 (17.2) 底 径 (5.6) 器 高 (4.0) 器 厚 (0.55)	調 整 外 回転ナデ 内 回転ナデ 精 良 (白色砂)	外 10YR6/4に近い黄色 内 10YR6/3に近い黄色 色 調 断 10YR6/4に近い黄色 内 10YR6/3に近い黄色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考
第 42 6 位 置 横 24次RA063	寸 法	口 径 (17.2) 底 径 (8.2) 器 高 (2.5) 器 厚 (0.5)	調 整 外 回転ナデ 内 回転ナデ 精 良 (白色砂、石目)	外 7.5YR6/4に近い黄色 内 7.5YR6/3に近い黄色 色 調 断 7.5YR6/4に近い黄色 内 7.5YR6/3に近い黄色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考
第 42 7 位 置 横 24次RA063	寸 法	口 径 (15.6) 底 径 (7.8) 器 高 (6.3) 器 厚 (0.5)	調 整 外 回転ナデ 内 回転ナデ 精 良 (白色砂、石目)	外 SYR6/4に近い褐色 内 SYR6/4に近い褐色 色 調 断 SYR6/4に近い褐色 内 SYR6/4に近い褐色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考
第 42 8 位 置 横 24次RA063	寸 法	口 径 (9.9) 底 径 (3.7) 器 高 (3.7) 器 厚 (0.5)	調 整 外 ハケ (ナシ) 内 ハケ (ナシ) 精 良 (白色砂)	外 7.5YR7/4に近い褐色 内 7.5YR7/4に近い褐色 色 調 断 7.5YR7/4に近い褐色 内 7.5YR7/4に近い褐色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考
第 42 9 位 置 横 24次RA063	寸 法	口 径 (15.5) 底 径 (8.2) 器 高 (4.3) 器 厚 (0.55)	調 整 外 ハケ (タテ) 内 ハケ (ヨコ) 精 良 (白色砂、スコリ)	外 7.5YR7/4に近い褐色 内 7.5YR7/4に近い褐色 色 調 断 7.5YR7/4に近い褐色 内 7.5YR7/4に近い褐色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考
第 42 10 位 置 横 24次RA063	寸 法	口 径 (17.4) 底 径 (9.9) 器 高 (18.4) 器 厚 (0.7)	調 整 外 回転ナデ、ハラケシリ 内 回転ナデ 精 良 (白色砂)	外 SYR6/6褐色 内 SYR6/6褐色 色 調 断 SYR6/6褐色 内 SYR6/6褐色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考 RA064・149と同一個体
第 43 194 位 置 地上 種 別 土器部 器 形 陶器 器 色 黑 残 在 20%	寸 法	口 径 (18.4) 底 径 (8.5) 器 高 (8.6) 器 厚 (0.65)	調 整 外 ハケ (タテ) 内 ハケ (ヨコ) 精 良 (白色砂、石目)	外 7.5YR6/4に近い褐色 内 7.5YR7/4に近い褐色 色 調 断 7.5YR7/4に近い褐色 内 7.5YR7/4に近い褐色 時 期 9°C後半~10°C前半 備 考

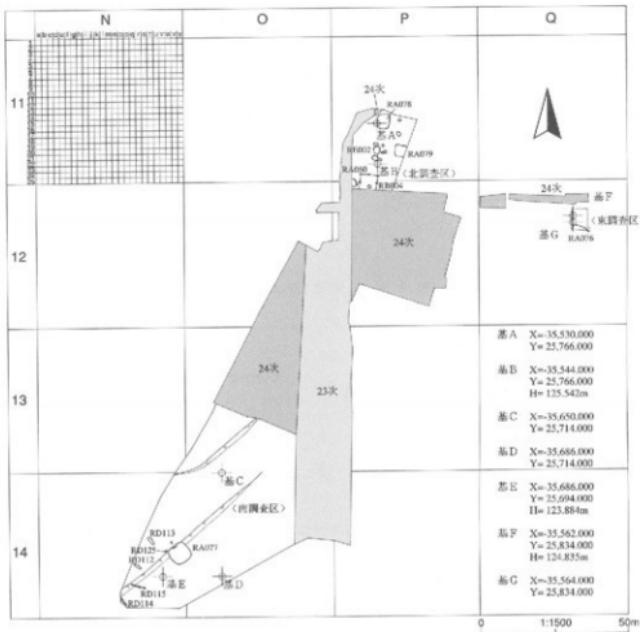
図 21	5	出 土 通 横	第24次RA067		寸法 (cm・g)	全 長	13.7	多孔質
写 真	46	224	出 土 位 置	南東側		全 幅	10.5	備 考
種 別	石器	出 土 層 位	T9.5			最 大 厚	6.5	
器 物	刀劍	残 存 率 (%)	—			重 量		
図 21	6	出 土 通 横	第24次RA067		寸法 (cm・g)	全 長	2.1	透明白
写 真	46	227	出 土 位 置	中央		全 幅	0.9	備 考
種 別	石製品	出 土 層 位	床面直上			最 大 厚	—	
器 物	玉	残 存 率 (%)	100			重 量	0.2	
図 28	69	出 土 通 横	第23次RA061		寸法 (cm・g)	全 長	15.0	刀柄添合部
写 真	47	228	出 土 位 置	南北西		全 幅	5.6	備 考
種 別	石器	出 土 層 位	屋土下端			最 大 厚	2.9	
器 物	鍬	残 存 率 (%)	100			重 量		
図 47	1	出 土 通 横	第23次RA061		寸法 (cm・g)	全 長	14.55	刀柄添合部
写 真	47	230	出 土 位 置	カマド北側		全 幅	15.35	備 考
種 別	石製品	出 土 層 位	瓦上端土			最 大 厚	1.35	
器 物	鍬	残 存 率 (%)	100			重 量	209.4	
図 47	2	出 土 通 横	第23次RA062		寸法 (cm・g)	全 長	9.8	刀柄添合部
写 真	47	231	出 土 位 置	北端		全 幅	12.6	備 考
種 別	石製品	出 土 层 位	貼床			最 大 厚	0.6	
器 物	鍬	残 存 率 (%)	95			重 量	48.3	
図 47	3	出 土 通 横	第24次RA069		寸法 (cm・g)	全 長	16.3	鋸歯状
写 真	47	232	出 土 位 置	—		全 幅	2.7	備 考
種 別	石製品	出 土 层 位	地土層			最 大 厚	0.5	
器 物	小刀	残 存 率 (%)	80			重 量	36.0	
図 47	4	出 土 通 横	第23次RA062		寸法 (cm・g)	全 長	11.2	
写 真	47	233	出 土 位 置	北端		全 幅	3.7	備 考
種 別	石製品	出 土 层 位	壁上端			最 大 厚	0.7	
器 物	鍬	残 存 率 (%)	35			重 量	89.1	
図 47	5	出 土 通 横	第23次RA061		寸法 (cm・g)	全 長	31.35	かえしは折り曲げ成形か?
写 真	47	234	出 土 位 置	—		全 幅	2.8	備 考
種 別	石製品	出 土 层 位	選土2層			最 大 厚	1.5	
器 物	鍬	残 存 率 (%)	100			重 量		
図 49	4	出 土 通 横	第23次RD108		寸法 (cm・g)	全 長	15.5	
写 真	47	229	出 土 位 置	—		全 幅	12.5	備 考
種 別	石器	出 土 层 位	底面附近			最 大 厚	11.5	
器 物	鍬	残 存 率 (%)	—			重 量		
図 16	2	出 土 通 横	第23次RA071		寸法 (cm・g)	全 長	5.4	側面ト手ヘラクズリ
写 真	45	221	出 土 位 置	—		全 幅	5.5	備 考
種 別	石器	出 土 层 位	選土2層			最 大 厚	4.1	
器 物	鍬	残 存 率 (%)	100			重 量		

挖掘遺物一覧の凡例

- 「寸法」数値の単位はcm
- 「寸法」の()付き数値は推定値、()付き数値は残存値
- 「器厚」の数値は最大値
- 「鉢」の()内は含有鉱物
- 「鉢土」の()内は含有鉱物
- 「黒斑」は1次焼成のものに限定し、その場所を示した

V 第29次調査

第29次調査区は3地点に別れ、それぞれ北・東・南調査区とした。観察表の出土地点に記載した調査区名は、第54図に示した北・東・南調査区表記を用いた。第29次調査では、竪穴住居跡5棟（うち1棟は第23次調査区に跨る）・掘立柱建物跡1棟・住居状遺構1棟・陥し穴状土坑4基・土坑10基・柱穴状土坑157個を調査した。土器の掲載遺物選定にあたっては、センター基準に従った。RZ等で胴部のみの出土である場合は、胴部片を掲載した。鉄製品・石器は全点掲載した。各遺構の事実記載の【出土遺物】には、総点数と掲載数を記載した。



第54図 第29次調査遺構配置図

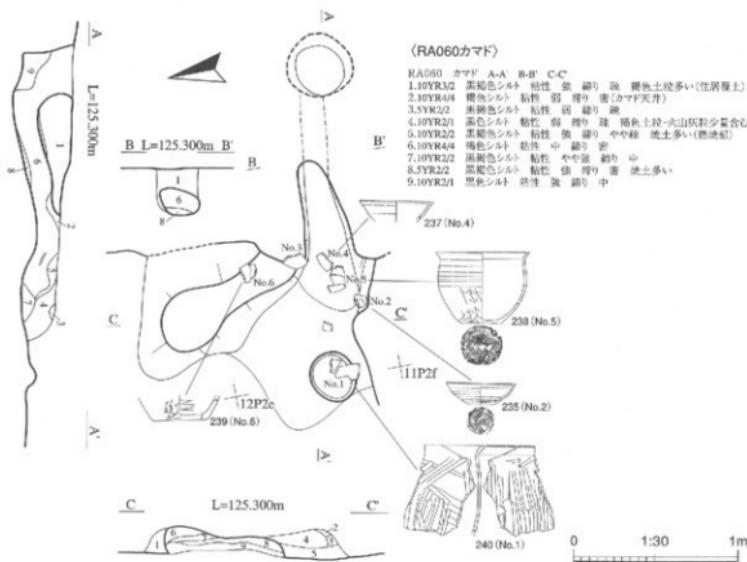
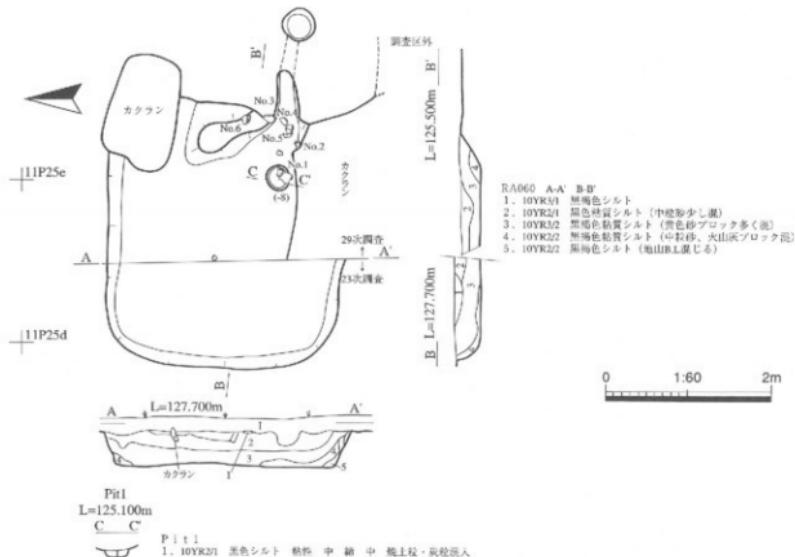
1 竪穴住居跡

RA060

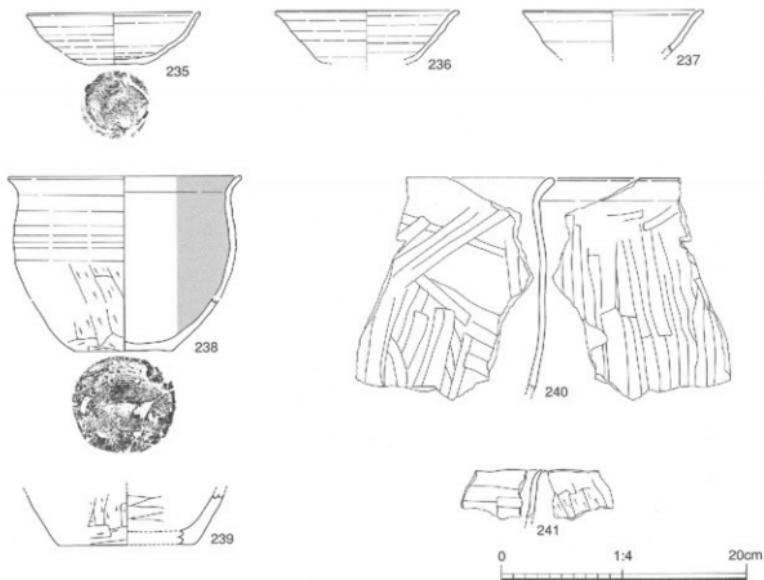
遺構（第55図・写真図版49）

【位置】 西半が第23次調査分、東半が第29次調査分で、北調査区 11P23d グリッド付近に位置する。
【平面形・規模】 第23次調査分と合成し、方形を呈することが判明した。残存長は北壁 3.28 m、東壁 3.00 m、南壁 3.00 m、西壁は擾乱が認められず 2.78 m である。深さは 40 cm を測る。
【堆積土】 4 層に分層され、4 層に火山灰粒が混入する。堆積土は第23次調査区（住居西半）と共に

1 壁穴住居跡



第55図 RA060住居跡



第56図 RA060住居跡出土遺物

するため、土層注記は第23次調査区で記録されたものを記載した。1層は23次調査区でのみ確認された。2・3層は黒色堆積土である。堆積は自然のレンズ状堆積の様相を示す。

【壁・床面】 壁はほぼ直立する。カマド周辺の床面は硬く締まっている。

【カマド】 1基東壁で検出している。カマドの主軸方向はN-98°—Eである。南袖部部は搅乱されているが、北袖部部は残存する。北袖部長さは83cm、黒褐色土と黒色土が互層をなしており、土を数回に分けて盛り上げて作ったと考えられる。カマド内部に支脚は認められない。

煙道部部は全長1.32m・径0.25mで、直径0.35m・深さ35cmの煙出し部部に向けて緩やかに下降する矧り貫き式である。天井部は著しく被熱しており赤変している。

【柱穴】 明確な柱穴は確認できなかった。カマド西にピットが認められるのみである。

【土坑】 確認されなかった。

遺物（第56図・写真図版62）

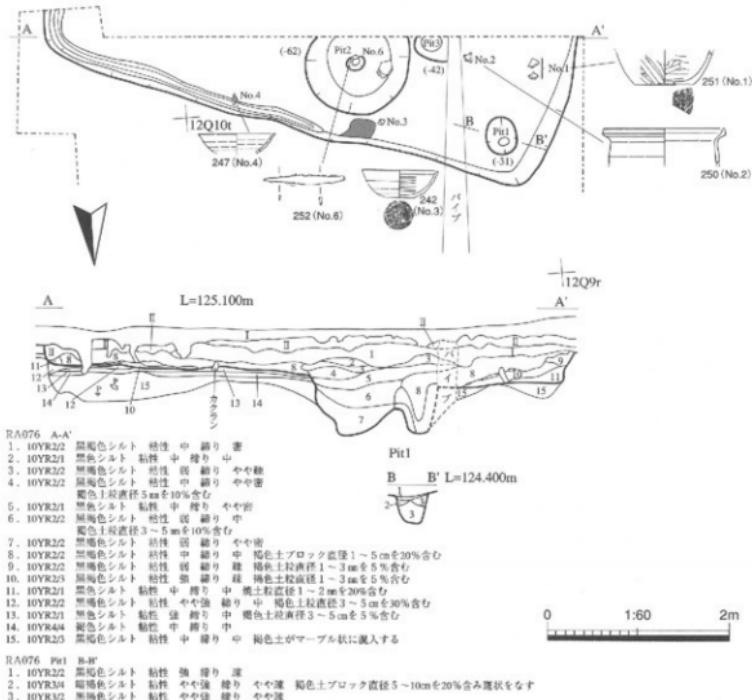
【出土遺物】 土師器（非黒色処理）壺口縁部18点出土しており、3点を掲載する。土師器（黒色処理）口縁部破片1点・土師器台付壺破片1点出土しているが、微小であるため不掲載とした。土師器壺口縁部は8点中2点、底部は1点中1点、土師器鉢は1点中1点掲載した。

遺物は全て第29次調査区のカマド内および周辺から出土している。カマド内の遺物出土状況は、煙道部入口と北袖部内側、ピット上面からの出土である。

土師器壺（235）・鉢（238）とも底面に回転糸切痕が認められる。（238）はロクロ成形が施されている。土師器（黒色処理）壺片が1点出土しているものの、土師器（非黒色処理）壺が18点と卓越する。

小結 遺構の時期は、出土遺物の特徴から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

1 壁穴住居跡



第57図 RA076住居跡

R A 0 7 6

[位置] 第29次調査の東調査区の12Q10tグリッド付近に位置し、第15次調査区のRA049から5m、RA047から3m（推定）の間隔を置く。検出面はⅢ層上面である。東調査区の南端に一部検出された。調査区内でも調査時使用中のパイプが通っていたため、掘削していない部分がある。

[平面形・規模] 平面形は調査区内だけで確認した範囲から方形を呈すると推測される。規模は北壁5.7mで、他は調査区外に延びるため不明。主軸方向はN-20°-Eの可能性がある。

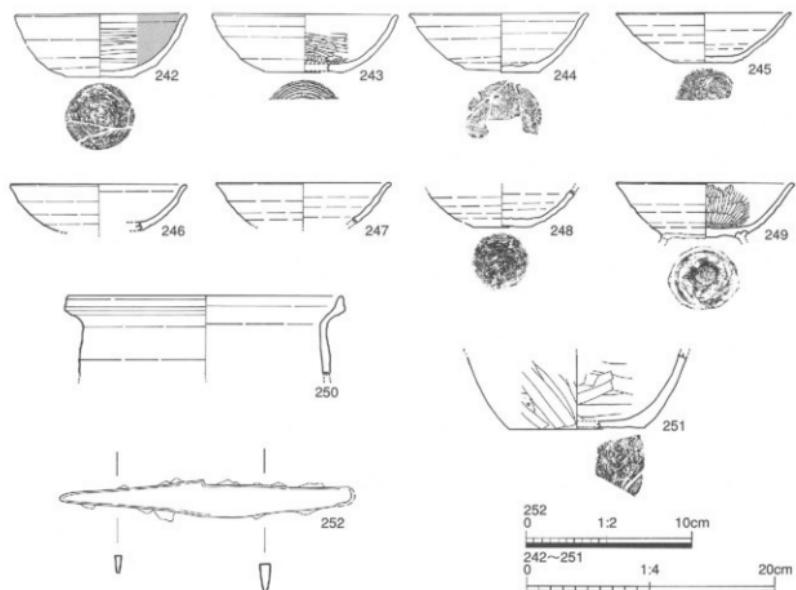
[堆積土] 黒褐色土主体で、褐色土粒が多く含まれる。覆土下層12層上面に焼土および炭が層をなしている。灰白色火山灰は8層中に粒子で含まれる。レンズ状の自然堆積を呈する。

[壁・床面] 北壁は急傾斜で立ち上がる。壁高は東壁12cm、北壁22cm、西壁36cm残存する。掘り方埋土上面を床面としており、ほぼ平坦で床面東ほど硬化している。

[カマド] 第29次調査区では検出していない。調査区範囲外に位置すると思われる。

[柱穴] 北西隅のピット1は柱の痕跡ではなく、径35cm深さ26cmである。調査区境のピット3は柱痕が顯著で、掘り方を含めた規模は直径36cm深さ42cmである。

[土坑] 中央に1基認められる。直径125cm深さ62cmで、貯蔵穴と考えられる。層相は住居堆積土



第58図 RA076住居跡出土遺物

に類似する。

遺物（第58図・写真図版62・63）

【遺物】土師器（非黒色処理）口縁部総数5点中4点、土師器（黒色処理）口縁部3点中2点、台付壺口縁部1点中1点、土師器壺口縁部1点中1点、底部2点中1点掲載した。土器以外には刀子1点が出土している。

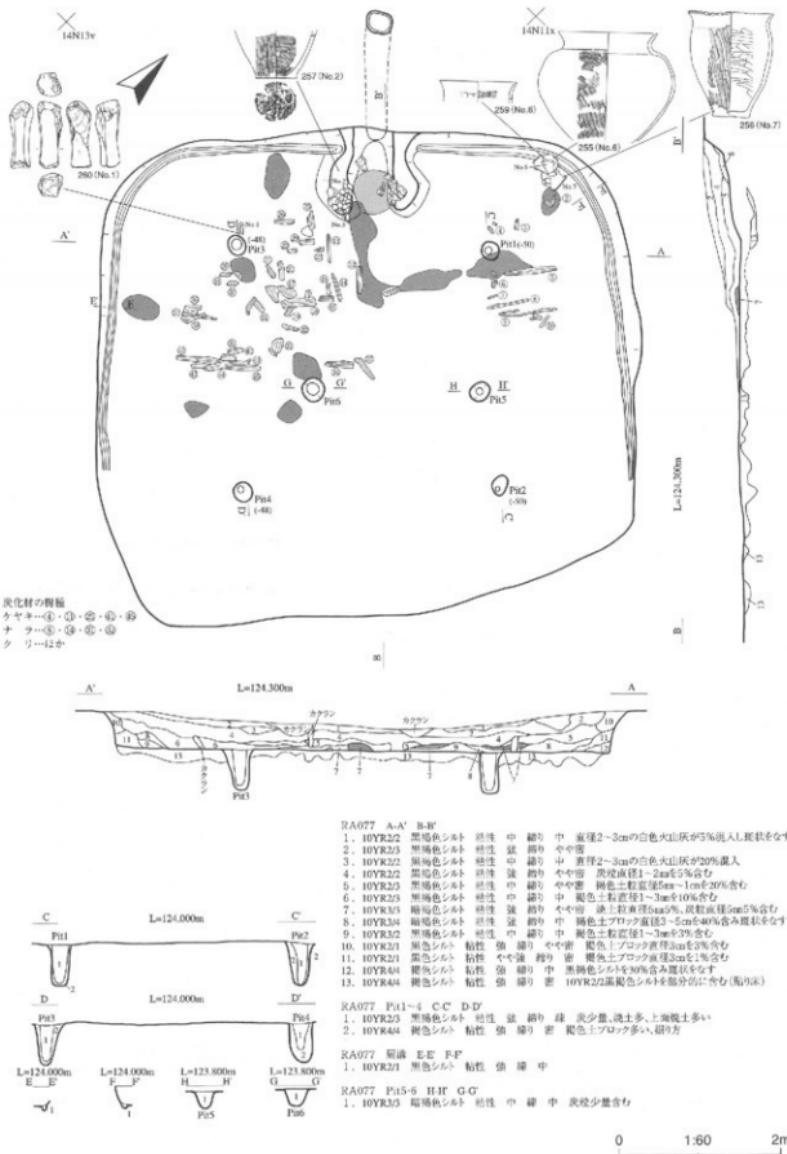
242・244・245は貼床、246・248・252はピット2、他は床面出土である。覆土中の出土はほとんど認められない。242は底面ヘラケズリ、243～245・248・249は回転糸切りである。249の台部は剥落しているが、回転糸切り後に台部をナデによって貼りつけている痕跡が認められる。土師器（内面黒色処理）の壺・台付壺は放射状のヘラミガキが顕著である。250はクロロ成形による土師器壺である。251は底面砂底である。252はピット2上面から出土した。現存長11.8cm・（刃部長6.0cm・幅1.2cm・厚さ0.4cm）・（基部長5.8cm・幅0.7cm・厚さ0.3cm）である。

土師器（非黒色処理）壺と（黒色処理）壺との組成比は5:3で、（非黒色処理）がやや多いが、RA060と比較すると、（黒色処理）壺の割合が多い。

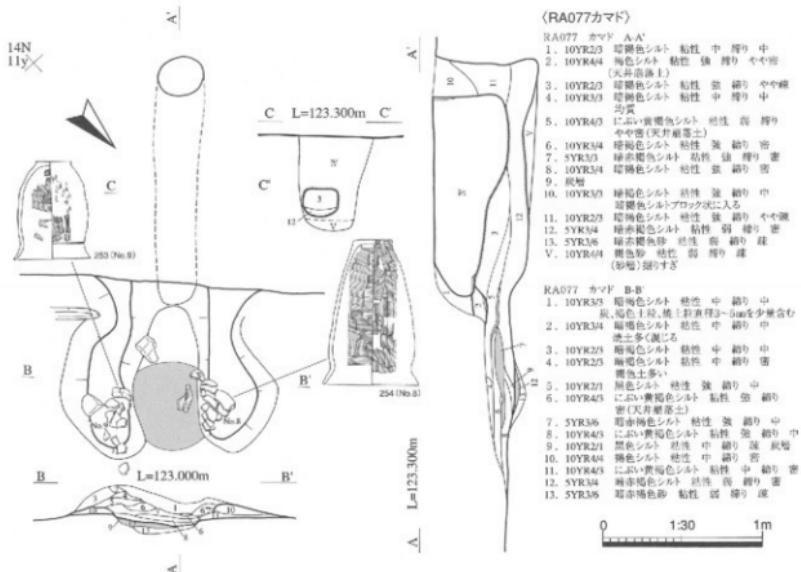
小結 RA076住居跡が位置する東調査区は、第15次調査区に隣接する。第15次調査区で検出されたRA045・047・048・049は奈良時代の竪穴住居跡で、全て北西壁にカマドが作られている。一方で平安時代のカマドは東壁に造られることが多く、RA076に関してもカマドは東壁で検出される可能性が高い。

遺構の時期は、出土遺物の特徴から9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

1 堪穴住跡



第59図 RA077住跡（1）



RA077

遺構（第59・60図・写真図版51・52）

【位置】 第29次調査南調査区の14N11xグリッド付近に位置する。第23次調査区RA066から南西に50mの距離を置く。

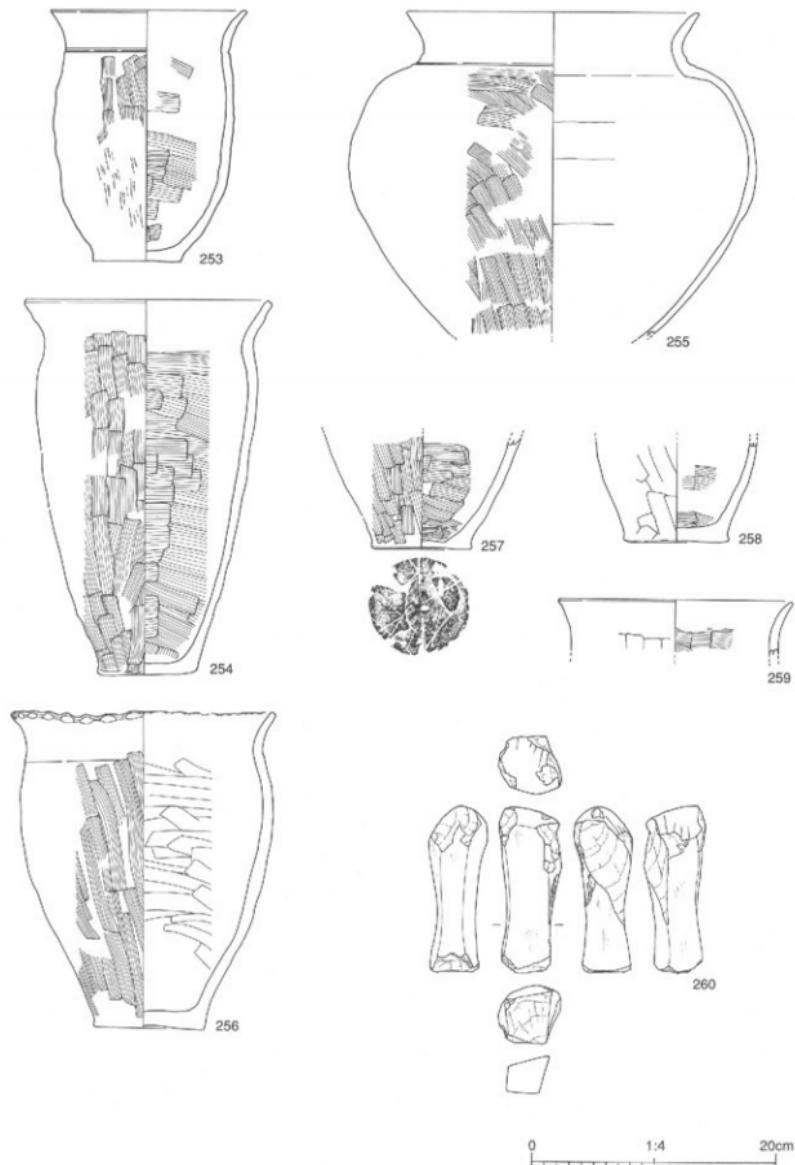
【平面形・規模】 住居の南東側は水田耕作により削平され、わずかに貼り床を残すのみであるが、貼り床の残存状況から、平面形は方形を呈すると考えられる。規模は6.0m×6.4m。主軸方向はN-45°-Wである。壁の残存長は、北西壁6.23m、北東壁（推定5.28m）、南東壁6.23m、南西壁5.92mである。

【堆積土】 床面直上に炭化材と焼土が多量に検出された。検出範囲はカマド側に偏るが、南東側は搅乱によって削平された結果である。炭化材は南西-北東と北西-南東の2方向に向いて出土しており、上屋構造を知る手掛かりとなりうる。出土炭化材は全て肉眼による樹種同定を行っており、ケヤキが④・⑪・⑫・⑬・⑭、ナラが⑧・⑯・⑰・⑱、他が全てクリとの結果を得ている。炭化材は焼土上面および下面からも出土しており、上屋上面に土が葺いてあった可能性もある。炭化材・焼土堆積後、堆積土は黒色土を主にしておりレンズ状に堆積している。堆積土1・3層に灰白色火山灰の混入が認められる。

【壁・床面】 壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは50cm程度である。床面はカマド周辺ほど硬化が認められるが、南東側は搅乱を受けているため、全体の様相を知りえない。

床面壁際には周溝が廻る。周溝は幅10~14cm深さ8cm程度で、カマド袖部脇から設定されている。

1 壓穴住居跡



第61図 RA077住居跡出土遺物

南東側は搅乱により貼り床の一部まで削平されており、周溝も削平されている。

【カマド】 北西壁に1基確認した。北西壁のはば中央に位置する。カマドの主軸方向はN-44°—W方向である。煙道部は長さ1.58m直径43cmで、直径29cm深さ64cmの煙出し部に向けて下降する割り貫き式である。煙道部および煙出し部は著しく被熱している。袖部は褐色土を基本に構築されており、南袖部に253、北袖部に254が逆位で据えてあった。南袖部には自然礫も出土しており、カマド構築材料として用いられた可能性もある。南袖部の長さは108cm、北袖部の長さは96cmである。支脚は出土していない。北袖部土器No.8の脇の燃焼部から出土した炭化材の樹種はクリである。平坦な板状の形態を呈し、床面から出土したクリ材より纖維が解れており、カマド使用に伴う燃料として使用された可能性がある。

【柱穴】 4本柱で構成される。ピット1～4は柱痕跡を明確に残す柱穴で、平均直径27.5cm深さ49.25cm木柱痕跡直径17cmである。ピット5・6は柱痕跡がなく、深さも浅いため柱穴である可能性は低い。ピット1～4の配置を観察すると、住居の中央を中心とした4本柱構成となっている。

【土坑・貯蔵穴】 土坑・貯蔵穴は検出されなかった。

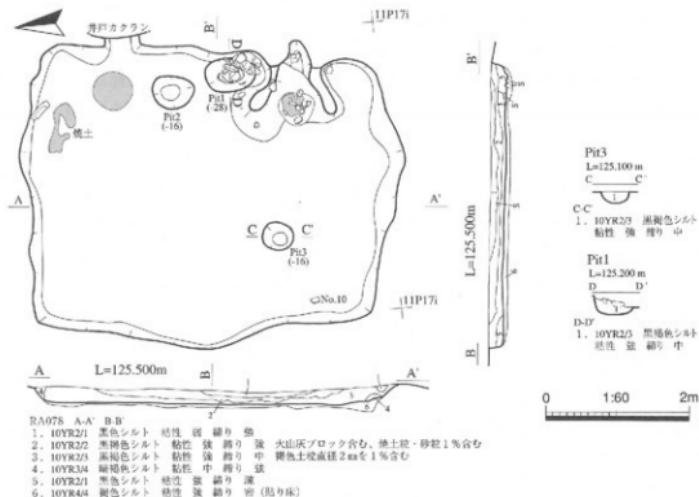
遺物（第61図・写真図版63・64）

【出土遺物】 土師器壺（黒色処理）の極小破片1点（貼り床）、土師器甕口縁部6点、底部7点、砥石1点が出土している。うち土師器甕口縁部5点、底部2点、砥石1点を掲載した。253・254はカマド袖部に再利用されたものである。255・256・259は住居北隅に一括して全て横位の状態で出土した。256の上に255が折り重なるように検出した。256は土圧で割れるもののほぼ完形であるが、255は検出時すでに上片側が失われており、下片側内面を上にした状態で確認した。上片側は耕作により失われた可能性がある。

RA077出土土器で特筆されるのは256である。頸部に括れがあり、口縁部にかけて緩やかに広がる器形を呈する。胴部はやや膨らむが、口縁部が最大径となる。内面はヘラ削り、外面はハケメ調整が施される。胎土・調整・焼成は在地の様相を呈しているが、口縁端部に指頭押圧による加飾が施されている。内面端部は指頭押圧によって波状に膨らむ。口縁端部文様は、縄文時代晩期中葉～後葉に当該地域に多く出土する粗製深鉢に顕著な文様に酷似する。類例として宮城県古川市名生館官衛遺跡SI1255 b住居跡に1点認められるものの、全体像を把握できる資料は他になく、非常に希少な例といえる。ただし、名生館官衛遺跡資料は底部から頸部にかけて直立する器形を呈しており、器形の上では256とは異なる。256は、器形と口縁部装飾の点では縄文時代晩期後半の粗製土器に近似し、調整は古代の土師器と共通する。

砥石260はカマド南のピット3脇床面直上で出土した。砥石は凝灰岩製で仕上げ砥石と判断される。5面に使用面が認められ、上面以外の使用面は渦曲しており、非常に使い込まれている。

小結 当住居跡は焼失住居で、床面に多数の炭化材と焼土を検出した。床面に散在する炭化材は、壁際にはほとんど認められず、4本柱穴の内側から多く出土している。床面直上から出土した炭化材には焼土が多量に伴っており、上屋に土が被せてあった可能性も考えられる。壁際には隅の三角堆積の傾斜に沿って焼土が堆積しており、住居廃棄後一定の時間を置いてから上屋構築物が焼失したと考えられる。また、当住居跡からは貼り床出土を除き、壺が1点も出土していない。このことからも住居廃絶後、一定の時間があったと考えられる。住居北隅には在地の球胴甕と一括して口縁端部装飾のある特殊な甕が出土しており注目される。また、甕が多く出土しているにも関わらず、貼り床出土の土師器（黒色処理）壺口縁部小破片以外、壺の出土が認められないことも特筆される。住居形態および出土遺物から奈良時代8世紀と考えられる。



第62図 RA078住居跡（1）

RA078

遺構（第62・63図・写真図版53・54）

[位置] 第29次調査北調査区11P14hグリッド付近に位置する。RA079から6.6m、RE002から5.8m、RA060から18.8mを測る。

[平面形・規模] 3.9×4.65 mの長方形を呈する。壁の残存長は北壁3.9m、東壁4.65m、南壁3.3m、西壁4.64mを測る。深さは最も深いところで19cmである。

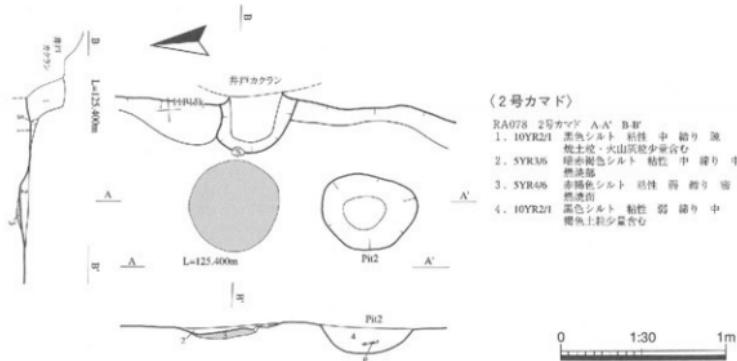
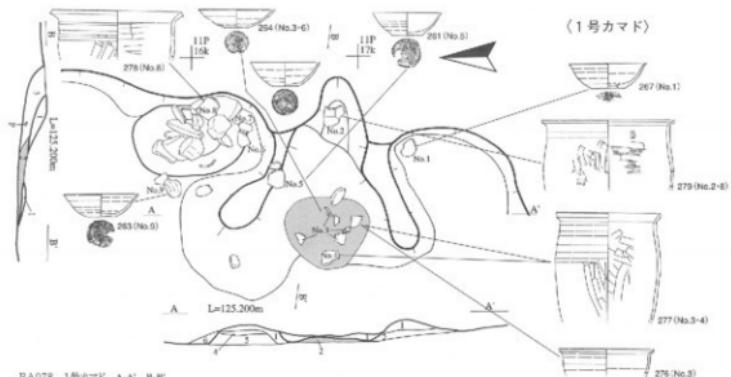
[堆積土] 壁際には暗褐色土の三角堆積が認められ、全体的に黒褐色土の緩やかなレンズ状堆積の様相を示す。2号カマド北脇の床面直上に焼土の堆積が認められるが、RA078には炭化材の出土が認められないため、当住居跡は焼失住居とは考えられない。

[壁・床面] 壁は北・東・西壁においてほぼ垂直に、南壁はやや緩やかに立ち上がる。床面は全体的に硬化が認められるが、1号カマド周辺が著しい。

[カマド] 東壁に2基検出した。2号カマドは北寄りに配置され、袖部燃焼部が欠落しており、旧期のカマドと判断される。1号カマドは南寄りに位置し、新期カマドと考えられる。

1号カマドの主軸方向はN-100°-Eである。遺構は上面が著しく削平されており、浅くしか残存していないため煙道部部分は検出されなかった。煙道部長は残存するだけで35cm径20cmである。煙道部部分と同様に煙出し部も検出されなかった。袖部は褐色土と暗褐色土で構成される。煙道部入り口には土師器壺破片279が出土しているが、完形ではないためカマドに据えられた壺とは考えられない。燃焼部からも土師器（非黒色処理）壺・土師器壺破片が出土している。カマド北脇にピット1があり、1号カマドに伴う貯蔵穴と考えられる。

2号カマドの主軸方向は不明だが、1号カマドとほぼ同方向と考えられる。旧期のカマドであるため床面の被熱面のみ残存し、袖部部・燃焼部は喪失している。煙道部は径32cm長さ35cmのみで、東側は井戸の搅乱が及んでいる。カマド南脇にピット2があり、2号カマドに伴う貯蔵穴と考えられる。



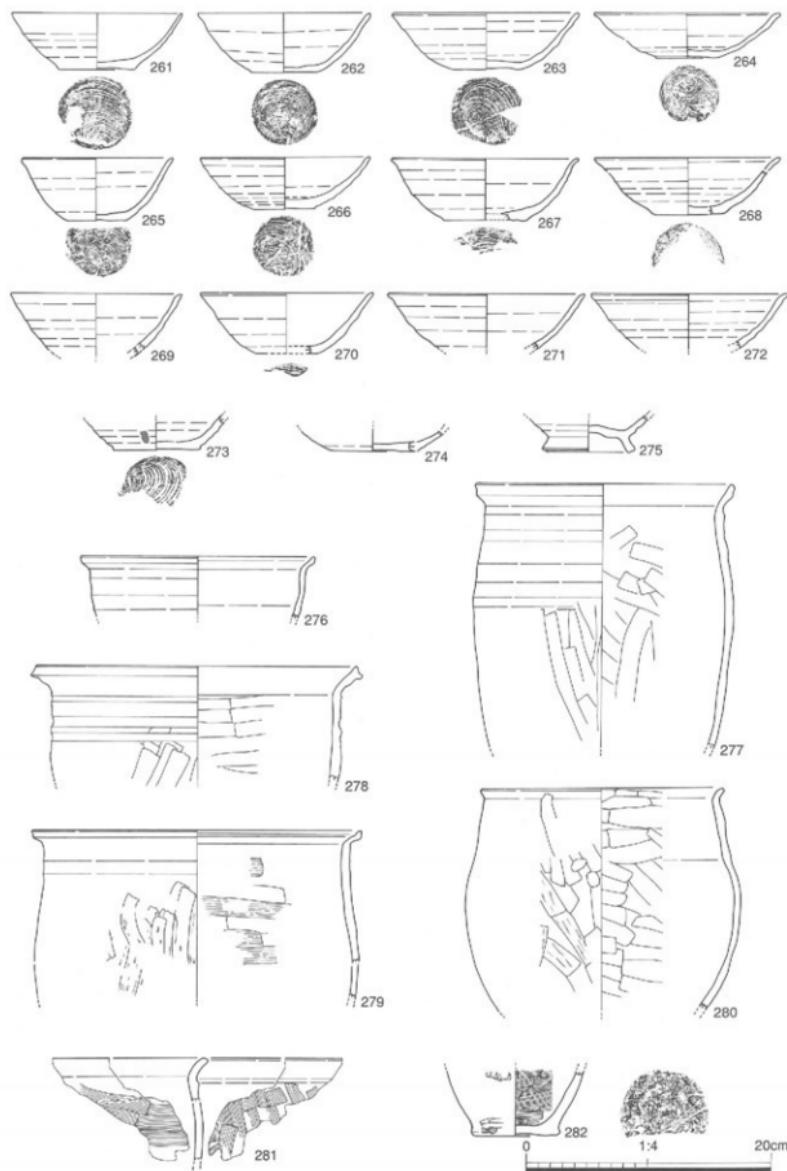
第63図 RA078住居跡（2）

【柱穴】 1個検出した。ピット3は住居南西に位置し、径42×40cm深さ16cmで、黒色土で構成される単層を示す。柱痕が認められない上にごく浅く、対応する柱穴も検出されなかつたため、柱穴でない可能性もある。

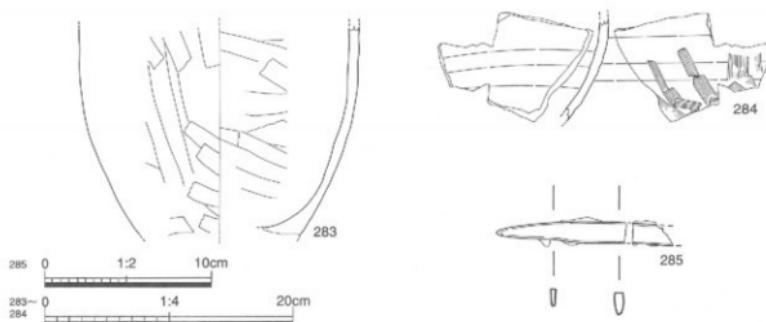
【土坑】 各カマド脇に1個ずつ貯蔵穴が検出された。ピット1は1号カマドに伴う貯蔵穴と考えられ、堆積土は単層である。堆積土中から土師器（非黒色処理）壙262・土師器壙278が出土している。壁際からピット上面にかけて自然縞を多量に検出している。土器は自然縞に混入するものや、自然縞上面からも出土している。

ピット2は2号カマドに伴う貯蔵穴と考えられる。堆積土は単層で、黒色土で構成される。土師器（非黒色処理）壙3点・土師器（黒色処理）壙2点の極小破片が出土している。

1 壁穴住跡



第64図 RA078住居跡出土遺物（1）



第65図 RA078住居跡出土遺物（2）

遺物（第64・65図・写真図版64・65・66）

【出土遺物】 土師器（非黒色処理）壺口縁部片総数42点中12点、底部11点中2点を掲載した。壺は他に土師器（黒色処理）口縁部2点・底部5点、須恵器口縁部1点が出土しているが、極小破片であったため不掲載とした。台付壺は土師器（非黒色処理）台部が1点出土しており、1点掲載した。土師器（内外黒色処理）台部が1点出土しているが、小破片のため不掲載とした。甕は土師器（非黒色処理）口縁部片が20点出土しており、うち6点を掲載した。底部片は7点中2点を掲載した。胴部片では、須恵器壺の破片が1点出土している。

土器は覆土からも出土しているが、残存状態が良く、器形復元できる個体は大部分が下層および床面直上・カマド周辺からの出土である。

壺で底面が残存しているものは全て回転糸切り痕が認められる。壺口縁部点数の組成比をみると、土師器（非黒色処理）が42点で壺全体の94%、土師器（内外黒色処理）1点・2%、土師器（内黒色処理）1点・2%、須恵器1点・2%を占めており、圧倒的に土師器（非黒色処理）が卓越する。この構成比はRA060の土師器（非黒色処理）1：土師器（黒色処理）18の割合に類似する。甕は全てロクロ成形による。

273は墨書き土器である。胴部下半～底部の破片資料であるため、全体の様相を知り得ないが、胴部下半に綫縞が引かれている。Q2下層、1号カマド周辺からの出土である。

土器以外には、刀子が1点出土している。1号カマド周辺の覆土下層から出土した。現存長7.0cm、幅0.6～0.9cm、厚さ0.2～0.35cmを測る。端部を持たない破片があり、接合しないが同一個体と考えられる。

小結 当住居跡は東壁にカマドが2基作られている。北側の2号カマドは旧カマドで、ピット2が貯蔵穴、南側の1号カマドは新カマドでピット2が貯蔵穴である。住居跡の時期は、住居構造と出土遺物から9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

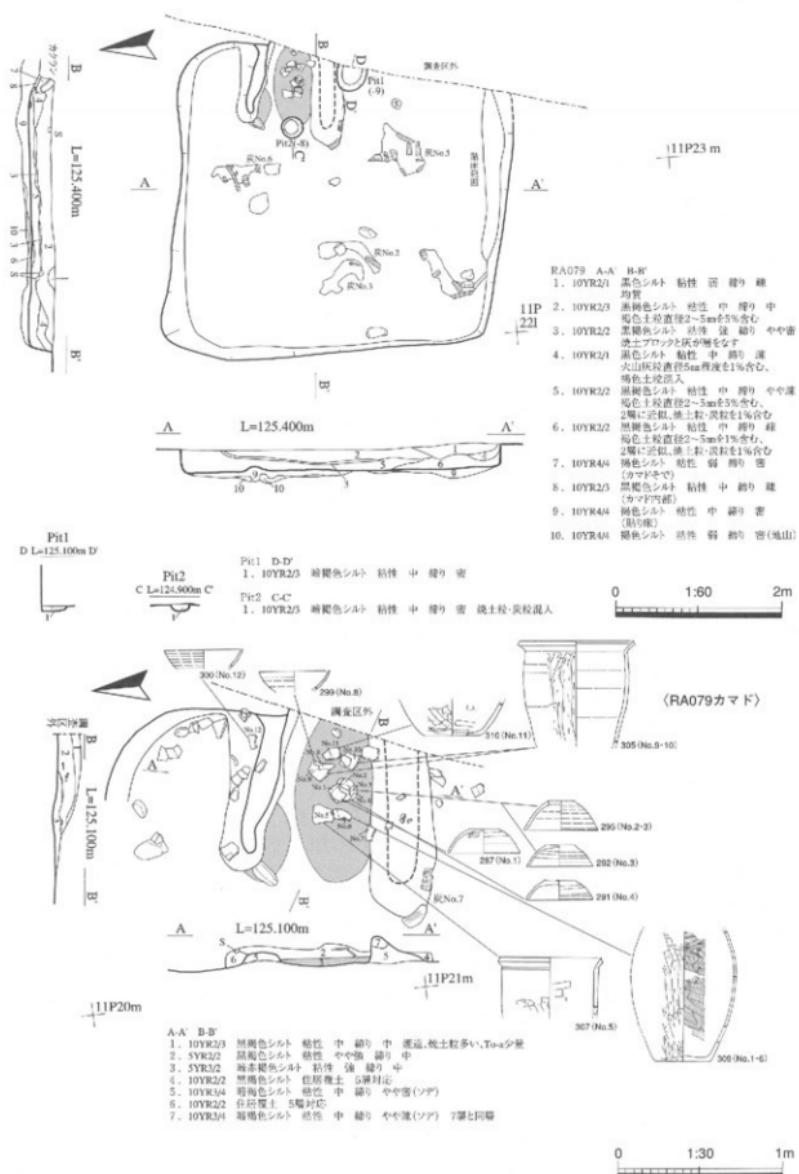
RA079

遺構（第66図・写真図版55・56）

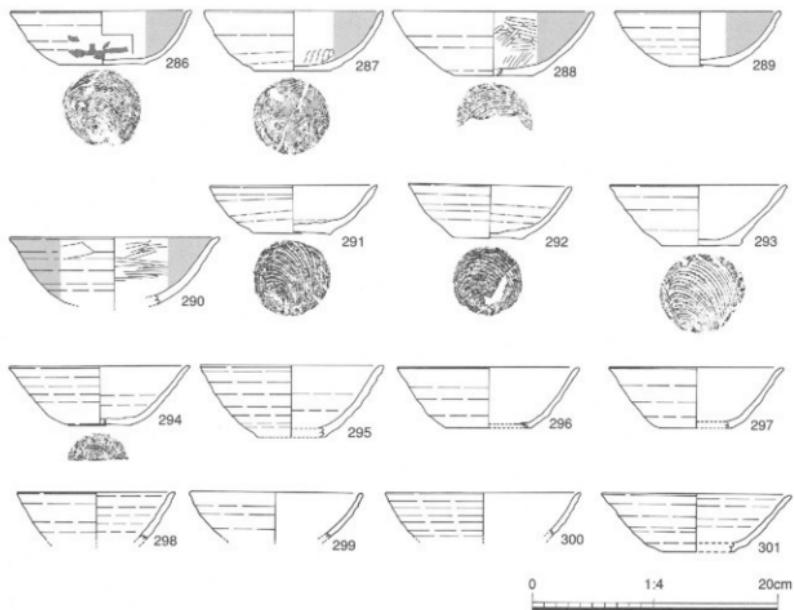
【位置】 第29次調査北調査区11P20mグリッド付近に位置する。

【平面形・規模】 規模は4×3.84mで方形を呈する。主軸方向はN—98°—E。南東端が調査区外へ延

1 整穴住居跡



第66図 RA079住居跡



第67図 RA079住居跡出土遺物（1）

びるため現存値となるが、壁残存長は北壁 3.84m、東壁 (4.00) m、南壁 (3.08) m、西壁 3.88m である。
【堆積土】 黒色土を基本とし、レンズ状の自然堆積の様相を呈する。全体的に褐色土粒・焼土粒を多く含む。床面広範囲に焼土および炭化材が出土しており、焼失住居の可能性がある。炭化材は全点肉眼による樹種同定を行った。No 1—サクラ (ヤマザクラ?)、No 2—クワ、No 3・4—カヤ、No 5—ウルシ、No 6・7—クリという結果を得た。RA077 よりバラエティー富んでいる。

【壁・床面】 壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最も深いところで 32.0 cm である。床面は全体的に硬化が認められ、カマド周辺がやや強い。

【カマド】 東壁に 1 基検出した。燃焼部は調査できだが、煙道部は調査区外へ延び、原地表面には現在の建物があったため調査を行っていない。推定値となるが、主軸方向は N-98°—E である。袖部は暗褐色土で構成される。支脚として下から 291・292・295 の环が逆位で配置され、その上にさらに 309 土師器臺底部が重ねられていた状態で検出した。検出時の支脚全体の高さは 9 cm である。

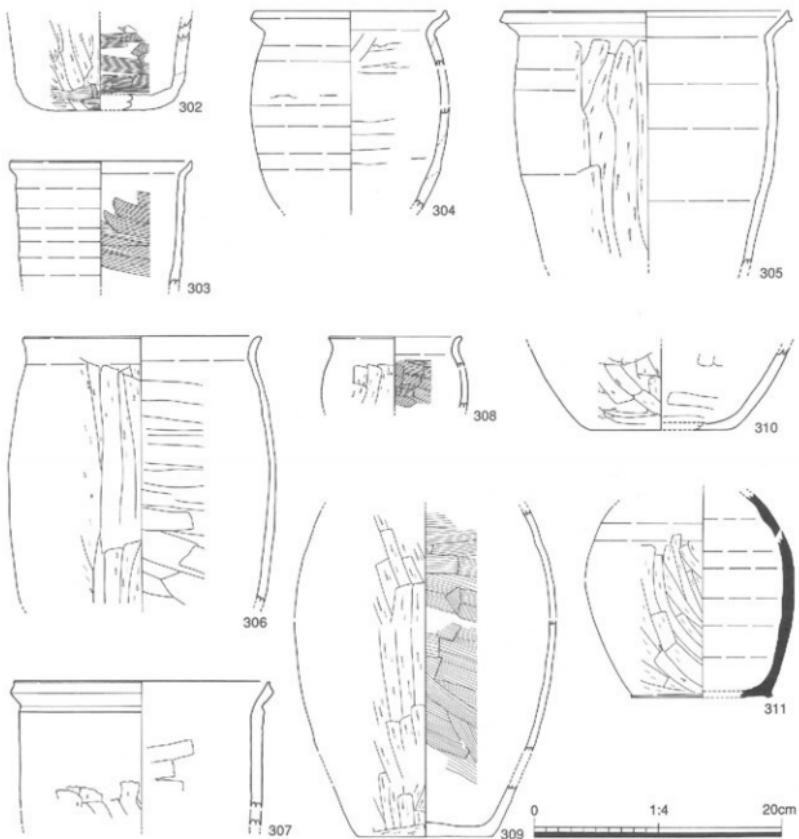
【柱穴】 ピット 1 (直径 34 cm 深さ 9 cm)・2 (直径 24 cm 深さ 8 cm) の 2 個を調査したが柱痕が認められず、また配置からも柱穴の可能性が低い。

【土坑】 検出していない。

遺物 (第 67・68 図・写真図版 67~69)

【出土遺物】 土師器 (非黒色処理) 环口縁部総数 40 点中 11 点、土師器 (内面黒色処理) 环口縁部総数 7 点中 4 点、土師器 (内外面黒色処理) 环 4 点中 1 点、土師器臺口縁部 17 点中 6 点・底部 10 点中 3 点、須恵器瓶類底部 1 点を掲載した。他に土師器 (非黒色処理) 环底部 11 点、土師器 (黒色処理)

1 塗穴住居跡



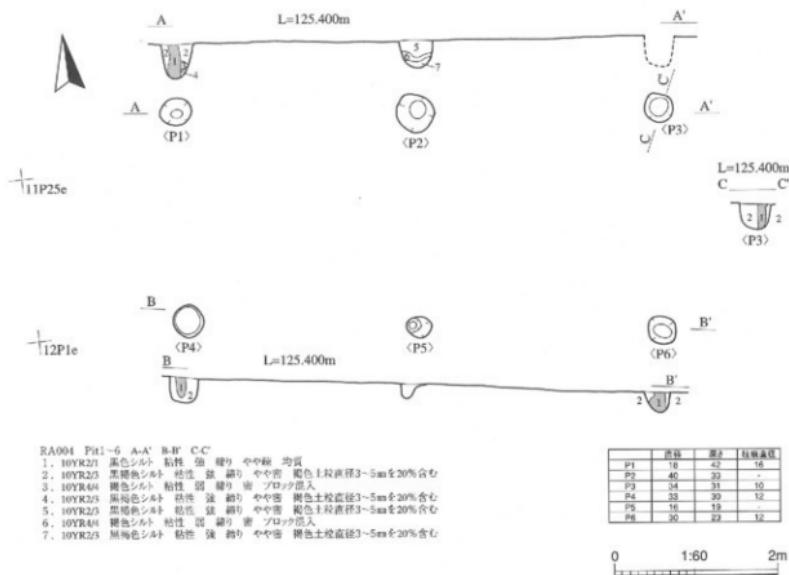
第68図 RA079住居跡出土遺物（2）

壺底部2点、須恵器壺口縁部6点・底部2点は小破片のため不掲載とした。

遺物は大部分がカマド周辺からの出土である。壺の底面調整は全て回転糸切りによるもので、壺口縁部の組成比は、土師器（非黒色処理）40点・土師器（内面黒色処理）8点・土師器（内外面黒色処理）3点・須恵器6点で、土師器（非黒色処理）が卓越するものの、黒色処理が一定量組成し、須恵器が第29次調査中では最も多く出土している。

壺はロクロ使用・非使用の両者が出土している。

286はカマドおよび床面直上からの出土である。底面を上、口縁部を下にした状態で体部に墨書で「方」と記されている。「一」の留め、撥ねが観察され、書の心得がある識字者による墨書と考えられる。「匁」部分は摩滅しているが、器面全体が摩滅しているのではなく、墨書の「匁」部分のみ摩滅している。



第69図 RB004掘立柱建物跡

小結 当住居跡は焼失住居の可能性があり、カマドの位置および出土遺物から9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

2 掘立柱建物跡

R B 0 0 4

遺構（第69図・写真図版57）

【位置】 第29次調査北調査区 11P24e グリッド付近に位置する。RA060から東に1.8mの地点に隣接する。

【平面形・規模】 南端が第29次調査区外に延びるため全体の様相を知りえず、現況では1間×2間であるが、過去の調査事例から、2間×2間の建物跡の可能性がある。残存長は東西柱列総長6.23m、南北柱列総長(3.08)m、軸方向はN-84°-WもしくはN-4°-Eである。柱間はP1～2・P2～3が2.9m、P3～4が2.7m、P1～4が2.55mである。

【柱穴】 調査区内で6個を確認した。P5は規模および堆積土が異なるため、掘立柱建物を構成しない可能性もあるが、位置的要素から報告に至った。黒色土からなる柱痕跡がP1・3・4・6で認められた。埋土は褐色土粒を含む黒褐色土である。柱穴の掘り方は円形で、直径平均31cm、深さ10~16cmである。

遺物（第72図・写真図版69）

【出土遺物】 土師器（非黒色処理）坏口縁部破片がP6から出土している。

小結 出土遺物から9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

3 土 坑

(1) 陥し穴状土坑

遺構（第70図・写真図版58・59）

第29次調査南調査区南端において、溝状の陥し穴状土坑4基を検出した。遺構検出面はRD112・113がⅢ層上面である。RD114・115は水田耕作によって削平され一段低くなった地点で検出しており、検出面はⅣ層である。第19・20次調査区で同様の陥し穴状土坑14基を確認しており、第29次調査において検出した4基も一連の陥し穴状土坑と判断される。

RD112・113は隣接している。RD113はRA077から5m、RD112はRD113から8mに位置する。RD114・115は隣接しており、6m間隔がある。規模の共通する2基が1組で配置されている。

R D 1 1 2 (第70図・写真図版58)

[配置] 14N16gグリッド付近に位置する。RA077から南西に11mの地点に位置する。

[形状] 細長い溝状の平面形を呈する。

[規模] 開口部径3.12×0.58m、底面径3.52×0.18m、深さ1mである。

[堆積土] 底面に黒褐色土が堆積した後、壁崩落黄褐色土の堆積が認められる。

R D 1 1 3 (第70図・写真図版58)

[位置] 14N12tグリッド付近に位置する。RD112から北東に8mの地点に位置する。

[形状] 壁崩落により開口部の形状がやや細長い溝状の平面形を呈する。

[規模] 開口部径3.52×1.02m、底面径3.58×0.13m、深さ0.9mである。

[堆積土] 底面に黒褐色土が堆積した後、壁崩落黄褐色土の堆積が認められる。

R D 1 1 4 (第70図・写真図版59)

[位置] 14N22oグリッド付近に位置する。RD112から南東に6mの地点である。

[形状] 南東端が搅乱されているが、現存範囲からRD112・113より細長い形状と判断できる。

[規模] 現存値で、開口部径(3.30)×(0.20)m、底面径(3.20)×(0.13)mである。

[堆積土] 底面付近に黒褐色土の堆積が多く、中位は経黄崩落褐色土が堆積、さらに上位には黒～暗褐色土が堆積している。いずれも自然堆積と判断される。

R D 1 1 5 (第70図・写真図版59)

[位置] 14N20qグリッド付近に位置する。RD114から北東に6mの地点である。

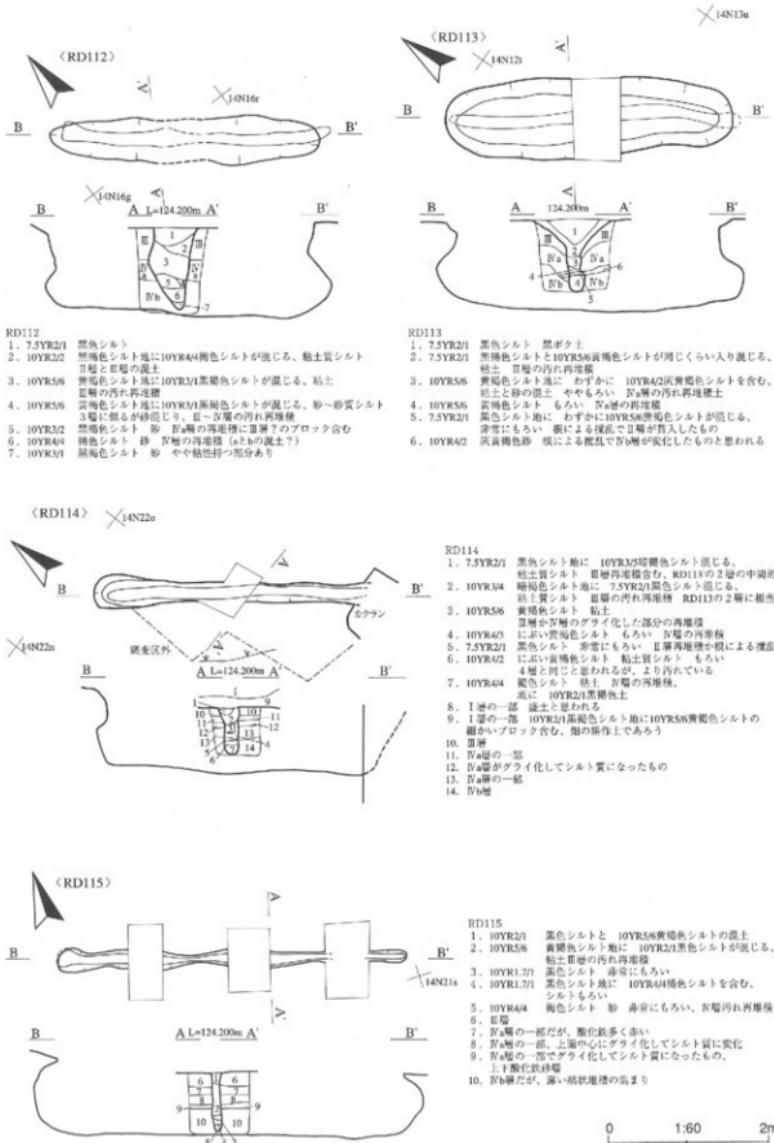
[形状] 本来の掘り込み面は検出面より上位であると考えられるが、上部を搅乱されており行く中位～下位のみが残存している。そのため、平面形は非常に細長い形状を呈する。

[規模] 開口部径4.3×0.1m、底面径4.3×0.1mである。

[堆積土] 底面にはⅣ層の再堆積が認められる。下層は黒色土で構成され、上層は壁崩落褐色土が堆積している。

第3表 第29次陥し穴状土坑観察表

遺構名	位置	平面形	開口径(cm)		底面径(cm)		深さ(cm)	等高線との位置関係	標高(m)	出土遺物	備考
			長軸	短軸	長軸	短軸					
RD112	14N15q	溝状	312	58	352	18	100	垂直	124.1	遺物なし	
RD113	14N11v	溝状	352	102	358	13	90	垂直	124.1	遺物なし	
RD114	14N22o	両頭形	(330)	(20)	(320)	(13)	58	垂直	124.1	遺物なし	一部搅乱
RD115	14N20r	両頭形	430	10	430	10	72	垂直	124	遺物なし	



第70図 RD112～115陥し穴状土坑

(2) 土坑 [第71図・写真図版60・61]

陥り穴状土坑と判断される溝状土坑を除いた検出数は10基に上る。土坑は9基が北調査区、1基は南調査区のRA077南西隅の南西に隣接する地点で確認した。出土遺物や他遺構との位置関係および堆積土の観察から古代と考えられるものが多い一方で、時期・用途ともに不明をせざるをえない土坑もある。

本節では個別の記載は省略し、墓壙の可能性がある土坑、他の出土遺物・堆積土から古代の可能性が高い土坑について記述する。本文中で触れないものについては、第5表に各土坑の概要を一覧表でまとめている。

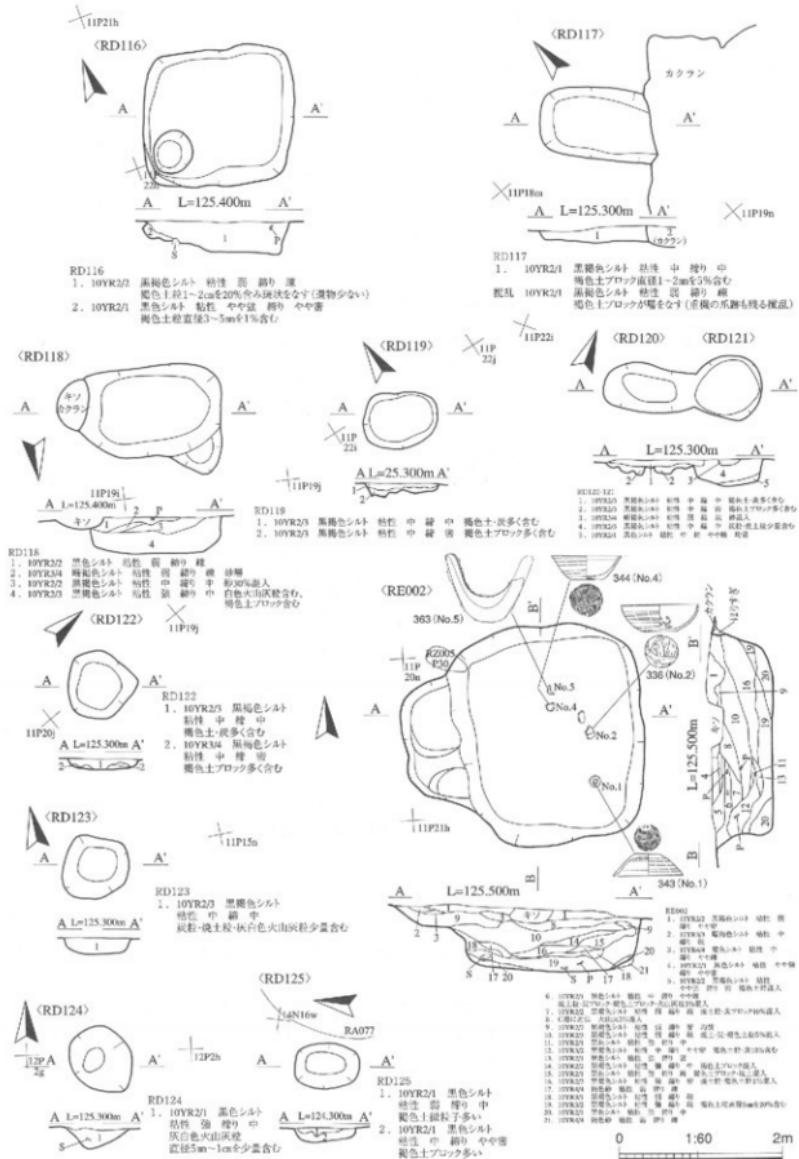
墓壙 第29次調査区で墓壙の可能性が高い土坑はRD116である。RE002の南60cm、RA079から南西に6m、RB004から北に5.2m、11P21hグリッド付近に位置する。規模は1.8×1.68mで、深さ38cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、土層堆積は褐色土粒を多量に含み斑状をなす黒褐色土で、人為堆積層と判断される。堆積土層中に遺物はほとんど含まれず、床面からの出土が多い。南西端には円形の凹みがあり、黒色土が堆積している。床面から出土した遺物は土師器（非黒色処理）壺2点、土師器甕2点があり、全点掲載した。RD116は方形であるが、規模が小さい点と床面に硬化が認められないことから土坑とし、堆積土の様相から墓壙と判断した。墓壙の帰属時期は、出土遺物とRA079堆積土と共通する点から、9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

その他の土坑 墓壙以外の土坑としてはRD117～125がある。褐色土・炭が混入する土坑は、RD119・120・121・122・125である。土層中に灰白色火山灰が混入するのはRD118・123・124である。遺物はRD118・119・121・124から出土しており、回転糸切り痕の認められる土師器（非黒色処理）・（黒色処理）壺、土師器甕が出土している。土坑から出土した口縁部・底部は全点掲載した。

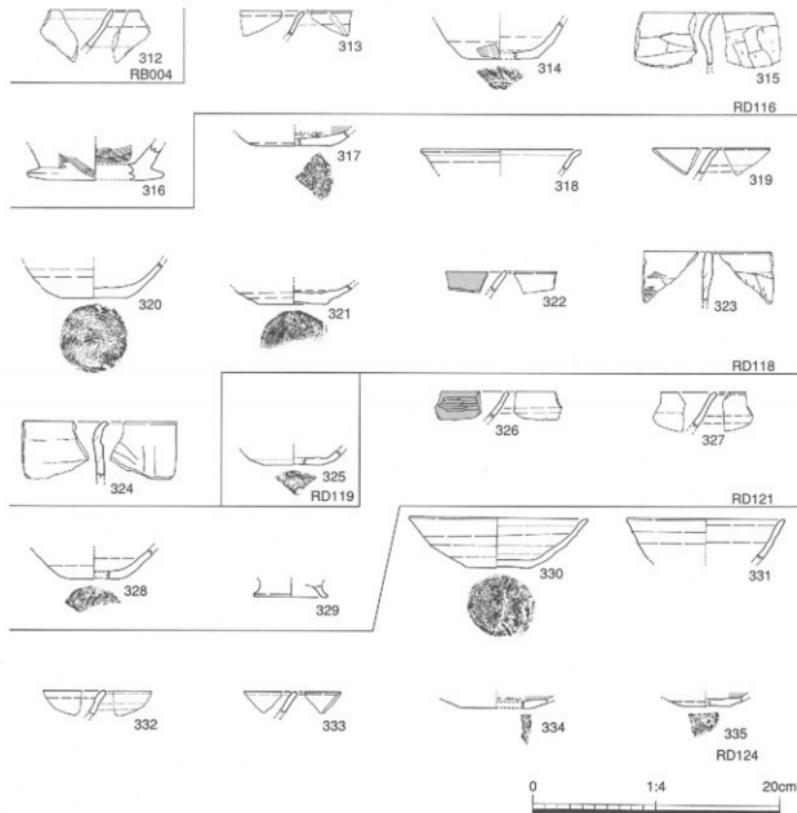
RD117は黒色土単層で構成されるため、時期・性格について考察できない。遺物が出土し、灰白色火山灰の混入が認められるRD118・119・120・121・122・123・124・125は9世紀後半から10世紀初頭の時期が考えられ、他の土坑は堆積土の様相から古代の可能性が指摘できる。

第4表 第29次土坑観察表

遺構名	位置	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	堆積土	検出面	出土遺物	備考
RD116	11P21h	方形	180	168	38	ほぼ単層で構成。褐色土 が多量に混入し斑状をなす。 人為堆積。	IV層上面	第72図313 ～316	
RD117	11P18m	楕円形	144	90	20	単層	IV層上面		
RD118	11P19i	楕円形	157	110	44	4層に灰白色火山灰・ 褐色土ブロック混入。	IV層上面	第72図317 ～324	RE002の北 に隣接
RD119	11P22i	楕円形	88	70	22	褐色土・炭多く混入。	IV層上面	第72図325	
RD120	11P21i	楕円形	120	58	18	褐色土・炭多く混入。	IV層上面		RD121を切る
RD121	11P21j	円形	82	80	33	炭・焼土粒少量含む	IV層上面	第72図326 ～329	RD120に切 られる
RD122	11P20j	円形	84	84	12	褐色土・炭多く混入。	IV層上面		
RD123	11P15m	円形	80	78	20	灰白色火山灰粒含む	IV層上面		
RD124	12P2g	円形	90	72	25	灰白色火山灰粒含む	IV層上面	第72図330 ～335	
RD125	14N16W	楕円形	80	56	18	褐色土ブロック多量に含む。 RA077住居覆土に共	IV層上面		RA077南西 隅に隣接



第71図 RD116～125土坑・RE002住居状遺構



第72図 RB004掘立柱建物跡・RD土坑出土遺物

4 住居状遺構

RE 002

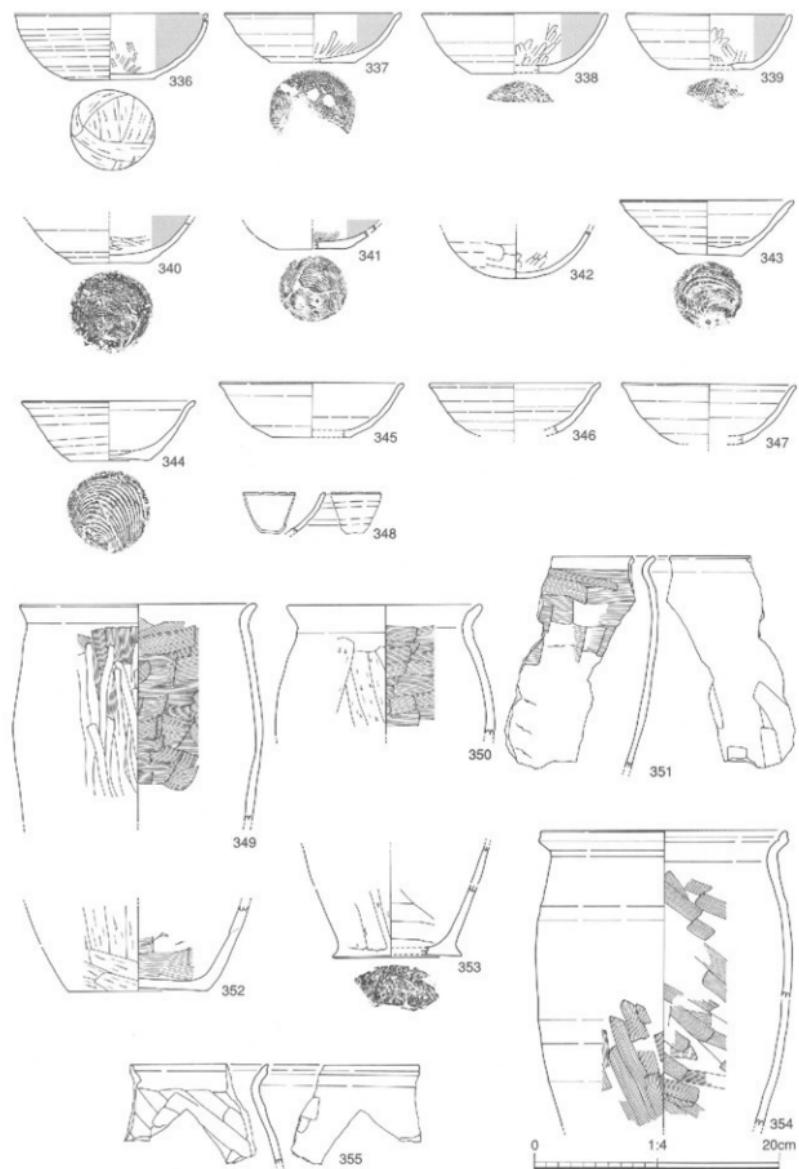
遺構（第71図・写真図版61）

[位置] RD118と116の中間、RA060から北東に10.6m、RA078から南に5.8m、RA079から西に5mの1IP21bグリッドに位置する。

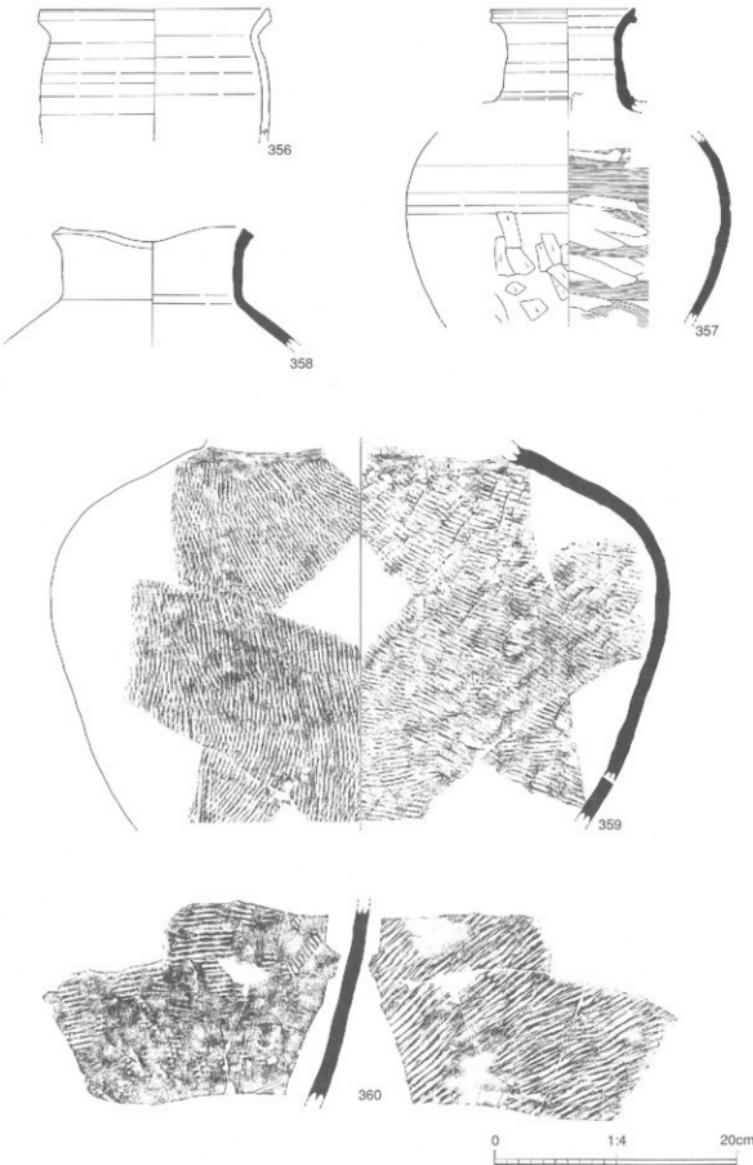
[平面形・規模] 規模は $2.68 \times 2.25\text{ m}$ の方形を呈する。

[堆積土] 黒褐色土を基本とし、褐色土ブロック・焼土・炭・灰白色火山灰粒が混入する層が互層をなす。堆積の方向は南北東方向からが著しい。焼土は間隔をあけて堆積しており、数回にわたって廃棄土が堆積していることが伺える。

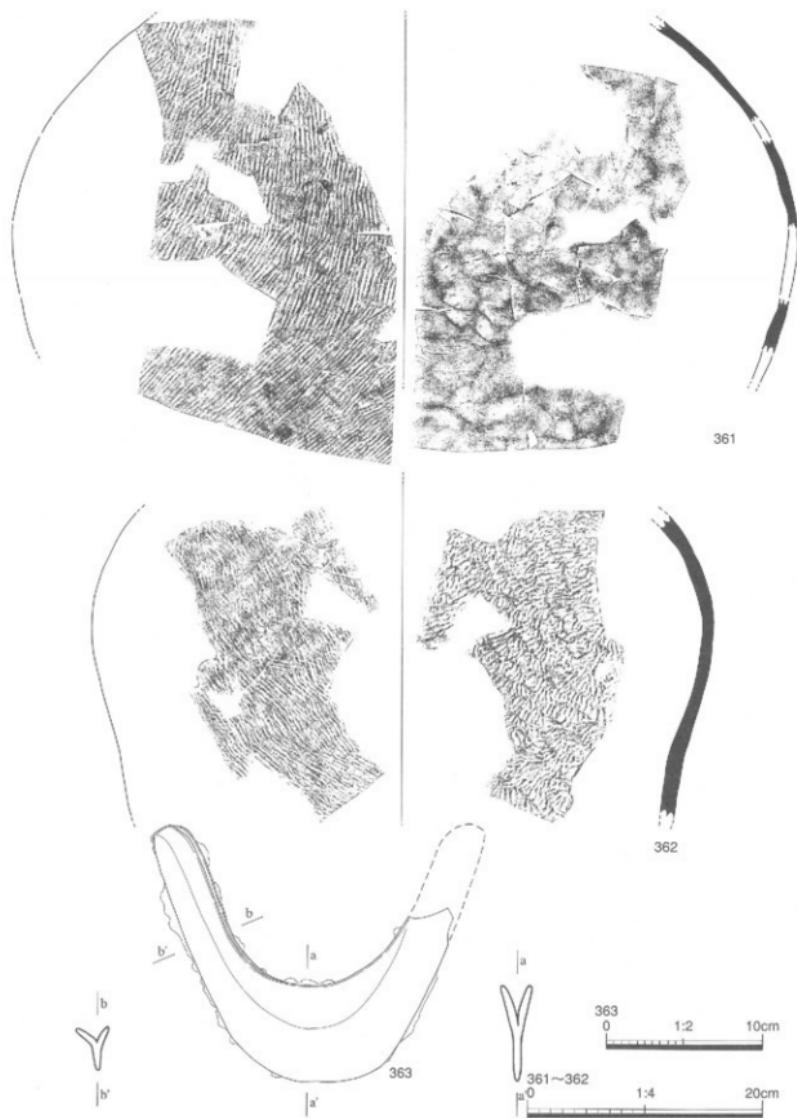
[壁・床面] 壁は西壁で一段段差が設けられているものの、他の3面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は硬化が全く認められない。



第73図 RE002住居状造構出土遺物（1）



第74図 RE002住居状遺構出土遺物（2）



第75図 RE002住居状遺構出土遺物（3）

遺物（第73～75図・写真図版70～73）

【出土遺物】遺物は各層および床面から多量に出土している。RE002から出土した遺物は、土師器（非黒色処理）壺口縁部総数46点中掲載6点・底部14点中0点、土師器（黒色処理）壺口縁部27点中4点・底部5点中3点、土師器（内外黒色処理）壺口縁部1点中0点、土師器甕口縁部19点中5点・底部7点中2点、須恵器胴部片4点中4点、瓶頸口縁部2点中2点を掲載した。壺の組成比は、土師器（非黒色処理）が47点で61%、土師器（黒色処理）が30点で39%である。割合としてはRA079の組成比により近い様相を呈する。床面から出土しているのは、土師器（非黒色処理）壺336、回転糸切り土師器壺344、鋤先363がある。

小結 RE002はカマド・床面の硬化が認められなかったことから住居状遺構とした。しかし、土層堆積の様相を観察すると、焼土・被熱した褐色土ブロック等の投げ込みや、多量の遺物廃棄も認められ、周辺遺構構築の際に生じた土・遺物を廃棄したものと考えられる。遺構の時期は、出土遺物から9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

5 柱穴状土坑

北調査区で84個、南調査区で73個確認した。



第76図 RZ005柱穴状土坑

R Z 0 0 5

遺構（第76図・写真図版61）

[位置] 第29次調査北調査区で検出した柱穴状土坑群を RZ005 とした。総数 84 個を調査した。

[平面形・規模] ほぼ円形で、径 14 ~ 64 cm、深さ 3.5 ~ 33 cm に分布する。

[堆積土] 褐色土粒・灰白色火山灰が混入するものが多い。周辺遺構と共通することから古代に属すると考えられるが、平面分布から建物を構成する可能性は低い。

遺物（第78図・写真図版73）

[出土遺物] 土師器壺・土師器甕・須恵器甕・須恵器瓶類の胴部破片が出土している。

小結 出土遺物および堆積土層から古代に属すると考えられる。

R Z 0 0 6

遺構（第77図・写真図版61）

[位置] 第29次調査南調査区で検出した柱穴状土坑群を RZ006 とした。総数 73 個を調査した。

[平面形・規模] ほぼ円形で、径 12 ~ 38 cm、深さ 4.4 ~ 30.4 cm に分布する。

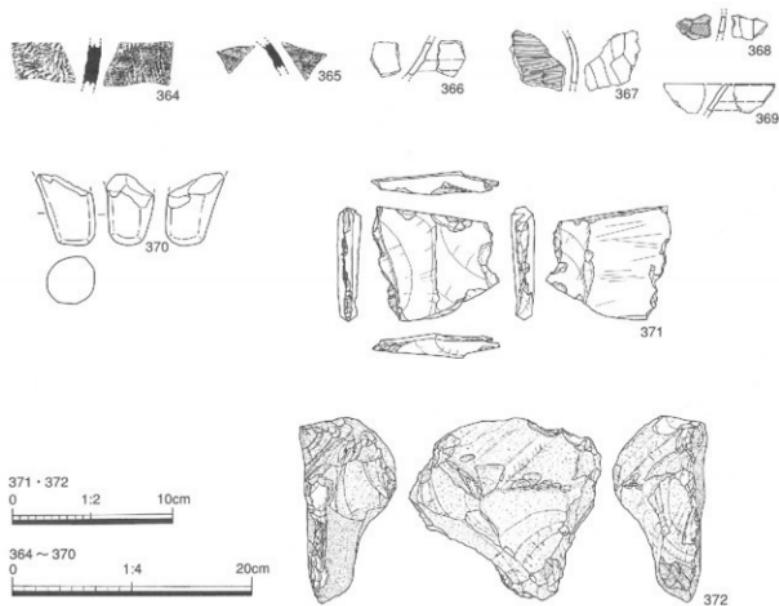
[堆積土] 褐色土ブロックを含むものもあるが、遺構の輪郭が明瞭であるため、ごく新しい柱穴状土坑である可能性が高い。

小結 出土遺物は認められず、堆積土もごく新しい様相を呈しており、古代に帰属するとは考え難い。



第77図 RZ006柱穴状土坑

5 柱穴状土坑



第78図 RZ005柱穴状土坑・造構外出土遺物

6 造構外出土遺物（第78図・写真図版73）

東調査区から土製脚状遺物が出土している（370）。表面はナデ調整が施され、胎土に微小砂粒を含む。色調は表面が明黄褐色、内部が褐灰色を呈する。土師器瓶とも考えられるが、焼成と形態から縄文時代晚期後葉の浅鉢に付けられる脚である可能性もある。

371は北調査区表土から出土している。凝灰岩製で、左右に鋸歯状の刃部が作られている。

372は南調査区から出土している。石材は頁岩である。端部に剥離が認められ、石核と考えられる

7 総括

第29次調査区では、竪穴住居跡5棟・掘立柱建物跡1棟・住居状造構1棟・土坑10基・柱穴状土坑157個・陥し穴状土坑4基を調査した。

東・北調査区で確認した竪穴住居跡・掘立柱建物跡は全て9世紀後半から10世紀初頭の時期である。南調査区で確認した竪穴住居跡は奈良時代である。隣接する第23次調査区でも奈良時代の住居を検出している。しかし、調査区西側は一段高くなっており、別集落である可能性もある。

南調査区において縄文時代と考えられる陥し穴状土坑を4基確認した。これらは第19・20次調査区において多量に検出した陥し穴状土坑の続きと考えられる。

出土遺物として注目されるのは、RA077出土の土師器壺である（第61図256）。口縁部に指頭押圧による文様が施され、類例に乏しい。

（八木）

第5表 第29次柱穴状土坑観察表

通構名	ピット名	グリッド	種	深さ	底面性質	土層
R2005	P1	11P1B0	43	14.9	125.19	-
R2005	P2	11P1B0g	52	28.3	125.25	10YR2/3黒褐色シルト
R2005	P3	11P16h	42	22.6	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 硬 繊り 中
R2005	P4	11P1B0	26	23	125.15	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P5	11P1B0f	62	7.9	125.17	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P6	11P1B0	36	25.9	125.15	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P7	11P1f6	21	15.5	125.22	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P8	11P1B0n	58	12.5	125.23	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P9	11P20e	20	17.6	125.88	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P10	11P1B0	28	29	125.09	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P11	11P1B1	42	18.3	125.87	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P12	11P1f6	20	14.6	124.985	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P13	11P1Bm	24	14.7	124.955	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P14	11P1T1	40	22.9	125.007	10YR2/1黒褐色シルト
R2005	P15	11P1T1K	26	19.5	124.997	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P16	11P1T1	22	13.4	125	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P17	11P1B1	44	13.4	125.15	10YR2/1黒褐色シルト
R2005	P18	11P1B1	22	23.1	125.01	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P19	11P1T1K	20	14.2	125.057	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P20	11P1Bk	22	13.5	125.007	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P21	11P1Bk	22	25.1	124.887	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P22	11P1B1	22	9.7	125.157	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P23	11P1Bk	38	16	124.985	10YR2/1黒褐色シルト
R2005	P24	11P1B1	28	15.8	124.985	褐色土粘土質2~3cmを少量含む
R2005	P25	11P1B1	24	14.6	124.99	10YR2/1黒褐色シルト
R2005	P26	11P1B1	24	19	125.084	褐色土粘土質2~3cmを少量含む
R2005	P27	11P1Bh	40	26.5	125.091	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P28	11P1Bh	28	21.1	125.155	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P29	11P20g	40	15.8	125.244	-
R2005	P30	11P1Bh	30	33	125.197	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P31	11P19c	22	3.5	125.197	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P32	11P19j	22	23.8	124.876	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P33	11P19j	24	24.1	124.989	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P34	11P19j	30	17.6	124.989	褐色土粘土質2~3cmを少量含む
R2005	P35	11P19m	26	11.9	125.048	褐色土粘土質2~3cmを少量含む
R2005	P36	11P20	22	10	125.105	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P37	11P20	14	13	125.098	褐色土粘土質2~3cmを少量含む
R2005	P38	11P20	40	22.6	125.026	10YR2/2黒褐色シルト
R2005	P39	11P21	24	14.9	125.026	褐色土粘土質2~3cmを少量含む

遺傳名	ピット名	クリッド	塗装	深さ	底面標高			土層
R2005	P40	11P21g	26	25.5	124.965	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 岩 繊り 窓	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P41	11P21h	26	20.7	125.037	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 中	褐色土+粘透2~3mを少量含む 白色火山灰粘透5m~3m少量含む
R2005	P42	11P21h	44	10.3	125.147	-	-	-
R2005	P43	11P21e	16	21.5	125.152	10YR2/3黒褐色シルト	褐色土+粘透2~3mを少量含む	-
R2005	P44	11P21e	20	21.5	125.062	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P45	11P22i	20	8.1	125.135	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P46	11P21j	24	16.6	125.072	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P47	11P22h	22	22	124.915	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P48	11P205	26	15.8	125.075	10YR2/3黒褐色シルト	褐色土+粘透2~3mを少量含む	-
R2005	P49	11P22j	20	13.9	125.104	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P50	11P22k	32	13.6	125.122	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 岩 繊り 窓	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P51	11P22l	26	12.6	125.071	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 岩 繊り 窓	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P52	11P23i	28	7.2	125.112	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P53	11P23e	20	29.4	124.901	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P54	11P23i	20	25.5	124.965	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P55	11P22h	24	23.5	124.985	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+粘透2~3mを少量含む 白色火山灰粘透5m~3m少量含む
R2005	P56	11P22h	26	14.6	124.982	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P57	11P23i	27	17.9	125.046	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 中 纖り 窓	褐色土+粘透2~3mを少量含む 2 層に分層され、下層は10YR3/2
R2005	P58	11P23i	14	18.5	125.056	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P59	11P23g	21	12.6	125.056	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 中	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P60	11P23h	22	6.2	125.111	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+粘透2~3mを20%含む
R2005	P61	11P23h	40	15.4	125.035	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 中 纖り 中	褐色土+ロック直透5m~3mを20%含む
R2005	P62	11P23g	22	17.3	125.034	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 中 纖り 窓	褐色土+粘透2~3mを20%含む
R2005	P63	11P23h	48	20.5	125.015	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 中 纖り 中	褐色土+粘透2~3mを20%含む
R2005	P64	11P23g	22	11.6	125.111	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+粘透2~3mを20%含む
R2005	P65	11P23i	20	21.3	125.008	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 中 纖り 中	褐色土+粘透2~3mを20%含む
R2005	P66	11P23i	22	8.5	125.129	-	-	-
R2005	P67	11P23i	20	11.8	125.032	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+粘透2~3mを20%含む
R2005	P68	11P23j	22	21.4	125.016	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+粘透2~3mを20%含む
R2005	P69	11P24g	58	24.6	124.942	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 中 纖り 窓	褐色土+粘透2~3mを20%含む 2 层に分層され、下層は10YR3/2
R2005	P70	11P25g	28	10.5	125.1	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 中	褐色土+粘透2~3mを20%含む
R2005	P71	11P25g	32	22.5	124.985	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 中 纖り 窓	褐色土+粘透2~3mを20%含む
R2005	P72	11P44h	64	20.6	124.99	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+粘透2~3mを20%含む
R2005	P73	11P25g	32	23.5	124.977	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+粘透2~3mを20%含む
R2005	P74	11P25g	24	9.2	125.11	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 中 纖り 窓	褐色土+粘透2~3mを20%含む
R2005	P75	11P11	24	14	125.07	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 中 纖り 窓	褐色土+粘透2~3mを20%含む 自色火山灰粘透5m~3m少量含む
R2005	P76	12P14	22	11.6	125.079	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 中 纖り 窓	褐色土+粘透2~3mを20%含む
R2005	P77	12P19	22	23.1	124.994	-	-	-
R2005	P78	12P1h	16	29.7	124.93	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 中	褐色土+火山灰粘透5m~3m少量含む 自色火山灰粘透5m~3m少量含む
R2005	P79	12P19	24	14.3	125.022	10YR2/3黒褐色シルト	粘性 砂 繊り 窓	褐色土+粘透2~3mを20%含む

油標名	ビット名	クリップド	緑	深さ	左側表面			右側表面			
					生長性	弱	弱	弱	弱	強	
R2Z005	P80	12P19	22	6.8	125.177	10YR2-1黑色シルト	弱性	弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z005	P81	12P19	31	6.8	125.165	10YR2-2黑色シルト	弱性	弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z005	P82	12P19	34	20.8	125.05	10YR2-2黑色シルト	弱性	弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z005	P83	12P19	14	-	10YR2-2黑色シルト	弱性	弱	弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z005	P84	12P28	26	19.5	125.01	10YR2-2黑色シルト	弱性	弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P85	13Q24c	24	19.5	123.99	10YR2-1黑色シルト	弱性	弱	弱	弱	中 層
R2Z006	P86	13Q24b	30	9	124.04	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P87	13Q24b	22	6.6	124.114	10YR2-1黑色シルト	弱性	弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P88	13Q24a	26	8.1	124.146	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P89	13Q24a	30	7.2	124.065	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P90	13Q24a	28	6.4	124.074	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P91	13Q24c	32	14	124.072	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P92	13Q24e	38	15	124.06	10YR2-1黑色シルト	弱性	強	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P93	13Q24e	26	7.7	124.144	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P94	13Q24f	30	19.4	124.032	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P95	13Q24g	22	8.1	124.14	10YR2-1黑色シルト	弱性	強	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P96	13Q24g	18	9.9	124.036	10YR2-1黑色シルト	弱性	強	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P97	13Q24g	18	7.6	124.032	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 強	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P98	13Q24h	22	6.4	124.075	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P99	13Q24h	22	7	124.085	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 強	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P100	13Q24i	18	9	124.036	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P101	13Q24i	23	4.4	124.114	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P102	13Q24i	24	7.5	124.069	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P103	13Q24j	30	7.6	124.052	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P104	13Q24e	12	14.4	124.1	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P105	13Q25e	32	13.8	124.13	10YR2-1黑色シルト	弱性	強	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P106	13Q25e	12	6.3	124.089	10YR2-1黑色シルト	弱性	強	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P107	14Q10	26	18.9	124.049	10YR2-1黑色シルト	弱性	強	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P108	13Q25d	26	16.8	124.084	10YR2-1黑色シルト	弱性	強	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P109	13Q25d	16	15.6	124.104	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P110	13Q25e	32	-	123.995	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P111	13Q25e	12	6.3	124.089	10YR2-1黑色シルト	弱性	強	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P112	14Q10	22	20.2	123.883	10YR2-1黑色シルト	弱性	強	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P113	14Q10	12	7	214.075	10YR2-1黑色シルト	弱性	強	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P114	14Q10	16	18.9	124.099	10YR2-1黑色シルト	弱性	強	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P115	14Q11	26	10.9	124.105	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P116	14Q14	22	5.9	124.131	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P117	14Q17	28	11.3	124.088	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P118	14Q1a	34	15.6	124.054	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む
R2Z006	P119	14Q1a	22	16.7	124.051	10YR2-1黑色シルト	弱性	中 弱	弱	弱	褐色土プロック少量含む

測査名	ビット名	グリッド	係	漢字	表面性質	上層		
						10YR2/1黒色シルト	粘性	中
R2Z006	P120	140Q30	22	8.8	124.19	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
R2Z006	P121	140Q30	16	18.1	124.01	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
F2Z006	P122	140Q30	20	30.4	123.922	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
F2Z006	P123	140Q30	5.1	124.204	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱	
F2Z006	P124	140Q30	23	4.5	124.145	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
F2Z006	P125	140Q30	58.84	16.3	124.037	10YR2/1黒色シルト	粘性	強
F2Z006	P126	140Q30	24	8.6	124.148	10YR2/1黒色シルト	粘性	強
F2Z006	P127	140Q30	29	22.2	123.985	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
F2Z006	P128	140Q30	24	19	123.924	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
F2Z006	P129	140Q30	22	8.5	123.965	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
F2Z006	P130	140Q30	21	16.6	123.91	10YR2/1黒色シルト	粘性	強
F2Z006	P131	140Q30	19	19	123.969	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
R2Z006	P132	140Q30	20	12.3	124.108	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
R2Z006	P133	14N8K	28	-	-	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
H2Z006	P134	14N8U	20	6.3	124.082	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
H2Z006	P135	14N7V	22	14.7	124.035	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
R2Z006	P136	14N7V	28	22.8	213.988	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
R2Z006	P137	14N7V	12	15	123.956	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
R2Z006	P138	14N7V	16	13.6	124.004	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
R2Z006	P139	14N7V	20	13.6	124.024	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
R2Z006	P140	14N8K	39	5.7	124.11	10YR2/1黒色シルト	粘性	強
R2Z006	P141	14N8U	15	17.8	124.017	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
R2Z006	P142	14N8U	27	7.9	124.38	10YR2/1黒色シルト	粘性	強
R2Z006	P143	14N8V	20	8	124.137	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
R2Z006	P144	14N8W	24	20.5	124.074	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
R2Z006	P145	14N8X	20	20.4	124.05	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
R2Z006	P146	14N8X	20	13.2	124.055	10YR2/1黒色シルト	粘性	強
R2Z006	P147	14N8Z	38	11.6	124.028	10YR2/1黒色シルト	粘性	強
R2Z006	P148	14N8Z	31	11.9	124.026	10YR2/1黒色シルト	粘性	強
R2Z006	P149	14N8U	22	20.7	123.961	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
R2Z006	P150	14N8U	16	7.7	124.112	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
R2Z006	P151	14N9V	38	22	123.887	10YR2/1黒色シルト	粘性	中
R2Z006	P152	14N9V	25	25.5	123.97	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
R2Z006	P153	14N9V	20	24.9	123.986	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
R2Z006	P154	14N9W	18	12.3	124.127	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
R2Z006	P155	14N9W	14	19.1	124	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
R2Z006	P156	14N9W	14	24.2	123.99	10YR2/1黒色シルト	粘性	弱
R2Z006	P157	14N8U	16	13.2	123.965	10YR2/1黒色シルト	粘性	中

VI 考 察

1 野古A遺跡第23・24・29次調査検出堅穴住居跡について

第23・24・29次調査において検出された堅穴住居跡は、第23次8棟・第24次4棟・第23-29次1棟・第29次4棟の合計17棟である。これらのうち奈良時代5棟・平安時代12棟である。遺構の詳細な時期決定は出土土器に依るため、本節では遺構のみでの検討を行う。なお、住居跡の分析に際して、過去の調査である第6次・6次補（盛岡市教委1998）、第12次（菅原2003）、第15次（阿部2003）調査成果を含めて遺跡全体の把握に努めることとした。ただし、住居が調査されている第11・18・21・25次調査に関しては報告書未刊のため住居構造の分析には入れず、全体遺構配置図および時代区分にのみ成果を盛り込むこととする。

（1）時期区分

野古A遺跡は奈良時代と平安時代の複合集落遺跡である。堅穴住居跡はこれまでに総数75棟見つかっている。うち未報告が15棟あり、未調査分の1棟(RA07)も除外し、土器から分類できる時代区分によって、奈良時代住居跡25棟、平安時代住居跡34棟と判断できる(表7)。

本報告書で報告する第23・24・29次調査では奈良時代5棟、平安時代12棟を検出した。各遺構の時期区分に関しては、野古A遺跡から南東に750mに位置する細谷地遺跡平安時代集落の遺構分析による住居時期区分分析において、十和田a降下火山灰の堆積の有無と火山灰堆積状況から検証が行われている(高木2003)。この方法を野古A遺跡奈良時代・平安時代集落に用い、火山灰混入層を覆土上位・中位・下位にグループ化し、各住居の堆積状況を検証した。結果、層として灰白色火山灰が堆積している住居は覆土上位のRA077(奈良)と覆土中位のRA067(奈良)で、他はブロック状に堆積している。ブロック状に堆積している住居跡は、覆土上位がRA018(平安)・RA039(平安)・RA040(平安)・RA063(平安)・RA064(平安)、覆土中位がRA019(平安)・RA028(平安)・RA048(奈良)・RA061(平安)・RA078(平安)・RA079(平安)、覆土下位がRA020(平安)・RA021(奈良)・RA022(平安)・RA023(平安)・RA041(平安)となり、各時代の細分だけでなく時代区分さえ混在する状況で、細谷地遺跡第4・5次調査のような結果を得ることができなかった。野古A遺跡の火山灰再堆積状況が細谷地遺跡と異なる環境下にあった可能性がある。また細谷地遺跡の場合は同一調査員によって調査がなされているが、野古A遺跡は4人の調査員が各調査次に配備されており、異なる視点によって土層観察がなされた結果、今回の結果となった可能性がある。従って、野古A遺跡の時代毎の細分は、層相からアプローチできなかった。

住居の配置を見ると、奈良時代と平安時代での住居の切り合いはRA034・RA035で認められるのみである。平安時代集落が営まれた時代において、十和田a降下火山灰(西暦915年)が覆土上位に堆積する住居(RA077)が認められ、奈良時代住居は埋没する過程にあったと推測されることから、平安時代集落は奈良時代住居を避けて住居を構築することが可能であったと考えられる。奈良時代同士での住居の切り合いはなく、また、平安時代同士の切り合いはRA059・RA064以外では認められないことから、各時代において全ての住居跡が同時期に存在した可能性がある。しかし、これ以上の検討は遺構からは望めず、各時代の細分に関しては土器の分析に譲ることとする。

（2）規模(床面積)

住居の壁2辺を掛けた床面積の概算を行った結果をグラフにした。第79・80図参照。第79図は奈良時代住居跡の規模を概算した床面積を示したものである。グラフを見ると3箇所に断絶が認められる。この断絶を境とし、 $5.64 \sim 10.24 \text{ m}^2$ を小形、 $15.2 \sim 23.1 \text{ m}^2$ を中形、 $30.37 \sim 34.1 \text{ m}^2$ を大形、 40.47

m²以上を超大形と分類することができる。第80図に示した平安時代は4.8～10.11を小形、12.92～19.2 m²を中形、22.56～28.6 m²を大形と分類することができる。

棒グラフ中のトーンがかかった棒は第23・24・29次調査において検出された住居跡で、奈良時代では中形2棟・大形2棟、平安時代では小形1棟・中形6棟・大形2棟で、奈良時代は小形・超大形が欠落し、平安時代では各規模が揃っているといえる。第23・24・29次調査区で検出された平安時代住居は第12・15次調査区と同じ面の段丘高位面に立地する。第81図野古A遺跡集落堅穴住居跡配置図を見ると、

平安時代集落にはまとまりが認められる。一方で奈良時代では第23・24・29次調査区は集落の中心からやや離れており、そのため小形・超大形が欠落した可能性がある。

(3) 焼失住居

明らかに焼失住居と判断できるのは、RA077の1棟のみである。RA015・RA026・RA029・RA068・RA079は少量だが炭化材・焼土が出土しており、焼失住居の可能性がある。報告書で報告されている住居が59棟であるので、焼失住居の少なさが際立つ。

(4) 柱 穴

柱穴ははっきりしないものが多い。奈良時代では明確なものが多く、RA067（6？個）、RA068（4？個）、RA077（4個）で方形に配置される。平安時代住居は不明確である。第12・15次調査においても同様で、奈良時代住居であるRA014（6個）、RA021（4個）、RA026（4個）、RA046（4個十建て替え？4個）、RA053（4個）は主柱穴が明確である。

(5) 貯 藏 穴

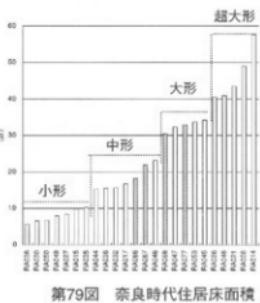
RA068（奈良）・RA076（平安）・RA078（平安）においてカマド脇の貯藏穴を確認した。RA076は調査区内ではカマドを検出していないが、規模から貯藏穴の可能性があるピットが検出されている。第12・15次調査ではRA019・020・022・024・026？・028・029・032・034・041・042・047・048・050・051・052において貯藏穴が作られている。

(6) 周 溝

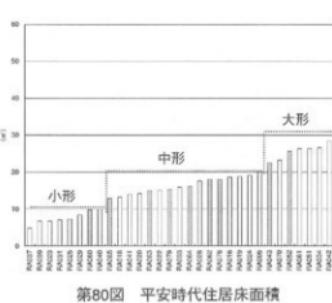
周溝はRA066（奈良）・RA068（奈良）・RA067（奈良）・RA076（平安）・RA077（奈良）において検出された。いずれも幅10cm未溝でほぼ全周する可能性がある。圧倒的に奈良時代住居跡に多い。第12・15次調査においてはRA014の半周、RA026・RA044のほぼ全周、RA046・RA047・RA048・RA053の一部に周溝が認められる。全て奈良時代住居跡であり、遺跡全体の構造として奈良時代住居跡のうち、大型を中心に周溝が検出されるものが多いと言える。

(7) カ マ ド

① 燃焼部 RA077 カマド燃焼部に両袖の芯材として土師器壺が逆位で使用されている。RA064



第79図 奈良時代住居床面積



第80図 平安時代住居床面積



第81図 野古A遺跡 古代住居跡分布図

第7表 野古A遺跡検出住居一覧

調査次数	住居名	時期	調査次数	住居名	時期	調査次数	住居名	時期	調査次数	住居名	時期
6-8補	RA005	平安	12次	RA024	平安	15次	RA043	平安	23-24次	RA061	平安
	RA006	奈良		RA025	平安		RA044	奈良		RA062	平安
	RA007	-		RA026	奈良		RA045	奈良		RA063	平安
11次 (H12調査)	RA008	-		RA027	奈良		RA046	奈良		RA064	平安
	RA009	-		RA028	平安		RA047	奈良		RA065	平安
	RA010	-		RA029	平安		RA048	奈良		RA066	奈良
12次	RA011	-		RA030	奈良		RA049	奈良		RA067	奈良
	RA012	-		RA031	平安		RA050	奈良		RA068	奈良
	RA013	-		RA032	奈良		RA051	平安		RA069	平安
12次	RA014	奈良		RA033	平安		RA052	平安		RA070	平安
	RA015	奈良		RA034	平安		RA053	奈良		RA071	奈良
	RA016	平安		RA035	奈良		RA054	未報告		RA072	-
	RA017	奈良		RA036	平安		RA055	未報告		RA073	未報告
	RA018	平安		RA037	平安		RA056	未報告		RA074	-
	RA019	平安		RA038	奈良		RA057	未報告		RA075	-
	RA020	平安		RA039	平安		RA058	-		RA076	平安
	RA021	奈良		RA040	平安		RA059	平安		RA077	奈良
	RA022	平安		RA041	平安		RA060	平安		RA078	平安
	RA023	平安		RA042	平安		RA061	-		RA079	平安

第8表 第23・24・29次堅穴住居跡調査表

調査次	住居名	時期	北壁北面 (m)	南壁南面 (m)	西壁西面 (m)	東壁東面 (m)	面積(m ²)	面積(m ²)	主軸方向	カマド	堅穴住居	堅穴住居	柱穴	周溝	その他の 遺物不可	
23次	RA069 平安	平安	5.17	5.12	-	-	6.75 (4.80)	4.96 (4.80)	3.22(4.5)	2.85(4.3)	45 (18.83)	%84°E (%84°E) 東北(1)・東北(1)	-	-	2	-
	RA082 平安	平安	4.31	3.8(4.2)	4.26	3.2(3.7)	2.81(5.0)	1.93 (1.90)	3.50	23 (12.48)	N45°W (N45°W) 北西(1)	45 (18.83)	-	-	-	-
	RA064 平安	平安	(3.80)	4.90	2.2(3.7)	2.6(3.7)	2.43(5.8)	5.20 (3.76)	4.57 (3.74)	34 (24.34)	N49°W (N49°W) 北西(1)	46 (15.63)	47 (4.11)	-	47	47
	RA080 魚食	平安	5.84	1.96(5.1)	-	-	4.59(5.4)	0.37(4.7)	2.85 (1.86)	2.72(3.9)	35 (15.55)	N48°W (N48°W) 北西(1)	-	-	2	60
	RA071 魚食	平安	1.91(4.2)	-	-	-	10.5(4.3)	0.16(3.5)	0.13(3.9)	26 (13.20)	N60°E (N60°E) 東北(1)	-	-	-	-	
24次	RA085 平安	平安	2.0(3.4)	0.67(3.8)	4.75	4.65	4.39 (3.80)	4.97 (3.80)	59 (3.80)	22 (13.20)	N47°W (N47°W) 北西(1)	29 (13.20)	-	-	67	67
	RA057 勝利	平安	4.80	-	2.38	1.44	-	41 (3.80)	2.78 (3.80)	40 (3.80)	N109°E (N109°E) 東北(1)	-	-	-	-	-
23-29次	RA060 平安	平安	(3)	3.00	-	-	-	-	-	-	P12 (1103×(-))	-	-	-	1	1
	RA076 平安	平安	5.38	-	-	-	-	-	-	-	P12 (1103×(-))	-	-	-	2	2
29次	RA077 勝利	平安	6.23	(5.28)	-	-	6.25	-	5.92 (5.28)	50 (34.82)	N44°W (N44°W) 北西(1)	-	-	4	4	4
	RA078 平安	平安	5.9	4.65	3.30	4.64	1.9	16.70	N107°E (N107°E) 東北(1)	N63°E (N63°E) 東北(1)	-	-	-	1	1	
	RA079 平安	平安	3.84	4.00	(3.98)	3.88	3.22	12.60	N46°E (N46°E) 北西(1)	N48°E (N48°E) 北西(1)	-	-	-	2	2	

() 内附有

第9表 第23・24・29次カマド計測表

調査次	遺構名	位置	基底(m)	窓面		窓面	縦長(m)	横幅(m)	窓面	窓面		窓枠	柱構成	柱長(m)	燃焼灰灰板	灰糊	天井石	積出面
				長さ(m)	幅(m)					縦(m)	横(m)							
23次	RA069 里	里	5.12	N64°E	-	144.20	1.5	44	44	42	42	軽質骨	シルト	-	100	30×40	-	
	RA082 里	里	(4.20)	N63°E	-	65.00	46	52	38	-	-	軽質骨	シルト	110	40×40	-		
	RA082 里	里	(4.20)	NS	-	140.00	34	34	40	-	-	軽質骨	-	-	70×64	-		
23次	RA084 西	西	(4.90)	N70°W	-	145.00	20	45	31	軽質骨	シルト+土	シルト+土	シルト	74	35×66	-		
	RA066 北西	北西	4.09	N45°W	-	135.00	28	31	44	軽質骨	シルト	シルト	シルト	58	50×50	-		
	RA066 北西	北西	(4.70)	N49°W	-	122.00	25	41	68	軽質骨	シルト	シルト	シルト	68	60×40	BTFH=45(1)		
	RA070 南西	南西	(4.70)	N156°E	-	141.00	25	45	40	-	-	軽質骨	シルト	42	100×45	-		
	RA071 北西	北西	(2.56)	N48°W	-	150.00	35	30	38	-	-	軽質骨	シルト	42	58×22	土保持 壁		
	RA083 里	里	(3.60)	-	-	146.00	14	34	29	軽質骨	シルト	-	-	-	50×43	-		
24次	RA069 北西	北西	4.60	N47°W	-	134.00	15	32	65	軽質骨	シルト	-	-	-	-	-		
	RA069 里	里	2.38	N109°E	-	114.00	12	31	70	軽質骨	シルト	-	-	80	60×50	不規則		
23-29次	RA060 里	里	3	N68°E	-	132	25	38	45	軽質骨	シルト	-	-	85	-	-		
	RA077 北西	北西	6.13	N44°W	-	158	43	29	64	軽質骨	シルト	-	-	102	-	-		
29次	RA078 里	里	4.65	N100°E	(35)	(30)	-	-	-	軽質骨	シルト	-	-	68	-	-		
	RA079 里	里	4	N68°E	(36)	(32)	-	-	-	軽質骨	シルト	-	-	86	-	86		

は自然礫が出土しており、芯材の可能性がある。ほかは地山土積み上げによって構成されている。地山削り出しによる構築の痕跡は認められない。

② 支脚 RA071は土師器壺が支脚である可能性がある。RA079においてカマド燃焼部に土師器壺が逆位で4個重ねられた状態で出土している。被熱による劣化は認められない。

③ 煙道・煙出 煙道は切り貫き式が主である。切り貫き式と判断できなかったカマドは検出面から遺構床面までの深さが非常に浅く、煙道天井部が失われている可能性もある。煙出にはRA070に投げ込みの跡が認められるほかは遺物の出土はない。

④ カマド方位 第82図参照。奈良時代のカマド方位はN 44° ~ 49° -Wに納まり、北西壁に作られる規則性が高い。また、カマドは北西壁のほぼ中央に作られる傾向が認められる。一方平安時代はN 80° -EからSNまでと奈良時代ほどの規則性ではないが、奈良時代のように西壁には作られない傾向がある。これは第12・15次調査においても同様である（阿部2003）。

⑤ 作り替え カマドの作り替えがあるのはRA062・RA078の2棟で、それぞれカマドが新旧2基検出された。RA062は南壁にカマドが作られた後、東壁に作り替えがなされている。一方、RA078は東壁北寄りにカマドが作られた後、同じ東壁の南寄りに作り替えがなされている。RA062・RA078は床面積がほぼ同じ中形の規模である。第15次調査ではRA042・048・051において新旧2基が認められる。RA042・048は同じ壁面での移動、RA051は隣り合う壁面に移動している。全体数として、カマドの作り替え行為は少ない傾向にある。

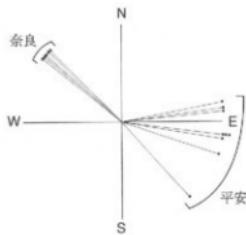
⑥ 貯蔵穴 カマド脇に貯蔵穴が認められるのはRA068・RA078である。RA076は貯蔵穴と思われるピットが検出されたが、カマドを検出していないため位置関係が不明である。RA078はカマドに向かって左、RA078は旧カマドが右、新カマドが左に作られている。規則性があるのではなく、住居構造上の制限による配置の可能性が高い。

小結 野古A遺跡堅穴住居跡は奈良時代と平安時代のものがある。奈良時代住居の床面積は小形から超大形まで4パターンが認められる。第23・24・29次調査においては中形から大形の住居が検出された。カマドは全て西壁の中央に作られる。主柱穴は4本柱が多い。一方平安時代住居跡は小形から大形までの3パターンが認められる。奈良時代のような超大形は検出されていない。第23・24・29次調査においては小形から大形までバラエティーに富む。カマドは東側に多いが、奈良時代のような厳密な規格性ではない。主柱穴は明瞭なものが少ない傾向である。各時代住居跡の立地は、奈良時代が高位面からやや低い地点まで分布範囲が広く、平安時代は高い段丘面に限定される。奈良時代と平安時代住居はほぼ重複が認められないため、平安時代の人々は埋まりきらない奈良時代住居を避けて集落を構築した可能性がある。

(八木)

参考文献

- 盛岡市教育委員会 1998 「(15) 野古遺跡」『盛岡市埋文化財調査年報 平成5・6年度』盛岡市教育委員会
 高木晃ほか 2003 『細谷地遺跡発掘調査報告書—第4・5次調査—』岩手県文化振興事業団埋文化財調査報告書第414集
 菅原靖男 2003 『野古A遺跡第12次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋文化財調査報告書第420集
 阿部満満 2003 『野古A遺跡第15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋文化財調査報告書第421集



第82図 カマド方位

2 野古A遺跡 第19・20・29次調査区検出の陥し穴状土坑について

零石川右岸の盛岡南新都市土地区画整理地域では古代の集落跡が多数確認・調査され、注目を浴びている。他の時代では本宮熊堂A遺跡や細谷地遺跡に縄文時代晚期の集落跡が認められるほか、狩猟場と考えられる陥し穴状土坑群も6遺跡・14次回の調査で見つかっている。

野古A遺跡では今回の第29次調査南調査区において縄文時代と考えられる陥し穴状土坑4基を確認した。過去の調査では、平成15年度の第19・20次調査において溝状形態の陥し穴状土坑が14基検出されている。ここでは第19・20・29次調査の18基を合せ、盛岡南新都市土地区画整理地区における縄文時代晚期の陥し穴状土坑について考察を行う。

(1) 第19・20・29次調査区検出陥し穴状土坑

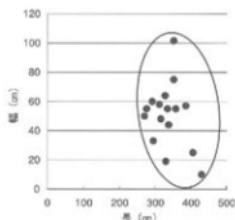
第19・20次調査区と第29次調査南調査区南西端に縄文時代の陥し穴状土坑と考えられる溝状の上坑は18基まとまって検出した。19次調査区に隣接する、平成16年度調査の第23次調査区では検出していない。以下、野古A遺跡の陥し穴状土坑の傾向を提示する。

【規模】 開口部は長さ270~430cm(平均334.7cm)・幅10~102cm(平均54.5cm)に分布し、底面は長さ255~440cm(平均335.7cm)・幅8~43cm(平均19.37cm)にまとまる。現況の幅は、上面の削平の状態によっては実態を現さない可能性が大きいため、検出面の差異による影響がないと考えられる底面における長幅分布図を第84図に示した。図を見ると、長さは連続するが幅において8~19cmと28~43cmに断絶が認められる。

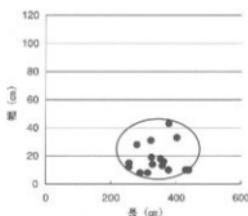
【堆積土】 最下層に黒色土が堆積し、中位に褐色土壁面崩落土が堆積、上位には黒色土が堆積していることが多い。このような堆積の様相は、使用時、あるいは廃絶後に表土の黒色土が流入し、壁面崩落土が堆積、上位の黒色土は再び表土が流入するという自然堆積の様相を呈していると考えられる。

【深さ】 深さは検出面と上部の擾乱により上下するが、49~105cm(平均76.84cm)に分布する。

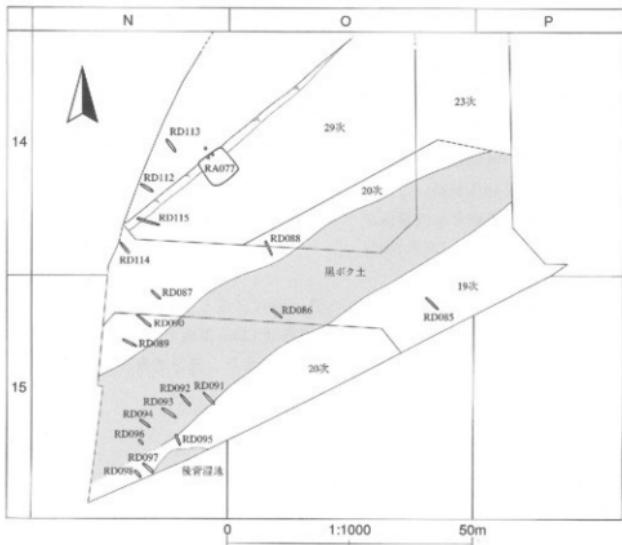
【立地・配列】 第85図参照。第19・20次調査区において北東~南西に帯状に黒ボク層が認められた。また、20次調査区南端において後背湿地が確認されている。第29次調査区においても黒ボク層に並行する段差が確認され、18基全て等高線に垂直に配置されるものと判断できる。また、等高線に垂直なだけでなく、平坦面中央には配置されず、傾斜変換線沿いに大きく3列で配列されていることが判る。第29次調査では北側2基と南側2基はそれぞれ規模が近似しており、2基1セットとして作られた可能性もある。



第83図 陥し穴状土坑開口部長幅分布図



第84図 陥し穴状土坑底面長幅分布図



第85図 野古A遺跡 陷し穴状土坑配置図

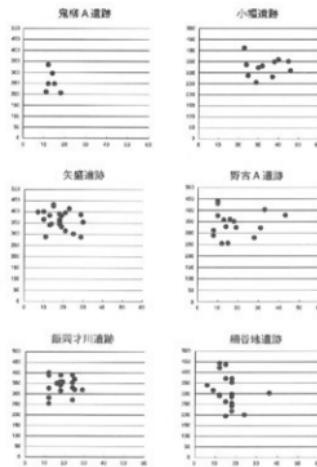
(2) 盛岡南新都市地区画整理事業の陥し穴状土坑

8 遺跡 19回の調査で112基が検出されている。

[規模] 第86図参照。全体の平均値で開口部の長さ342cm幅63.3cm、底面長さ330cm幅19.4cm、深さ82.3cmである。遺跡毎に底面平均長幅分布を見ると、小幡遺跡326×34cm、鬼柳A遺跡257.3×13.67cm、矢盛遺跡363×18cm、飯岡才川遺跡339×18.9cm、細谷地遺跡310×16.26cmである。本宮熊堂B遺跡は1基のみの検出で116×25cmである。

[立地・配列] 野古A遺跡・鬼柳A遺跡・本宮熊堂B遺跡・矢盛遺跡の陥し穴状土坑はほぼ全て等高線に垂直あるいはほぼ垂直に配置されている。飯岡才川遺跡は遺構配置図に標高線がないため詳細には確認できなかったが、現況の地形図から判断するとはほぼ垂直に配置されているものが多い。細谷地遺跡は15基(79%)が等高線に垂直、4基(21%)が並行に配置されている。

それぞれの立地は、細谷地遺跡・矢盛遺跡は隣接しており一続きの旧河道沿いに立地している。また飯岡才川遺跡



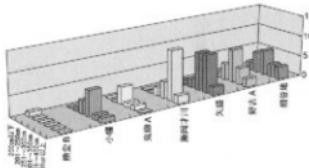
第86図 近隣遺跡検出陥し穴状土坑開口部長幅分布図

も同じ旧河道を挟んだ対岸に位置しており、一帯が大規模な狩場として利用されていたことが窺える。

小結

細谷地遺跡では、2本の旧河道に挟まれた微高地上に陥し穴状土坑が集中している。このことに加え、「旧河道の堆積土はシルト質ないし粘土質で、陥し穴が構築された当時には帶水性の湿地であった可能性が高いことから、水場に集まる動物を対象とした罠獵が行われていたものと考えられる。」(高木 2003)との分析結果が得られている。

野古A遺跡では、古代集落の中心から離れた低い地点にまとまっている。標高も集落の中心は125m前後であるのに対し、陥し穴状土坑集中区の標高は124m前後と1m程の標高差が認められる。また、第19・20次調査区の南端は後背湿地も確認されており、細谷地遺跡同様、水場に集まる動物を対象とした罠獵が行われていたものと考えられる。



第87図 陥し穴状土坑底辺長さ別検出数

(八木)

参考文献

- *以下、次の通り省略する。 (財)岩文埋セ: (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 岩文埋文化財調査報告書: 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
- 福田友之 1981 「溝状ピット」研究に関する覚書』『弘前大学考古学研究』第1号 弘前大学考古学研究会
- 坂本真弓・杉野春淳子 1997 「青森近県における陥し穴集成」『研究紀要』第2号 青森県埋蔵文化財調査センター
- (財)岩文埋セ 1996 『小幅遺跡第2次発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第244集
- 盛岡市教育委員会 1998 『盛岡市埋蔵文化財調査年報 平成5・6年度』盛岡市教育委員会
- (財)岩文埋セ 1998 『大宮北遺跡・本宮熊堂A遺跡発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第281集
- (財)岩文埋セ 1998 『野古A遺跡第10次調査』『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第282集
- (財)岩文埋セ 1999 『飯岡才川遺跡第2次調査』『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第311集
- (財)岩文埋セ 1999 『本宮熊堂B遺跡第4次・鬼柳A遺跡第4次発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第308集
- (財)岩文埋セ 2001 『飯岡才川遺跡第4次調査』『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第370集
- (財)岩文埋セ 2001 『鬼柳A遺跡第7次調査』『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第370集
- (財)岩文埋セ 2002 『熊堂B遺跡第10次発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第377集
- (財)岩文埋セ 2003 『矢盛遺跡第4次調査』『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第423集
- (財)岩文埋セ 2003 『細谷地遺跡発掘調査報告書—第4・5次調査—』岩文埋文化財調査報告書第414集
- (財)岩文埋セ 2004 『矢盛遺跡第3次・熊堂B遺跡第14次発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第451集
- (財)岩文埋セ 2004 『飯岡才川遺跡第5次調査』『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第455集
- (財)岩文埋セ 2004 『飯岡才川遺跡第6次調査』『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第455集
- (財)岩文埋セ 2004 『野古A遺跡第19次調査』『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第455集
- (財)岩文埋セ 2004 『野古A遺跡第20次調査』『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第455集
- (財)岩文埋セ 2005 『矢盛遺跡第5次調査』『平成16年度発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第469集

第10表 盛岡開発地域内陥し穴状土坑一覧（2）

道跡名	通路名	位置	平面形	開口径(cm)	底面積(cm)	深さ(cm)	等高線	標高	備考
矢盛 第4次	57 RD010	2C10m	溝状	414 41	432 15	115	垂直	122.6	遺物なし
	58 RD022	3B1u	両頭形	334 44	363 18	103	垂直	122.5	遺物なし
	59 RD023	3B3s	溝状	384 25	398 7	75	垂直	122.5	遺物なし
	60 RD024	3B4r	両頭形	381 31	384 13	74	垂直	122.6	遺物なし・風呂本？付随ビット
	61 RD025	3B4p	溝状	322 46	345 14	96	垂直	122.6	2個なり
	62 RD026	3B4o	溝状	370 46	395 21	100	垂直	122.7	遺物なし
	63 RD027	3B5r	溝状	322 36	357 18	95	垂直	122.6	遺物なし
	64 RD028	3B6	溝状	334 27	287 11	92	垂直	122.4	遺物なし
	65 RD032	3B5u	溝状	323 25	340 13	81	垂直	122.4	遺物なし
矢盛 第5次	66 RD038	3A25t	溝状	390 30	400 10	66	垂直	122.6	遺物なし
	67 RD040	3A24u	溝状	346 30	365 10	104	垂直	122.6	遺物なし
	68 RD039	3A24v	溝状	363 34	425 15	89	垂直	122.6	遺物なし
飯岡才川 第2次	69 RD02	X-36.003 Y26.015	溝状	356 55	356 18	85		123.4	遺物なし
	70 RD03	X-35.967 Y26.043	溝状	352 42	356 19	61		123.6	遺物なし
	71 RD04	X-35.982 Y26.250	溝状	261 55	254 12	70		123.6	遺物なし
飯岡才川 第4次	72 RD21	X-36.006 Y26.366	溝状	333 49	327 12	67		122.1	遺物なし
	73 RD25	X-36.006 Y26.350	溝状	305 67	315 18	36		122.2	遺物なし
飯岡才川 第5次	74 RD033	-1B7t	溝状	372 55	379 25	50		123.5	遺物なし
	75 RD034	-1B6f	溝状	398 25	320 25	55		123.5	遺物なし
	76 RD035	-1B7n	溝状	320 43	282 12	65		123.5	遺物なし・風呂本？
	77 RD036	-1C7g	溝状	375 98	350 16	67		123.5	遺物なし
	78 RD043	-1C18t	溝状	400 82	329 24	76		123.4	遺物なし
飯岡才川 第6次	79 RD044	-1C6a	溝状	341 94	271 24	59		123.5	遺物なし
	80 RD045	-1B2v	溝状	353 71	318 29	94		123.7	遺物なし
	81 RD046	-1D17t	溝状	365 71	388 24	118		123	遺物なし
	82 RD047	-1C18f	溝状	412 94	400 12	88		123	遺物なし
	83 RD048	-1C21w	溝状	376 59	400 12	106		123	遺物なし
	84 RD049	-1C20s	溝状	365 59	368 18	94		123	遺物なし
	85 RD050	-1C18g	溝状	388 59	353 24	59		123.1	遺物なし
	86 RD051	-1C12s	溝状	378 82	341 18	76		123.1	遺物なし
	87 RD052	-1C19t	溝状	300 82	271 24	82		123.1	遺物なし
	88 RD053	-1C16f	溝状	412 71	388 12	82		123.1	遺物なし
	89 RD71	2E1k	溝状	308 52	280 12	68	垂直	122.2	遺物なし
	90 RD91	2D1	溝状	377 60	370 18	48	垂直	122	遺物なし
船岡地 第4・5次	91 RD92	1D25h	溝状	(228) 25	(230) 9	44	垂直	122	一部調査区外
	92 RD93	1D22q	溝状	342 20	339 6	28	並行	122	一部調査区外
	93 RD95	2E18h	溝状	(316) 80	(303) 15	106	垂直	122.4	遺物なし
	94 RD97	2E14s	溝状	426 105	421 12	100	垂直	122.2	一部調査区外
	95 RD98	2E18n	溝状	360 54	370 15	70	並行	122.4	遺物なし
	96 RD100	2E16p	溝状	256 76	242 18	75	垂直	122.4	遺物なし
	97 RD101	2E18p	溝状	372 62	352 18	78	垂直	122.4	遺物なし
	98 RD103	2E19k	溝状	(270) 84	(242) 12	70	垂直	122.5	遺物なし
	99 RD104	2E17l	溝状	276 70	261 15	70	並行	122.4	一部調査区外
	100 RD114	3E11	溝状	310 102	303 35	85	並行	不明	貝岩群・削出土
	101 RD120	2F10e	溝状	(275) 60	(273) 9	98	垂直	122.2	遺物なし
	102 RD121	2F10g	溝状	320 55	315 9	98	垂直	不明	一部調査区外
	103 RD122	2F12g	溝状	422 106	436 15	120	垂直	122.1	遺物なし
小箱通跡	104 RD123	2E24a	溝状	250 90	194 15	90	並行	122.3	遺物なし
	105 RD127	2E24y	溝状	300 108	254 18	105	垂直	122.3	遺物なし
	106 RD128	2F21f	溝状	285 73	294 12	100	垂直	122.2	遺物なし
	107 RD129	2F21h	溝状	255 80	218 18	105	垂直	122.2	遺物なし
	108 RD130	2F18f	溝状	418 83	442 12	108	垂直	122.2	遺物なし
	109 RD132	2E14t	溝状	314 100	297 18	106	垂直	122.3	遺物なし
	110 RD133	2E16y	溝状	346 112	285 18	90	垂直	不明	遺物なし
	111 RD134	2E10p	溝状	242 70	200 24	104	垂直	122.3	遺物なし
	112								遺物なし

3 墓 壇

(1) 抽出と特徴

野古 A 遺跡では過去の調査も含めると 100 基を超える多数の土坑 (RD) が検出されている。その中で、性格を特定することができる土坑はきわめて少ない。しかし、これら土坑の中には墓壇である可能性が高いものがいくつか存在する。本書で報告した野古 A 遺跡第 23・24・29 次調査では、墓壇であると考えられる土坑を計 3 基検出した。第 23 次 RD103・108、第 29 次 RD116 の 3 基である。3 基ともに骨片等の出土はみられなかったが、以下の理由で、墓壇である可能性を指摘した。いずれも平面形態は長方形・方形を基調としており、比較的整った形態である。また、底面は平坦で、壁は垂直に近い急角度で立ち上がる。やはり整った断面形を呈し、方形基調の形態である。埋土は各種ブロックを多く含み、人為的に埋め戻しがおこなわれた様相を呈する。特に、RD103・108 は、砂質の火山を掘り込んでおり、砂質の埋土である。のことから掘削後、掘削排土による埋め戻しが一連の作業の中でおこなわれたと考えられる。すなわち、穴を掘った後あまり時間を空けず、埋め戻すという行為が想定され、土坑が墓壇や何らかの埋納造構などの特殊な特性を持つことが考えられる。同様に、過去の調査におけるこのような土坑は、第 12 次調査 RD039 が挙げられ、これを含めた 4 基の土坑について詳しく分析する。

平面形態は方形と長方形のものの 2 種認められる。RD116 が方形であり、その他の 3 基は長方形である。なお、方形・長方形と 2 種の平面形態があることは周辺遺跡においても確認されている。さらに、長方形の RD039・103・108 は短辺と長辺の比が、それぞれ 1 : 1.31・1 : 1.28・1 : 1.25 である。平均すると短辺 1 に対して長辺 1.25 の長方形である。野古 A 遺跡では検出されていないが、近隣の本宮熊堂 B 遺跡第 18 次や台太郎遺跡第 26 次などでは、約 1 : 2 の比の長方形プランを呈する墓壇も確認されている。検出された 4 基の墓壇の主軸方向は必ずしも一定ではないが、もっとも近接する竪穴住居と概ね同じ主軸方向にある。住居に対して何らかの意識があったのかもしれない。また、RD108・116 は底面より遺物が出土した。RD108 からは礫石器 1 点、RD116 からは土師器壺や土師器壺片などが出土した。これらは墓壇に伴う遺物であると考えられる。しかし、遺物が副葬品のような性格を有するものであるかどうかは不明である。

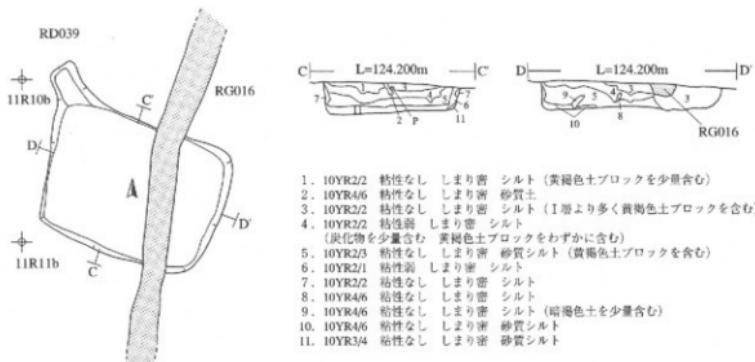
(2) 分布と時期

以上の条件より墓壇である可能性の高い土坑は集落内居住域に展開する。これは集落中心部でもなく、集落外縁部でもない位置に存在する。さらに、比較的竪穴住居に近い場所に位置している。また、これら墓壇同士はそれぞれ近接せず、30~100 m の距離を置いて存在する。つまり、墓群を形成せず、単独で集落内に散在するという分布状況である。

時期については、4 基ともに遺物や埋土中に含まれる火山灰より平安時代に属するものと考えられる。また、周辺集落における同様の墓壇も平安時代（9~10 世紀）に属するものが多い傾向である。ちなみに、古墳~奈良時代において、この種の墓壇は周辺遺跡では確認されていない状況である。周辺遺跡でも古墳~奈良時代の竪穴住居は検出されていることを考えると、この時期は今回取り上げているような墓壇は出現していない可能性が考えられ、平安時代（9~10 世紀）に特有の葬法であるのかもしれない。また、墓壇の時期は火山灰や出土する遺物より、遺跡内で検出された平安時代の竪穴住居と大きく隔たるとは考えられない。したがって、墓壇と竪穴住居とは同時期に併存している可能性が考えられる。

(3) 葬法と墓制

規模・形態を考えると成人男性が伸展あるいは横臥屈葬される状態に適している。また、鉄釘が出



第88図 野古A遺跡 第12次RD039 (S=1:40)

土ないこと、堆積土に棺の痕跡が認められないことから、遺骸を直接埋葬している可能性が高い。また、墓場に付属する墳丘・周溝・覆い屋・墓標などの施設も確認できない。以上のことから、これら墓場はいわゆる上墳墓と呼ばれる比較的簡素な形態の墓であると考えられる。

この盛南地域では、9～10世紀、集落内に簡素な長方形あるいは方形の土坑墓が造られていたと考えられる。野古A遺跡では、これまで34棟もの平安時代の堅穴住居が検出されているが、これに比べ土墳墓の数は4基と極めて少ない。仮に、これら34棟すべての堅穴住居が同時併存していなかったとしても、土墳墓の検出数は極端に少ないとと思われる。また、近接する本宮熊堂B遺跡のように居住域内で土墳墓が検出されても、古代の居住域から外れている低位面（本宮熊堂A遺跡）、高位面（稻荷遺跡）など集落外れに土墳墓が検出されていない。このことを考えると居住域の外には土墳墓は存在していないようである。また、検出数を考えると集落内で生活を営んでいた人々すべてが土墳墓に埋葬されたとは考えられない。しかし、平安時代の堅穴住居には身分的な格差を示すような特徴はみられない。このように集落内の土墳墓にどのような人が葬られたのか想像すらできないが、身分の優劣は別として、ある程度限られた特定の人物がこのような土墳墓に葬られたのではないだろうか。

(福島)

引用・参考文献

- 盛岡市教育委員会 1998 「野古遺跡」『盛岡市埋蔵文化財調査年報 平成5・6年度』盛岡市教育委員会
- 菅原清男 2003 『野古A遺跡第12次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第420集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 阿部眞澄 2003 『野古A遺跡第15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第421集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 福島正和 2005 『本宮熊堂B遺跡第18次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第458集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 東日本埋蔵文化財協会 1995 『東日本における奈良・平安時代の墓制』東日本埋蔵文化財協会

4 土 器

(1) 分類と器種構成

〈古墳～奈良時代〉(集成図 RA067・068・077)

当概期における供膳形態は土師器壺が主体であり、壺類はロクロを用いないものである。また、ほとんどの内面に黒色処理が施される。本稿では、このようにロクロの回転力を用いない土師器壺を土師器壺I群と分類した。第23・24次、RA067・068などの堅穴住居より出土している。これら壺類は段・稜線・沈線などによって口縁部と底部が区分される例が多い。今回の調査では壺の出土数が少なく、明確に分化することはできないが、周辺集落も視野に入れるならば、法量により大(A類)・中(B類)・小(C類)の3形態に分類可能である。しかし、主体となるのは中(B類)である。

また、これら土師器壺I群B類の中には器壁がやや薄く全体にシャープであり、体部の段が明瞭で、器高の低いものが認められる。また、これらは底部にヘラケズリの痕跡が認められ、丸底ながらもやや扁平な形態である。宮城・福島県域など東北地方南部を中心とする栗団式あるいは、それに後続する国分寺下層式などに直接系譜を求められる形態の壺である。集成図に掲げたRA068-3や4などがこれに該当し、便宜的に土師器壺I群B類a形態としておく。

一方、体部に段・稜・沈線があるが、器壁が厚く、器高が高めのものも存在する。これらは概ね半球形の丸底である。東北地方北部を中心にみられ、宮城県域では北部で多くみられる形態である。集成図に掲げたRA068-5～7などがこれに該当し、便宜的に土師器壺I群B類b形態としておく。

今回の調査では出土していないが、以上の2形態以外に体部に段・稜・沈線など口縁部と底部とが明確に区分されないものを便宜的に土師器壺I群B類c形態としておく。

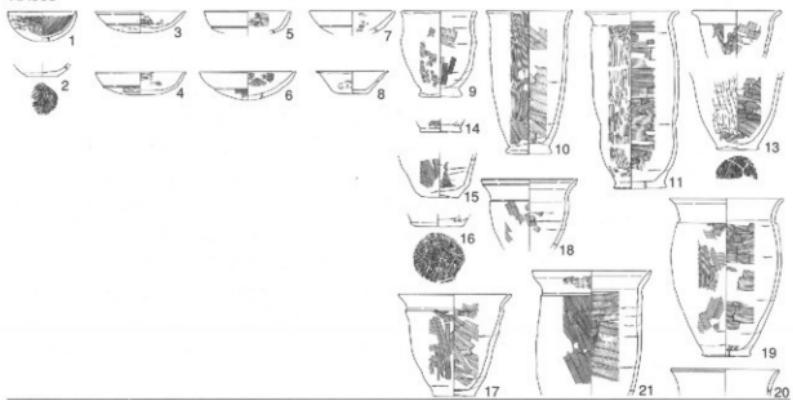
さらに、関東系土師器と呼ばれる土師器も周辺集落を含めわずかながら出土している。今回の調査ではRA068-1がこれに該当する。関東系土師器の中にも様々な形態のものが存在しているが、ここでは一括して土師器壺I群B類d形態としておく。

当概期における煮沸形態は土師器壺が主体である。壺類と同様、ロクロを用いないもので構成されている。このように製作に際してロクロの回転力を利用しない土師器壺を土師器壺I群と分類した。第23・24・29次調査では、RA068・RA067・RA077などの堅穴住居より出土している。体部でわずかな膨らみを持つのみの長胴形を呈し、口縁部と体部の境目には段・稜・沈線などの区分が比較的明瞭なものが主である。これら土師器壺I群は、法量により大(A類)・小(B類)に2分することが可能である。また、それぞれ段・稜・沈線などで口縁部が区分されるもの(a形態)とされないもの(b形態)に分けられる。後述するが、周辺遺跡を含め盛岡地域でみられない県北特有の形態を有する土師器壺がRA068より出土している。これら特徴的な壺を亞種として今回はc形態としておく。今回出土したもので主となるのは、土師器壺I群A類a形態である。

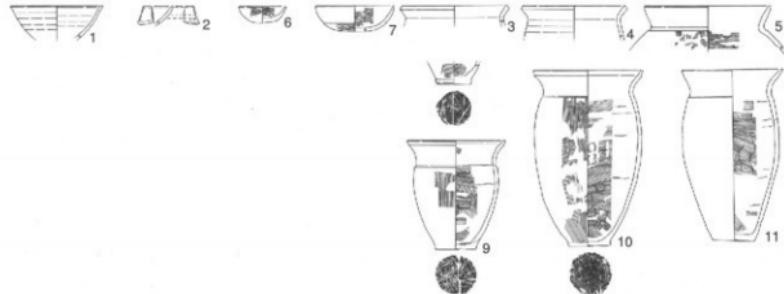
当概期における貯蔵形態は土師器壺が主体である。これは球胴壺とも呼ばれる器種であり、原則的に煮沸痕跡が認められる土師器(長胴)壺とは区別した。これらもやはりロクロを用いないもので構成されている。このように製作に際してロクロの回転力を利用しない土師器壺を土師器壺I群と分類した。第23・24・29次調査では、RA067・RA077などの堅穴住居より出土している。出土頻度は土師器壺に比べると全体的にかなり少ない傾向である。体部で横に膨らみを持つ球胴形を呈し、口縁部と体部の境目には段・稜・沈線などの区分が比較的明瞭なものが主である。これら土師器壺I群は、法量により大(A類)・小(B類)に2分することが可能である。今回の調査では大(A類)のみの出土であるが、周辺集落も視野に入ると小(B類)も存在するため今回も2つに分類した。

土師器壺I群A類は形態の特性上、体部に最大径が生じる。その体部の最大径の位置について、上

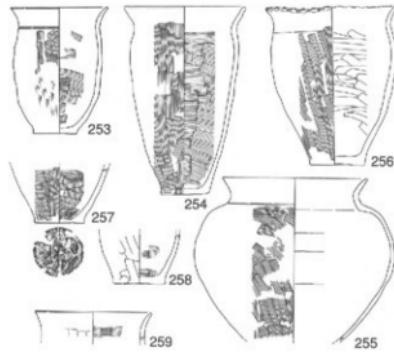
RA068



RA067

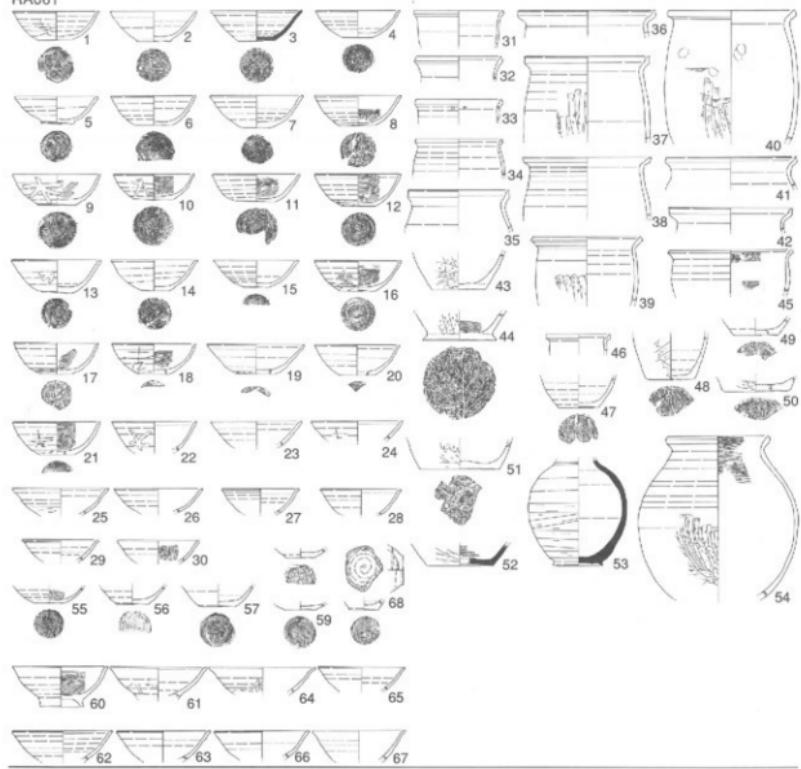


RA077

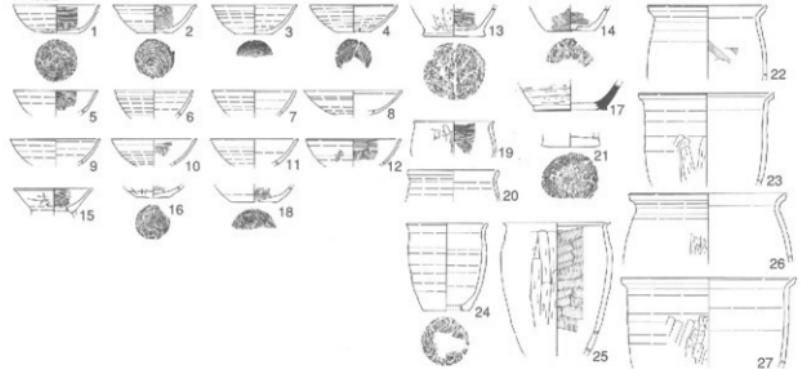


第89図 土器集成図（1）

RA061

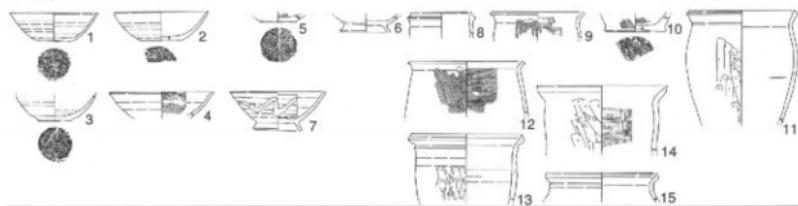


RA062

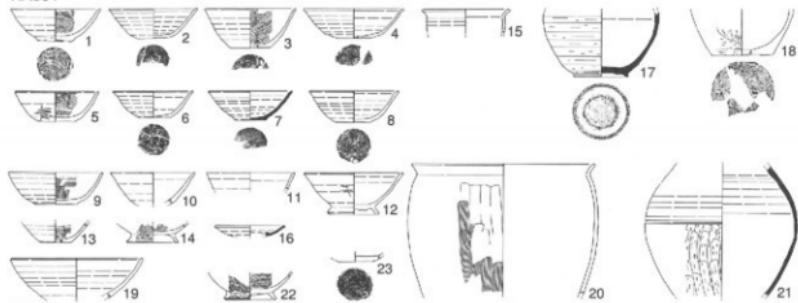


第90図 土器集成図（2）

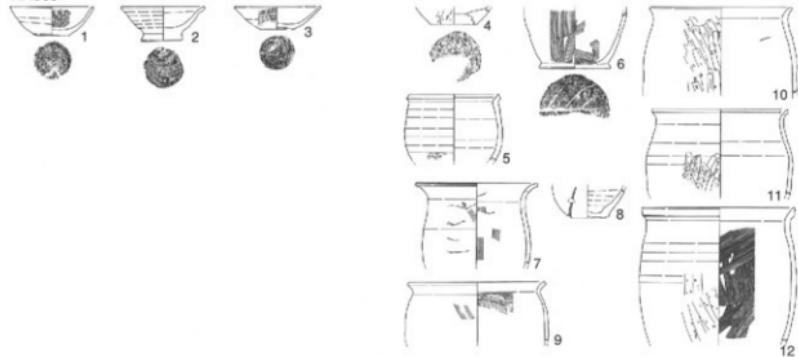
RA063



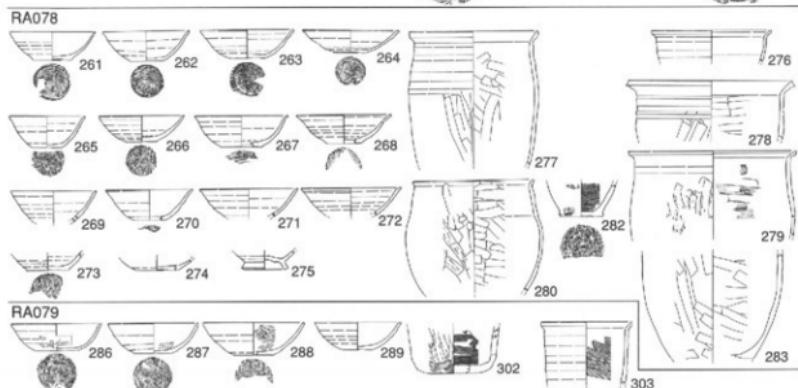
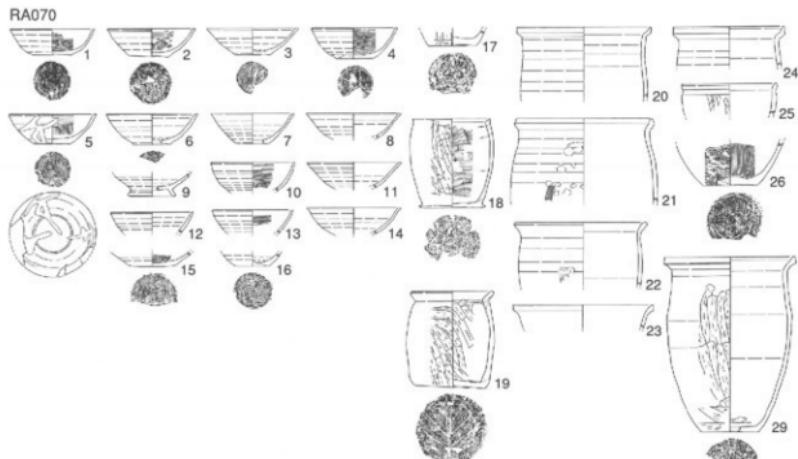
RA064



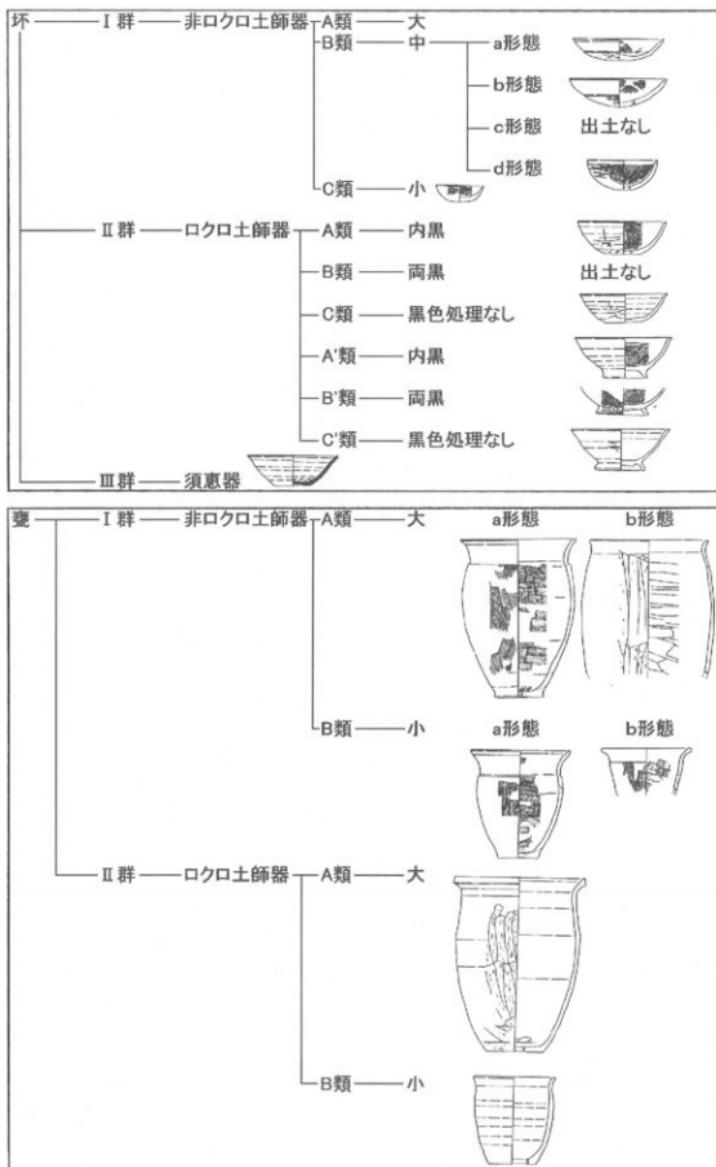
RA069



第91図 土器集成図（3）



第92図 土器集成図（4）



第93図 土器分類図

位にあるもの（a形態）・中位にあるもの（b形態）・下位にあるもの（c形態）の3種に分けることができる。今回の調査出土資料で、このような形態が判明するのはRA077出土の土師器壺のみで、集成図では255である。これは土師器壺I群A類a形態と分類することができる。

〈平安時代〉（集成図RA061～064・069・070・078・079）

当概期における供膳形態は前代と比較すると、土師器壺が主体であることに変わりはないが、これに須恵器壺が加わる。また、土師器壺はロクロが用いられたものに変わる。したがって、供膳形態はロクロの回転力を用いる土器のみの構成となる。このようにロクロを用いる土師器壺は土師器壺II群とした。内面ミガキ・黒色処理されるもの（A類）、内外面ともにミガキ・黒色処理されるもの（B類）、ミガキ・黒色処理のまったく施されないもの（C類）の3種に分けることができる。また、これら土師器壺II群A類～C類は、それぞれ高台の付かないもの（A～C類）と、高台の付くもの（A'類、B'類、C'類）とに分けられる。

当概期における煮沸形態は前代と同様に土師器壺が主体である。しかし、前代はロクロが用いられない土師器壺I群のみの構成であったのに対して、当概期はロクロが用いられる土師器壺II群が加わる。土師器壺I群は法量により大（A類）・小（B類）の2分することができる。同様に、土師器壺II群においても、法量により大（A類）・小（B類）の2分することができる。前代より続く形態である土師器壺I群は、前代とは異なり段・後・沈線などで口縁部が区分されないもの（b形態）のみで構成される。さらに、土師器壺I群はA類、B類とともに、口縁部が外反あるいは外傾し頸部が明瞭なもの（b1形態）と体部と口縁部が直線的に連続し、括れが小さいもの（b2形態）、頸部の括れないが、急角度で口縁部のみが外方に短く折れ曲がるもの（b3形態）に分かれる。次に土師器壺II群は口縁端部の形状の差により、上方へ頸著に摘み上げられたようなもの（a形態）、上方へ伸びないが端面を持つものの（b形態）、端面を持たず丸く収められているもの（c形態）に分けられる。

当概期における貯蔵形態は須恵器壺、須恵器壺が主体で、土師器壺や鉢がこれらを補う。土師器壺は前代においてロクロを用いない土師器壺I群のみであったが、当概期においてはロクロを用いる土師器壺II群のみとなる。この土師器壺II群は体部が球胴形に膨らみ、内面にミガキ・黒色処理が施される。このような内面調整から、煮沸機能を念頭に置いたものではなく貯蔵目的で製作されたとみるべきである。また、土師器壺II群の内面にミガキ・黒色処理を施したような器種である土師器鉢は、頸部に括れがほとんどないため土師器壺とは区分した。須恵器の貯蔵形態は壺・甕からなる。壺は大半が長頸壺（瓶）であると考えられる。今回出土した須恵器長頸壺は、いずれも底部に高台が付くもので占められている。また、口縁部や頸部を欠いているものが多いため分類が難しいところであるが、体部下半の調整について差異が認められる。この調整差は、ロクロの回転力を用いる横方向ヘラケズリのもの（a調整）、ロクロの回転力を用いない縦方向のヘラケズリのもの（b調整）に分けられる。

（2）土器の年代について

〈古墳～奈良時代〉

今回、土師器壺I群B類a形態としたものは、東北地方南部では栗沢式新段階、八戸地域では三段階に位置付けられている。これらの具体的な時期は7世紀後葉～8世紀前葉である。特に第89図RA068-3・4壺は口縁部と体部（底部）との境が明瞭で7世紀代の特徴が色濃いと考えられる。また、関東系土師器（第89図RA068-1）について、千葉県域では7世紀末～8世紀初頭と考えられており、その他の壺類と共にても何ら矛盾はなさそうである。一方、第89図RA067-7壺は口縁部と体部（底部）が不明瞭で連続的な形状を呈しており、先述したものより新しい要素であると考えられる。なお、過去の調査で土師器壺I群B類a形態は、第12次調査RA015・032、第15次調査RA047

・053などでも出土している。

土師器壺は口頸部に段・稜がある土師器壺I群A類a形態から徐々に段・稜の無い土師器壺I群A類b形態へと型式変化すると考えられている。また、土師器壺I群A類a形態は7世紀～8世紀半ばまで存続し、b形態へ型式変化する画期は8世紀後半～9世紀初頭とみられている。RA067・068は土師器壺I群A類a形態が主体である。しかし、RA077は土師器壺I群A類b形態である第88図254が存在し、8世紀後半に位置付けられる。また、これら土師器壺I群（非ロクロ）は、底部内面の断面形状が丸みを持つ「U」字形から扁平な形へと変化すると考えられており、RA067-10・RA068-19などは前者、RA067-11およびRA077-254は後者の形状である。この形態の変化は体部下半の膨らみとも連動するようで、体部下半が膨らみを持つものから膨らみを持たず、直線的に立ち上がるものへと変遷するようである。総合すると、土器がある程度まとめて出土した当概期の3棟（RA067・068・077）は時期的に古いものからRA068→RA067→RA077の順に並べることができる。

〈平安時代〉

この時期の土器は、前述した前代に比べると地域的な特徴があまりみられず、県内各地で出土する土器類は地域色の極めて乏しい状況にあるとされている。これまでの先行研究でなされた編年観を援用すると9世紀初頭～半ばについては県内の各城柵の出土資料が基準となっている。9世紀後半以降に関しては胆沢城およびその周辺資料が基準となっている。9世紀半ばを含む前半代は須恵器壺の形態・製作技法の特徴が標準として挙げられる。すなわち、低い器高・大きな底径（6cm超）・底部のヘラ切りなどである。これらの特徴を持つ壺は、野古A遺跡では出土しておらず、この時期以降の土器群で古められている。また、胆沢城が機能を失う10世紀半ば以降は古代的な土器様式から中世的な土器様式へと変容する時期に当たり、煮沸形態が激減し、供膳具（皿）が増加する。野古A遺跡の出土資料は新しくとも10世紀前半頃に収まると考えられる。この9世紀後半～10世紀前半の期間で、さらに詳細な時期を土器から特定することは容易ではないが、おおまかな時期決定をおこなう。

土師器壺は、詳細な時期を特定する資料は多く含まれていない。つまり、どの土器についてもこの時期に存在する通有のものである。ただし、RA069出土資料2の柱状高台壺は周辺ではみられない特殊な形態である。盛岡市域では同様の壺が堰根遺跡で出土しており、10世紀半ばから後半の土器であると考えられている。したがって、この土器を積極的に評価するならば、野古A遺跡の古代集落ではもっとも新しい時期とみられる。このような目で見れば、同じRA069出土3の壺についてもやや扁平な器形・外面調整など9世紀後半～10世紀前半にはみられない形態の壺である。資料が乏しいため即断はできないが、この2点の壺は10世紀前半以降の土器である可能性が考えられる。

ロクロが用いられない土師器壺I群は、前代の型式変化を踏襲することが志波城などで確認されている。したがって、口縁形態にその特徴は現れ、頸部の括れが明瞭なものから不明瞭なものへと変化する。実年代は判明していないが、10世紀半ば以降にはほとんど頸部と呼ぶことができる形態を有する壺はみられない。このことから、前項で分類した通り、土師器壺I群b1形態からb2形態あるいはb3形態のものへと時期が下るにつれて変化すると考えられる。土師器壺I群b1形態に属するものはRA063-12・RA069-9などが挙げられ、土師器壺I群b1形態に属するものはRA062-19・25、RA078-280などが挙げられる。

（3）特殊な土器について

〈第23次調査 RA068出土土師器壺〉

本書の報告でも述べたが、この土師器壺は関東系土師器壺ではないかと疑われる。千葉県域で出土

する7世紀後半～8世紀前半の土師器壺に似ている。形態が類似することは考えられるが、製作技法上の特徴が酷似する。また、このような技法は在地の土師器壺ではみられないものである。これらの点からみて「関東系土師器」と考えられる。

<第23次調査RA068出土土師器壺>

盛岡市域より北の地域でみられる壺の特徴を有する。通常の壺と比較した際に目に付く特徴は、細長い円筒状の体部、頸部から口縁部にかけての括れが小さく、段もみられない。底部は極度に厚く、接地部がやや外方に張り出す。以上のような特徴を有する壺が大・中・小の各サイズがRA068より出土した。このような土師器壺によく似た形態の壺が岩手県北部で出土している。久慈市平沢I遺跡GII-1住居出土資料の壺類は今回野古A遺跡で出土した特異な壺と形態的な共通点が多くみられる。これら独特な特徴を有する土師器を羽柴直人は「九戸型土師器」と呼称し、分析をおこなっている。また、「九戸型土師器」は九戸地方における地域色の強い土師器と捉えている。「九戸型土師器」の中において、上記平沢I遺跡出土資料を「2群土器」とし、7世紀後半の年代観を与えており。一方、本書では野古A遺跡RA068の土師器は7世紀末～8世紀初頭頃と報告しており、大幅な年代のズレはない。なお、盛岡市周辺では滝沢村諸葛川遺跡において出土している。

<第29次出土土師器壺>

花弁状の口縁端部を有する。非常に特異な形態であるため類例を探すことが困難である。

<第24次調査出土土師器羽釜>

羽釜という器種自体が類例として僅少であるが、多賀城跡第61次調査で出土している。関東地方においては平安時代の土器様式の中にみられる。

以上のように周辺集落ではほとんどみられない土器がこの野古A遺跡で出土している。このことから、どのような交流であったかはまだわからないが、他地域との何らかの交流があったことを示すものと考えられる。

(4)まとめ

以上のように、土器から遺跡を概観すると概ね7世紀後半から集落形成が始まり、9世紀前半に断続しながらも10世紀前半、場合によって半ば以降まで存続する可能性が考えられる。また、各時代ともに他地域との交流が土器から窺うことができ、周辺を含め遠距離の集落と何らかの交流があったと考えられる。

(福島)

引用・参考文献

- 宇都明保 2002 「東北北部型土師器にみる地域性」『海と考古学とロマン—市川金丸先生古稀記念献呈論文集一』市川金丸先生古稀を祝う会
- 福島正和 2005 「台太郎遺跡第54次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第486集 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 集落遺跡検討会編 2004 「岩手県土師器集成」 集落遺跡検討会
- 羽柴直人 1995 「岩手県九戸地方のロクロ使用以前の土師器」『紀要XV』(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 八木光則ほか 1985 『志波城I』 盛岡市教育委員会
- 柳生正一 1987 『諸葛川遺跡』 滝沢村教育委員会
- 市原市文化財センター 1989 『文作遺跡』 市原市教育委員会・市原市文化財センター

5 磔石器の使用痕跡

(1) 観察方法

奈良・平安期の庶民の暮らしには依然として敲石・磨石・円石などの敲磨器類が利用されている。今回の野古A遺跡第23・24次調査でも敲磨器類が出土しており、使用痕跡と考えられる明確な光沢面と線状痕が観察された。古代の石器に関する機能論的検討事例は少ないので、今後の研究の一助となりうると考え報告することとした。なお、主として磨面を観察対象としたため微小剥離痕については記載しない。観察に際し、光沢面タイプは御堂島分類（御堂島1986・1988）に従い、観察には金属顕微鏡オリンパス BM51 を使用した。また、写真撮影はデジタルカメラで行った。

(2) 観察結果

観察結果は第11表の通りである。器機の性能上、大型礫石器については観察していない。確認できた光沢はB・Cタイプなど明るいものが多い。線状痕は直線的な外観を呈するタイプaを主体とする。特徴的な使用痕は砥石に見られたため、現在発掘調査現場で利用している砥石を比較試料1として観察した。その結果、明瞭なCタイプ光沢が多数確認できた（写4）。225の表面でもCタイプを確認した。確認したCタイプは石器表面の凸部にしかみられない点に特徴がある（写1）。また、225の研磨面に青色の付着物が確認された（写2）。Cタイプ光沢面上にも確認されており石器表面凸部にのみ分布する。この付着物は凹部には見られない。ペイントスプレーの塗料や顔料成分を含む硬度の低い岩石であった可能性は低いだろう。考えられるのは接触した鉄製品の中に含まれる微量な銅・鉛などの成分か、何らかの酸化物質であろう。本遺跡では実施していないが、奈良・平安期の鉄製品主成分分析では銅・鉛などの微量元素の含有報告例がいくつもある。あくまで推定であり、理化学分析による検証を必要とするが、磨面に青色の付着物が確認されCタイプ光沢がある場合、225のような石器は鉄製品を研磨した砥石として評価できる可能性が高い。

今回の使用痕分析による機能推定によって、磨面にCタイプなど明るく貼り付くような光沢が見られ、線状痕aを主体のものを砥石と認定できる可能性を指摘した。また青色付着物が確認できる可能性も合わせて指摘した。顕微鏡観察によって機能論的に砥石を判別できたことは磨具として一括してきた研磨具の位置づけを明確にする一助となろう。

(米田)

第11表 磋石器の使用痕観察表

図No	登録	器種	石材	光沢	線状痕	所見
第21図1	223	石皿	安山岩	B	a主体、b少量	光沢は明るく丸みをもつ。光沢面上に線状痕aが多数見られる。
第21図3	225	砥石	安山岩	C	a主体、b少量	光沢は器皿表面の最も高い場所にのみ貼り付くようにならぶ。線状痕も見られる。表面に平滑な磨面を有し、研磨痕と考えられる。磨面上の擦痕は器皿長軸に「平行」が主体で、長軸に「直行」、「斜行」のものは少ない。磨面上に青色の付着物が点在する。
第21図5	224	石皿	安山岩	B	a主体、b少量	第20図1と同一個体か？裏面の凹痕周辺に丸みをもつ明るいBタイプ光沢が見られる。
第13図1	219	磨石 (砥石)	安山岩	C	a主体	光沢は局所的に発達し、範囲は狭い。光沢は種が明瞭で明るく貼りついたような外観で、アルミ片が貼り付いているような印象である。光沢中に線状痕aが多数見られる。
比較資料	比較試料1	砥石	粘板岩	C	a	発掘調査現場で使用している鉄製研磨具のうち、磨耗の激しいものを選択した。

参考・引用文献

- 阿古鳥 香 1989 「石器の使用痕」 ニュー・サイエンス社
 御堂島 正 1986 「黒曜石製石器の使用痕－ポリッシュに関する実験的研究」『神奈川考古』22 神奈川考古同人会
 御堂島 正 1988 「使用痕と石材－チャート、サメカイト、凝灰岩に形成されるポリッシュ」『考古学雑誌』74-2

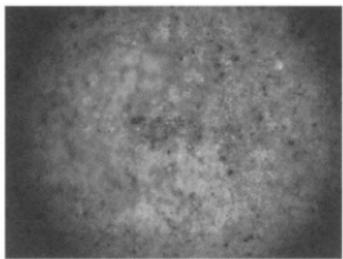


写真1 225(第21図3)の表面のCタイプ光沢(200倍)

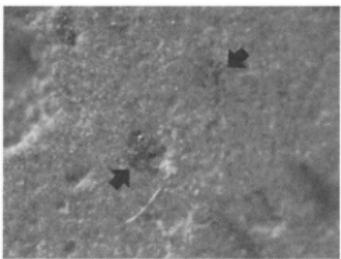


写真2 225(第21図3)の表面の青色付着物(200倍)

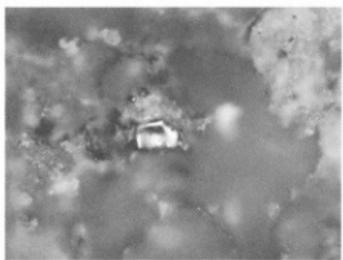


写真3 224(第21図5)のBタイプ光沢(200倍)

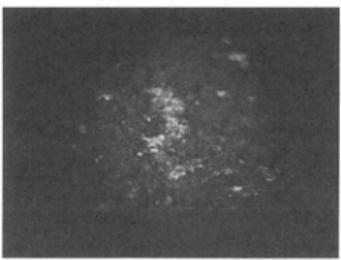
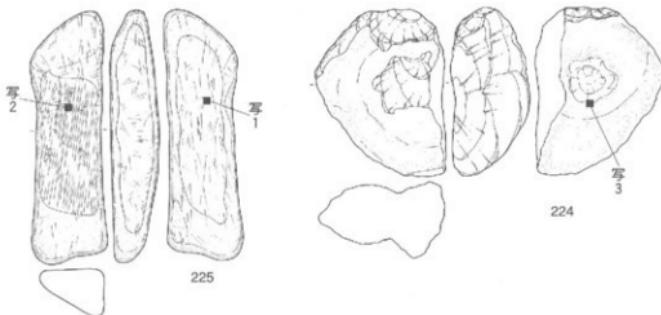


写真4 比較資料1表面のCタイプ光沢(200倍)



第94図 硅石器の使用痕跡

6 鉄製鉢先

野古A遺跡23次調査で、RA061より鉄製鉢先が出土した。岩手県内では資料が少なく、定量分析が行える状況はない。しかし、その性格上、古代人の生業の一端を示す貴重な資料であり、今後の検討のために、県内出土例の集成を試みた。

今回集成するにあたり、既刊の報告書に掲載されているものを基本としているが、出土が確認できた未報告のものも含まれている。それら未報告のものについては、調査担当者の方々の協力の下、現時点での報告に近い形で取り上げられるよう努めた。

鉄製鉢先が出土した遺跡は、野古A遺跡をはじめ、久慈市中長内遺跡、旧西根町（現八幡平市）子飼沢山遺跡、盛岡市壙根遺跡、旧石鳥谷町（現花巻市）大西遺跡、宮古市赤前V遺跡の6遺跡で、遺跡毎の出土点数状況を見ると、中長内遺跡、子飼沢山遺跡、壙根遺跡、大西遺跡が各2点ずつ、野古A遺跡と赤前V遺跡が各1点ずつの計10点となっている。2点出土している遺跡はいずれも同一遺構内の出土である。

以下、各資料についての特徴等を報告より一部引用しつつ見ていくことにする（第96図・第12表）。なお、No. 1（野古A遺跡出土遺物）については本書にて紹介しているため割愛する。

No. 2, 3 久慈市 中長内遺跡出土資料

RA516号住居内のはぼ同一地点、同一層位よりの出土である。時期は平安時代とされている。「いずれも断面形は四角形状で先端部にはかえしが設けられており、「茎部はやや平らになる」かえしは反り気味のものと直線的なものとがある。

No. 4, 5 旧西根町（現八幡平市）子飼沢山遺跡出土資料

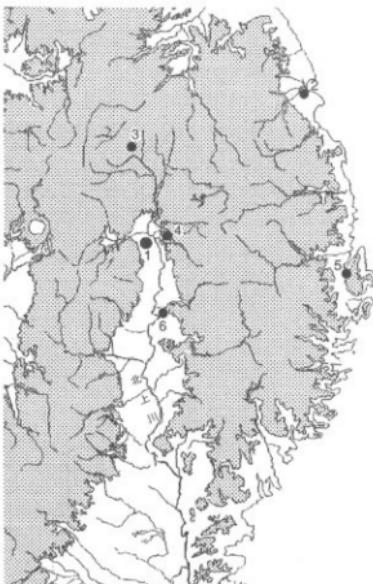
5号竪穴住居跡（焼失住居）北側床面よりの出土である。時期は平安時代とされている。「2つの個体を繋り糸で縛った状態での出土である。断面形は茎部がやや平らな板状、体部が四角形状、先端部に向かうに従い梢円状となっている。

No. 6, 7 盛岡市 壙根遺跡出土資料（未報告）

RA508（焼失住居）内、同一グリッド同一層位よりの出土である。時期は平安時代。断面形は基部がやや平らな板状で、先端に向かうにつれ四角形状になる。かえしが後からつけられた痕跡が見受けられる。

No. 8 宮古市 赤前V柳沢遺跡出土資料

A-2号竪穴住居跡床面よりの出土である。時期は「平安時代？」とされている。断面形は「1cm角に面取りしている」。茎部はやや平ら気味になる。「ミツマタ鉢の一本か」とある。



1. 野古A遺跡 2. 中長内遺跡 3. 子飼沢山遺跡
4. 壙根遺跡 5. 赤前V遺跡 6. 大西遺跡

第95図 岩手県における鉄製鉢先出土分布

No. 9, 10 旧石鳥谷町（現花巻市）大西遺跡出土資料

A区住居跡4（焼失住居）内、「2本が1組になった状態」の出土である。時期は平安時代とされている。断面形は体部に至っても幅に対し厚さがやや小さい長方形状である。9は先端部が欠損しているものの、10と対になって出土していることから、鉈の茎部とされているようである。

以上、岩手県内における鉄製鉈先の出土事例をみてきた。特徴として、多くの遺跡で2点ずつ出土しており、しかも2点が1対になった状態で出土している点と、いずれも平安時代の堅穴住居跡からの出土である点が挙げられる。中でも、子飼沢山遺跡出土例は2点が撚糸で束ねられた状態で出土しており、このような事例から本来2本一組であった可能性が考えられる。なお、赤前V柳沢遺跡出土例は1点のみの出土であるが、A-2号堅穴住居跡は大部分が調査区外に位置しており、未調査部分に対となる鉄製鉈先が存在する可能性もある。

次に、寸法については長いもの、短いものに分類することが可能である。長いものは全長30cm前後、短いものは全長25cm前後でまとまる傾向にある。しかし、これら長短の差が何に起因するものか現段階ではわからない。今回の野古A遺跡出土資料は、子飼沢山遺跡出土資料とともに長いタイプに属する。

また、出土遺跡の分布についてであるが、当初は漁撈具という性格上、沿岸地域に多く分布するものと予想していたが、内陸地域での出土も比較的高い割合で認められた。鉄製鉈先が漁労具であるとすれば、内陸地域においては河川などの淡水域で使用された可能性も視野に入れる必要があろう。

いずれにせよ現段階では、分布傾向や使用状況等を検討するには事例があまりに乏しく、今回は資料紹介にとどめる事とする。今後の更なる調査の積み重ねによる資料の充実に期待したい。（立花）

参考文献

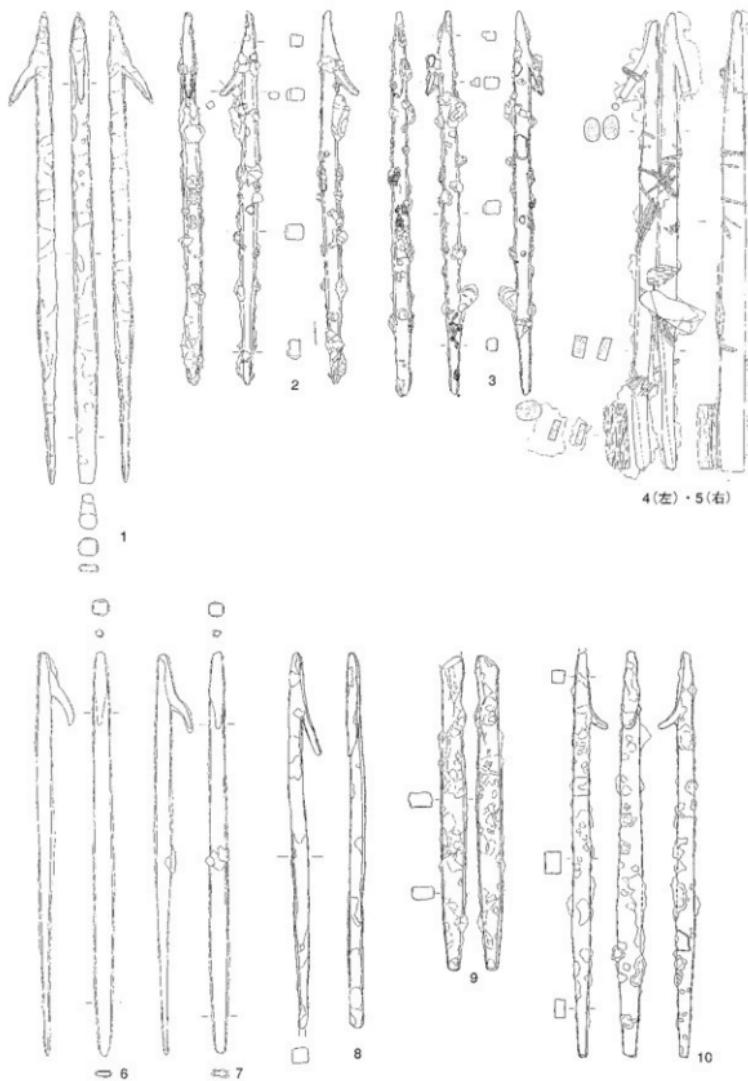
久慈市教育委員会1995「中長内遺跡」久慈市埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集

福島大学行政社会科学院考古学研究室2000「調査報告 西根町子飼沢山遺跡、春坪遺跡発掘調査概要Ⅱ」「岩手考古学」第12号
宮古市教育委員会1999「赤前Ⅲ遺跡 赤前IV八枚田遺跡 赤前V柳沢遺跡 赤前VI笠屋ヶ沢遺跡 小堀内Ⅲ遺跡」宮古市埋蔵文化財
調査報告書53

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006「大西遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第479集

第12表 岩手県内出土鉄製鉈先

No.	遺跡名	市町村	報告書記載No.	遺物名称	出土遺構	出土層位	計測値(cm)			長辺
							全長	幅	厚さ	
1	野古A	盛岡市	第4.7回5	鉈先	R A 06.1	埋土下層	31.4	2.8	1.5	長
2	中長内	久慈市	第1.4.6回6.1(F-1)	鉈	R A 51.6	床やや上	24.0	1.0	1.1	短
3	中長内	久慈市	第1.4.6回6.2(F-2)	鉈	R A 51.6	床やや上	24.7	0.9	1.0	短
4	子飼沢山	旧西根町(現八幡平市)	第1.7回9.(回上)	鉄製品(鉈)	5号堅穴住居跡	床面	29.4	1.5	1.0	長
5	子飼沢山	旧西根町(現八幡平市)	第1.7回9.(回下)	鉄製品(鉈)	5号堅穴住居跡	床面	30.0	1.4	1.0	長
6	堅根	盛岡市	未報告	鉈1	R A 50.8	C層	26.2	1.1	1.0	短
7	堅根	盛岡市	未報告	鉈2	R A 50.8	C層	26.0	1.1	0.9	短
8	赤前V	宮古市	第5.8回5	鉈	A-2号堅穴住居跡	床面	24.1	1.0	1.0	短
9	大西	旧石鳥谷町(現花巻市)	第2.5回5.9	鉈?	A区住居跡4		20.1	1.9	1.0	-
10	大西	旧石鳥谷町(現花巻市)	第2.5回6.0	鉈?	A区住居跡4		25.7	2.2	1.4	短



第96図 岩手県内出土鉄製鉗先 (S-1/3)

7 まとめ

以上、本書で報告した野古A遺跡第23・24・29次調査について遺構および遺物に関する様々な角度から分析と考察をおこなった。ここでは、これら考察を受け、本書で報告した野古A遺跡第23・24・29次調査成果について今一度整理し、評価をおこなうこととする。

(1) 遺構

中心となる遺構は古代の堅穴住居である。第23次では8棟（うち1棟は第29次でも検出）、第24次では5棟、第29次では5棟（うち1棟は第23次でも検出）の内訳である。第23次の7棟中2棟が7～8世紀、5棟が9～10世紀の住居である。第24次の5棟中2棟が7～8世紀、3棟が9～10世紀の住居である。第29次では4棟中1棟が8世紀、3棟が9～10世紀の住居である。すなわち、7世紀後半から集落が営まれ、8世紀を通じて居住域が展開し、その後連続せず、9世紀後半以降に再展開するようである。7～8世紀（古墳～奈良時代）の堅穴住居は概ね整然と主軸が描うことが特徴的である。一方、9世紀後半以降（平安時代）のものは主軸方向にばらつきがあり、前代と比べ一定でないことが特徴である。また、前代の堅穴住居を切ることなく広がることから、前代に使用されていた住居の埋没が完全に終わらないうちにこれらを避けた選地がおこなわれたものと考えられる。したがって、平安時代の居住域は古墳～奈良時代の集落域とは近接しながらも重ならない状況である。野古A遺跡全体の奈良時代住居床面積には4類型が認められ、第23・24・29次調査では中～大形の住居、一方平安時代は小～大形の3類型がみられ、バラエティに富む傾向である。また、段丘面での立地において、奈良時代は高い地点から低い地点まで、平安時代は高い地点に限定されるという傾向がみられる。

堅穴住居以外の遺構では、墓壙と考えられる遺構が確認されている。いずれも方形あるいは長方形を基調とし、集落内居住域とあまり離れない場所に位置している。いずれも平安時代のものと考えられ、同時期の堅穴住戸数を考えると墓壙はきわめて少なく被葬者が限定されていた可能性が考えられる。

また、野古A遺跡では過去の調査とも合わせると18基を数える绳文時代の陥り穴状土坑が調査されている。これらは、すべて溝状の形態を呈し遺跡南側の低地に偏在する傾向があり、等高線に垂直方向に配置されている。このような傾向は、周辺遺跡でもほぼ同様であり、水場を求めて集まる獲物を狙った狩猟地点が点在していたことを示す。

(2) 遺物

出土した古代の土器から概ね堅穴住居の時間的位置付けが推察できた。土器がまとまって出土した住居に関しては、古墳～奈良時代においてRA068、RA067、RA077の順に時期変遷することが考えられる。7世紀代まで遡る可能性があるのはRA068で、その他は8世紀代の範疇で納まると考えられる。一方、平安時代はどの住居も9世紀後半～10世紀前半に納まると考えられ、明確な時期変遷を述べることは難しい。しかし、RA069は柱状高台風の土師器坏が出土しており、この1点のみみれば、この住居は他の住居より後出する可能性が考えられる。古墳～奈良時代の住居群は比較的の長期間にわたり営まれているが、平安時代の住居群は短期間に集中して営まれたものと考えられる。また、古代全般を通じて、出土した土器の中には在地の土器の特徴から逸脱する特徴を有する土器がいくらかみられ、他地域と何らかの交流があったものと考えられる。

土器以外では礫石器、鉄製品が出土しており、これらは道具として使用されたと考えられる。礫石器には使用痕跡が認められた。特に、砥石表面には鉄製品の研磨によって生じた線状痕が確認され、これら痕跡の付着物から研磨した鉄製品の成分中に銅や鉛が含まれている可能性が考えられる。また、

これまで野古 A 遺跡では鏃先などの鉄製農具類が出土している。しかし、第 23 次調査では鉄製鏃先が出土した。このような鉄製鏃先は漁労貝であると考えられており、岩手県内 10 遺跡で出土している。しかし、その出土分布は沿岸に限らず、野古 A 遺跡のような内陸部でも出土しており、野古 A 遺跡では零石川、北上川などの河川での漁労活動を想定することができる。

（3）今後の課題

最後に今後の課題としていくつか提起しておく。堅穴住居群が多数検出されている野古 A 遺跡では概ね集落の中心部から外縁まで把握できつつあるが、集落の広がりと他遺跡との関わりは不明である。これまで調査されてきた周辺諸集落との比較検討が必要であろう。さらに平安時代における墓壙についても集落様相と合わせて検討しなければならない。また、被葬者像についても同様である。また、野古 A 遺跡は縄文時代の狩猟場でもあるが、縄文時代晩期の集落が確認されている本宮熊堂 A 遺跡との関連についても考えなければならない。

また、蓄積された土器などの資料の分析をより精緻におこない、土器による編年を今一步進めることが必要とされる。土器以外では周辺集落を含め古代であっても実用利器として石器の使用が認められ、鉄製品とともに生業との関わりを明らかにする必要があろう。

以上のように野古 A 遺跡は、縄文時代から人々の活動の場として利用されてきた。特に、古代においては集落が形成されている。長い期間、人々がこの地で残してきた痕跡について検討することは容易なことではない。課題は多く残っているが、これらをクリアにして人々の活動がリアルに甦るような総合的な視点によるアプローチが必要であろう。
（福島）

写 真 図 版

第23・24次調査



調査区遠景（南から）



調査区近景（直上から）



調査区北端（北から）



調査区中央（北から）

写真図版 2 調査前状況



調査区境東側断面（北西から）



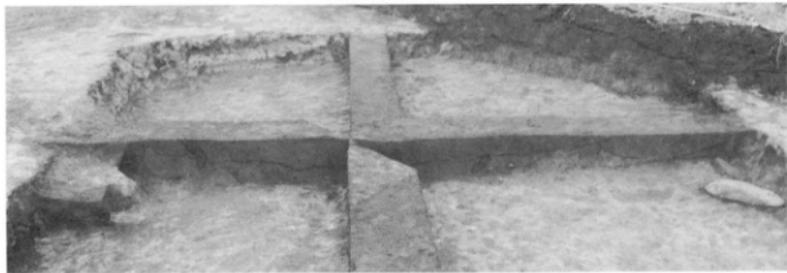
調査区境西側断面（北から）



全景（南東から）



断面（北西から）



断面（南西から）



カマド断面（南東から）



カマド断面（北東から）



煙道・煙出し断面（北西から）



カマド袖部断面（南東から）



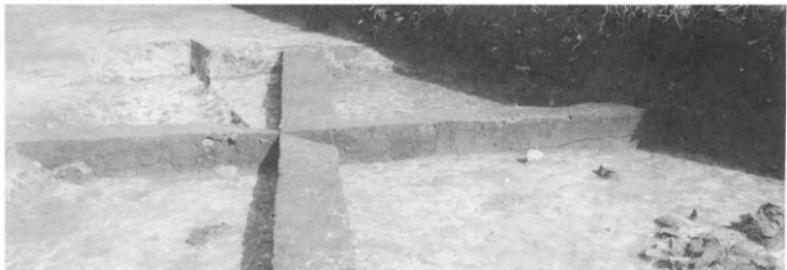
貼床断面（南西から）



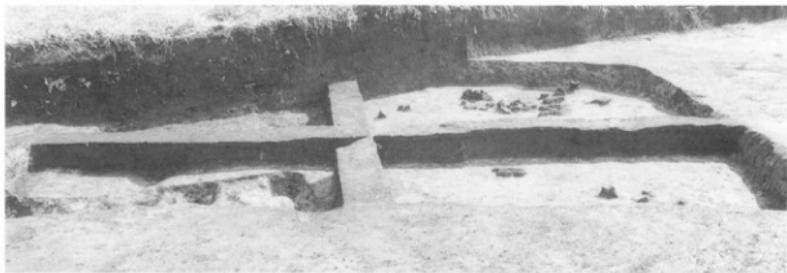
貼床断面（北西から）



全景（南東から）



断面（南西から）



断面（北西から）



カマド (南東から)



カマド断面 (南東から)



カマド断面 (北東から)



煙道・煙出し断面 (西から)



カマド袖部断面 (南から)



Pit 1 断面 (南から)



Pit 3 断面 (西から)



全景（南から）



断面（南西から）



断面（西から）



RA071貼床断面（南西から）



RA071窓掘（南西から）



RA071煙道断面（南西から）



RA071カマド袖部断面（南から）



RA060断面（南西から）



全景（西から）



断面（南から）



断面（西から）



カマド（西から）



カマド袖部断面（西から）



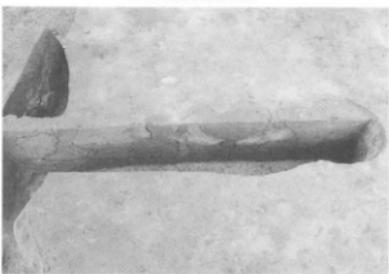
カマド断面（西から）



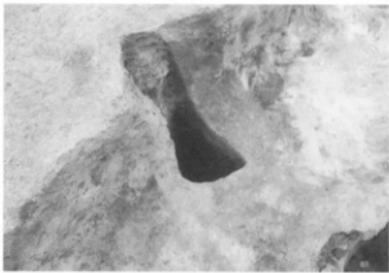
カマド断面（南から）



煙道断面（南東から）



煙道断面（南から）



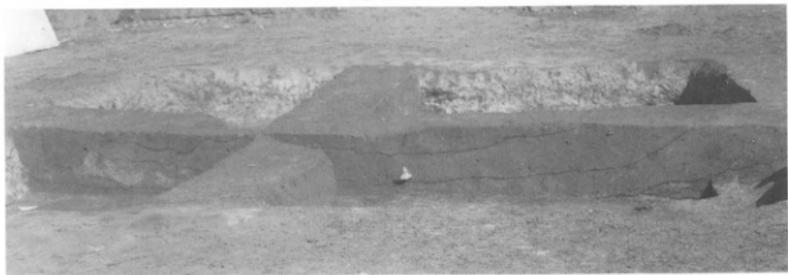
Pit 1 断面（北西から）



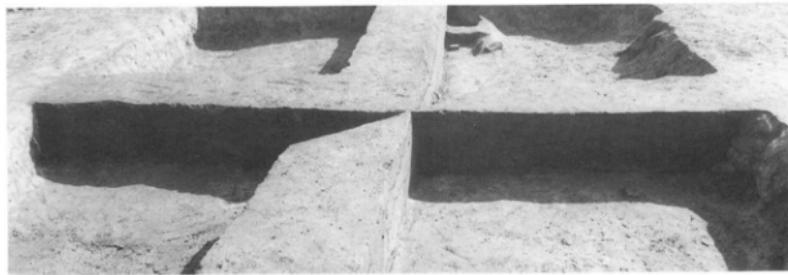
作業風景



全景（西から）



断面（南から）



断面（西から）



東側カマド（西から）



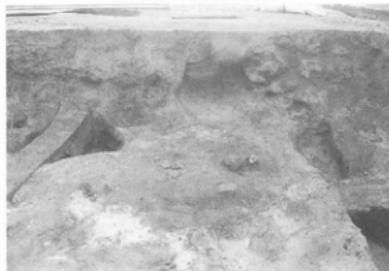
東側カマド袖部断面（西から）



東側カマド断面（西から）



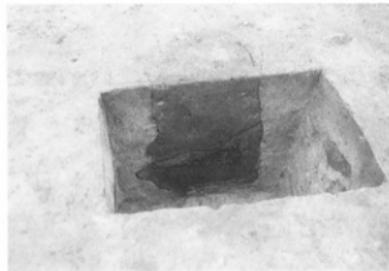
東側煙道断面（東から）



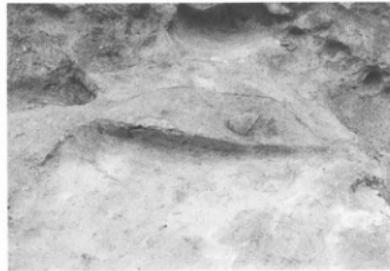
南側カマド（北から）



南側煙道断面（南から）



南側煙出し（北から）



南側カマド燃焼部断面（北から）



全景（西から）



断面（南から）

写真図版14 RA064(1)・RA059（第23次）



断面（西から）



カマド断面（南西から）



カマド断面（西から）



煙道断面（南西から）



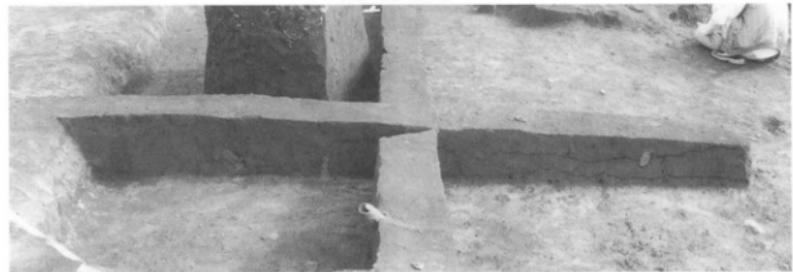
北側壁搅乱（南西から）



全景（北西から）



断面（南西から）



断面（北西から）



カマド（北西から）



カマド袖部断面（北西から）



カマド断面（南西から）



カマド断面（北西から）



カマド断面（南西から）



カマド断面（北西から）



煙道断面（南西から）



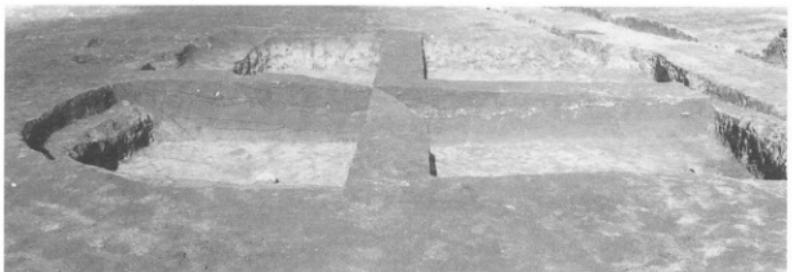
煙出し断面（南西から）



検出状況（東から）



全景（東から）



断面（南から）



断面（西から）



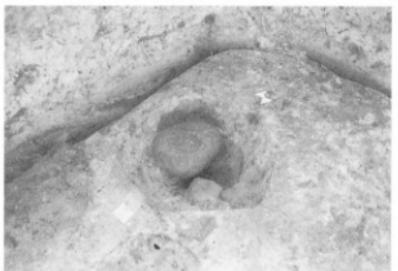
カマド断面（東から）



カマド袖部断面（東から）



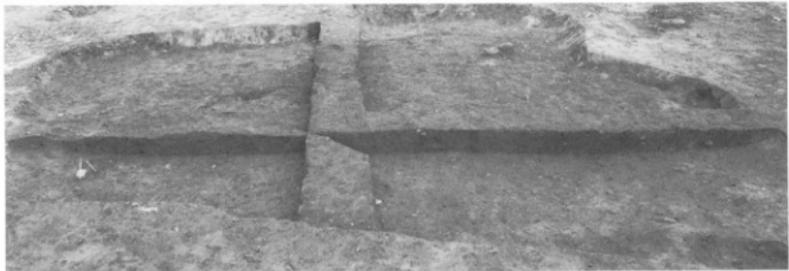
南東隅土器出土状況



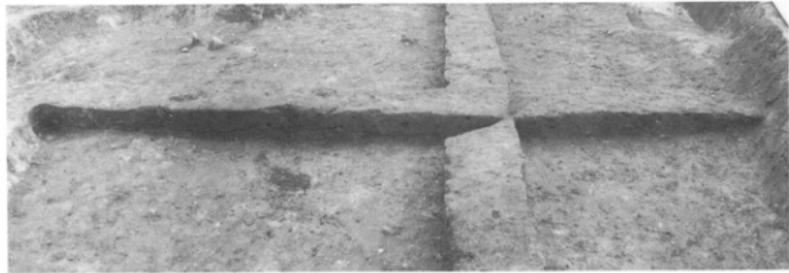
南東隅石器出土状況



全景（西から）



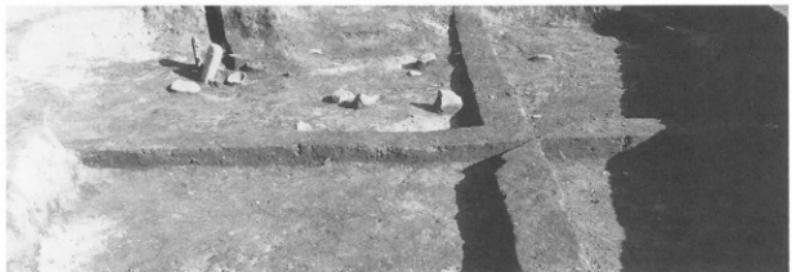
断面（南から）



断面（西から）



埋土最下層断面（南から）



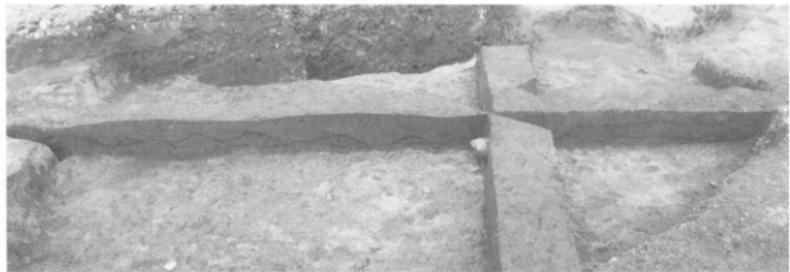
埋土最下層断面（西から）



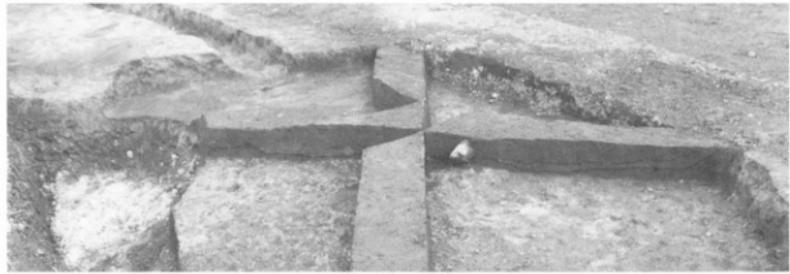
煙道断面（西から）



全景（東から）



断面（南西から）

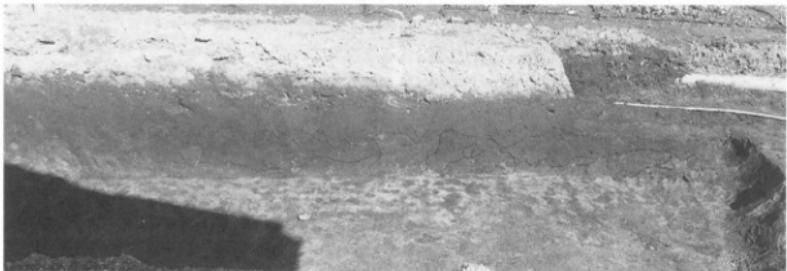


断面（北西から）

写真図版22 RA065（第24次）



全景（南西から）



断面（南から）



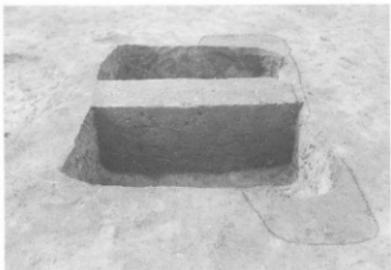
煙道断面（南西から）



カマド陶遺物出土状況（西から）



RD104全景（東から）



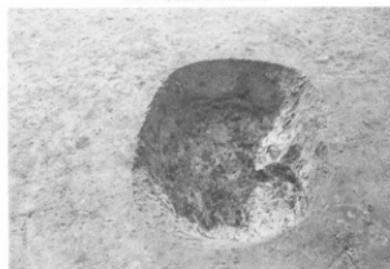
RD104断面（東から）



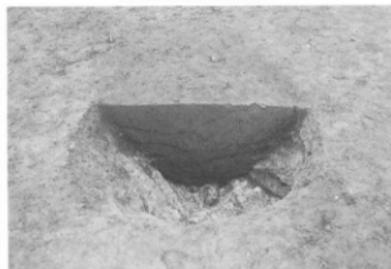
RD103断面（南東から）



RD106断面（北東から）



RD105全景（東から）



RD105断面（西から）



RD108全景（東から）



RD108断面（東から）



RG024全景（南西から）



RG024断面（西から）



RD107断面（東から）



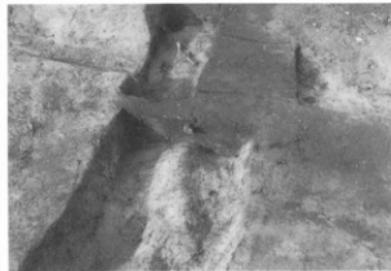
RG027・028全景（西から）



RG027断面（西から）



RG028断面（西から）



RG029断面（南から）



2



3



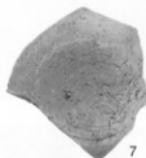
4



5



6



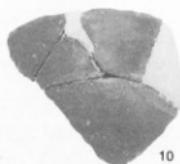
7



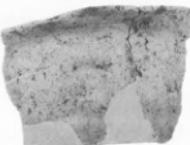
8



9



10



11

写真図版26 RA066・068(1)出土遺物（第23次）



12



13



14



15



16

写真図版27 RA068(2)出土遺物（第23次）



17



18



19



20



21



22

写真図版28 RA068(3)出土遺物〈第23次〉



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32

写真図版29 RA071（第23次）・067(1)出土遺物（第24次）



33



34



35



36



37



38



39



40

写真図版30 RA067(2)〈第24次〉・060・061(1)出土遺物〈第23次〉



41



42



43



44



45



46



47



48

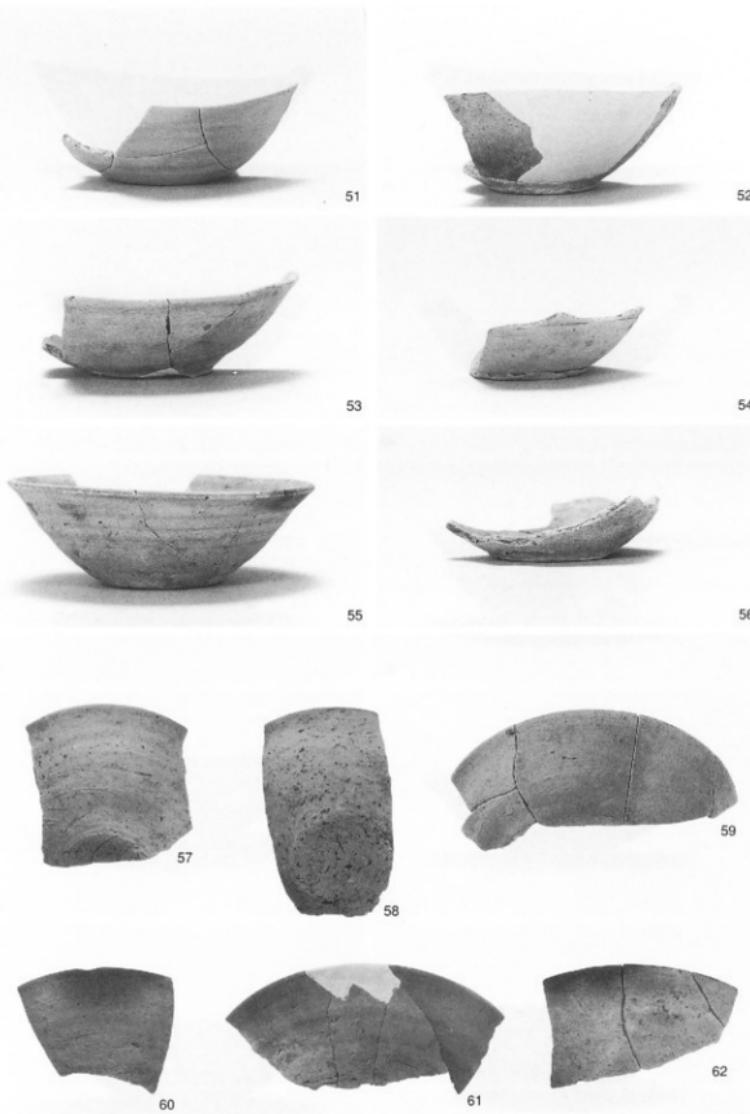


49

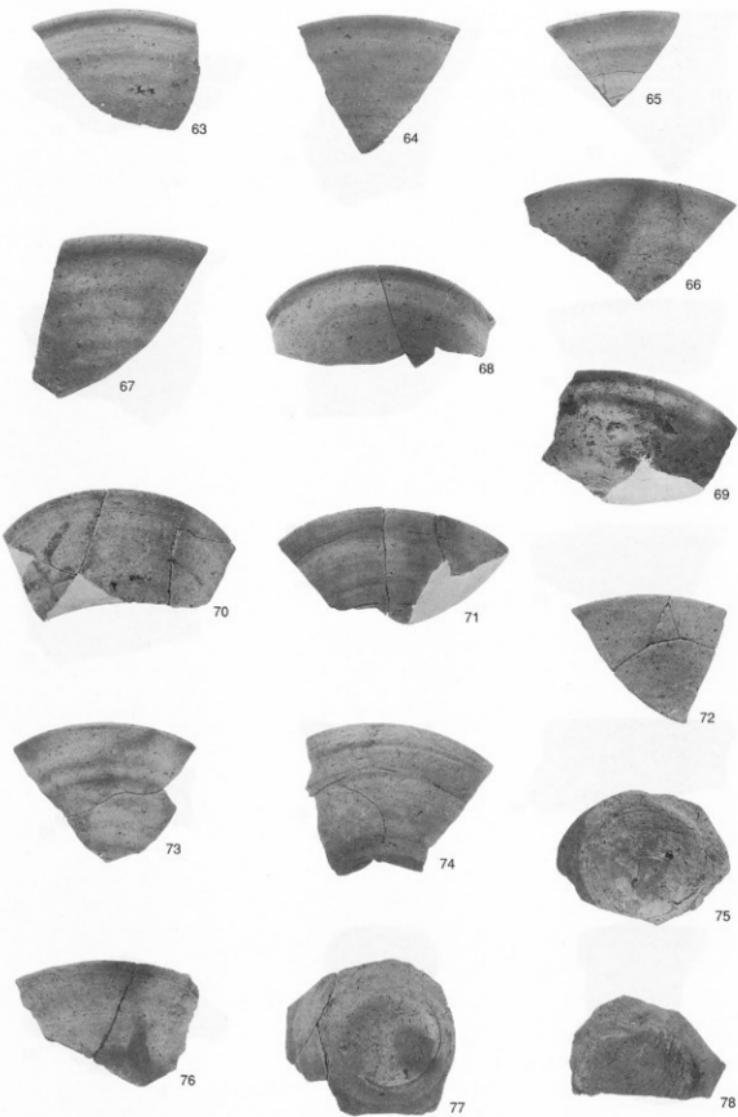


50

写真図版31 RA061(2)出土遺物（第23次）



写真図版32 RA061(3)出土遺物（第23次）



写真図版33 RA061(4)出土遺物〈第23次〉



写真図版34 RA061(5)出土遺物（第23次）



94

95

96



97

98



99

100



101



102



103

写真図版35 RA061(6)出土遺物（第23次）



104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117

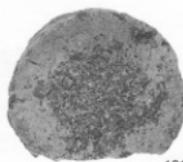


118

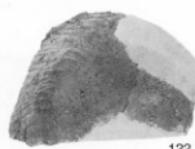
写真図版36 RA062(1)出土遺物〈第23次〉



119



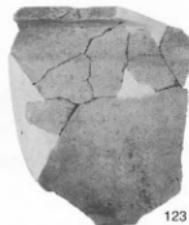
121



122



120



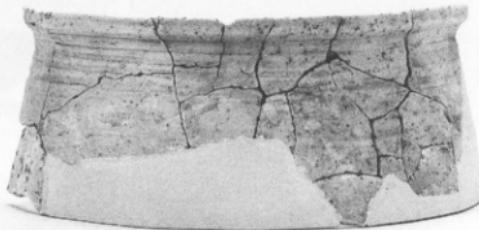
123



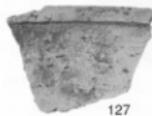
124



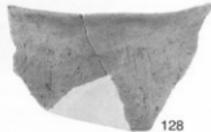
125



126



127



128



129



130

写真図版37 RA062(2)出土遺物〈第23次〉



131



132



133



134



135



136



137



138



139



140



141

写真図版38 RA064(1)出土遺物（第23次）



142



144



145



146



147



148



150



149



151



152



153



154

写真図版39 RA064(2) 出土遺物 (第23次)



155



156



157



158



159



160



161



162



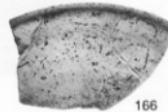
163



164



165



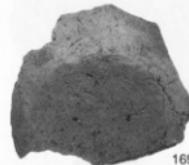
166



167



168



169

写真図版40 RA070(1)出土遺物（第23次）



170



171



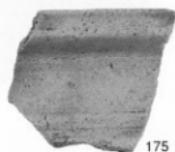
172



173



174



175



176



176



177



178



179



180

写真図版41 RA070(2)出土遺物〈第23次〉



181



182



183



184



185



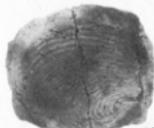
186



187



188



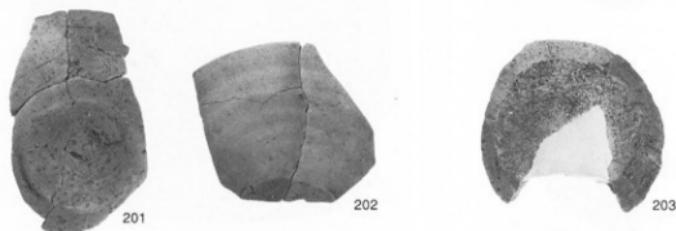
189



190



191



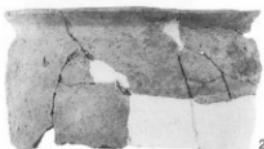
写真図版43 RA063(2)・069(1)出土遺物（第24次）



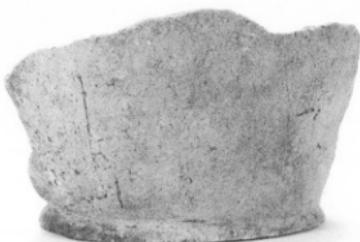
204



206



205



208



207



209



210



211

写真図版44 RA069(2)出土遺物（第24次）



212



213



214



215



216



217



218



—



219



|



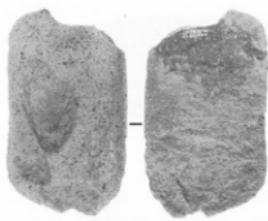
—



220



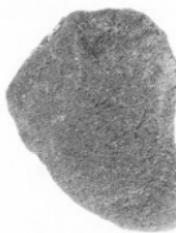
221



222



223



—



—



—



225



—



226



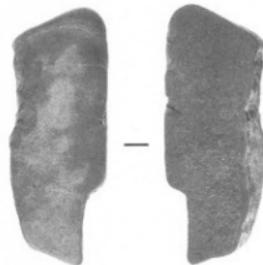
—

—

—

227

写真図版46 RA067出土石器・石製品



228



230



229



231



232



233



234

第29次調查



第29次調査区全景



南調査区基本土層



RA060全景（南から）



東西断面（南から）



カマド燃焼部断面



カマド烟道断面

写真図版49 RA060住居跡



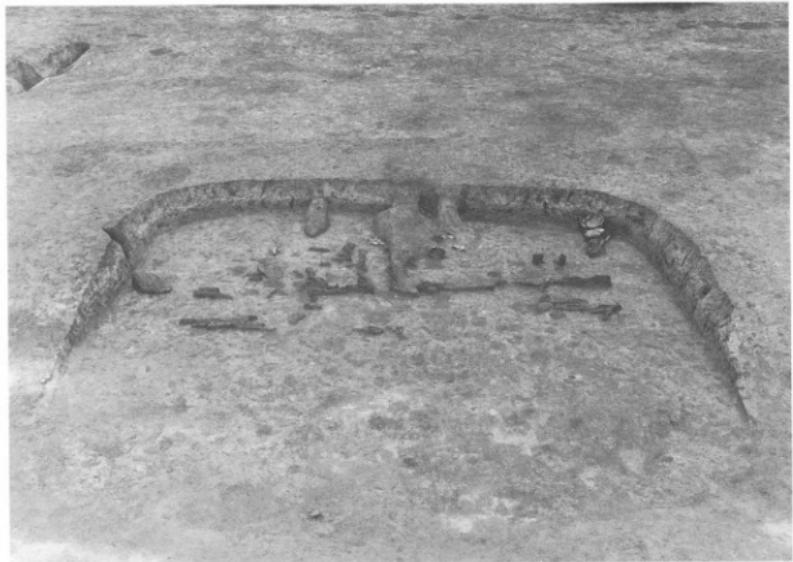
貼床除去後全景



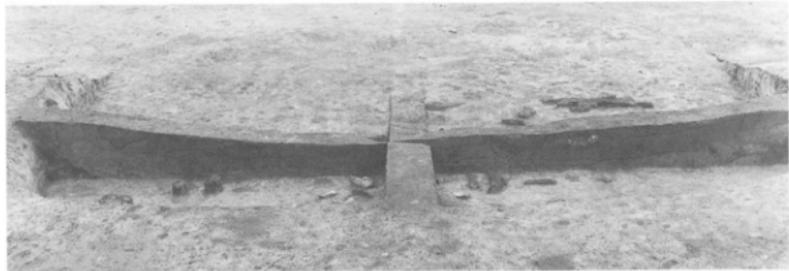
RA076全景



Pit2・3断面



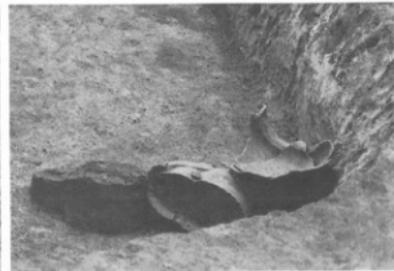
出土状況



南北断面（西から）

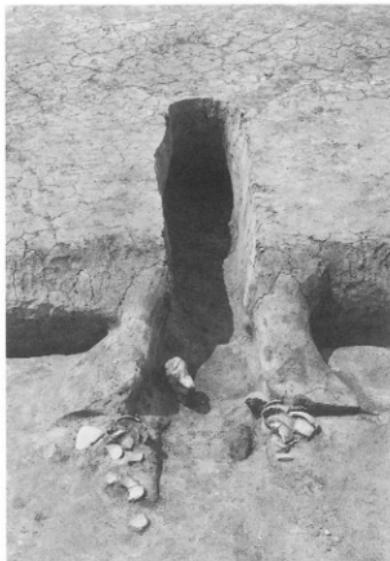


東西断面（北から）



住居北西土師器臺出土状況

写真図版51 RA077住居跡（1）



カマド全景



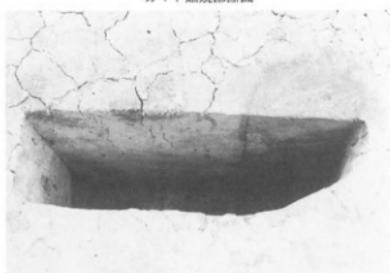
カマド燃焼部断面



カマド燃焼部断面



カマド煙道横断面



煙道縦断面



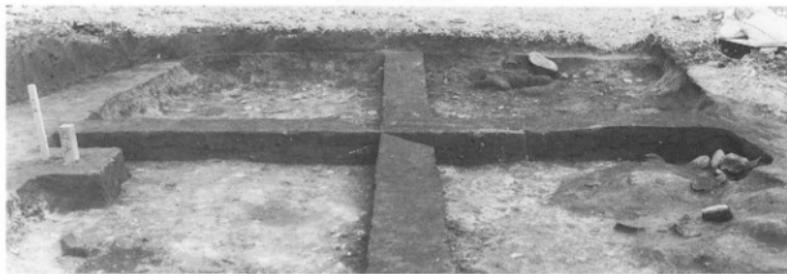
RA077全景



RA078全景



南北断面（西から）



東西断面（南から）



RD078カマド



1号カマド横断面



1号カマド縦断面



2号カマド横断面



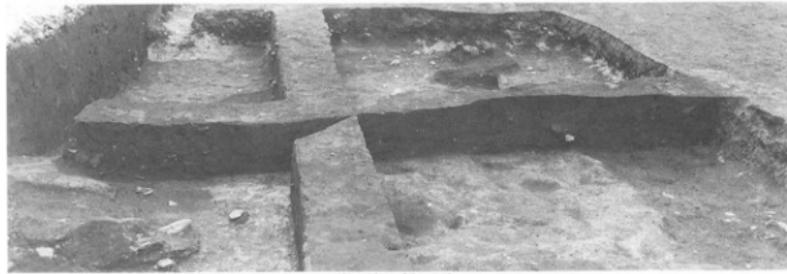
2号カマド縦断面



RA079全景



南北断面（西から）



東西断面（南から）



カマド検出・炭化材検出



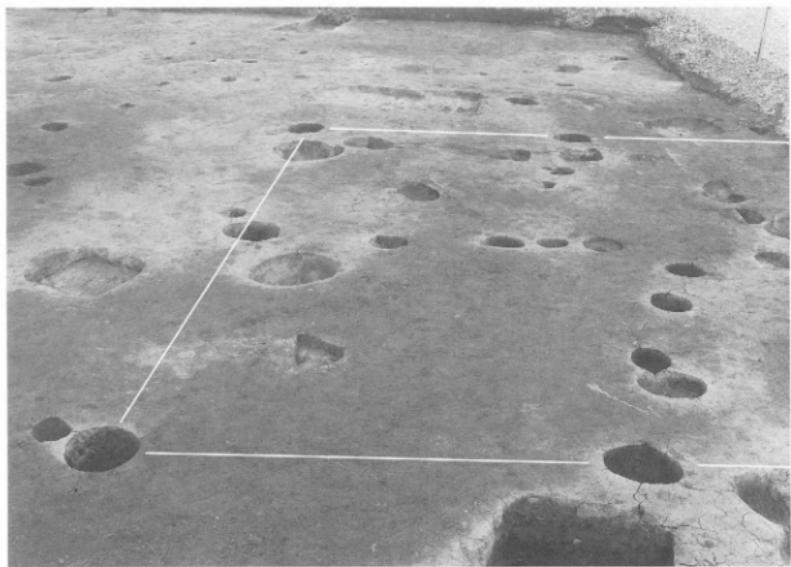
カマド横断図



カマド縦断図



カマド内遺物出土状況



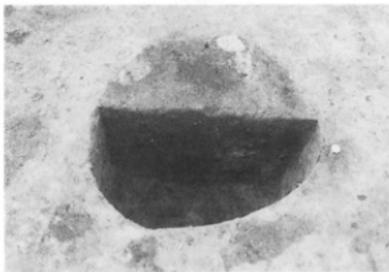
RB004全景



P1断面



P3断面



P4断面



P6断面

写真図版57 RB004掘立柱建物跡



RD112



RD112断面



RD113



RD113断面



RD113断面

写真図版58 RD112・113陥し穴状土坑



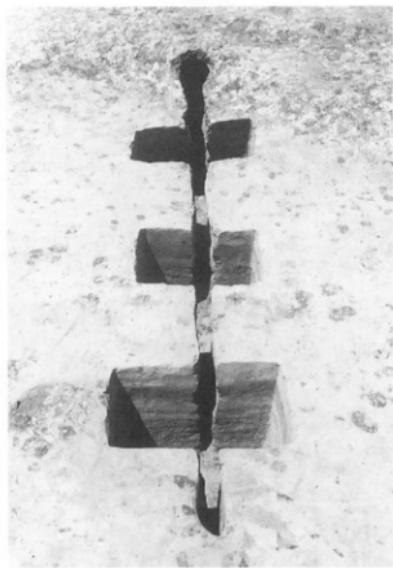
RD114



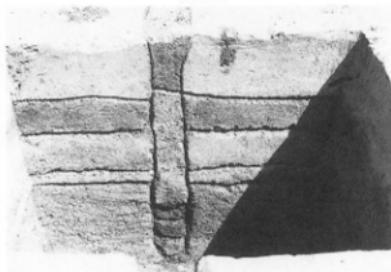
RD114断面



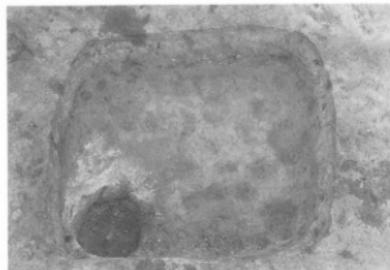
RD114



RD115



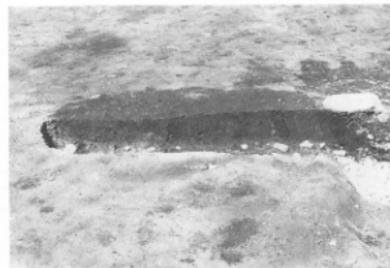
RD115断面



RD116全景



RD116断面



RD117断面



RD118全景



RD119



RD118断面



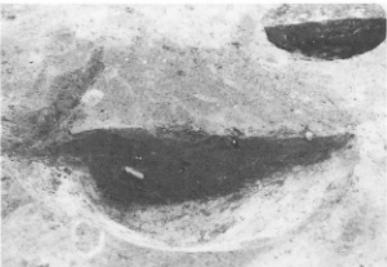
RD120・121断面



RD122断面



RD123断面



RD124断面



RD125断面



RE002全景



RE002東西断面



RE002南北断面



RZ005全景

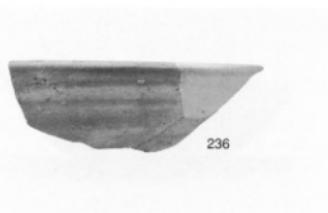


RZ006全景

写真図版61 RD122・124土坑、RE002住居状遺構・RZ005・006柱穴状土坑



235



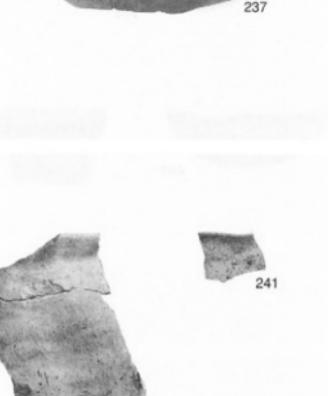
236



237



238



240



241



239



242



243



244



245



246



247



248



249



250



251



252



253



254

写真図版63 RA076・RA077住居跡出土遺物



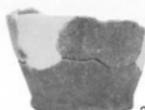
255



256



257



258



260



259



261



262



263



264



265



266



267



268



269



270



271



272

写真図版65 RA078住居跡出土遺物（1）



273



274



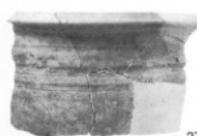
275



276



277



278



279



280



281



282



283



284



285

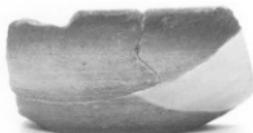
写真図版66 RA078住居跡出土遺物（2）



286



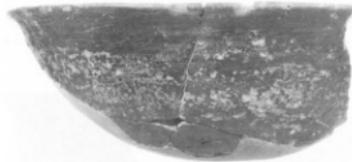
287



288



289



290



291



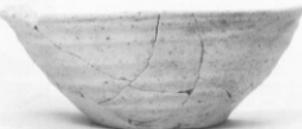
292



293



294



295

写真図版67 RA079住居跡出土遺物（1）



296



297



298



299



300



301



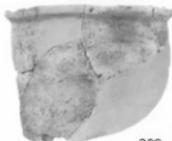
302



305



306



303



304



307

写真図版68 RA079住居跡出土遺物（2）



308



310



309



311



312



313



314



315



316



317



318



319



320



321



322



323



324



325



326



327



328



329

写真図版69 RA079住居跡・RB004掘立柱建物跡・RD土坑出土遺物



330



331



332



336



334



335



337



338



339



340



341



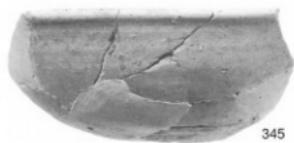
342



343



344



345



346



347



348

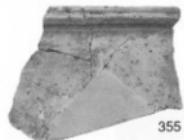


349



350

写真図版71 RE002住居状遺構出土遺物(2)



355



351



353



356

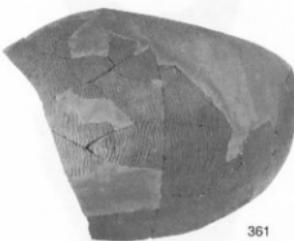


352

352



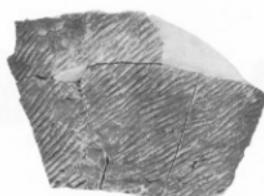
358



361

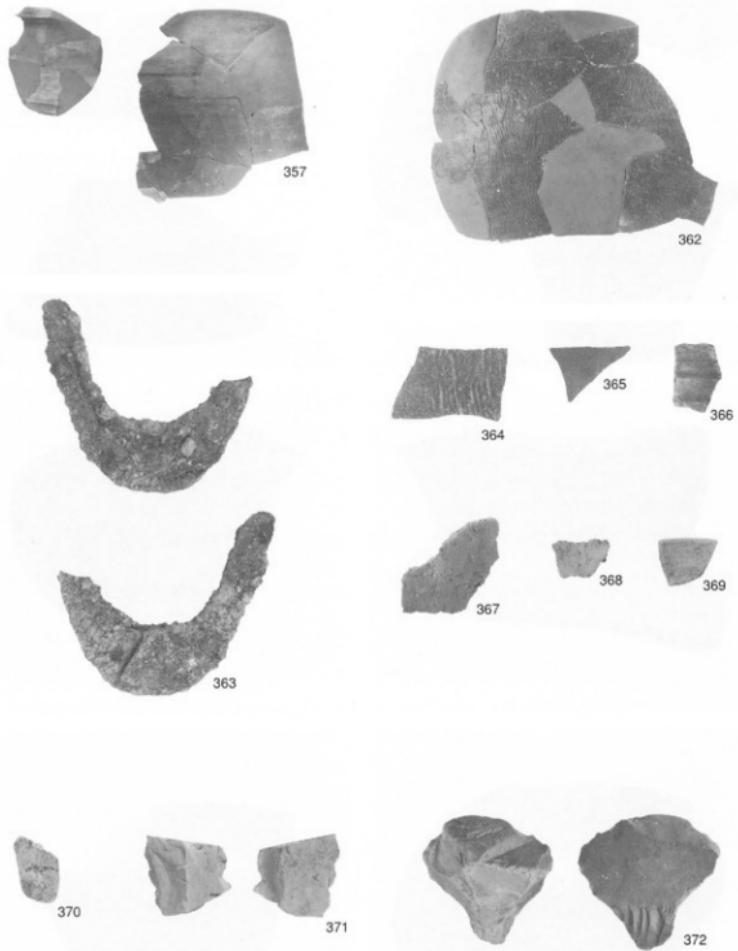


359



360

写真図版72 RE002住居状遺構出土遺物(3)



写真図版73 RE002住居状遺構(4)・RZ005柱穴土坑・遺構外出土遺物

報告書抄録

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第501集
野古A遺跡第23・24・29次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書

印刷 平成19年2月20日

発行 平成19年2月28日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001
FAX (019) 638-8563

印刷 (株)五六堂印刷
〒020-0021 岩手県盛岡市中央通3-16-15
電話 (019) 654-5610
FAX (019) 651-2167
